SF三国志

石川英輔

講談社文庫

カバーデザイン　石丸千里

い10-10

SF三国志

石川英輔

講談社文庫

石川英輔

い
10
10

SF三国志

講談社文庫

P600

9784062630504

1910193006002

ISBN4-06-263050-8

C0193 P600E (0)

SF三国志
石川英輔

定価600円
（本体583円）

い
10
10

三惑星共和国を独裁的に支配しようとする曹操。自由な世界を守るため、関羽・張飛ら猛者（もさ）を引き連れ劉備は遂に立ち上がる。とはいえ全く不利な状況。名参謀・諸葛孔明や美女・蝶蟬を味方に引き入れ、どう戦うのか!? 大人気「三国志」の英雄豪傑美女が宇宙で活躍する興奮の傑作スペース・ファンタジー！

講談社文庫

石川英輔作品

- 大江戸神仙伝
- 大江戸仙境録
- 大江戸遊仙記
- 未来妙法蓮華経
- 大江戸えねるぎー事情
- 大江戸テクノロジー事情
- SF三国志

SF三国志

石川英輔

I

SF三国志

石川英輔

講談社文庫

講談社文庫

SF三国志

石川英輔

講談社

SF三国志●目次

華釆城の誓い——7
幻影空戦——28
赤目の呂2号——47
大統領府のクーデター——66
劉備と曹操——83
目指せ洛陽——101
殺したいのは……——114
天下は巡る——132
虎は野に——147
スペースラブの男——160
孔明の戦い——179
宇宙基地　K1——199
ゲリラ大襲撃——218
女の戦争——238
虫取りすみれ——251
二星同盟——272
宇宙の盗難——292
〈赤い岩〉——309
追撃命令——333
戦いのはて——352
また会う日まで——371
『SF三国志』
文庫版へのあとがき——383
石川英輔という人の
世界について　野田昌宏——385

主な登場人物

劉備（りゅうび）　三惑星連合共和国初代大統領の子孫。徹底的な共和主義者。のちのS星大統領。
関羽（かんう）　知勇ともに秀でた豪傑。劉備の義弟。
張飛（ちょうひ）　単純で粗暴な性質の豪傑。劉備の義弟。
諸葛孔明（しょかつこうめい）　人間離れした知能の持ち主。のちに劉備の参謀となる。
蝶蟬（ちょうせん）　洛陽一の名妓。のちに孔明の妻となる。
曹操（そうそう）　文武ともに傑出した超エリート。のちに共和国大統領となる。
孫堅（そんけん）　共和国長沙州知事。W星の支配者。
孫権（そんけん）　孫堅の後継者。若いがすぐれた政治家。
呂布（りょふ）　メカトロニクスの超天才。
董卓（とうたく）　悪がしこく残酷な軍人。共和国第三百九十代大統領。
趙雲（ちょううん）　S星の名将。のちに劉備の部下となる。
司馬仲達（しばちゅうたつ）　知謀すぐれた老将軍。
司馬水鏡（しばすいきょう）　多くの優秀な弟子を育てた大学者。精神科医。心理学者。
公孫賛（こうそんさん）　共和国北平州知事。
袁術（えんじゅつ）　共和国南陽州知事。
孔融（こうゆう）　共和国北海州知事。
程仲徳（ていちゅうとく）　曹操の参謀。
張譲（ちょうじょう）　共和国大統領第一顧問官。共和国の最高権力者。
趙忠（ちょうちゅう）　共和国大統領第二顧問官。法制担当。
曹節（そうせつ）　共和国大統領第三顧問官。軍事担当。
段桂（だんけい）　共和国大統領第五顧問官。司法担当。
張昭（ちょうしょう）　W星の主務大臣。
魯粛（ろしゅく）　W星の外交大臣。
周兪（しゅうゆ）　W星の軍務大臣。
黄蓋（おうがい）　W星の技術者将軍。
献大統領（けん）　三惑星連合共和国第三百八十九代大統領。暗愚な人物。

SF三国志

華采城の誓い

「そこだ。やっちまえ」
「そうだ。キックを入れろ。うめえぞ」
広場の隅にある大きな3Dスクリーンには、凄まじいカンフーの真拳試合が中継されていた。文字通りどちらか一方が死ぬまで戦うデスマッチに、観衆は興奮して叫び立てている。
全身ひぐまのような体毛でおおわれた巨漢が、グロッキーになりかけている男の腹に強烈な蹴りを入れた。さながら鋼鉄のロープの束のように見えた腹筋に、巨漢の爪先が深々と食い込んで、男の口から血が噴き出した。その血は、スクリーンから観衆の方へ飛び散るように見えた。
「いいぞう。もう一発……」
血を見て一層興奮した観衆がどっと沸き立った時、突然画面に複雑なノイズが走ったと見るや、試合の中継は消えて代わりにいかめしい軍人の顔が大映しになった。
「引っ込めー、このおー」
「早く、試合を映せえ。ブーブー」

「バーロー、くそおやじ消えろ」

人間の断末魔の形相を見るのが何よりの楽しみだという心のすさんだ観衆は、食べようとした瞬間にご馳走を取り上げられたようなものだから、不平たらたらで、わめき立てた。だが、いくらわめき立てようが画面に映っている軍人に聞こえるはずはない。

「諸君。聞いてくれ。私は、幽州軍司令官の柳だ」

その軍人は、への字に結んでいた薄い唇を開くと、大声でいった。

「共和国は、今や危機に瀕している。知っての通り、逆賊張角の率いる反乱軍イエロー・キャップは、日に日に勢力を強め、すでに八州は敵の手に落ちた。

しかし、いかんせん正規軍は、人員不足である。このままではわが幽州とても安全とはいえない。共和国の栄光を守るために、幽州軍司令部は、義勇兵を募集している。

二十歳以上、四十歳以下の男子ならすべて歓迎する。勝利の上は、手厚い恩賞を約束しよう。

なお、自前の武装をした五人以上の部下を率いて参加する者は、下士官として、二十人以上を率いる者は士官として待遇する。

希望者は、可及的速やかに司令部に出頭してほしい。受付は、二十四時間開いておるから、思い立ったらすぐに駆けつけてくれ。

以上だ」

柳司令官の姿がちらついて消えると、またカンフーの中継画面に戻ったが、デスマッチは

とっくに片づいて死体は場外に引きずり出され、リングには血溜りが残っているばかりだった。

「ちぇっ、終わっちまったじゃねえか」

「へん、だ。戦争はてめえらの仕事だろ。普段いばりくさってんだから、こんな時ぐれえ真っ先立って突進し、お国のために戦死してくれよな」

「こちとら、税金さえ安けりゃ、イエロー・キャップだろうと共和国だろうと、知ったこっちゃねえんだよ」

デスマッチの興奮から引き戻された観衆は、急に白けた表情になると、ぶつくさいいながら散って行った。

心のすさんだ観衆といっても、広場を通りかかった時にたまたま足を止めただけだから、いったん現実に引き戻されてしまえば、ただの小市民に過ぎない。天下国家よりも、目先の用の方がはるかに大事なのだ。

たまたまこの場を通りかかって一部始終を眺めていた一人の男があった。身長百八十センチ近いがっしりした体と白い肌、耳にとどくほど切れ長の大きな目をした、とりとめのない風貌の大男だが、どこか犯し難い気品がある。

この男、姓は劉、名は備といって、身分が低く性質も穏和なため、地元ではほとんど話題にもならない人物だったが、志は高くつねに天下を憂えていた。この様子を見ると、何を思ったか思わず深い溜息をついて、つぶやいた。

「情ないことだ」

ところが、何気なく口にしたこの言葉をすぐそばで聞いていた者がいた。劉備と同じように、立ち止まって成り行きを見ていた大男である。大男は、見る見るうちに不機嫌そうな顔つきになると、まるで大地の唸るような声でいった。

「情ねえというのなら、なぜてめえが義勇軍に参加しねえんだ」

大声に驚いて振り向くと、頭一つだけ背が高く針金のような髭を生やした赤ら顔の大男が、盃のような目をぎょろつかせながら、劉備を見下ろしていた。

「お前さんは、どなたかね」

全身が炎のように赤く、仁王さながらのたくましい体と、殺気がほとばしる異様な風采を見た劉備は、いいしれぬ親しみを感じて尋ねた。

「聞くのなら教えてやろう。おれは、姓は張、名は飛という者だ。代々、この幽州に住んでいるが、こういう筋の通らねえ世の中にすっかり嫌気がさして、ひと暴れしてえと思っているものの、どうも良いきっかけがつかめねえ。今日も、何か面白いことがないかと出歩いていたら、お前さんが溜息をつくのを聞いたってわけだ。おれは、文句ばかりいって自分じゃ何もしねえインテリってやつらが大嫌いなのさ」

「そういうわけだったのか」

劉備はうなずいて、じっと張飛の顔を見詰めながら名乗った。

「私は、劉備という者だ。この土地には新しいが、考えていることはお前さんと大して違わないようだな。イエロー・キャップの連中のやり口が気にいらないから、義勇軍に参加して目にもの見せてやりたいのはやまやまだが、何せ今の共和国政府も腐り切っておる。一兵卒として参加して、命をまとに働いたところで、しょせん手柄は他人のものになるだろうよ。そう思えば、溜息も出ようというものだ」

「ちげえねえ。おれも、同じことを考えているんだ。何だか、おれたちはうまが合いそうだな」

張飛は、大きくうなずいた。

「おい、劉備とやら、こんな所で立ち話もなんだから、その先の酒場で一杯やろうじゃねえか。どうだ。乗物は、あるのか」

「乗物は、広場のはずれにある駐機場に停めてある」

劉備は、もの静かな口調でいうと自分の乗物がある方に目をやった。

「そうか。おれのも同じ場所においてあるから一緒に行こう」

長くつき合ってもさっぱり気心の知れぬ相手もあれば、一度会っただけで一生の友達になる相手もある。劉備と張飛は、ほんのひとことふたこと言葉を交わしただけで、すっかり意気投合してしまい、肩を並べて駐機場へ向かって歩きだした。

「これが、おれのだ」

駐機場に入ると、張飛は、入口のすぐそばに停めてあった黒光りする小型反重力艇の機体を掌で軽く叩いた。
「ほほう。素晴らしいものだな。これなら、重武装もできそうだ」
「もちろんさ」
張飛は、得意そうにいった。
「その辺にある量産品とはわけが違う。エンジンもジェネレーターも、ボディの見かけより五倍以上もパワーがあるんだ。変わり者だが腕のいい改造屋に頼み込んで、装甲から何からすっかりチューンアップさせちまったのさ。
もちろん、フルパワーで加速や旋回をすりゃ、並の人間なら背骨も肋骨も折れちまうから、おれじゃなければ操縦できないがね」
「ふうん」
劉備は、羨ましそうに唸った。
「お前さんのは、どれだい」
「あそこにある銀色のだ。お前さんと違って貧乏だから、とてもこんな逸品には手が出ない。操縦性だけは良いが、あとは大してとりえのないポンコツ寸前だよ」
「なに、酒を飲みに行くにはそれで充分さ。それじゃ、劉備。おれについて来るがいい」
うなずいて悠々と歩いて行く劉備を見送りながら、張飛は、自分の反重力艇のキャノピー

を開いて乗り込むと、全周ビジョンのスイッチを入れて離陸準備をした。
「劉備。いいか。連絡には標準波長を使うぞ」
劉備が自分の艇に乗り込むのを確かめると、張飛は、スティックを握りながら声をかけた。
「OK。発進準備完了」
ジェネレーターの唸るかすかな音を残して、張飛の反重力艇は軽々と地面を離れた。劉備の艇もすぐに離陸した。
次の瞬間、張飛の艇は離れ業に近い旋回をして反転した。劉備も、ごく自然にあとを追った。張飛は、その様子を見てにやりと笑った。
「あのオンボロ船で、なかなかやるじゃねえか」
そのまま高度を二百メートルにとって高層ビル群の上空に出ると、張飛は、黒光りする反重力艇を南に向けて直進させた。劉備の艇も間隔を変えずについて行く。
行く手には、天に向かって半球状に開いた高さ五百メートルもある巨大なビルが、建ち並ぶビル群の中に、ひときわ高くそびえていた。幽州の名所〔華采城〕だが、城とは名ばかりで全体が歓楽街になっている。
張飛は、一気に華采城の上空に舞い上がった。華采城は上から見ると五弁の花のような形をしており、そのために華采の名があるのだ。
空中に群れるトンボさながらに飛んでいる反重力艇の間をたくみに縫って、張飛は、五つ

に分かれた中心にあるひときわ高い円筒形の部分に向かった。頂上の少し下には、水平に開いた口が数ヵ所あるが、張飛はそのうちの比較的大きな口に滑り込んだ。ほとんど間をおかずに劉備の艇も舞い込み、張飛と並んで駐機した。

「大した腕前じゃねえか」

劉備がキャノピーを開いて顔を出すと同時に、張飛は声をかけた。

「兄貴の腕前なら、イエロー・キャップを相手にしても充分渡り合えるぜ。さ、おれについて来なせえ」

いつの間にか劉備を兄貴呼ばわりし始めた張飛は、巨体を驚くほど身軽く動かして反重力艇からとび下りると、先に立って歩き始めた。劉備も、手早く駐機処置をしてあとに続いた。

ごちゃごちゃした通路を通り抜けて、二人が入ったのは、女っ気のない居酒屋風の酒場だった。張飛は、常連らしくさっさと真ん中の席に座り込むと、

「おい。いつものやつを一樽と、豚を一頭ぶん、見つくろいの料理で持って来い」

と怒鳴った。劉備は、向かい側の席にどっしりと腰をおろしながらいった。

「お前さんは、このあたりじゃなかなかの顔らしいね」

「何といったって、幽州じゃ旧家の方だからな。この華采城が建っている土地だって、五分の一はおれのものなのさ」

「ほほう、そりゃ大したものだ」

劉備がうなずくのを見て、張飛は尋ねた。

「しかし、お前さんも見たところただものじゃあなさそうだが、どういう身分なんだ」

「私は、共和国の初代大統領を務めた劉家の子孫に当たるものだが、今ではご覧の通り落ちぶれてしまって、あまりはやらない靴屋さ」

「な、何と……」

張飛は、大きな目を一層大きく見開いた。

「それでは、あの劉家のご当主か」

劉備は、その様子を見て苦笑した。

「なに、いくら先祖が偉くても、この私はつまらぬ男だ」

「そんなことはない。見る目をもって見れば、お前さんがただものじゃないことぐらい、すぐにわかる」

などといっているところへ、酒と肴が運ばれて来た。

「さあ、飲んでくれ。まさか、酒は飲めないなどというまいな」

「そんなことはない」

二人が、大盃を取って飲み始めた時、店の中が妙に静かになった。敏感な劉備が顔を上げると、張飛よりさらに一回りは大きい男が、あたりを払うばかりの勢いで入って来たのが目に入った。張飛もすぐに気づいて注目した。

男の風貌は、異様だった。顔色はまるで熟した棗のように黒く、その中で唇だけが朱のよ

うに赤い。眉は額の半ばを覆うほど太くて濃く、切れ長の大きな目にかぶさっている。そして、豊かな髭は胸にまでかかっていた。

ところが、こういう恐ろしげな顔にもかかわらず、男の身のこなしには気品があり、

「酒を持って来てくれないか」

と、店の者に声をかける様子も、すこぶる穏やかである。

異様な大男の闖入に、一瞬静まった客たちも、どうやらこれは面倒ごととは無関係な堅気の衆らしいと知って、また陽気にしゃべり始めた。

「ありゃ、ただものじゃねえな」

しばらく大男の様子を見ていた張飛は、そうつぶやいて立ち上がり、つかつかと席に近づくと声をかけた。

「そこの兄貴。もし、差し支えがおありでなければ、おれたちの方へ席を移して下さらんかね」

「わしならば、別に差し支えもないが、何かご用の筋でも……」

突然の申し出に、いぶかしげな表情で振り向いたものの、大男は張飛の顔を一目見ると何かに魅入られたように立ち上がって、二人の席へやって来た。

劉備と張飛が、それぞれ自己紹介をすると、男はいった。

「わしは、このG星の者ではなく、隣のS星から参りました。姓は関、名は羽と申すお尋ね者でござる。

S星の田舎あたりでは、共和国政府より豪族どもの方が強力で、無法の限りを尽くしております。あまりのことに腹に据えかねて、大物を二人血祭りに上げたばかりに、わしは故郷を捨てて浪々の暮らしをしておりました。

ところが、はからずも、イエロー・キャップの反乱で、義勇兵を募集していると聞いたもので、応募しようかと幽州へ参りました。反乱軍の討伐で手柄を立てれば、大抵の罪は帳消しになるそうでござるからな」

「なるほど」

関羽の話を聞いて、二人は思わず顔を見合わせた。

「実をいうと、われわれも義勇軍に参加したいと思っていたもので……」

張飛は、これまでのいきさつを話した。関羽は、うなずいて、

「なるほど、確かにばらばらに応募するのは得策といえぬ。しかし、元手といえばこの体しかないわしに、いったい何ができようか」

「そういうことなら、この三人が部隊を組んで応募すればよかろう。そうすれば、一兵卒の働きと違って無視することもできまい。ぜひ、そうしようではないか」

大まかな張飛は、もうことが成ったような勢いだ。

「さあ、関羽の兄貴。これで一杯やってくれ」

「うむ」

関羽は、なぜかこの二人に対して、最初からまったく警戒する気持が起きなかった。い

や、それどころか、これまで誰に対しても感じたことのない信頼感、一種の同類意識のようなものを強く感じていた。しかし、それにもかかわらず、三人で戦闘部隊を組もうというアイデアには簡単に同意できなかった。本格的な武装をしている反乱軍相手に戦闘をするには、たとえ十人や二十人の武装にも莫大な費用がかかることを知っていたからだ。

　黙々として大盃を干している関羽の様子を見て、その気持を察した劉備がいった。

「張飛どの。部隊を組むといっても、そのためにはとてつもない金がかかる。イエロー・キャップの装備は、反乱軍といってももともとが正規軍だけになかなかのものだという。それどころか、何やら新しい武器を発明したから、それに自信を持って反乱を起こしたのだというではないか。

　ところが、この私などは重装備の反重力艇も買えない貧乏人だ。どうして対等に戦うことができよう」

「まさにその通りだ」

　関羽も、うなずいた。

「わしは、どんな武器でも使いこなす自信がある。といって、丸腰の船で戦艦にぶつかりたいとは思わない。むしろ、一兵卒として支給された武器で地上戦をやる方を選ぶね。

　射撃でも斬り合いでも、大抵の敵には負けないつもりだからな」

「まあ、関羽どのにかなうやつは滅多におらんだろうよ」

　劉備は、鋼鉄製の巨人さながらの関羽の体を見ていった。

「装備のことならおれにまかせてくれ」

　張飛は、丸焼きにした豚の腿をかじりながらいった。

「おれは、ここでの暮らしに飽き飽きしてるんだ。こんな世の中でのんべんだらりと平穏に暮らすよりは、危険でもいいから張り詰めた毎日を送りたい。そのために死んだって、後悔はしないさ。

　財産を全部売りとばせば、ちょっとした金になる。幸いなことに、政治資金ほしさのばかげた政治のおかげで、このあたりの土地はべら棒な値段になっているから、義勇軍の士官になれる程度の装備なら、すぐにでも買えるさ。

　おまけに、このあたりにでも、今の世の中に嫌気がさして、まともな軍人の部下になって名を上げたい若い者や、筋の通らない事件でお尋ね者になっている連中はいくらでもいる。おれが声をかければ、百人やそこらの兵隊はすぐに集まるだろうよ」

　劉備は、驚いていった。

「しかし、先祖伝来の財産をそんなことに使ってかまわんのかね」

「かまうもんか。おれは、結婚なんて面倒なことはしたくないから、いずれこの財産も他人のものになってしまう。それなら、共和国の敵、イエロー・キャップをやっつけるのに使えば、ご先祖さまだって喜んでくれるさ」

「当面の敵はイエロー・キャップだが、今の共和国の本当の敵は、共和国の政治家や役人や豪族どもなんだ。イエロー・キャップはやっつけられるかもしれんが、もっと悪どい連中に

すってんてんにされかねないぞ。
それでもかまわんのか」
「そうだ」
関羽も相槌を打った。
「病気には、必ず原因がある。イエロー・キャップを国の病気だとすれば、原因は、腐り果てた政治だ。上のやることは、必ず下も真似をする。今の共和国では、国民が熱中するのは金儲けとカンフーのデスマッチぐらいのものだ。共和国がこんな状態だから、これまでに大小の反乱が何度あったかわからない。イエロー・キャップを倒してもすぐにまた、第二、第三のイエロー・キャップが出て来るにきまっている。
張飛よ。お前さんには、その覚悟ができてるかね」
「イエロー・キャップをやっつけたら、その勢いで悪い政治家や役人を叩き殺してしまうさ」
「悪党の五人や十人は叩き殺せるさ。でも、わが共和国に巣くう悪党は際限なくいるんだぞ」
関羽は、盃を空けると、張飛の顔をじっと見詰めながら地響きがしそうな低い声でいった。
「なんでも、われわれの先祖が超過密の母星を脱出して、この星系へ来たのは四百年以上も前だそうだ。人間の住める惑星が三つあったので、大昔、母星にあった三つの国の名にちな

んで、魏星、呉星、蜀星と名づけたという。今の、G星とW星とS星のことさ。
最初は、自分が王様になろうとしたやつが大勢いて共和制支持者との間で戦争になり、結局は劉備の兄貴のご先祖が初代大統領になって、今の共和国ができたという話は、お前さんも知ってるだろう。
その時の苦い経験で、特定の家系の者に国を支配されないために作ったのが、太学士の制度だった。つまり、太学の卒業生で国家試験を通った者だけに太学士試験をして、合格者には太学士出身の資格を与え、太学士出身でなければ高級官僚になれない能力主義の世の中にしたわけだ。
これは、立派なことだった。アホが親のあとをついで、順送りに大臣になる世の中に比べりゃ、天地の差がある。実際、太学士制度も、最初のうちはうまく行っていたということだよ。ところがどうだ。今じゃ、政治とかお役所とか聞けば、まともなやつは慌てて逃げ出すようなシロモノになっちまった。
共和国憲法じゃ、汚職役人は極刑を科せられることになっているが、政治家や役人が死刑になったなんて話は聞いたこともないだろう。これは、絶対にやつらがご清潔だからじゃない。合法的に利権や無税の収入が仲間内のポケットに入るような法律を次から次へと作って、いくらでも贅沢ができる仕組みになっているからなんだ。
ハタ目に見ておかしいと思っても、太学士出身者は、そういう法律の専門家の集団だから、リクツじゃ勝ち目はない。おまけに、国民議会の議員だって、五人に四人までは太学士

出身のやつらだし、そうでなくったって、選挙で当選すれば太学士出身と同じ権利があるから、一つ穴のムジナさ。

わしは、故郷の町で政治の実態をうんざりするほど見て来たから、いくらか知っているが、実にひどいものさ。S星では、県知事あたりまでは、形式上、太学士出身の下っ端が占めているが、実際の地方政治は、昔からの豪族がやりたい放題をやっているんだ。

大統領だけは、国民の直接選挙で選ばれて、国民議会の決定にも拒否権を発動できるたてまえだが、実際は、大統領顧問官どもの決めたことに黙ってハンコを押すだけのお人形になり下がっている。

だから、この百年というもの、共和国の各地に大小の反乱が絶えたことがないのだ。いいかね、張飛さんとやら。一人の兵隊として戦争をするのなら、勝つにせよ負けるにせよ、その場限りのことだ。強い者は、それなりに尊敬されてはばがきく。

だが、自分の手勢を率いて戦争に参加する以上、いやでも大なり小なりこの国の政治にかかわらなくてはならなくなる。

お前さんには、その覚悟ができてるのかね。そのことを承知で、財産を投げ出すといってなさるのかね」

「いうまでもねえこった」

張飛は、一瞬のためらいもなく答えると、大きな拳でテーブルを叩いた。

「おれの吹けば飛ぶような財産でも、大事に守って暮らせば一生安楽にやって行けるだろうよ。でも、おれはもう、こんなぬるま湯につかったような生活が我慢できねえんだ。

まともな人間ほど小さくなっていて、筋を通そうとすりゃひどい目にあわされる。じっと我慢の子で、お偉い方のなさることはどんなことでも見て見ぬふりをしていれば、平穏無事にその日を送らせて頂けるという寸法だ。いい加減うんざりするぜ。

何か一発やらかしたいと思っていた矢先、劉備兄貴に出会って、この兄貴となら命を的に戦ってもいいという気がしたんだ。

そこへ、お前さんみたいな男まで現れた。おれは、ただの乱暴者だから、野放しにされると何をしでかすかわからねえ。でも、思慮分別のあるお前さんたちみたいな兄貴分と一緒なら、思う存分腕を揮えるだろう。

どうだ。お二人とも、天下に志があるのなら、おれも仲間にしてくれないか」

いかつい顔に誠意をみなぎらせて見上げる張飛の目をじっと見ていた劉備は、おもむろにいった。

「張飛どの。お願いしたいのはこちらの方だ。私は、大した男ではないが、天下を憂える気持だけは人後に落ちないつもりだから、きっとお役に立てると思う」

「お前さんさえその気なら、わしも、こちらからお願いしたい」

関羽も、黒光りのする顔を引きしめていった。

「どうせイエロー・キャップの討伐に参加する以上、つまらぬ上官に追い廻されて命を縮めるよりは、お前さんたちのような仲間と組んで一働きしたいものだ」

「よし。それで決まりだ」
張飛は、立ち上がった。
「ここでは腹を割った話もできん。席を換えよう。良い場所があるんだ」
三人は、酒場を出た。先に立って大股で歩く張飛に二人がついて行くと、エレベーターを乗り換えながら、次第に高い所へ上がって行った。
「どうだ。ここは、華采城の中心にある塔の頂上だぞ」
最後にエレベーターを降りると、張飛は、ゆるやかな階段を昇って二人を透明なドームに覆われた見晴らしの良い部屋に案内しながらいった。
「見てくれ。素晴らしい眺めだろう。華采城を建てる時、おれは大地主としてこの場所の使用権を確保しておいたのさ。幽州の半分はここから見える。さあ、座ってくれ」
三人は、丸いテーブルを囲んで座った。劉備は、景色などには目もくれず、二人の顔をしげしげと眺めながらいった。
「不思議なめぐり合わせというほかない。われわれは、今朝起きた時にはアカの他人だった。いや、ほんの一時間か二時間前まで、こんな人間がいることさえお互いに知らなかった。
それが、どうだろう。同じ目的に命を賭けようとしているのだ。私には、まだ夢のようにしか思えない」
「とんでもない。これが夢であるもんか。兄貴、おれは、いつかこういう日が来ると信じて

待っていたんだ」
張飛は、燃えるような目つきで二人を見た。
「自分でも信じられないが、わしもそうなのだ」
関羽も、髭をひねくりながら独りごとのようにいった。
「いつものわしなら、見知らぬ人に誘われても、けっして一緒に酒を飲んだりはしない。ところが、さっきは、まるで古くからの知り合いに声をかけられたような気持になって、つい同席してしまった。そればかりか、こうやって話しているとますます昔からの仲間のような気がしてならないのだ。
いったい、わしらは、どのような因縁で結ばれた仲なのだろうか」
「そんなことは、どうだっていいじゃねえか」
張飛が、大声でいった。
「理由なんぞ、あとでひまな時に考えればいい。とにかく、おれたちは力を合わせて働きたいんだ。できることなら、この手で共和国をまともな国に引き戻してやりたい」
関羽も、うなずいた。
「そのためには三人がばらばらではまとまった力にならない。ここで、兄弟の誓いを立てようではないか」
「そうだ。それがいい、もちろん、劉備の兄貴が長兄だ。そして、関羽の兄貴が次兄。おれは、もちろん、末弟だ。

この序列に、異存はあるまいな」
張飛は、大声でいって、二人の顔を交互に見た。劉備にも関羽にも、なぜか三人の序列は抵抗なしに納得できた。
「よろしい」
劉備は、重い口を開いていった。
「そういうことなら、この私が長兄となろう。さあ、二人とも立て。そして、手を握り合うのだ」
三方から伸ばした白い手と黒い手、そして赤い手が、テーブルの中心でがっしりと握り合わされた。
「いいか、弟たち。私のいう通りに誓いを立てるのだ」
劉備が、早くも長兄らしい威厳を見せていった。
「われわれは、今ここに兄弟の誓いを立て、これより心を一つにして苦しむ者を救い、共和国のために戦い、そして、願わくは、同年同月同日に死せん。もし、天地に神があるならば、わが真心を照覧あらんことを」
関羽と張飛が神妙に唱和した。
折しも、天を覆っていた厚い雲の切れ目から、太陽の光が扇を広げたように射し出すのが見えた。その様子をじっと見ていた劉備が、厳かにいった。
「弟たちよ。あれを見ろ。天の神は、われらの誓いを聞き届けたもうたのだ。今や、暗い雲

は破れようとしている。
幸先は上々だぞ」

幻影空戦

「ここは、おれにまかせてくれ」
張飛が、勢いこんでどなった。発信、受信とも複雑な暗号回路を使っているのだが、最新の通信装置のためまるで向かい合って話しているようにはっきり聞こえた。
「敵は、たったの十機だ。おれの第三中隊だけで、ひともみにもみ潰してくれる」
「用心しろ。何かの策略かもしれない。手強いやつらだそうだからな」
劉備は、高い位置から戦場全体を見廻しながら答えた。幽州と青州の境に近い地上二万メートルばかりの空中で、僅か十機の反乱軍の編隊が、劉備と関羽、張飛の率いる五十機ずつの重武装反重力戦闘艇の編隊に上下左右の全方向を包囲されてじっと浮かんでいた。所属の全艦艇の先端を黄色く塗っているためにイエロー・キャップの名で恐れられている反乱軍だが、圧倒的に優勢な討伐軍の前では影がうすかった。
「大丈夫だ。HRレーダーでも百五十キロメートル以内に敵機影はない」
「われわれが援護しているが、用心してかかれ」
「まかせておけ」

張飛の率いる赤塗りの戦闘艇中隊は、それまでの空中での静止状態から滑るように展開した。同士討ちをしないために、球面陣形で点対称になる位置を避けながら包囲を広げて行く。空中で自由に静止できて、しかも瞬間的に発進、停止のできる反重力艇による戦闘は、パイロットの資質も作戦も、空気力学的な旧式の戦闘機とはまったく異質なのだ。
「攻撃開始」
機体を震わすような大声で張飛が命令を下すと、赤塗り重武装反重力艇の半分二十五機から、高エネルギー・ビームが劣勢のイエロー・キャップ編隊に向かって走った。次の瞬間、敵戦闘艇の耐熱装甲が白熱した光を発する……と思って見ている目の前で、五十本のビームは何の抵抗もなくイエロー・キャップの編隊を貫通した。
「なんだ、これは……」
張飛が、わめいた。
「第二次攻撃開始」
フルチャージで待機していた二十五機が、一斉にビームを放射した。しかし、静止状態で直撃すれば、小型戦闘艇の装甲なら厚さの半分程度までは穿孔して白熱した火花を散らすはずの強烈なビームが、またもむなしくイエロー・キャップの戦闘艇を通り抜けて、虚空に消えた。
「なんてこった」
レーダー・スクリーンにもはっきり映り、明らかに実体として存在する一群の戦闘艇が、

ビーム攻撃に対して幻さながらの反応しか示さないのだ。強気の張飛も、この意外な成り行きを見てさすがにたじろいだ。

「攻撃を中止して、散開させろ」

劉備は、柳司令官の『とにかく変幻自在の敵だ。戦闘のたびに別の手を使って攻めて来る』という言葉を思い出しながら、張飛に命令した。だが、一瞬遅かった。

今の今まで心細げに滞空していた十機の戦闘艇の姿がにわかにぼやけて消え失せたと思うと、第三中隊の包囲の外に一隻の五千トン級反重力巡空艦が突然出現したのだ。銀色に輝く涙滴形の巨体は、艦首が鮮やかな黄色に塗られているので、イエロー・キャップの巡空艦であることは、一目でわかった。

思わず目をこすりたくなるのをこらえて、劉備がレーダーを見ると、小型戦闘艇の機影は消えて、まがうかたなき巡空艦の大きな機影だけが映っているではないか。

気づくと同時に、巡空艦からの攻撃が始まっていた。あらかじめ照準を合わせてあったとしか思えない正確さで、十数発のミサイルが同時に発射され、張飛の率いる戦闘艇のうち退避行動のおくれた五機が直撃を喰らってこっぱ微塵になってしまった。

「散開、散開」

張飛は、慌てふためいて叫んだ。だが、次の瞬間には、巡空艦の姿も消え失せていた。まるで悪い夢を見たような気分だが、五人の部下と五機の重装備反重力戦闘艇が失われたという重苦しい現実は夢ではなかった。張飛は、うめくようにいった。

「おい。兄貴。これはどういうことだ」

「わからん。おい、関羽。何か気づいたことはないか」

劉備は、沈黙を守っていた関羽に尋ねた。

「わしにもわからん。とにかく、静止しないでRND行動を続けるほかあるまい」

「そうだな。よし、全機ただちにRND行動を開始。自由度は、一六〇〇」

すぐに、戦闘艇はそれぞれのコンピューターの乱数指令にしたがって、パイロット自身にも予測できない不規則で複雑な動きを始めた。この状態では、奇襲による損害を最小にとどめることができるのだ。劉備は、慨嘆するようにいった。

「柳司令官に、これまでの戦闘の実例を沢山聞いたが、こんなのはなかった。いや、こうやって戦力をつぶしてから、無理をせずにその州を占拠するのがやつらの手らしいから、筋としては通っているのかもしれない」

「しかし、それにしても、いったいイエロー・キャップの戦闘艇と巡空艦はどこから来てどこへ行きやがったんだ」

と、張飛がわめいた。しばらくたってから、劉備がいった。

「まったく不思議な戦術だ。あるいは、イエロー・キャップのやつらは、亜空間に出入りする方法を開発したのではあるまいか」

「もしそうだとすれば、戦って勝てる相手ではない」

張飛が絶望的な声を出した。それを聞いて、関羽が思慮深げにいった。

「しかし、兄者。わしにはどうしてもそうとは思えんのだ。共和国には優秀な学者が大勢いるが、紙の上の理論はともかくとして亜空間についての実際的な研究など一つだってないだろう。イエロー・キャップがどれほどの人材を集めたとしても、巨大な巡空艦で亜空間に出入りできるような技術を短期間に完成できるだろうか」

「天才科学者というやつがいるかもしれねえぞ」

「そりゃいないとはいわんよ。だが、たとえいたとしても、かなり大がかりな実験を重ねないと実戦で使える技術はできるものじゃない。

共和国が二つに分裂して戦っているのならともかく、たかが田舎の十州だけをおさえている反乱軍のイエロー・キャップどもに、それだけの基礎的な大研究を支援する力があるとは思えんのだ」

「じゃ、あれはいったい何なんだ」

張飛がそういった時、柳司令官からの指揮官専用通信が入った。

「義勇軍の劉備隊長、応答せよ」

「こちら劉備隊長」

「戦況はどうだ」

「実に奇妙な戦闘で、残念ながら一機も撃破しないうちに敵影は消えました。味方の損害は、五機です」

「やはり、そうか。野武士集団のようなおぬしたちなら、なんとかイエロー・キャップどものゲリラ戦法を破れるかと思ったのだが……。

だが、義勇軍に無理は頼めん。それ以上犠牲を増やしたくなければ、帰投して解散することを許可する」

もともと劉備たちに対して好意的だった司令官は、けっして侮辱するつもりでいったわけではない。たくましい面がまえの優秀な反重力艇ライダーを揃えた義勇軍を見て、この連中なら奇怪なゲリラ戦に対処できるかもしれないと一筋の期待を抱いていただけに、失望したのだ。

だが、劉備たちにとっては、軽蔑でも失望でも同じだった。

張飛の呼びかけに応じて集まったのは、幽州でも名うての荒くれライダーどもである。日ごろ、一般に許可されている量産品の反重力艇を限度までチューンアップして乗りこなしているが、それでは満足できなくなった男たちだった。軍隊に入って戦闘艇のパイロットになれば、最高のマシンに好きなだけ乗れるのだが、職人気質の連中だけに、規則ずくめの軍人暮らしはとても性に合いそうにない。

命知らずのライダーにとって、親分肌の張飛が先頭に立って義勇軍団を作る話は、まさに渡りに船だった。重武装した反重力戦闘艇は、マニアにとってあこがれの的だったし、小うるさい上官の命令には反抗したくなる連中も、張飛のような親分のいいつけには喜んでしたがうものだ。その上のボスである劉備や関羽も、張飛以上にゆったりとした大物らしいから、死ぬ覚悟さえしていれば気楽な暮らしができそうだ。

こういう荒くれが、三百人も集まったまでは良かったが、張飛の全財産を売り払ったところで、戦闘艇をこれだけ揃えるにはほど遠い。ところが、乱世のこととて、一種の保険として頼りになる軍団があればと思う企業や金持も多かった。張飛が旗揚げするという話が伝わると三個中隊分の、百五十機買えるだけの思いがけない大金が集まってしまったのである。

三人の頭領たちは、厳しいテストの結果、百五十人のライダーを選び出し、これに戦闘艇パイロットとしての猛訓練をして、義勇軍の新しい部隊を編成したのだった。

だが、この部隊を足がかりにして乱世に打って出ようとしていた劉備たちにとって、いいとこなしの緒戦の敗北は、痛手だった。このまま成すこともなく引き下がるようでは、軍に対しても、後援してくれた幽州の企業や旦那連に対しても、顔向けならない。たちどころに信用は失墜して再起不能であろう。

といって、具体的な対策も浮かばないまま、劉備が頭をかかえていると、関羽が、個人回路を使って呼びかけた。

「兄者。もう一度戦わせてくれるよう司令官に頼んでくれないか。どうやら、やつらの戦法が読めたぞ」

「本当か。それなら早速申請してみるからな」

暗闇に日が射した思いで、劉備は司令官を呼び出した。

「柳司令官殿。ただ今の交戦の結果、イエロー・キャップ軍の作戦の手のうちが読めました。

次の交戦では、必ず撃破してお目にかけます」

「そういうことなら、交戦を許可する。帰投してエネルギーを補給の上、待機せよ」

義勇軍の場合、政府は武器と人員に関しては一切供給も口出しもせず、ただ弾薬とエネルギーを補給するだけなので、司令官は気楽に返事をした。勝ってくれれば、自分の功績にもなるし、たとえ負けたところで、自分の部下ではないから痛くも痒くもないからだ。もちろん、こういう無責任な態度がどれだけ共和国政府や正規軍の威信を傷つけているかわからないのだが、弱体な正規軍の司令官にとっては、背に腹は替えられぬというところだった。

命令一下、劉備の軍勢が整然と集結し始めた時、また柳司令官から緊急連絡が入った。

「義勇軍の劉備隊長。イエロー・キャップがまた現れた。爆撃艇一機に護衛の戦闘艇五機の編隊だ。現在位置の東北東二百三十六キロメートルの上空一万四千メートルの位置だ。ただちに迎撃せよ」

「了解」

劉備は、ただちに関羽と張飛に命令を伝えた。関羽がいった。

「兄者。今度は、わしの中隊に戦わせてくれ」

「そうはいかん。今度も、おれの第三中隊にやらせてくれ。このままじゃ、メンツにかかわる」

張飛が、不満そうに主張した。

「待て、張飛。関羽には、考えがあるのだ。

おくれを取ってはならぬ。目標位置へ急行せよ」

劉備は、三つの中隊を散開させると、数分後にはイエロー・キャップの編隊と対峙(たいじ)する位置に移動していた。

「兄者。くわしく説明しているひまがないので、すまないが、この作戦に限ってはわしに指揮を取らせてくれないか」

関羽が、丁寧に頼んだ。

「よろしい」

劉備は、言下に答えると、すぐに命令を下した。

「全部隊に告ぐ。本作戦に関しては、隊長以下全機が関羽中隊長の指揮下に入る。全員、通信機をチャンネルKに切り換えよ」

三人の頭領たちの絶対的な信頼関係を知っている部下は、ためらうことなく通信チャンネルを関羽直通に切り換えた。

「こちらは、関羽中隊長だ」

すぐに、関羽の命令が全員に聞こえた。

「現在の空間座標を各自三軸ともゼロにセットし、今後は、中隊長機より指示される目標座標へ直行せよ」

関羽は、自機のコンピューターに全機の空間座標を入力した。これで、劉備義勇軍をすべて自分の手足のように指揮することができる。

「第二中隊前進」

関羽は、まず、自分の中隊を前衛に出して、一斉射撃をすればビームが敵の爆撃艇に集中するように、半球状の戦闘面を形成させる。まったく平凡な戦術で、張飛の布陣よりはるかにひかえ目だった。

イエロー・キャップの爆撃艇は、戦闘艇五十機の迎撃を受けて空中に停止した。僅(わず)か五機の護衛戦闘艇は、爆撃艇の周囲によりそうようにしてゆるやかに動いている。普通の戦闘ならば圧倒的に優勢な迎撃側がかさにかかって襲いかかり、劣勢の攻撃側が全機撃破される場面である。

イエロー・キャップにとっては、その時こそ不思議な戦法を使って反撃するチャンスだから、敵がわなにかかるのを舌なめずりしながら待っている。関羽艇だけが、爆撃艇に向けてビームを放射した。ビームが、何事もなかったように爆撃艇を通り抜けたのは前回と同じだった。

続いて、一斉攻撃を始めるのかと待ちかまえていたところへ、関羽の命令が出た。

「第二中隊。目標座標へ移動せよ」

だが、関羽の作戦指揮は、イエロー・キャップ側にとってはもちろん、味方にとっても予想外だった。命令と同時に示された空間座標に向かって、関羽直属のパイロットたちは、一瞬の間もおかずに殺到したのだが、黒塗りの関羽中隊が見事な操縦ぶりで包囲した目標は、目の前にいるイエロー・キャップの爆撃艇ではなく、その二千メートルほど下の何もない空

間だった。いずれも、反重力艇の操縦にかけては、われこそ世界一と自信まんまんの連中だから、たとえ目に見えない目標に向かって反射神経だけで操縦しても、その動きは一糸乱れぬ見事さである。

張飛は、三人の間だけに通じている回路を使って叫んだ。

「兄貴。どこへ行くんだ。だまされるんじゃねえぞ」

「張飛。口を出すな。関羽の命令に従うのだ」

と、劉備がきびしい口調でたしなめた。

「第三中隊。進め」

張飛の中隊が、やはり何もない空間を中心にして集結し、第二中隊の外側に散開した。続いて、劉備の第一中隊が、さらにその外側に散開した。

「第二中隊。目標に向かって攻撃ビームを全力放射」

まるで催眠術にかかったように、第二中隊のパイロット全員が何もない空間に向けて、ビーム砲のトリガーを引いた。充分にチャージされたエネルギーが、虚空に向かって放出された……と見えたのはほんの一瞬のことで、八方から強力なビームを受けた空間に、一隻の巡空艦らしい中型艦の輪郭が、白熱した光に包まれて浮かび上がったのである。

「第三中隊。続いて攻撃ビームを全力放射」

中型艦の輪郭が、再びはっきりと浮かび上がった。

「第一中隊。敵艦のブリッジをミサイル攻撃せよ」

劉備の小隊は、前方にいる関羽と張飛の包囲網を避ける位置に布陣しているので、ただちにミサイルを発射した。戦闘艇に積んでいるミサイルの破壊力などたかが知れているものの、それでも五十発が集中すれば、中型艦の頑丈な装甲も大破する。いきなり空中の一点から黒褐色の煙が噴き出すと同時に、今までビーム攻撃を受けた時だけ輪郭の見えた巡空艦の艦体が、突然銀色に輝くなめらかな姿を現した。艦首の鮮やかな黄色が、明るい地上と青黒い空をバックにして目にしみるようだった。護衛の戦闘艇は一機もいない。

反重力艦独特の美しいブリッジの曲線が無残に破壊されて、煙はそこから激しく噴き出していた。同時に、最初見えていた爆撃艇と護衛の戦闘艇が、視野からもレーダーからも消え失せた。

関羽は、その状況を観察しながら命令を下した。

「第三中隊。敵艦ブリッジに第二次ミサイル攻撃をせよ」

一回目の攻撃で大破していたブリッジは、この一斉攻撃で潰滅した。

ブリッジに指揮系統が集中している中型艦では、これで戦闘指揮はほとんどできなくなる。巡空艦は、最初のビーム攻撃を受けてから一分もたたないうちに、ほとんど戦闘能力を失っていた。

「ざまあ見やがれ」

張飛が、元気良く叫んだ。

「関羽の兄貴。おれの中隊の指揮権を返してくれ」

「兄者にお願いしろ」
筋の通らないことが何より嫌いな関羽は、劉備に与えられた自分の指揮権は当面の戦闘だけだと理解しているから、けっして越権行為はしない。その辺の呼吸は張飛も充分飲み込んでいて、すぐ劉備に頼む。
「劉備の兄貴。この巡空艦の始末は、おれにつけさせてくれ」
「いったい、どうやって始末をつけるつもりなのだ」
「おれの中隊の下士官に、この型の巡空艦に三等機関士で乗り組んでいたやつがいる。その男のいうには、こんな船、機関室にあるジェネレーターの制御部さえぶっつぶせば、ウンともスンともいわずに墜落するそうだ」
「誰が、その制御部を破壊するのだ」
「おれが、その男といっしょに乗り込んで叩きつぶしてやる。もちろん、おれだってこんな船と心中する気はさらさらないから、時限爆弾を仕かけて来るさ」
「よろしい。行け」
「まかせてくれ」
すぐに、張飛の小隊から五機の戦闘艇が飛び出した。張飛は、破壊されたブリッジ前の甲板に自分の戦闘艇を重力場の作用でしっかり固定した。続いて、もと三等機関士の部下が同じように着艦した。あとの三機は、空中で護衛に当たる。
二人は、身軽に艇の外へ出ると、張飛が先に立ってブリッジの裂け目から艦内に入り込んだ。

内部は見るも無残に破壊されていて、ねじ曲がった金属と人間の死体が通路をふさいで足の踏み場もない。しかし、張飛は、とても人間わざとは思えない力で、無造作にそれを押しわけながら進んで行った。腕力だけで片づかなくなると、高出力のブラスターで焼き切ったり、腰につけた特殊鋼製の棍棒で叩きこわしながら、舗装道路を歩くようなペースで進んで行く。
艦の頭脳であるブリッジが大破したため、艦長が死亡したばかりか、艦内の気圧があちこちで下がるし、通信系統がずたずたになって、艦内は大混乱におちいっていた。
本来なら、イエロー・キャップのユニホームを着ていない張飛たちが通路を進んで行くことなどできるはずもないのであるが、まさか攻撃の直後に敵が乗り込んで来るなどとは夢にも思っていないから、あっという間に艦の中心部にある機関室にたどりついた。
機関室には五、六人の機関兵がいたが、突然入って来た大男を見て茫然としているところを、ブラスターの掃射で片づける。この一方的な戦闘が行われている間に、手早く時限爆弾を取りつけた下士官が、張飛に報告した。
「爆弾のセット完了しました」
「よし。脱出だ」
機関室を出ると、ようやく異常に気づいた兵士たちが駆け寄って来たが、張飛は遠慮なくブラスターで撃ち倒しながら進んで行った。ついでに、通路の壁面に露出している配線のパ

イプを焼き切るので、方々で照明が消えて、混乱に輪をかける。

大体、どんなことでも建設より破壊の方がやさしいのは世の常で、いかに頑丈な巡空艦でも内部でゲリラ的な破壊活動をされてはひとたまりもない。張飛たちは、混乱に乗じて艦内を突破すると、再びブリッジの裂け目から甲板へ飛び出した。

「長居は無用だ。早く行け」

張飛は、下士官が艇に乗り込むまでブラスターをかまえて見張っていたが、続いて自分もコックピットに飛び込んで、無造作に離艦した。護衛の戦闘艇が中隊長機を囲むようにして動き始めた。張飛は、大声で報告した。

「兄貴たち。終わったぞ。あと一分四十二秒で爆発する」

「ご苦労だった」

劉備がほっとしたように答えた。

張飛たちが編隊に戻って態勢を調(ととの)えると、巡空艦がぐらりと揺れるのが見えた。時限爆弾は小型なので、爆発音は聞こえなかったし、艦体に見かけ上の変化もなかったが、ブリッジが破壊されたまま空中にじっとしていた艦は、一度バランスを崩すとそのまま振子のように大きく左右に振れながら高度を下げて行き、ほどなく土煙を立てて下の岩山に突っ込む様子が望遠スクリーンにはっきり映った。

「いっちょう上がり、だ」

張飛が、愉快そうにいった。

「では、柳司令官に報告しよう」

劉備は、重々しくいって、通信回路を開いた。

「こちら義勇軍の劉備隊長。柳司令官に報告します」

すぐに、司令官が出た。

「イエロー・キャップの中型巡空艦一隻撃墜致しました。墜落地点は、敵機を発見した位置の真下の山腹。ただ今から、拡大映像を送ります。報告終わり」

「本当か。劉備隊長。一体どうやって幻のようなイエロー・キャップの船を破壊したのかね」

柳司令官は、大喜びで体を乗り出すようにして質問した。

「その件につきましては、帰投の上ご報告申し上げます」

「よろしい。待っているぞ。全速力で帰れ」

司令官との通信を切ると、劉備は関羽に尋ねた。

「関羽。こういうわけだから、どうやってあの巡空艦の隠れ場所がわかったのか教えてくれ。というより、どういう理屈でイエロー・キャップのやつらが姿を消したり、幻の船にレーダー波を反射させたりしているのだ」

「わしも、学者ではないからうまくは説明ができないが、お尋ね者として放浪していた時に、ああいう技術の話を小耳にはさんだことがあるのだ。

何でも、発明した男が軍に売り込もうとしたが、大学士出身じゃないもので相手にされな

かったということだった。恐らく、それをうらんで反乱軍に売り込んだのだろうよ。
　わしの聞いたところでは、光線を曲げる力場のようなものを作るということだったが、同じ技術で空中に立体的な映像を映し出せるらしい」
「しかし、兄貴。なぜただの映像がレーダー波を反射するのだ」
「わしにもわからんが、電波も光も人間の目に見えるかどうかの違いがあるだけで、同じものなのだろう。それなら、実物同然に見える以上、レーダーに感じるようにさせることもできるはずじゃないか」
　劉備も、科学的な知識はあまりないが、ものごとの本質はよくわかる男なので、しばらく考えてから納得したようにいった。
「なるほど。同じような方法で、一方では光も電波もゆるやかに曲げて通り抜けたように見せかけ、一方では反射させて、ないものがあるように見せかけるというわけか。
　それはわかったことにして、おぬしは巡空艦があの位置にあることをどうやって知ったのかね」
「どうしてといわれても困る。あれは、わしのカンとツキだったとでもいうほかない」
「しかし、それでは次の戦闘の時に応用がきかないし、柳司令官にも報告のしようがなくて困る」
　ツキはともかく、カンといわれることの多くは、無意識のうちに合理的な推理が働いているという説を聞いたことがあるのだが、とっさにそう判断するだけの根拠はあったのだろ

う」
「もちろん、それはある。護衛艇が爆撃艇を中心にして水平方向に散開していたから、もしこれが空中に映し出した映像だとすれば、恐らく真上か真下にかなりの大きさの艦が浮かんでいるはずだと見当をつけた。
　そして、もし前回と同じように巡空艦を使っているならば、その映写装置のようなものは艦の底よりもブリッジや甲板に積みやすいはずだから、真下にある確率が高いと読んだのだ。
　そのあとは、本当にカンだけで、巡空艦のありそうなあたりを推定して、わしの小隊に包囲させ、ビームの一斉放射をやってみた。あれだけのエネルギーを集中すれば、光をコントロールする力場にも影響するだろうと思ってね。
　あとは、ご覧の通りの結末さ」
「ううん」
　と、張飛が唸(うな)った。
「さすがは、関羽の兄貴だ。あの時は正直いって気でもくるったのじゃないかと思ったけれど、よくそれだけの根拠で自信たっぷりに命令できたなあ」
「危険のない戦争なんてない。危険なことが嫌なやつは、うちでおとなしくカミさんといっしょに商売でもしているに限る。
　わしは、危険なことが好きなのだ」

「まさに、その通りだ」
劉備がいった。
「さあ。全員、編隊を組んで基地へ堂々と凱旋しようじゃないか」

赤目の呂2号

「さえねえ田舎だなあ」
惑星間フェリーの窓から外を見ながら、張飛がぼやいた。一州の首府で宇宙港のある土地だというのに、高層建築らしいものさえ見えない。
「これが、命がけでイエロー・キャップを叩きつぶしてやったおれたちへのお礼か。ひでえもんだ」
「仕方あるまい。無官の私が、たとえ辺地といえども一村の村長に任命されるのは、かなりの出世だろう」
劉備は、はじめて見るS星の世界を食い入るように眺めている。だが、張飛は不平たらたらだった。
「兄貴は、人格者だよ。おれは、はらわたが煮えくり返りそうだぜ。だってさ、イエロー・キャップを討伐できたのは、もとはといえば関羽兄貴のおかげじゃないか。つまり、劉備義勇軍の功績だろう。
そりゃ、エライ学者先生が、関羽兄貴の考えたことを立派な理論にして、イエロー・キャ

ップどもを確実にやっつけられるようになったけれど、まぼろし戦術の秘密さえわかれば、あんな理論は気のきいた高校生にでもできるっていう話じゃねえか。

それなのに、どうだ。おれたちには命がけの戦争を何十回もやらせておいて、いよいよ安全と決まったあとから、安全百パーセントの戦闘を指揮したチンピラ軍人や小役人どもが、省長どころかG星の州知事あたりに昇格していやがる。

あの董卓ってえ白ブタ野郎なんざ、いくさのイの字も知らんくせに、おれたちの総攻撃でやっとの思いでイエロー・キャップの旗艦を黙らせたところへ大軍を率いて割り込みやがった。やつらがあの旗艦にぶっ放したのは、止めの一発だけのくせに、おれたちの手柄には知らん顔どころか、劉備の兄貴が太学士出身じゃないとわかると、ふんぞり返って口もききやしねえ。

結局、大統領府にうまいことてめえの功績を売り込んで、大統領府付武官とやらになり、今じゃあ飛ぶ鳥落とす勢いだという話だ。

それなのに、おれたちの兄貴がさいはてのS星の、しかも片田舎の定州は中山郡、安喜村の村長と来ている。

そりゃ、出世かもしれねえが、兄貴がこんなド田舎の村長にしかなれねえ理由が、太学士出身でも士官学校出の正規の軍人でもないというのは我慢できんよ。

関羽の兄貴は、どう思うかね」

「お尋ね者だったわしが、こうやって劉備兄者やお前と一緒に故郷のS星へ帰って、まっと

うな暮らしができるだけで満足している。別に文句をいう気はないがね」

「あのなあ」

張飛は、じれったそうにいった。

「これじゃ、他人に得をさせるために働いたようなものじゃねえか。おれは、別に聖人君子のまねなんぞしたくない。

それに、このざまじゃ戦死した部下にも申し訳がたたんよ」

それを聞くと、関羽は笑った。

「今さら何をいう。最初からいってるように、政治にかかわるってのは、こういうことなんだ。政治の世界でものごとの筋道が全部きちんと通るなら、この世は天国とまでは行かなくても、天国に限りなく近づくだろうよ」

「おれは、そういう国を作りたいんだ。だから、こんなことは我慢できん」

いきり立つ張飛に向かって、劉備はさとすようにいった。

「私だって作りたい。そのために、お前さんたちと一緒に立ち上がったのじゃないか。だが、ものごとには順序がある。われわれは、野人だ。正義の気持だけは人一倍強いつもりだが、それだけで世を治めることはできまい。

人の心を知り、世の中を治めるノウハウを身につけるためには、小さな村の村長あたりから始めるのが手頃だと思って、私は喜んでいるんだがね。

われわれは、まだ若い。三人とも二十代だ。チャンスは、いくらでも廻って来る。今のう

ちに、力をつけておこうではないか」

張飛は、黙ってうなずくほかなかった。確かに、自分たちには太学士出身者のような組織もないし、連中を支配するだけの力も経験もない。士官学校出の将軍たちを命令に従わせるだけの権威もない。だが、張飛にしてみれば、劉備には、もう少し強烈な上昇意欲を持っていてほしいという思いが、胸の内にくすぶる。

その思いを察したのか、関羽がいった。

「策士、策に溺れる、ということわざがあるのをお前さんも知っているだろう。

細かい抜け道を次々と見つけて、小器用に進むやつを見ていると、わしらのように不器用な男はつい感心してしまうが、そういう連中が大成することはめったにないものだ。手段にすぎなかったはずの策略が、目的のようになってしまい、本来の方向を見失ってしまうからだろうよ。

なあ、張飛。兄者が今いわれたように、わしらはまだ若い。ややこしい策略をひねくるのに向いているとも思えない。しばらくは、天から与えられた道をゆっくり歩いてみようじゃないか」

「なるほど」

単純な張飛は、理詰めで納得させられてうなずいた。

さて、場面が変わって、こちらは洛陽にある大統領府の豪華な宮殿。洛陽は、G星の首府

であると同時に、三惑星連合共和国の首都をかねた共和国最大の都会である。

純白の大統領府と付属する国民議会議事堂は、同心円状に広がる大都会の中心部にあったが、その大統領府の中でも中心に位置するのが、第三百八十九代献大統領の執務室だった。

豪華な執務室の中にいる献大統領は、国民の直接選挙で選ばれた共和国の最高権力者なのだが、およそ平凡な男で、知能程度もあまり高くない。もちろん、見かけだけはちょっと立派で、演説の原稿を読ませればなかなかうまいが、取柄といえばその二つだけで、計算は足し算がやっとという程度の男だった。

なぜ、こんな男を国民が大統領に選ぶのか不思議に思う人もいるだろうが、この国でたった一人の大統領候補者を決めるのは、ひと握りの高官たちで、投票用紙にはその候補者の名前が印刷してあって、選挙民はそれを投票箱に入れる仕組みになっている。もちろん、タテマエは民主主義だから反対する自由も認められていて、理由を申し出れば、別の投票用紙に好きな人物の名前を書いてもかまわない。

ただし、そんなことをする反体制派はほとんどいなかった。あまり長い間こういう状態が続いているので、選挙とはそんなものだと思い込んでいるせいもあるが、本質的には、一般国民は政治にまったく期待していないからだ。

トップである大統領の選挙でさえこんなものだから、あとは推して知るべしで、国民議会の候補者も利権の大きさに比例してあらかじめ決められている。

それでは、実際の政治を運営しているのは誰かというと、僅か十人の大統領顧問官たち

で、その筆頭である第一顧問官の地位こそが、すべての太学士出身官僚にとっての最終目標になっていた。

官僚制度の最終目的が官僚制度自体の維持であることは、古今東西を問わず人類共通の傾向で、三惑星連合共和国も例外ではなかった。例外でないどころか、太学士出身者のグループほどその傾向の強い集団は珍しく、共和国の政策は、国民の福祉などとはまったく無関係で、要するに太学士出身官僚間の序列や力関係の都合に合わせて決められていた。

だから、執務室の豪華な椅子に座ってはいても、献大統領には何の権限もなく、渡される案件にサインして、翡翠（ひすい）製の大統領玉璽（ぎょくじ）を機械的に押すだけのロボットにすぎないのだった。

ところが、普段はあくびばかりして所在なさそうに座っているこのボンクラ大統領が、今朝はどことなく浮き浮きしているように見えた。それもそのはず、十年間の大統領任期を半分以上も務め上げた今日になって、はじめて自分の意思で一枚の命令書にサインし、玉璽を押したのが嬉しくてならなかったのだ。

といっても、自分で何かを立案して決定したわけではない。そのいきさつは次のようだった。

まず、大統領府付武官の董卓が朝早く献大統領を訪ねて来たところから、すべては始まった。

この董将軍こそ、劉備たちの功績を横取りして、イエロー・キャップ討伐の最高殊勲者に

おさまったいかさま軍人なのだが、大統領顧問官たちに信用があるのを利用して、うまく権力の座近くに潜り込んでいた。

董卓は、巨体を縮めるようにして、大統領に対する正式の敬礼をすると、うやうやしい態度でいった。

「大統領閣下。恐れながら申し上げます。

やつがれ、おそばにお仕えするようになりましてから、大統領府内のありさまをつぶさに拝見致しまするに、かの顧問官どもばかりが権力を振るっております。そして、憲法に定められましたる至高の地位におられる大統領閣下ご自身では、何一つお決めになれないご様子と拝し奉りました。

この董卓の眼は、ふし穴ではござりませぬぞ。献閣下のごとく英明な大統領を頂きながら、国民が苦しみにあえいでおりますのは、すべてかの顧問官どものせいであることが、よっくわかり申しました」

いかに愚かな男でも、字が読める程度の知能はあるので、イエロー・キャップの旗艦を撃墜し、反乱軍の主将、張角を倒したという董卓将軍にこんなことをいわれて嬉しくないはずはない。しかも、董卓将軍は、いかにも自分を尊敬しているように丁寧な敬語を使い、うやうやしい態度で接してくれる。

こうなると、単純な献大統領の目には、ずるくて残酷そうな董卓の顔も忠義な軍人の典型

のように見えるし、体重が少なくとも二百キロはあるぶざまで脂肪の固まりのような体さえ、この上なく威厳たっぷりに思えるのだった。

甘い言葉に有頂天になった大統領は、笑いがこぼれそうになるのを抑えようともせずに何度もうなずきながらいった。

「さよう。さよう。実は、余も常々そう思っておる。しかし、顧問官どもの力はまことに強く、どうすることもできないのだ。その方、何か良い考えがあるなら、遠慮なく申してみよ」

「はい。閣下が、やつがれをご信任下さりますならば、共和国の権力は、憲法に定めまする如く、ただちに閣下のものとあいなります」

「おう。そういうことなら、将軍の思うように致すぞ」

「しからば……」

董卓は、鋭い目つきであたりを改めてうかがうや、ふところから一枚の書類を出して、大統領のデスクの上に広げた。

「ここに、ご署名を頂き、玉璽を押して下さりますれば、顧問官どもなど、もはや恐れることはございませぬ」

「しかし、顧問官どもは法律にくわしく、いささかの落度でもあれば、余の命令書などただの紙切れにすぎぬというであろう」

太学士制度が続いている最大の理由の一つは、この国では形式上の合法性が神経質なほど

に重要視されているからである。長年かけて作り上げられた膨大な法律は、主に太学士出身の官僚たちの利権保護のためにあるので、法律と太学士制度はあたかも車の両輪のような関係になっている。

複雑な法律は、それなりに見事な整合性を保っているため、ほんの一部分でも合法性が失われると、太学士出身者による官僚制度自体がぐらつきかねない。

五年も大統領をやっていると、こんな男でもそのあたりの理屈はいくらかわかって来るらしく、献大統領は、心配そうだった。

「その点は、ご心配ご無用に存じます。現在、共和国では、副大統領の地位は空席になっておりますが、憲法には、『大統領の任命によって定めることができる』とはっきり記されております。

共和国の無数の法律のどこを探しましても、神聖なる憲法の条文のいずれかの効力を停止するという条項はございませぬゆえ、この任命書に閣下のご署名と玉璽をいただけますならば、不肖やつがれが副大統領に就任致し、閣下にさからう者どもなど、わが兵力で鎮圧致してお目にかけますわい」

「なるほど。それは、名案である」

献大統領、署名捺印だけは慣れているから、董卓の口車にまんまと乗せられて、完全に合法的な副大統領の任命書を作ってしまった。

長年にわたって副大統領が空席になっていたのは、その地位が法律的にあいまいなため、

不用意に任命された場合の危険を利口な高級官僚たちが承知していたからだった。ところが、共和国憲法は、一種の神聖法として扱われているため、論評するだけでも袋叩きの目にあわされる。もちろん、誰も手を触れることなどできない。

悪がしこい董卓は、その弱点を巧みについて、うまうまと三惑星連合共和国副大統領の地位を手に入れてしまったのである。献大統領にもう少し常識があれば、在任中の大統領が死亡した時は、副大統領がその地位を継いで残りの任期を務める、という規定があることを知って震え上がっただろう。

もっともらしい顔で副大統領任命書を押し頂き、うすっぺらな書類入れにしまい込んだ董卓は、

「これは、有難き幸せにござります。では、ぬかりなく準備を致しました上、顧問官どもに申し聞かせますゆえ、このことは絶対にご他言なさりませぬように。

さもなくば、ずる賢い連中のことでございますから、閣下のお命を狙うことすらあるやも知れませぬぞ」

一発おどしをかけると、董卓は、誰にも気づかれぬように大統領執務室を出てドアを閉め、脂ぎった顔に陰険な笑いを浮かべながら、つぶやいた。

「あとは、あのアホを殺しさえすれば、共和国は、いつでもおれさまのものだ」

そんなこととは夢にも知らない献大統領は、忠義な副大統領のおかげで、もうすぐあの高慢ちきな顧問官どもをアゴでこき使えるようになると信じて、得意げに薄ら笑いを続けていた。

董卓は、悠々と大統領府を出て、当番兵の操縦する専用の反重力艇に乗った。大統領府付武官である将軍が大統領府を出入りしても、警備兵は当然のこととしか思わないし、顧問官たちはまだ出勤していなかった。董卓は、こうして誰の注意を引くこともなく、自分のオフィスのある師団へ引き上げると、自分の部屋へ閉じこもった。

副大統領任命書を書類入れから出して机の上に広げると、董卓は、これこそ長年夢見ていた、共和国の支配者への近道なのだと思った。全国が自分の支配下に入れば、いずれは共和国などというまだるっこしい制度を廃止して、独裁者として君臨する計画だったが、差し当たりは、武力を背景にした副大統領として、合法的に顧問官どもを制圧しなくてはならないのである。

だが、そのためには、よほど慎重に準備してかからないと、返り討ちにあってこちらの命が危ない。

董卓は、副大統領任命書を金庫にしまうと、ビジホンで腹心の参謀李儒少佐を呼び出し、すぐ来るように命じた。

「どうだ。例の物はできたか」

少佐が入って来てドアを閉めると同時に、董卓は尋ねた。

「はい。試運転は、大成功だったようです。あとは、董将軍閣下のサイコ・パターンとの調整をすれば、すぐに使えると申しておりますが」

「費用は、請求額だけ渡してやってくれ。僅かな金を惜しんで天下を手中にしそこなったのでは、後世の笑いものになるからな」
「はあ。すでに、直接経費のプラチナ二万六千両のほか金貨で千両渡してあります。引き渡しの時に、さらに千両渡す約束であります」
「よかろう。その程度の金で、ああいう天才を抱えておけるのなら、安いものじゃ」
董卓は、機嫌良くいった。
「仰せの通りでありますが、何せあの呂布という男は大変な変わり者で、おまけに金と権力と女にはすこぶる意地汚いという噂であります。
確かに、共和国に二人とはおらぬ天才的なメカトロニクスの職人で、特に、量子顕微鏡を使ったウルトラマイクロ・マニピュレーターによる手彫りの光子超LSIの製作は、共和国広しといえどもあの呂布以外に手がけられる技術者は一人もいないそうであります」
「いわれなくとも、それぐらいのことは知っておる。金と権力の好きなやつなら、ふんだんに金を使わせ、権力のうまみをたっぷりと味わわせてやれば良かろう」
共和国の最高権力者、というより三惑星の独裁者になろうとしている董卓にとって、一人の変人技術者の個人的欲望などちっぽけな問題にすぎなかった。
「今回の作品でも、その手彫りの光子超LSIがふんだんに使われているとかで、これを採用された上は、董閣下の安全は呂布ごとき職人の手に握られることになります。
その点は、充分お含みの上、今後のご決断を賜りたく存じます」

「わかっておる」
董卓は、秀才参謀の精密な分析を聞きながら、うなずいた。いかに李儒少佐が優秀であっても、金庫の中に献大統領の署名と玉璽つきの副大統領任命書が入っていることはわからない。帝王を志す者と一参謀の判断の違いは、基準とする情報の質にあるのだ。
「なあ、李少佐。考えてみろ。権力者にとって、金と権力に弱い連中ほど扱いやすいものはないのだぞ。
最高権力者ほど金と権力を自由にできる者はないから、金と権力の好きな男ほど、簡単に操れる。
そうは思わぬか」
「御意にございます」
李少佐としては、参謀としての意見をボスに判断して貰うのが仕事なのだから、将軍の判断に論理的な欠陥がない限り、受け入れるほかなかった。
「それで、サイコ・パターンの調整とやらは、今月中にもできるのかね」
董卓としては、一刻も早く権力を掌握したいところなのだが、たとえ腹心の部下にでも自分が焦っている様子を見られたくなくて、わざと悠然と質問した。
「今日にでもOKのようなことを申しておりましたが、いかがでございましょうか」
「うむ。わがはいは、今日の午前中なら出られる」
「それでは、念のため確認致します」

少佐は、ビジホンで呂布を呼び出した。ぎょろ目で丸坊主の男が映った。

「おう。李少佐どのか。こちらの準備はできてるぞ。いつでもかまわん」

呂布は、顔をみるなりいった。

「そうか。では、これからすぐ董閣下をお連れするが、手落ちのないようにしておいてくれよ。閣下は、大変お忙しいお方だからな」

「わかっておる。大事なスポンサーに迷惑をかけるほど、ドジな男じゃないから心配するな」

「よろしい。それでは、三十分以内に着く」

李儒少佐がビジホンを切ると、董卓は立ち上がった。

「では、参ろう」

李儒少佐自身の操縦する反重力艇に乗って、董卓がお忍びのような形で行った先は、洛陽の町外れだった。ごくありふれた灰色の四角い建物の前にぴったり寄せて艇を停めると、何やら重そうな箱を抱えた李少佐が、先に降りてドア・チャイムを鳴らした。すぐに、さっきビジホンで見た男が出てきた。

董卓は、はじめて見る呂布が、意外にたくましい大男なのに驚きながら、艇を降りた。すぐに、李少佐が初対面の二人を引き合わせた。二人とも、相手の第一印象に満足したような様子で言葉を交わした。

「閣下。呂2号には、ご満足頂けると思います」

「そう願いたいな」

厳重にロックできる何重ものドアを通ってうす暗い工房に入ると、董卓は、思わず足を止めて息を呑んだ。

奇妙な形の甲冑（かっちゅう）をつけた厳めしい人間の像が一体、スポット照明を浴びて金色に輝いていた。身長は百九十センチもあるだろうか。鈍く光る赤い目が、じっと董卓を見下ろしているようだった。

「これが、呂2号でござる」

「見事なものだ……」

董卓は、惚れ惚れと眺めながらいった。

「早速、サイコ・パターンの調整とやらをやって貰おうではないか」

「かしこまりました。どうか、そこへおかけ下さい」

呂布は、呂2号の正面に据えつけてある複雑な構造の椅子を手でさし示した。頑丈な金属製らしく、董卓が巨体を投げ出すようにして座ってもびくともしなかった。すぐに、ひとかかえほどもある透明な半球形のカバーが上から降りて来て、董卓の頭部を覆った。

その様子を見届けると、呂布は、大型のコンソールの向こうへ廻って腰をおろした。李少佐は、ドアの内側に立って油断なく警備をしている。

「三十分近くかかりますがその間、お立ちにならぬようお願い申し上げます」

呂布は、何やら操作を始めながらいった。董卓は、機嫌良く答えた。
「わかった。なるべくじっとしておるぞ」
ゆっくりと時間が流れた。見たところでは、ほとんど何も起こらなかった。呂布の叩くキーボードのかすかな音が聞こえ、十面ほどあるスクリーンに複雑なパターンが流れているだけである。大事を前にして慎重になっている董卓は、普段よりはるかに忍耐強く、退屈極まりないこの時間を無言で耐えた。
やがて、金属のこすれ合う不気味な音が聞こえた。同時に、それまでゆったりと立っていた呂2号の体全体が、さながら大きな手で絞り上げられるように引き締まって行く様子がはっきりとわかった。数分のうちに、呂2号は見るからに機敏そうな姿になり、胸を張って立っていた。
続いて、呂2号の目が、血のような色の光を放って輝いた。それを見ると、呂布はコンソールの前に立ち上がって報告した。
「閣下。呂2号は完成致しました。今後は、閣下のご命令以外には一切従いません。ただし、基本ソフトが護衛用でございますゆえ、閣下の安全は、たとえご命令がなくとも最優先でお守り致します。
閣下。もう、お立ちになっても結構でございます」
「ついに完成したか」
透明なカバーがもとの位置に戻るのを待って、董卓はゆったりと立ち上がろうとした。李

少佐が駆け寄って来て助けた。
「どうか、何なりとご命令下さい」
呂布は、コンソールの前を離れながらいった。
「ほほう」
董卓は、次の瞬間には攻撃に移れそうな姿勢で身構えているたくましい護衛ロボットに近づくと、じろじろ見ながら周囲を一周した。その間も、呂2号は、頭と体を少しずつ動かして、新しい主人の周りを警戒し始めている。
「呂2号。わがはいについて来い」
董卓は、最初の命令を出してゆっくり歩き始めた。呂2号は、意外に軽快な足取りで、一メートルほど後を追ってついて行く。工房を一周すると、董卓は、入口の前に立ち止まっていった。
「呂2号。このドアを破れ」
頑丈な鉄製のドアに片手をかけると、呂2号は、上半身を少し前に傾けて押した。数秒もたたないうちに、ドアは大きく歪み、爆発音に近い轟音（ごうおん）を立てて外れた。
「なかなか、やるわい」
董卓は、満足そうにいってから、首をかしげた。
「だが、護衛の腕前の方は、どうやって試したものかのう」
「これでは、いかがかな」

呂布は、手近にあったコップを取ると、いきなり董卓目がけて投げつけた。
「何を致す」
董卓が慌ててよけようとする間もなく、ドアの前にいた呂2号は、素早く振り向いた。次の瞬間、両眼からほとばしったビームは、呂布の手を離れて間もないコップを打ち砕いていた。董卓の体には、破片のひとかけらすら当たらなかった。
「ほほう。これは、驚くべき性能だ」
董卓は、満足そうにいった。
「しかし、敵のブラスターで狙撃された場合は、どんなものだろう」
これ以上、工房の中で荒っぽい実験をしてほしくない呂布は、李少佐の方を半分見ながら答えた。
「それは、ビーム防護服をお召しになった上で、軍隊で実験なさることですな。呂2号の扱いについては、少佐にくわしくお話してありますので、少佐からお聞き下され。
残りの代金は、テストが全部終わってからでよろしゅうございますぞ」
「なに。金は、今払って取らせる。おい。李少佐。千両をここへ出せ」
董卓は、気前良くいった。中央に大した人脈のない董卓にしてみれば、当面頼りになるのは金と武力だけである。能力のある人材は、金に糸目をつけずに集めたかった。まして、呂布のように今後いくらでも使い道のありそうな天才には、ケチだと思われたくないのだ。
大力の少佐は、さっき運び込んでおいた箱を床から持ち上げて呂布に手渡した。

「呂布どの。確かめて下され」
と、董卓がいった。少佐よりたくましい呂布は、その箱を軽々と受け取ってデスクの上に置き、嬉しそうに蓋を開いた。そして、いかつい体とは不釣り合いに繊細で神経質そうな手で、ぎっしり詰まった金貨をすくい上げては落としながら、恍惚とした表情でその音色に耳を傾けていたが、ふと思いついたようにいった。
「そのドアの修理代金は、別途にご請求致しますぞ」

大統領府のクーデター

「ここを開けろ」
　無遠慮な大声と、破れんばかりに激しくドアを叩く音に、三惑星連合共和国大統領顧問官たちはびっくりして顔を見合わせた。おりしも、会議室の中では顧問官たちの定例会議が開かれていた。
「どこの無礼ものじゃ」
　長寿薬の使いすぎで、干からびたなめし皮のような肌をした張譲第一顧問官が、眉をひそめながらいった。
　共和国の政治の中枢である大統領府の中でも、特別に重要な大統領顧問官会議室、会議中ここへ入れるのは、十人の顧問官以外は記録や雑用をする高等秘書官一人だけで、大統領すら入れない共和国中最高の〈聖域〉なのである。ドアの前まで来ることを許されるのも、特別な高級官僚のほかは選り抜きの警備官だけなのだ。
　そのドアを乱暴に叩きながら大声でわめく者がいるという事実は、現に自分の耳で聞いていても、顧問官たちには、容易に信じ難いことだった。

「警備官は、何をしておる」
　司法問題を担当している第五顧問官の段桂が苦々しげにつぶやいた。秘書官は、慌てて目の前のビジホンを取ると、警備の責任者を呼び出そうとした。だが、呼び出しのブザーが二十回鳴っても相手は出て来ない。
「一体、何をしておる」
　いよいよ激しく叩く音に、張譲は不安そうにドアの方を見ながらいった。秘書官は、あちこちにビジホンをかけまくるが、どこにも通じない。
「電線でも切れたようでございます」
　汗を拭きながら秘書官が報告すると、段桂第五顧問官は恐ろしい目つきでいった。
「警備責任者は、S星の辺地へ追放だな」
　仲間の顧問官たちも、同意したようにうなずいた。だが、責任者の処罰を決めたところで、差し当たり警備官が来ない事実に変わりはない。
　この種の権力者は、具体的な問題を処理する能力などゼロに近いから、担当の部下がいない時に変わったことが起きると、ただうろたえるほかないのだ。
「開けないと、叩き壊すぞ」
　ドアの外の声は、ひときわ大きくなった。
　――どこかで聞いた声だ――
　何人かの顧問官はそう思ったが、ドアの外にいるのが誰かわかったところで、今さら何の

足しにもならない。

「壊せるものなら、壊してみろ」

第一顧問官が、かん高い声で叫んだ。複雑な唐草の浮き彫りを施した厚さ五センチ近くもあるブロンズのドアである。内側から四方にかんぬきでロックしてあるから、人間の力では、びくともしない。

張譲の捨てぜりふが、聞こえたかどうかはともかく、外にいる人物の声はさらに大きくなった。

「ようし。今、叩き壊してやる」

わめき声とともに、ドアの中心部が内側にふくらみ始めた。分厚い金属板のそり返るいやな唸りが聞こえた。

顧問官たちの顔に、恐怖の色が浮かんだ。独裁的権力者の特徴として、本質的に想像力が欠けているから、自分たちが今置かれている状況については何一つわかっていない。しかし、生身の動物である以上、目の前に見える現象に対する物理的な恐怖だけははっきりと感じているのだった。

見る見るうちにドアの曲がりは大きくなって、直径が八センチもあるかんぬきの一本が、鋭い音とともに壁から外れた。

それを見ると、張譲第一顧問官は真っ青な顔を恐怖で引きつらせて立ち上がり、ドアの反対側へ向かってよろめくような足どりで逃げた。こうなれば、もう大統領顧問官としての威厳もへちまもない。顧問官たちも秘書官も、慌てふためいてドアの反対側の壁にへばりついた。

ほとんど同時に、みにくくひん曲がったドアの片側が、室内へ向かってはじけ飛んだ。蝶番の一部がちぎれずに壁とはつながっていたため、重いドアは豪華な調度品をなぎ倒し、斜めになって止まった。

続いて、かんぬきも蝶番も全部外れた反対側のドアが、そのまま内側へ倒れて、近くにあった家具を轟音とともに床面に叩きつけた。

「な、なんだ、あれは」

秘書官が、悲鳴を上げた。

もうもうと立ちこめる埃の向こうに立っていたのは、不気味な赤い目を光らせた金色の大男だった。よく見ると、金属製の甲冑らしいもので全身を覆っているようだが、その姿の異様さだけで充分人を威圧するだけの迫力がある。

怪物が一歩横へ移動すると、震えあがった顧問官たちの前に脂肪太りに太った一人の男が現れた。イエロー・キャップの討伐で名を上げて大統領府付武官に昇格した、あの董卓将軍だった。将軍は、背丈こそ金色の大男には及ばないものの、胴周りははるかに太い巨体をゆするようにして土煙の中をゆっくりと進み出た。

「おう。将軍か」

第三顧問官で軍事担当の曹節が、ほっとすると同時に急に傲慢な表情に戻っていった。い

かに上級の軍人でも、大統領顧問官にとっては部下の一人、いわば下っ端にすぎない。

まして、相手はつい最近取り立ててやったおかげで、大統領府に出入りできるようになった男だ。上官の窮地を救うために登場するのは当然で、しかも顧問官を救えば、また叙勲の対象になるのだから有難く思うべきだ、ぐらいの感覚で呼びかけた。

「ここは、そなたの警備範囲ではないが、特に許可するによって、早くその怪物を処分せよ」

だが、意外なことに、董卓将軍は、二、三歩前に出ながらこれまでとは別人のように残忍そうな表情になってせせら笑い、凄味のある声でいった。

「ふふん。何をほざく。この死にぞこないどもめが。わがはいは、貴様らの指図など受ける身分ではないわい。貴様らの方こそ、わがはいに生殺与奪の権を握られていることがわからんのか」

「控えろ。この下郎めが」

曹節が、居丈高になって怒鳴った。

「たとえ勲功ある将軍とても、われらの口頭命令によって、一兵卒におとすことも軍法会議で死刑を科すこともできるのだぞ」

「できるものなら、やってみるんだな」

董卓は、ふてぶてしくいい放つと、やおら一枚の書類を取り出して顧問官たちの方へ向けながら近づいた。

「これは、恐れ多くも大統領閣下よりじきじきに賜った副大統領の任命書であるぞ。わがはいは、今や三惑星連合共和国の副大統領なのだ。まさか、このご署名と玉璽が見えないとはいうまいな」

「に、に、にせものだ」

張譲第一顧問官は、今までは、デブで愛嬌のある番犬ぐらいにしか思っていなかった董卓が、憎悪をむき出しにした恐ろしい形相でにじり寄って来るのを見て、心底からの恐怖を覚えながら叫んだ。

その恐怖の中に、さし迫った肉体的な要素が多く含まれていたことは確かだが、法律でコリ固まった頭には何よりも一人の軍人が正式の副大統領任命書を持っていることの異常さが恐ろしかったのである。

第一顧問官にとって、大統領のサインと玉璽は見慣れたものなので、一目見ただけでそれが本物であることはわかった。しかし、そんな恐ろしいことが、絶対にあってはならないこともよくわかっている。

大統領顧問官は、共和国の法律に関しては最高度の専門家である。一介の軍人にすぎない董卓が、たとえどんな手段で副大統領の任命書を手に入れたかわからなかったが、それがどれほど厄介な問題を含んでいるかは、一瞬のうちに理解できた。

――あのトンマ大統領めが……――

張譲は、心の中で罵った。こんなことが起きないように、大統領の人選には大変な苦労を

しているのだ。それだけに、顧問官の誰一人として、献大統領が、よもやこんな軍人のいいなりになるとは想像もしていなかった。だが、人を偏差値と太学士試験の成績とでしか判断できない顧問官たちは、どんなつまらぬ人間にも同じような自尊心があることなど、夢にも思っていなかったのである。

「その副大統領任命書は、にせものだ」

張譲は、もう一度叫んだ。何がなんでも、任命書の正当性だけは否定しなくてはならない。できることなら、どんな汚い手を使っても取り上げて、破棄してしまいたかった。

「のう。趙忠（ちょうちゅう）。あれは、にせものであろう」

張譲は、法制担当の第二顧問官の同意をうながすようにいった。

「は、はい。大統領閣下のご署名、玉璽とも、真っ赤なにせものにござります」

ボスの意のあるところをとっさに汲み取った趙忠は、すぐに同意した。

「わかったか。この不届き者め。反逆罪でただちに処刑するぞ。

これ、誰かある。早くこの者を引っ捕えよ」

「何をほざく。反逆者は、貴様の方ではないか」

董卓は、任命書を右手に持ち替えて突きつけながらせせら笑った。

「神聖なる共和国憲法のどこに、副大統領が大統領顧問官の指揮下にあると書いてあるのかね。わがはいに命令できるのは、恐れ多くも大統領閣下お一人であらせられるぞ。

それ、曹操（そうそう）どの。ただちに、張譲を逮捕されよ」

声に応じて会議室に入って来たのは、共和国大統領親衛隊の指揮官、曹将軍だった。親衛隊といっても、この部隊は、実戦経験豊かな精鋭ぞろいで、これまでも反乱軍の鎮圧に何度も参加し、イエロー・キャップの討伐にも大きな戦果を上げている。

「これは、曹将軍ではないか」

親衛隊の戦闘服姿で入ってきた曹操を見て、張譲はほっとしたように大声を上げた。曹将軍は、士官学校出身の正規の軍人でありながら太学士試験にも合格しているという大変なエリートで、顧問官たちの信頼感も並の武官に対するのとは違っていた。

軍人としては大男の方ではないが、上流階級出身らしいバランスの取れた体つきと切れ長の涼しい目をした貴族的な風貌は、全身脂肪の塊のような董卓とは対照的だった。

「そこもとは、大統領親衛隊の指揮官じゃ。まさか、このような不法行為を見逃しはすまいな」

曹節が、きびしい口調でいった。曹操は、いかにも大秀才らしい冷淡な態度でいい放った。

「確かに、私は大統領親衛隊の指揮官だが、大統領顧問官親衛隊の指揮官ではない。だから、大統領閣下はもちろん、その代理者としての副大統領閣下の命令は受けても、顧問官の指図は受けぬ」

「な、何をいう。冗談であろう。曹将軍ともあろう者が、まさかあの任命書が本物だと信じてはおるまいな」

張譲は、絶望的になりながらいった。董卓程度の軍人が、思いつきで企てたクーデターなら、地方の軍隊を動員して鎮圧する望みもあるが、軍部のことばかりか官界の裏表まで知り尽くしている曹操が加担しているのでは、まず勝ち目はないからだ。曹操は、それを聞いてもほとんど表情を変えずにいった。

「この任命書は、れっきとした本物だ。軍人としては、憲法に違反できない」

「寝言は、もうたくさんだ。ええい。そのにせ任命書をこちらへよこせ」

第一顧問官は、捨て鉢になって、董卓の持っている書類を奪おうと飛びかかった。法律上の手続きだけで共和国を支配して来たこの最高権力者は、任命書さえ破ってしまえば、軍人たちの横暴をおさえられると思ったのである。

やせた小男の張譲は、見かけによらない機敏な動作で任命書に飛びつくと、太りすぎて動作のにぶい董卓がよける間もなく、書類をひったくり、力まかせに破ろうとした。だが、骸骨のようにやせた指の力では、丈夫な羊皮紙製の大きな書類を一気に破ることなどとうていできなかった。

ほんの五センチほど破ったところで力が尽き、手の位置を変えて破ろうと慌てて持ち替えた時、董卓が、冷たく命令した。

「呂2号。こやつの頭を吹っ飛ばせ」

呂2号は、命令と同時にビームを発射した。張譲の頭は一瞬のうちに蒸発して、消え失せた。

まるで悪夢を見ているようにあっけなく首なし死体となったボスが、床の上に放り出されたように転がるのを見て、顧問官たちの中にはそのまま失神する者、腰を抜かして失禁する者が続出した。あたりには、肉のこげる嫌なにおいが漂って、辛うじて立っている者も、口を半ば開けて放心状態になっている。

「曹操どの。こいつらを生かしておいては、またどこで何をしでかすかわからぬ。いっそひと思いに、まとめて始末するべきだと心得るが、おぬしの考えはいかがかな」

この秀才将軍に一目置いている董卓は、顧問官たちのだらしのない姿を見ながら、意見を求めた。曹操は、冷淡な態度でうなずいた。

「いうまでもないこと。わが共和国が、このようなありさまになったのは、すべて大統領顧問官どもが国政を私利私欲に利用したからにほかならぬ。大統領閣下の名のもとに、副大統領としての董卓どのが、即刻処刑なさるべきと考えます」

「よろしい。それ、それ、呂2号。こいつらを全員殺すのだ」

董卓の心に連動している呂2号は、ほんの一呼吸する間をおいただけで、残る九人の顧問官と、まきぞえを喰った秘書官の心臓にビームを打ち込んだ。

董卓は、死んだ人間には関心がないといわんばかりの態度で、その様子に視線を投げかけてから、床の上にかがみ込んで任命書を拾い上げた。

「大統領のサインと玉璽の入った公文書を破るとは、第一顧問官としたことが血迷ったものだ。それだけでも、充分に死刑にするだけの理由になるわい。

なあ、曹操どの」

「おおせの通りでございます。副大統領閣下」

曹操は、うやうやしくいったが、内心では、一刻も早くこの場から逃げ出さねばならないと思っていた。共和国の政治をまともな姿にするためには、大統領顧問官の制度を廃止しなくてはならないというのは、かねてからの持論だったので、昨夜、ひそかに協力を頼みに来た董卓が、正式の副大統領任命書を見せた時は、今こそチャンスだと思った。あらゆる点から判断して、曹操の率いる大統領親衛隊が協力すれば、このクーデターが成功することは確実だったからである。

だが、曹操が協力を約束したのは、それだけの理由ではなかった。

軍人仲間の儀礼的訪問という形でふらりとやって来た董卓は、客間に通されるや、後からついて来た呂2号を見て驚く曹操に向かって、薄笑いを浮かべながら尋ねたものだ。

「これが何か、おわかりかな」

「ロボットのように見えますが……」

「さよう。かの名工、呂布（りょふ）の作品で、これさえ連れていればこわいものなしという、空前絶後の傑作でしてな。

さよう、一つあの庭石を吹き飛ばしてお目にかけよう」

粗野な董卓は、他人の庭先に手頃な庭石があるのに目をつけると、

「おい。呂2号。あの石を吹っ飛ばせ」

と、命令した。呂2号はすぐ庭の方を向くと、両眼から強力なビームを発射して、ひとかかえもある石をこなごなにしてしまった。

「なかなかのものであろう」

得意になった董卓は、平然としていった。高価な石を破壊したことに対するやましさなど、いささかも感じていない様子である。

「さて、曹操どの。ひとつ、その文鎮をわがはいに向けて投げつけてごろうじろ」

「しかし、これは角ばっており、当たれば将軍が怪我をなさいます」

「心配は、ご無用。さ、投げつけてみるがよい」

止むを得ず、曹操が文鎮を取って軽く投げつけると、董卓の横に立っていた呂2号が、目にも止まらぬ素早さで手を伸ばして、その文鎮をつかんだ。

「この呂2号は、わがはいの意のままに動いてくれる。もはや、誰一人としてこのわがはいに手出しをすることはできんのじゃよ」

董卓は、茫然としている曹操の顔を見ながら得意気に笑うと、おもむろに、大統領顧問官会議室を攻撃するクーデターの話を持ち出したのだった。

形の上では依頼でも、これは、はっきりした脅迫である。一旦、秘密を聞いた上は、もし、協力を断った場合ただではおかないという意思表示を、呂2号を使ってあらかじめデモンストレーションしたと思うほかなかった。目をつけられたのが百年目で、曹操としては引き受けざるを得なかったのである。

しかし、軍人仲間では、董卓が粗暴な上、目的をはたすためならどんな卑劣な手段でも取りかねない危険な男だということは有名だった。荒療治の相棒として利用するにはまたとない相手でも、うまく身を引かなければ自滅する。曹操は、董卓ごときと運命をともにする気などまったくなかった。それどころか、このチャンスを逆手に取って、自分の野心の実現に向かって大きく一歩を進めようと、決心していたのだ。

だが、そのためには、董卓が不自然だと思わないような口実を見つけて、一刻も早くここから脱出しなくてはならない。利口な曹操は、自分が道具として使われただけだということをよく知っているから、目的をはたした今となっては、いつ殺されても不思議はないことも理解していた。

顧問官会議室まで踏み込んだのは、董卓と呂2号と曹操だけだから、部下の兵士たちはいない。それに、もしかりに、精鋭の一個中隊がここにいたとしても、呂2号から自分を守れるとは思えなかった。昨夜、董卓が得意になって説明してくれたところでは、人間が運べる程度の武器で攻撃しても、呂2号の装甲に傷をつけることすらできないということだった。

相手が人間であれば、護衛兵に身を守らせることもできるし、並の刺客なら曹操自身でも取り押さえるなり、射殺するなりできないことはない。だが、あの人工の怪物、呂2号が相手では、少なくとも建物の中にいる限り逃げることはできないだろう。

ということは、呂2号の目の届く範囲にいる者の運命は、董卓の手にがっちり握られていることになる。

——呂布とかいうやつ、下らんロボットを作りおって——

曹操は、心の中でぼやきながらも、逃げ出す口実を必死で考えていた。それを知ってか知らずか、董卓はやおら腕組みをすると、半分は独りごと、半分は曹操に聞かせるようにいった。

「さて、これからどうしたものであろうか。やはり、この際、わがはいが責任をもって大統領閣下を補佐すべきであろうなあ」

「さよう心得ます。閣下」

曹操は、せい一杯忠実な部下らしい演技をしながらいった。董卓は、猜疑心に満ちた表情で曹操の様子をうかがっていたが、おもむろに尋ねた。

「曹操どのは、わがはいの副官としてひと働きして下さらんかね」

曹操は、それを聞くと表情を改めて姿勢を正し、相手の目をじっと見詰めた。

「もったいないお言葉にございます。しかしながら、私ごとき者に、どうして天下の大事のお手伝いなどできましょう。

今、わが共和国には大手術が必要でございます。閣下以外の誰にも、この重い任に当たることはできませぬ。ただ、心配なのは中央を離れた土地で、閣下のお心を知らぬやからが不穏な動きをすることでございます。

この私と致しましては、洛陽の都にとっては鬼門とも申すべき遠州の知事にでも任じて頂き、閣下のご大業を外から補佐致す方がふさわしいと存じます」

「だが、中央の大統領親衛隊指揮官から遠州の知事では、やや格下げになるぞ」
董卓は、いぶかし気にいったが、曹操はもっともらしく、
「むしろ、その方が好都合ではありますまいか。世間の者に、私が閣下を恨んでいると思わせておけば、閣下に謀叛心を抱くやからが近づいて来るはずでございます。もし、そのような者が参りますれば、同心すると見せかけておいて、一味の仲間もろとも、一網打尽に致すこともできましょう」
「なるほど。曹操どのの忠義の心、感じ入りましたぞ。では、早速、大統領閣下にお願いして、辞令を出すことにしよう」
命がけでクーデターに参加して成功した以上、高い地位を望むのが当然である。ところが曹操が望んだのは、辺地とはいえないまでも、中央から離れた遠州の知事だった。現在の遠州知事は、形式的な官僚知事なので、辞令一本でいつでも首をすげ替えられるのだ。董卓は意外に思うと同時に安心した。曹操のような切れ者をそばに置いておけば、いつ寝首をかかれないとも限らないから、あまり高望みをするようなら、呂2号に命じてこの場で始末しようとさえ思っていたのである。
だが、味方になってくれるのなら、曹操ほどたのもしい男はいないことも、董卓は充分承知していたので、こういう成り行きになったことには満足だった。
曹操は、危ういところで安全圏に逃げ込むのに成功した。
「では、ことのいきさつが世間に知られぬうちに、早々と遠州に赴任致します」

董卓と呂2号のそばから逃げられる嬉しさを押し隠そうと、曹操は、苦心して神妙な表情を作りながらいった。
「軍隊が必要なら、指揮下の師団を引き連れて行ってもかまわんから、必要なら申請書を提出するように」
「かしこまりました。早急に計画をたてて、副大統領閣下のオフィスへ提出致します」
曹操は、丁寧に敬礼すると、落ち着いた足取りで顧問官会議室を出た。董卓は、部屋の外まで送りながら、参謀の李儒少佐を招き、
「曹将軍が、親衛隊を率いてお帰りになる。混乱のないよう指揮せよ」
と、命令した。クーデターが成功したのに、一方の功労者である親衛隊が引き上げるのは不自然な気がしないでもなかったが、何か裏があるのだろうと判断した少佐は、発令用通信機のチャンネルを指揮下の全員に開いて、そのむねを伝えた。
曹操は、整然と合流する親衛隊員の先頭に立って大統領府を後にしながら、颯爽と歩いて行った。凶暴な董卓と危険極まりない呂2号のそばにいた間の緊張から解放されて、体中の力が抜けそうだったが、すべてが計画通りに運んだ満足感で、足取りは軽かった。
共和国の内臓ガンともいうべき大統領顧問官制度は、あっけなく崩壊したし、自分は願いかなって故郷の遠州の知事に任命された。あとは、機会を待つだけだ。
遠州には、洛陽のような大都会こそないが、優れた人物が多い。資源は豊富で、土地は肥えている。工業も洗練されているし、食べ物は満ちあふれている。いわば含み資産が多いの

である。土地柄が地味なため、実力のほどは天下に知られていないが、地元出身者として曹操は高く評価していた。

　これからの共和国は、首都洛陽を中心にして、大混乱におちいるだろうと曹操は見ていた。董卓のような人間には、破壊はできても建設はできない。また、あの程度の頭では、平時の軍隊ならともかく、混乱期の政治組織を動かすことなどできるはずがない。

　このままでは、強力な独裁体制を敷く結果になることは目に見えていた。しかも、呂2号という物騒なロボットを手に入れた以上、その独裁体制がどんな形になるかも、想像に難くない。

　曹操としては、そんな最悪の状態の時に、中央の政界でのごたごたに巻きこまれたくなかった。競争に勝ったところで、消耗が激しく、いつ寝首をかかれるかわからないし、負ければ一巻の終わりだ。この際は、一歩身を引いて故郷に錦を飾り、たとえ一州であっても実際の政治を体験して、力を蓄えながら高みの見物をするに限る。

　――私は、まだ若いのだ。いずれはここへ戻って来て、天下に号令してみせるぞ――

　董卓の師団の兵士たちに取り囲まれている華麗な大統領府を振り返って見ながら、三十四歳の曹操は、心の中で誓った。

劉備と曹操

「監督官どののお着きである。一同、立ちませい……最敬礼」

　省から派遣されて来た小役人が、せい一杯ふんぞり返って号令をかけた。数百人の村長たちが深々と頭を下げる前へ州の監督官が姿を現わすと、一同を見廻してから尊大な口調でいった。

「ご苦労であった。頭を上げてよろしい。書類監査の結果、次に読み上げる村長以外は問題がないことがわかった。

ただ今より読む名簿に名前のない者は、帰ってよろしい」

　続いて、小役人が名簿を読み上げた。

　読み上げられた僅か十数人の中に、中山郡安喜村村長としての劉備の名があった。

「そりゃ、州知事がほめてくれるんだろう」

　会場から出て来た張飛が、嬉しそうにいった。

兄貴がはじめてだといっている。
ろくでもない野郎が多いが、州全体では十人ぐらいはまともな村長がいるんだろう」
「わしは、逆だと思うがね」
関羽(かんう)は、沈鬱な表情になっていった。
「村の人に喜ばれる村長が、州知事にほめられるような世の中なら、共和国もこんなひどいことにはなっておらんよ。
どの村長も、上からのヒモつきで着任しているから、合法的な範囲でできるだけたくさんの金を特別税として上部機関に納めている。今度の監督官とかいうやつも、こうやってぐるっと廻れば今年のボーナスなんていらないぐらい集まるのだろう。
ところが、わが安喜村からは一両も納めていない。お覚えがめでたいはずがなかろうが」
「だって、兄貴。州の上役に金を上納しなくちゃならんなんて規則は、どこにも書いてないぜ。おれたちは、憲法の規定にしたがって正しく村を運営して来たじゃないか」
「憲法は憲法。習慣は習慣だ。規則に書いてなくても、プロの村長ならわかるのさ。というより、わかるような連中が村長に任命されて来たんだな。
うちの兄貴みたいに、少しでも地元のためになるように村の連中の方を向いて村のことを取り仕切ってるのは、いわばアマチュアなんだよ」
「アマチュアじゃいけないのか」
「立派なことさ。けれど、立派なことばかりされると困るやつも世の中には大勢いるんだ

な。多分、難題をふっかける気だろうよ」
黙って聞いていた劉備が、この時おもむろに口を開いた。
「関羽。もしそうなら、ここを抜け出すいいチャンスだと思う」
「待ってました」
張飛は、大きな掌(てのひら)を打ち合わせてびっくりするような音を立てると、嬉しそうに大声を上げた。
「おれは、精神修養ってやつが好きじゃねえんだ。確かに、S星(せい)は良いとこだし、酒も肴もうまい。
でもねえ、兄貴。毎日トリビジョンで世界中のニュースを見てると、おれはつくづく情なくなるんだ。誤解しないでほしいんだが、おれは、あの幽州(ゆうしゅう)での暮らしに戻りたいとか、財産を手放したのが惜しいなんてことは、これっぽかしもいってるわけじゃない。
ただ、ここの生活は、刺激がなさすぎるんだよなあ。せっかく、こんな乱世に生まれたのに、のんびりと麦畑を眺めて酒ばかり飲んでいるのも楽じゃないぜ」
「しかし、つくづく良い勉強になったと思わんかね」
劉備は、この一年を思い出すようにいった。
「安喜村のように小さな村の世話役みたいなことをやってみても、人間というのは、私がかねてから考えていた通りのものだということが、よくわかった。
つまり、それほど立派なものでもないし、それほど悪いものでもないが、行政にたずさわ

るわれわれが自分の損得を度外視して、少しでも公正にことを運ぶように努力すれば、村人の気風も穏やかになる。

確かに、安喜村の人は大して学問もないし、自分勝手なところもある。ほんの目先の損得だけで動きやすい。しかし、それは、今までの行政のやり方が、政治や官僚制度の都合を第一に考えたやり方だったせいだと思うよ。

とにかく、村人のために行政があるのではなくて、行政のために村人を利用していたのが今までの政治だから、できるだけ損をしないように立ち廻らないと生きていけない。あれでは、自分勝手になるなといっても無理な相談じゃないか。

私の遠い先祖である共和国の初代大統領劉邦（りゅうほう）は、それまでの政治があまりにも煩雑で国民をないがしろにしていたのに反抗して革命を起こし、共和国を建国したということだ。

そして、国家の基本法などは単純な方が良いといって、最初の憲法草案は僅（わず）か三ヵ条しかなかったという。それさえ守っていれば、広い範囲の地方自治を認めようとしていたらしい。実際には、あまり法制が簡単だと、解釈がまちまちになってかえって公正を欠きやすいから、専門家の意見をいれて十三ヵ条にしたそうだが、それにもとづいた自治社会の集団が共和国の始まりだった。

私は、四百年前の社会が復元できるなんて考えてはいないし、今の世の中には今の世の中にふさわしい政治が必要だと信じている。だがね、たった四百年で人間の本性がそれほど変わるはずがないだろう。

社会の変化に合わせて、新しい方法を採り入れて行かなくてはならないのは当然としても、人間にはもともと自分のことは自分でできる自治能力があるという基本を忘れてはいけない。それこそが人間社会をうまく運営する基本原則だというのが、私の信念だ。別の表現をするなら、自治能力が発揮できるようにするのが、政治の目的だといってもよかろう」

普段はあまりしゃべらない劉備が、珍しく自分の政治的信条について話すのを、聞いて張飛はうなずきながらいった。

「おれは、兄貴が絶対に正しいと思うよ。隣村の酒場で飲んでいる時に、今度の村長さまになってから安喜村の衆は顔つきが変わったといって羨（うらや）ましがっているのを、何度も聞いたもの。

おれも、実際その通りだと思うね。兄貴のいう通り、人間はそれほど立派な動物じゃないが、偉いやつが手取り足取りして連れて行かないとどちらへ行っていいかわからないほどのばかでもねえ。大まかなルールだけ決めて、賞罰をはっきりさせとけば、あとは自治能力とやらにまかせても、立派にやって行けるにきまってるよ」

関羽は、いちいちうなずきながら聞いていたが、首をかしげながらいった。

「わしも、もちろん賛成だ。しかし、さっきいったように、今このあたりにいる政治ゴロや才取り（さいとり）役人どもが、そういう考え方を高く評価してくれるとは思わん方がよかろう」

三人がこもごも話し合っているところへ、呼び出しがかかった。

「中山郡、安喜村、劉備村長。入室するように」

劉備が、やおら立ち上がると、張飛は、
「おれも、ついて行こう」
と、腰を浮かす。関羽も、ゆっくり立ち上がって劉備のあとに従った。
「お、お前たちは、なんだ」
劉村長と一緒に、仁王様もたじたじとなるような大男が二人で監督官の部屋へ入ろうとしたので、小役人は慌てて制止しようとした。だが、ひげ面で恐ろしい目をした張飛にじろりと睨まれると、震え上がってしまって、口もきけない。
鬼をもひしぐような関羽と張飛を従えて入って来た劉備を見た監督官は、心臓が止まるほど驚いたが、そこは海千山千の男のこと、慌てて書類に視線を戻して、
「その方が、安喜村の劉備だな」
といいながら、おもむろに顔を上げた。
「さようでございます」
「その方は、どのようにして村長の地位にありついたのか。正直に申してみよ」
劉備は、むっとしたが、一礼して答えた。
「それがし、イエロー・キャップ討伐戦での手柄により、お上から安喜村村長の地位を賜りました」
「黙れ。何を申すか。イエロー・キャップの討伐は、偉大なる指導者、董卓副大統領閣下がなされたものであることは、共和国人民の常識であるぞ。

その方ごとき下賤の者に、いささかでも功労があったとは思えぬ。恐らくは、邪悪な手段によってその地位を得たものであろう」
高圧的な態度には腹が立ったが、政治家の劉備は、これだけ聞くと筋書がすっかり読めてしまった。
S星の辺地に住んでいても、洛陽の情報は次から次へと入って来た。ただし、政府発表の公式ニュースは、大部分が新しく復活させた副大統領の制度のPRと、偉大なる指導者、董卓副大統領の宣伝、それに顧問官制度を廃止したことによる国民の利益についての講釈のようなものばかりで、役に立つ報道はほとんどなかった。
ところが、普通の人間が知りたがるような情報も別のルートからどんどん流れ込んできた。
顧問官制度が崩壊した結果、共和国の社会は奇妙な二重構造になりかけていた。力のある政治家は、董卓の統治能力に見切りをつけて、続々と自分の地元へ帰って行き、中央政府の意向を無視した政治を始めている。ところが、実際の行政を運営するには太学士出身の官僚をこれまで通りに利用せざるを得ないから、問題がややこしくなった。
太学士出身の官僚は、中央からの命令にもある程度従わざるを得ないから、三惑星連合共和国は政治的には分裂国家のようになって、しかも行政上はつながっている部分もあるという混乱状態におちいってしまった。
これまでの社会を悪い安定とすれば、董卓支配下の社会は、悪い不安定ともいうべき様相

を呈し始めていた。

だが混乱した社会は、同時に自由な社会でもある。当然、自由なジャーナリズムが発生し、混乱の中にある洛陽の都には大勢の辣腕（らつわん）レポーターやカメラマンが潜入して、取材に当たっていた。董卓の支配下に入った中央政府が、いくら表向き立派なことをいっていても、半独立国のようになった州では自前の情報を自由に流し続けているから、普通の頭があれば実情がどうなっているかの見当はついた。

だから、特別な情報ルートを持たない劉備でも、世界の現況をかなり知っていた。中でも、現在洛陽の中央政府を握っている董卓が、自分の独裁的権力を固めるために、どれほど非道なことをやっているかについては、うんざりするぐらいの知識を仕入れていた。安全地帯にあるあらゆるメディアを通じて、この男のスキャンダルがふんだんに流されていたからだ。

成り上がり独裁者がよくやる手だが、董卓も、この世の中の良いことはすべて自分のおかげだというキャンペーンを始めていた。イエロー・キャップが滅びたのも、もちろん偉大なる指導者である董卓副大統領閣下の功績によるものであって、ほかの将軍たちは、偉大なる副大統領閣下の完全なる指揮のもとで戦ったおかげで、辛うじて勝つことができたというのである。

政府側の宣伝とは別に、董卓の身辺を護衛しているロボット呂（りょ）2号のことは、反董卓のジャーナリズムによって手を替え品を替えして報道されていたため、この新米（しんまい）独裁者がおぞましいロボットを使ってどれほど簡単に人を粛清しているかを知らない国民は一人もいないほどだった。しかも、怖いもの見たさで、呂2号に関するニュースは、いつも人気があった。

こういう世の中では、劉備たちのような本当の英雄ぐらい邪魔なものはない。できることなら事故にでも見せかけて殺したいというのが本音だろうが、劉備だけでもかなり手強（てごわ）いところへ、関羽、張飛という常識離れした歴戦の豪傑がほとんど二十四時間勤務のようにそばについているから、とうてい手出しはできない。

肉体的に片づけられないとすれば、人格的に消してしまうほかない。幸いなことに、劉備たちのグループはまだほとんど名を知られていないから、公式にはその功績を一切認めなければ済む。戦争が上手だといっても、しょせんは野武士の集団にすぎぬ。いいがかりをつけて、退職金もやらずに追放してしまえば、いずれ散りぢりになってどこかへ消えてしまい、野たれ死にするだろうという計算なのである。

天下の情勢がよくわかっている劉備と関羽には、監督官の幼稚な手口がはっきり読めていた。S星の田舎あたりでは、大して有力な政治家もいないから、まだ中央政府の影響力が大きく、この程度の役人が威張っていられるのだが、実際の強制力はほとんど失っていた。

相手が程度の低い小役人なので、劉備は、なんとかうまく丸め込む手がないかと考えているのだが、単純な張飛は、董卓ごときが手柄を独り占めしたというだけでかんかんに怒っている。おまけに、劉備か関羽が反論するかと思って待っていても、二人とも何やら考え込んでいるばかりで黙りこくっているから、ついに我慢の限界に達した。

「やい。この監督野郎め」

張飛はずかずかと前に進み出ると、鼓膜がびりびり震えるような大声で怒鳴りながら、監督官のデスクを力まかせに叩いた。一撃でデスクに大きな穴が開く。

「董卓なんてクソ野郎は、おれたちがイエロー・キャップの旗艦を撃墜したのをてめえの手柄にしてるだけのハゲタカの白ブタじゃねえか。そいつの家来のそのまた下っ端のくせしやがって、でけえ面をこくんじゃねえ」

監督官は、びっくりして飛び上がった。官僚としての序列以外に価値判断の基準を持たない地方派遣の監督官にとっては、任官していない張飛のような男は人間の数にも入れていない。村長と一緒に部屋に入って来ても、目ざわりな家畜ぐらいにしか思っていなかったのだ。

その人間以下の家畜がいきなり一人の人間として立ち向かって来ただけでも驚きなのに、突然の暴力沙汰、しかも、信じられないほどの怪力である。

どうして良いかわからないまま、おろおろと立ち上がるところを、張飛はいきなり監督官の襟首をつかんで子猫でも扱うように軽々と空中に吊るし上げた。監督官は、もがきながら叫んだ。

「くっく、……苦しい。何をするか」

「やめろ。張飛。この方はお役人だぞ」

関羽が、慌てて止めに入った。その言葉を聞くと、監督官は急に元気づき、

「わ、わしは、監督官だ。無礼を働くと許さぬぞ」

と、宙吊りになってもがきながらも、官職をかさに着て威張って見せる。

「くたばりやがれ」

関羽に左腕を押さえられた張飛は、自由な右手だけで監督官を吊るしたまま空中で一回振り廻して壁に叩きつけた。鈍いいやな音とともに、監督官の体は床へ落ちて動かなくなった。

「ざまあ見ろってんだ」

関羽の怪力に引き戻されながら、張飛は愉快そうにいった。

「おい。張飛。お前さんはいったいなんということをしてくれたのだ。せっかく、役人としても筋が通るように身を引こうと考えていたのに、これではすっかりぶち壊しではないか」

劉備が、顔をしかめながら苦情をいった。張飛は、平気な顔で、

「かまうこたあない。こんなやつらに調子を合わせていた日にゃ、こっちまでおかしくなっちまう。ついでに、こいつをもう一ひねりして息の根を止めてくれようか」

「冗談じゃない」

関羽が、溜息をつきながらいった。

「あの勢いで叩きつけられて、生きていられるほどタフなやつとも思えん。さて、このままではやっかいなことになるぞ。家には寄らずに逃げ出すべきだろう」

劉備が、尋ねた。

「逃げるといって、いったいどこへ逃げるつもりなのだ」
「G星へ帰るほかありますまい」
「しかし、三人で惑星間フェリーに乗る金はない」
「なあに、今はちょうどこのS星がG星と内合の位置に近づいていて、われわれの反重力戦闘艇なら全加速で二日はかからない距離です。窮屈なのを我慢して落下軌道を飛んで行けば、ほんのひと眠りかふた眠りするうちに着いてしまいますよ。こんな所に長居は無用だ。すぐ、エネルギー補給をして脱出しよう」
「そうだ。そうだ」
張飛は一も二もなく賛成する。
「G星じゃ、仲間の命知らずどもが腕をさすって待っているんだ。せっかく面白い世の中になったというのに、こんな片田舎の村長なんぞやっていられるかっていうんだ」
「仕方がない。ここにいては面倒なことになるから、関羽のいう通りにしよう。G星の私の故郷、北平州の公孫賛知事は、県学校の先輩だ。ひとまず、あの人を頼って行くことにする」
劉備も、止むを得ず同意した。
「それでは、私がまず部屋を出て中に向かって最敬礼するから、お前さんたちは続いて出てすぐにドアを閉め、揃って最敬礼をするのだ。あとは、三人揃って駐機場へ行けばよい。艇に乗ってしまえば、こちらのものだ」

三人は、示し合わせた通りに外へ出ると、そのままそれぞれの反重力艇に乗り込んで飛び去った。

その頃、曹操はG星の遠州で忙しい毎日を送っていた。無宿人のような劉備と違って、こちらは大統領から正式に任命された一州の知事、それも、ただの天下り知事ではなく、地元では誰知らぬ者のない名門の御曹司であるばかりか、太学士出身の大秀才。おまけにイエロー・キャップの討伐でも手柄を立てた将軍で、大の野心家ときている。
名目は知事であっても、実際は独立国の支配者のようなものだった。中央政府の干渉はほとんどないに等しいが、太学士出身の役人も手足のように使いこなしてしまうし、洛陽から連れて行った大統領親衛隊の精鋭を中心にして、州軍も編成しなおす。実力はあるものの地味だった産業界には、低利の融資をして活気を呼び起こす。新知事の着任以来、遠州では、町を歩く人の顔色まで良くなったといわれるほどだった。
だが、新知事が人知れずいちばん力を入れていたのは、人材集めだった。
曹操の見るところでは、共和国の命運はとうの昔に尽きていた。顧問官がのさばりだしたのも、数百年続いた共和国の体制が現状に合わなくなったからだと判断していた。
そもそも、大統領の直接選挙という制度が、現在の共和国の実情から見て非現実的でありすぎるのだと曹操は思っていた。三惑星の五十億という人口の中から、もっとも聡明な人物を一人だけ選挙で選び出すという憲法の理想は美しいが、美しい理想に限って現実性に乏し

いものだ。

聡明な人間が、必ずしも政治に首を突っ込みたがるとは限らないし、大統領になりたがる人間が必ずしも聡明でないことは、昔からの常識だといっていい。共和国憲法は、発想の土台からして間違っていると、曹操は信じていた。

それでは、一般論として、どういう組織の政治がもっとも優れているかという問題になると、曹操自身にもはっきりとは答えられなかった。というより、人間のように複雑な動物の集団を、永久にうまく治めるための理想的な方法など、この世にあり得ないのではないかと思っていた。

人間が移動する時に、歩くほかなかった時代と馬に乗れるようになった時代の違い程度なら、共通した政治理念があり得ただろう。それは、電車や自動車の時代あたりまでは、まだ通用したかもしれない。

だが、個人が反重力艇で簡単に宇宙へ出られる今の世の中に、地上にへばりついていた時代の考えがどれだけ通じるだろうか。

高い水準の教育を受けた曹操は、理論的に説明できることはできるだけ理論で割り切ろうと努力したが、理論はあくまで過去のデータを整理した結果にすぎないことも充分承知していた。もともと政治は、理論つまり過去のデータが応用できる部分があまり多くない分野なので、過去にこだわることはむしろ有害ではないかとさえ思っていた。

少なくとも、こういう混乱期を乗り越えて新しい世の中を開いてくれる人物が、国民投票

などという古典的な方法で正しく選び出せるはずがないというのは、今ではほとんど曹操の信念にさえなっていた。

人並み外れた切れ者の曹操にとって、人間の大部分、八十パーセントぐらいは、ほんの目先のことを判断するのがやっとの凡人だとしか思えなかった。そういう人たちも、それぞれの日常の仕事では優れているのかもしれないが、今のような時代、平凡な庶民たちに正しい大局的判断を期待する気にはとてもなれなかった。多数決主義は、どちらへ転んでも大差のない平穏無事な時代にしか通用しないと曹操は信じていた。もちろん、董卓のような人間による独裁は、最悪である。

だが、政治理論上の一般論はさておいて、差し当たりどうすべきかという点になると、曹操の結論はきわめて明快だった。

それは、曹操自身が、三惑星連合を支配することだった。

混乱がここまで広がってくると、大統領制による共和国のたてまえにしがみついていたのでは、無政府状態がますますひどくなる。今は、共和国初代劉大統領のような英雄が、新しい理念に基づいて三惑星を支配しないことには収拾がつかない場面なのだ。

そして、現在の三惑星連合のどこを見ても、自分以上にその才能がある者はいないというのが曹操の結論だった。

董卓のクーデターに参加した時から、曹操は、自分には才能ばかりか幸運までがついているのだと信じるようになった。ほんの数時間の決起で、予想以上の勝利を収めたばかりか、

独裁者の信頼を得たままで故郷の州知事に任官できるなどとは、前の晩まではどう楽観的に考えても想像もできなかった。

しかも、遠州へ帰ってからは、かねてより考えていた理念のもとに行政を行って、思った通りの業績をあげている。曹操がますます自信を強めたのは当然だった。

こういう自信の背後には、エリートコースばかりを歩んで来た秀才独特の思い上がりがあることはいうまでもないが、曹操は、他人がばかに見えてしようがないという程度の薄っぺらな秀才とは、根本的に違っていた。

曹操は、ありふれた中小企業のやり手社長のように、あらゆることに頭をつっこみ口出しをして自己満足にふけるタイプではなかった。個々の問題についてはそれぞれの専門家に任せるべきで、自分は大勢の専門家の上に立って大きな政策や戦略を考えることに専念したかった。総合的な判断力なら誰にも負けない自信があったからだ。

幸いなことに、州知事ほど優秀な人材を集めやすい立場はない。個人的なブレーンとしても十人や二十人のスタッフを抱えられる程度の機密費は使えるし、特殊な専門家なら、知事の権限内で州の職員として採用することもできた。いわば、日常の業務の中で天下の人材を手足のように使えるのだ。

州知事に就任して以来、曹操は片はしから各界の長老に会った。最初は儀礼的に会ってみて、これはと思う人物なら親交を深め、さらに優れた人物を紹介して貰う。本当に使いものになる優秀な人物は、たとえ野にあっても完全に孤立していることはないので、こうやって

つてをたどれば、次から次へと見つかった。

また、知事が、真剣に人材を求めてそれなりに評価してくれる人物だということが知れわたると、自薦他薦の才人たちがぞろぞろ押しかけて来るようにもなった。そういう手合いの大部分は、ただのすね者や変人だったが、曹操はできるだけ時間の都合をつけて面会して、無駄とわかっても話を聞いたり小遣いをやったりした。

一年もたたないうちに、曹操の周囲には行政、軍事、科学、技術、工業、農業など、すべての面での俊才がG星中から集まって、遠州は、ちょっとした文化の中心地になってしまった。

曹操は、平和で豊かな遠州で英気を養いながら、あらゆるルートを使って情報を集めていたが、特に身にしみて恐ろしさを体験した呂2号については、どんな細かいことでも知ろうとした。あのロボットが健在な限り、董卓を暗殺するのは不可能に近かったから、何とかして弱点をつかみたかった。

だが、すべての情報は、呂2号の予想以上の能力を証明していた。曹操が集計しただけでも、これまでに九百人以上の人間が、董卓を襲撃しようとして、あるいは、単に董卓の不興をかっただけの理由で呂2号に殺されていた。それればかりか、呂2号には、弱点らしい弱点は見つからず、核攻撃でもしないことには破壊できそうにないというのが一般的な意見だった。だが、呂2号を、無人の原野の真ん中に誘い出すのは、ねずみが猫の首に鈴をつけるより難しそうだった。

曹操は、あの時うまく洛陽を脱出できた運の良さをつくづく有難いと思いながら、董卓の評判が予想以上の早さで悪くなって行く様子を醒めた目で分析し続けていた。
人々が、董卓のやり口に我慢できなくなる時が間もなくやって来ることは、目に見えていた。今後の自分の運命は、その時期を正しく見極めて絶妙のタイミングで利用できるかどうかにかかっていることを、曹操ははっきり自覚していた。

目指せ洛陽

献（けん）大統領は、ベッドの上でぼんやり横になっていた。憂鬱だった。
そうひどい部屋ではないし食事も悪くはないが、窓には不透明なガラスがはまっていて外が見えないばかりか、ドアにもしっかり鍵がかかっている。こんな生活が、二ヵ月も続けば、もう我慢も限度だった。
もともと、はっきり理由がわからないまま大統領にさせられて、十年間はこの建物の外へ出てはならないと命令されたのだが、大統領府は、それまでいた施設とは比べものにならないほど立派で待遇も良かったから、そう悪い仕事でもないと思っていた。
ただし、第一顧問官の張譲（ちょうじょう）は、献大統領にとっては実に不愉快な相手だった。徹底的に高慢ちきな男で、献の顔を見るたびに『大統領とて、しょせんは太学士出身者の小道具に過ぎぬ』というようなことをいっては、鼻先でせせら笑うからだった。
そのくせ公文書にサインさせる時だけは、形式的に『大統領閣下。ここにご署名を賜りますよう伏してお願い申し上げます』というようにばか丁寧な口のきき方をするのも、たまらなくいやだった。

だが、今思えば、張譲とても董卓よりは百倍もましだった。董卓は、自分を副大統領に指名してくれれば大統領を最高権力者にすると約束したのに、ちやほやしてくれたのはほんの十日ほどで、しかもその間は、べたべたおだて上げながら、毎日毎日これまでにないほど膨大な量の書類にサインをさせた。

ひと山の書類にサインし終わると、董卓は、もっともらしい理由をつけて玉璽をどこかへ持って行ってしまい、それっきり寄りつきもしなくなった。

その時以来、大統領に対する待遇は張譲の頃よりずっと悪くなり、歩き廻れる範囲も三分の一程度に制限された。しかも、董卓が副大統領になってから、世話係の職員は掃除婦に到るまで全員入れ替わり、顔見知りが一人もいなくなってしまった。

あとがまとして入って来たのは、全員が兵士のようないかつい男たちだった。この連中は、何を話しかけてもろくに返事をしないので、あわれな献大統領には、いったい何がどうなっているのか、見当もつかなくなった。

そして、二ヵ月前のある日、暗殺の恐れがあるといって突然この奥まった一室につれて来られたまま監禁されてしまったのである。そして、三度の食事と着替えだけが差し入れられるという囚人なみのみじめな生活が始まった。

献大統領の単純な頭脳でも、二ヵ月もの間なんの見通しもない監禁生活を続ければ忍耐の限界に達するのは当然だった。

「董卓を呼べ。副大統領をここへ来させろ。すぐ来なければ、ハンストをして死んでやると

いえ」

その日の夕食を持って来た無表情な警備兵に向かって、大統領はせい一杯の大声で怒鳴りつけたが、ふと思いついたようにつけ足した。

「いうことを聞かんと、副大統領の任命を取り消すと伝えろ」

警備兵には、大統領のいっていることの意味はよくわからなかった。しかし、どうやら本気で怒っていることだけはわかったので、触らぬ神に祟りなしとばかり、慌てて汚れた食器を取ると、

「わかった。上官に伝えておく」

とだけいって、出て行った。

この時、董卓は、大統領府に五室ある宴会場のうち、もっとも小ぢんまりした〈天堂の間〉で、ほとんど全裸に近い姿の美女を数人はべらせて酒盛りをしていた。すぐうしろには呂2号が、いつもながら赤い目を不気味に光らせて厳めしく突っ立っている。

音声専用電話のブザーが鳴った。董卓は、うるさそうに眉をひそめたが、大股を開いて太い膝の上にまたがっていた女が受話器を取って渡した。

「副大統領閣下」

今では大佐に昇進している李儒だった。

「大統領が、閣下をお呼びするように要求しております。お出でにならなければ、ハンストをするとも申しておりますが、いかが取り計らえばよろしいでしょうか」

それを聞いた董卓の額にむらむらと青筋が立った。

「そのようなことを、いちいち取り次ぐな。うるさいやつだ」

かなり酒が廻って、もともと程度の低い理性が、ほとんど麻痺している。楽しんでいるところを邪魔されて、どす黒い怒りが頭に上った。電話の相手が腹心の参謀李大佐でなければ、呂2号に命令して殺したいところだった。

だが、何か気になることがあれば、たとえ夜中にでも伝えるようにと大佐に命令してあることは、辛うじて覚えていた。

かすかに残る理性が大佐に対する腹立ちをおさえたが、内攻した怒りが残忍な性格に火をつけた。董卓は、凄味のある薄笑いを浮かべていった。

「おい。ちょっと待て……すぐに行くと伝えろ。それから、大佐。ここへ来てくれ」

電話を切ると、董卓は、女を振り落とすようにして立ち上がった。

「閣下。参りました」

間もなくドアの外で、李大佐が声をかけた。

「ご苦労だった。大統領の所へ行こう」

董卓は、巨体をゆさぶるようにしながら部屋を出た。大佐が先導し、呂2号がほとんど間隔をおかずについて行く。

大統領を監禁している一角は、普段は厳重に閉め切られているが、李大佐の命令でドアが開かれ、警備兵が通路の角ごとに立っているだけだった。一行が部屋の前まで来ると、連絡

を受けていた警備兵は、鍵をはずして不動の姿勢を取った。董卓は、荒々しくドアを開くと中に入った。献大統領は、董卓の荒々しい態度に本能的な危険を感じたのだろう。ベッドの上で体をすくめた。

董卓は、その様子を傲慢な態度で見下ろしながら、黙って一歩横に動いた。重々しく金属のすれる音がして、呂2号が前に進み出た。次の瞬間、白熱した細いビームが、大統領の心臓を貫いた。高熱で焼き固められた傷口からは、ほとんど出血もしなかった。

「愚か者めが」

酒臭い息を吐きながら、董卓は切れ切れにつぶやいた。

「おとなしくしておれば、貴様のことなど忘れておったのに」

『献大統領は、二ヵ月前から病気療養中のところ、昨夜十時二十五分、急性心不全のため逝去されました。

憲法第二条第三項の規定により、後任の第三百九十代大統領には、わが偉大なる共和国の継承者、董卓副大統領閣下の就任が自動的に決定致しますので、政治的な空白や混乱の心配はありません。

偉大なる指導者、董卓新大統領閣下は、すべての国民に対し、故献大統領の遺徳をしのぶため、十日間の服喪を呼びかけられました。また、悲しみに耐えながらも憲法を守り、共和国をより発展させることが、亡き大統領の霊を慰める道であるとの談話を発表されました』

洛陽放送の臨時トリビジョン・ニュースである。曹操は、喪服を着たアナウンサーが形式的な暗い声で大統領の死を告げるのを見ながら、考えた。

――なんという空々しいことだ。どうせ、董卓のやつが一服盛ったのであろうに、聞いていて背筋がざわざわするわい。

だが、なぜこんな時期に大統領を殺したのだろう。今、副大統領から大統領になったところで、実際の権限が少しでも増えるわけではないばかりか、寝ている子ならぬ、寝ている敵を起こすだけのことではないか。

もし、深い計画があるのなら、顧問官どもを殺害した直後にでも暗殺して、顧問官のせいにすれば良さそうなものだ。前から大統領は病気療養中ということになっていたのに、世界中から董卓討つべしの声が上がりかけている今、錦の御旗ともいうべき献大統領を殺すというのは、どうにも腑に落ちぬ。大統領を擁立している限り、表向きは副大統領職にある董卓も安全なはずだからな。

思うに、董卓は一時の腹立ちでかっとなって大統領を殺したのではあるまいか――

曹操がそこまで考えた時、ニュースの内容が就任式のことに変わった。アナウンサーは、相変わらずとってつけたような厳粛さで話し続けていた。

『偉大なるわれらの指導者、董卓新大統領の、三惑星連合共和国第三百九十代大統領就任式は、十日間の服喪期間ののち、十月二十七日に行われる予定で……』

曹操は、最後まで聞いていなかった。唇をへの字に結び、しっかりと腕組みをすると、視

線を少し上げて何もない空間を見詰めた。

しばらくの間、そのままの姿勢で考え込んでいた曹操は、やがて視線をデスクの上に戻すと、オフィスの内部だけに通じるインターコムで相談役の一人である程仲徳を呼び、すぐ来るようにいった。

程仲徳が入って来ると、曹操はすぐに事情を話し、意見を求めた。

「十日もあれば、主だった州は決起できるであろうな」

「さよう。大義名分さえ立って、筋の通った作戦を示すならば、三惑星のうち力のある州すべてが立ち上がること疑いありませぬ。

問題は、誰にも納得のできる大義名分でございましょう」

「それなら、良い考えがある。このようなこともあろうかと、ひそかに準備しておいたものだ」

曹操は、立ち上がると執務室の隅にある金庫から、一枚の羊皮紙を取り出して来た。

「これは、本物……」

程仲徳は、無造作に手渡された紙を見て、さすがに驚いたような声を立てた。それは、献大統領の署名と玉璽の入った白紙の命令書だった。

「もちろん、それは偽物だ。私が、遠州の知事を命じられた時の任命書をもとにして、こういう仕事の専門家に作らせておいた。あとは、これに適当な文章を印字して、大物の州知事に送りつければ、きっかけを待っていた連中は間違いなく動き出す。

その文章は、大統領府に監禁中の今は亡き献大統領が、ひそかに出された最後の公文書の形式で、董卓討つべしという各州知事に対する命令書の文体にすればよかろう。たとえ偽物だと思っても、公文書メッセンジャーを使って正式に手渡しさえすれば、これ幸いと乗って来るはずだ。

献大統領は、自分が董卓に殺されることを予感していて、万一の際は、州知事たちが大統領就任式のパレードに参加すると見せかけて三惑星連合各州の軍勢を集め、一気に逆臣董卓を倒すべしと、はっきり命令するような緊迫した雰囲気を盛り込めば申し分ない。

そうすれば、ことあれかしの大物たちが、必ず州軍を率いて洛陽へ乗り込んで来るだろう。

この命令書の原稿だけは、ぜひ先生に書いて頂かなくてはならぬ」

ポケットに入れられる手帳型のファックスが広く使われている世の中に、何百年前と同じ形式の羊皮紙公文書が、高い権威の象徴としていまだに通用している愚かさは信じ難いほどだった。しかも、大統領の任命書や命令書の場合は、署名と玉璽の入った書類そのものを大統領自身か、専門の公文書メッセンジャーが本人に手渡さない限り、効力を発生しないのだ。

曹操は、共和国にしみついた形式主義を逆手に取って利用するつもりで、大統領府での勤務経験が豊富な、文書の専門家や公文書メッセンジャーだった男たちを、遠州州庁の文書部門に雇い入れておいたのである。

程仲徳は、すぐに曹操の意向を理解してうなずいた。

「それは、たやすいこと。その手の文章なら得意でございます。すぐに、この場で書き上げ、殿のワークステーションを使ってプリントまで作ってしまいましょう。

遅れては、それだけ効果が薄らぎます」

「ぜひ、お願いしたいものだ。大統領公文書と同じ書体も用意してある。有力な州知事の名簿もワークステーションに入っているから、すぐに取りかかって頂こう」

「かしこまりました」

曹操の執務室には、最新のＯＡ機器が揃っている。程仲徳は、慣れた様子でキーボードに向かい、ディスプレーを見ながら命令書の文を打ち出し始めた。

正式の大統領公文書メッセンジャーの制服を着て、重要公文書の入った赤いケースを持ち二人の護衛官をつれた男が、最初に遠州の州庁舎を出たのは、それからわずか一時間後のことだった。その三十分後にはさらに、同じような男が一組、さらに三十分後にはもう一組がひそかに出て行った。いずれも、もとベテランのプロだけあって、どこへ行ってもれっきとした大統領のメッセンジャーとして通用する姿をしているが、実際は曹操の秘密命令を受けた偽ものであることはいうまでもない。

公文書メッセンジャー姿の男たちの一組は、Ｇ星の各地を目指し、あとの二組はそれぞれＷ星とＳ星を目指して旅立って行った。

待ちかまえている曹操のところへ、最初の連絡が入ったのは第一のメッセンジャーが出かけてから三時間後だった。一般回線の指名通話のビジホンで、相手は、南陽州の知事、袁術だった。

「これは、曹知事どの。大統領閣下が亡くなられたそうで、まことに悲しみにたえぬことでござる。しかし、副大統領制を設けておいたおかげで、混乱もなく董卓閣下が第三百九十代大統領に就任されるとのこと。こちらはめでたいことで……」

袁術は、曹操の気持を探ろうとするように、当たりさわりのない文句を並べ立てた。

「仰せの通りです。大統領閣下から直接任命されておりますわれわれとしましては、共和国の平和を願うのみでございます」

曹操は、相手に輪をかけた当たりさわりのない返事をした。

「ところで、曹知事どのも献大統領閣下からの命令書をお受けになったそうだが、新大統領の就任式にはどのようにして臨まれるおつもりかな」

「はい。もちろん、軍人としては、盛大な軍事パレードでお祝いするべきと考えておりますが、袁知事どのは、いかがお考えですか。これは、亡き大統領閣下のご希望でもあろうかと思いますが」

袁術は、それを聞くと急に勢い込んでいった。

「もちろん、もちろん、それ以上われらの忠誠心を示すのにふさわしい方法があるとは思えませんわい。わが南陽州も、亡き献大統領閣下のご遺志を受けて軍事パレードに参加いたし

ますぞ。精鋭を揃え最新の兵器を並べて、堂々と行進して見せ……いや、お目にかけましょう」

「わが遠州の軍備は、南陽州には遠く及びませんが、全軍を率いて馳せ参じ、賑やかにパレードを致します」

信頼している同士なら、暗号通信でざっくばらんに話し合えばすむことだが、お互いに腹の探り合いをしているのだから、言質を取られないようにしながら少しずつ真意を見せ合わなくてはならない。もちろん、第三者に聞かれてもしっぽを摑まれないことが絶対に必要だから、言葉に二重の意味を持たせてある。

「それでこそ、曹操どのだ。ところで、ほかの州との連絡はなされたかな」

「いや。何しろまだ若輩者ゆえ、ただ茫然とするばかりで、何も致しておりません。今、袁知事どのとお話しして、やっと人心地がつき、考えがまとまりました。

これからは、何ごとも袁術どのにご相談致したいと存じます」

「いやはや、わがはいなど、とてもそのようなお役に立てるものではない」

と、いいながらも、袁術は、若き秀才知事におだてられて悪い気はしない。

「曹操どのが、世話役を引き受けて下さると、この老いぼれは助かりますわい」

「下働きなら、私のような若造にも務まりますゆえ、すべておうかがいした上で駆け廻らせて頂きます」

まことに調子良く、袁術との通話が終わると、十五分もしないうちに北海州の孔融知事か

ら、やはり一般回線による指名通話でビジホンの連絡が入った。これも、まず当たりさわりのない挨拶があって後、曹操は、

「先ほど、南陽州の袁知事どのから、故大統領閣下よりの命令書を受けられたゆえ、ご遺志に従い新大統領閣下の就任式には、精鋭を率いて軍事パレードに参加されるとのことでございました。

私も、袁知事指揮のもと、参加致す所存であります」

「ほほう。それは、さぞや亡き大統領閣下のみ心にそうことでありましょう。わが州もぜひ参加したいが、日時はどのようになりましょうか」

乗り遅れてはならじと、孔知事も身を乗り出した。

「いずれ、袁術どのよりご連絡がありましょうから、若輩のこの私が世話役としてご連絡申し上げます。もし、到らぬところがあれば、ご遠慮なく仰せ下され」

年の若いことをうまく利用して、ごく自然に世話役になってしまった曹操は、こうして次から次へと連絡を入れて来る州知事たちを、たくみに〔軍事パレード〕に集結させて行った。

なぜ、このように曹操の所へばかり連絡が集中するかというと、その秘密は、公文書メッセンジャーにあった。本来、公文書メッセンジャーは公文書の伝達以外によけいな口をきいてはならない。黙って文書を相手に渡し、受領印を受けるだけにすべしという規則があるのだ。

ところが、この時は大変特殊な状態だった。つまり、知事たちが文書を受け取る時は、発信者である大統領が死亡していて、しかもそのことを世界中の人が知っている。

こういう異例中の異例の状況なので、多少の規則違反はむしろ歓迎されると思い、曹操は、自分の送り出した偽の公文書メッセンジャーに密命を下し、さり気なく、『遠州の曹操知事閣下だけは、何事かご存じのご様子でございました』と、州知事たちの耳もとでささやかせたのである。

献大統領に董卓討伐の命令書など作れるはずがないことぐらい、知事たちは一人残らず知っている。それだけに、この手の裏情報にはすぐに飛びつくはずだし、だからといって、自分が仕掛け人だという証拠はない。命令書を受け取った全員から、さり気ない形で問い合わせが来ることは確実だと予想した曹操は、適当な間隔で公文書メッセンジャーが各州に着くように時間を調整して出発させたのだった。

予想は、的中した。

もっとも遠いW星長沙州（ちょうさしゅう）の孫堅（そんけん）知事からの連絡が八日遅れて入ったのを最後に、偽造命令書を受け取った全部の知事からの問い合わせが曹操のもとに集まった。

共和国三十八州中の強大な七州が、董卓大統領の就任式の当日までに、選り抜きの精鋭部隊を首都洛陽に集結させる計画は、実質的には曹操主導のもとに着々と進んだ。

殺したいのは……

洛陽は、軍事パレードの名目で集まった三万の機動歩兵と空宙軍から成る七州連合軍に包囲されていた。郊外の空き地という空き地には、小は戦闘艇から大は大型巡空艦までの艦艇が着陸して、仮設兵舎が並び、大勢の兵士がゼロハンのAGバイクで、音もなく地上一メートルから五メートルあたりを飛び廻っていた。

人間を一人殺すのに、三万の大軍を集めるだけでも大袈裟だが、これだけの大戦線を張って十日になろうというのに、戦局はいささかも進展していなかった。

董卓を殺すためにどんな攻撃をしてもいいのなら、ことは簡単だった。小型の質量爆弾を一発、洛陽の大統領府に落とせば解決する。ところが、攻撃軍側としては、大統領府はもちろんのこと、洛陽の市街に指一本触れたくなかった。

もともと、各州連合軍は寄り合い世帯、それも、ご立派なたてまえはともかく、内心では、われこそが董卓に代わって共和国を牛耳りたいと思っている大物知事たちの率いる集団である。そして、共和国の主になることと洛陽の大統領府の主になることは、同じ意味なのだ。海千山千のしたたか者たちにとっても、この都の、この美しい宮殿の主人になるのでな

ければ、天下を取っても価値は半減する。たとえ董卓を倒しても、このまま手つかずの洛陽に入り、長い伝統のある壮麗な大統領府の主人として三惑星を支配しなくては、完全な勝利とはいえない。つまり、焦土と化した洛陽の主になりたいと思っているボスなど一人もいないところが問題だった。

董卓も、そのことは百も承知だから、さっさと大統領就任式を内輪だけですませてしまった。軍事パレードは、董卓には関係なく企画されたものだから、そんな話に乗って危険をおかす必要はない。そうかといって、自分の指揮下にある首都防衛軍の十倍もの大軍を追い払う力はないから、首都の入口に当たる環状七号緑地から放射道路へ入る地点だけに防衛軍を配置して、毎日遊び暮らしていた。

連合軍側にしても、三万の大軍をはっきりした目的もなしに、そう長くよその土地に駐屯させておけるものではないから、主将袁術は、自分の乗って来た南陽州所属の大型巡空艦会議室に、知事たちをはじめ主だった将軍を集めて、作戦会議を開いた。

「董卓大統領が、軍事パレードを開催させぬまま就任式をすませたことは、皆さんのご存じの通りです。このままでは、董卓の討伐どころか連合軍の維持さえ遠からず困難になることは、明らかであります。

局面の打開に、何か名案があれば、忌憚なくご意見を述べられたい」

すぐに、地方軍閥出身の軍人知事である長沙州の孫堅が発言した。

「こうなった上は、大統領府を破壊するのも止むを得ないのではありますまいか。そもそも

戦闘の目的は、敵に人命ばかりか物質上、精神上の損害を与えるために行うものでありますから、特定の建物を保護することを戦闘の目的の一つとするのは、不合理だと考えます。董卓が、確実に大統領府にいる時を確かめ、爆撃を敢行するべきです。幸い、大統領府の周囲は広場で、市街とは離れておりますから、超低空から周囲に時限爆弾を打ち込んで爆破するなら、市民への被害は最低限ですみましょう」

「しかし、あの歴史的建造物を多くの国宝美術品とともに破壊するなら、汚名を千年に残しますぞ。将軍、その覚悟はおありかな」

と、喰ってかかったのは、やはり軍人知事である北平州の公孫賛だった。

「董卓のごときつまらぬ男の命を取るために、大統領府の建物を破壊するなどとは、愚の骨頂。ほかに、いくらでも方法がござろうに」

「ほほう。それでは、ぜひその名案をうかがいたいものですな」

孫堅が、むっとした様子でいう。

「形だけとはいえ、董卓は大統領で、われらはその部下。曲がりなりにも大統領就任式をした以上、部下であるわれわれが祝うのはごく自然のことでありましょう。祝辞を述べに行くといえば、受け入れるほかありますまい。

その際、すきを見てやつの心臓を打ち抜けばよい。ほかならぬ、このわしがやってお目にかけよう」

公孫賛が胸を張っていうと、袁術や孫堅も負けずに、

「わしにも、それぐらいはできる」

殺人ロボット呂2号の恐ろしさを身にしみて知っている曹操は、董卓の暗殺がそれほど簡単だとは思っていないが、地方軍閥出身の頑固な将軍たちに説明して納得させるのは面倒なので黙っていた。

作戦会議の結論が出たので、袁術知事が代表になって董卓新大統領に申し入れをしたところ、喜んで祝辞を受けるばかりか、返礼に祝宴を開くとの返事である。袁術からの通知を受けた知事たちは、豪華な贈物を準備し、文官、武官それぞれの礼装に身を固めると、大型反重力艇に乗って都大路をパレードし、大統領府へ繰り込んだ。

きらびやかな大礼服姿の董卓は、儀式に使う〈竜陛の間〉でにこやかに州知事たちを迎えた。第一礼装の文官、武官がずらりと居並ぶその後に、ひときわ目を引くのが、頭一つぶんだけ背の高い金色の巨人ロボット、呂2号だった。赤い目を光らせた顔をたえず左右に動かしながら、あたりをうかがっている様子の不気味さに、はじめて見る知事たちは震え上がった。

呂2号を見るのが二度目の曹操も、改めて背筋の寒くなる思いがした。一年の間に千人もの人間を血祭に上げたことで、呂2号と董卓の思考パターンとの連動は一層緊密になっているようだった。つまり、最初見た時は、ただ命令通りに動く不気味さしか感じなかったのに、今では董卓の残忍な性格が呂2号に乗り移っているように思えた。

老獪な袁術でさえ、恐る恐るといった感じで董卓の前に進み出て型通りの祝辞を述べ、一

同からの贈物の目録を進呈するのがやっとというていたらくである。

董卓は、州知事たちが恐れ入っている様子を見て満足気に、

「その方たち。軍事パレードとやらは時節柄ひかえて貰ったが、祝ってくれる気持は、この上なく嬉しい。隣室に粗末な祝宴を用意させておるゆえに、どうか心おきなく過ごしてくれるように」

と、まるで帝王気取りの挨拶をした。暗殺するつもりで来たはずの将軍たちも、気圧されて手を出せないでいるところへ、大統領の前に居並ぶ武官の一人が、いきなりつかつかと進み出た。何ごと、と見守る前で、武官は腰のブラスターを抜く手も見せず、董卓に向かって、

「この国賊め。思い知……」

と、いいざま発射しようとした。だが、その言葉も終わらぬうちに、呂2号の発する強烈なビームが、武官の首から右肩にかけて一瞬のうちに閃いた。人間の反射神経とはケタ違いに素早い反撃に、武官の首と、ブラスターを持った腕はひとたまりもなく切断されて、胴体から噴き出す血の勢いで空中に舞い上がった。

一呼吸するほど遅れて、たくましい体が床に崩れ落ち、続いて首と腕の落ちる鈍い音が聞こえると、あたりは大騒ぎとなった。悲鳴を上げて逃げ出す者、顔面蒼白となって卒倒する者が続出するうち、董卓だけは、半身に返り血を浴びながらも、平然として命令した。

「何じゃ、こいつは。首都防衛軍の張温のやつではないか。やくたいもない裏切りをしおって。

誰か、こやつの首を大皿に盛って、宴会場の盛り花に換えて飾りとせよ。余を殺そうなどとは夢思われぬ忠実なる州知事諸公には、花よりも良い眺めであろう」

残酷で底意地の悪そうな笑いを浮かべた董卓の顔を見た知事たちは、思わず目を伏せてしまい、誰一人として顔も上げられない。

やがて、知事たちは、豪華な宴会場に通されたが、中央の大テーブルには、きれいに洗った張温の生首が立派な皿に載せられて、無念の形相もの凄くこちらを睨んでいた。多くの戦闘を経験し、人間の死体など石ころ同然に見られる将軍たちも、董卓の底知れない異常さと、そういう男が大統領府に居座ってしまった状況に対しては、慄然とせざるを得なかった。

第二回目の作戦会議は、翌日の朝から開かれた。董卓を殺すためには大統領府の爆破も止むを得ないことは、昨日の惨状を見れば誰にもはっきりわかっていた。だが、久しぶりに大統領府の奥深く入って、この世のものとも思えない豪華な宮殿をしげしげと眺めたばかりなので、董卓のように愚かで薄汚い男のために僅かな傷をつけるのさえ、いかにももったいなく思えて、とても攻撃命令など出せないのだ。

それに、自分が天下を取った時のことを考えると、何としても伝統あるあの建物から号令しなければ、気がすまない。

結論は誰にでもわかっているのに、誰もその結論を出したくないのだから、会議はさっぱ

り進行しない。その様子を見ていた公孫賛は、さり気なく振り向いてうしろの席に座っていた色の白い大柄な男に声をかけた。

「劉備隊長。何か良い考えはないか」

小声だったが、一同が黙り込んでいたので、その声は列席者全員に聞こえた。袁術は、見知らぬ顔の男がいるので不審そうに尋ねた。

「その者は、いったい誰でござるか」

「かのイエロー・キャップとの戦いで、最初の戦果をあげた義勇軍の隊長、劉備と申す者でございます。故郷の県学校の後輩でありまして、初代劉大統領の子孫として、地元では知られております。局地戦には慣れておりますゆえ、参謀役として召し連れました」

公孫賛が紹介するのを聞いて、袁術は顔色を改め、

「ほう。劉大統領のご子孫か。して、太学士試験は、何期に合格された」

と質問する。劉備は、頭を下げて、正直に答えた。

「試験には、合格致しておりませぬ」

「なんと、そのような者の意見など聞く耳持たぬわい」

太学士出身者か、地方軍閥の御曹司として生まれた者以外は対等の人間でないと信じている袁術は、吐き出すようにいった。むっとした公孫賛は、あたりを見廻したが、この際だから身分にかかわらず能力ある者の意見を聞いてみようという雰囲気ではない。仕方なしに身振りで劉備に退席するよう命じた。

これで、会議の席はすっかり白けてしまい、そのまま解散となった。

一方、劉備は、G星に帰ってからずっと世話になっている公孫賛に連れられて、作戦会議の席に出たものの、まるで相手にもされないので、憤懣やるかたなく北平州軍の陣地へ引き上げて来た。関羽や張飛を心配させてはいけないので、何ごともなかったように仮設兵舎の自分の部屋に入ったものの、どうにも面白くない。

「何が太学士だ。何が身分だ。そんなことをいってるから、董卓のようなやつがのさばっても手も足も出せんのだ」

独りごとをいいながら憤慨していると、関羽が顔を出していった。

「兄者。曹とかいう人が、会いたいといって来ておられるが」

曹は、ありふれた姓なので、知人の中にも何人かいる。

「お通ししてくれ」

と、答えると、入ってきたのは眼光鋭く威厳のある男だった。見ると、目立たない平服に着替えてはいるものの、先刻、会議の席で見かけた遠州の知事、若手ナンバーワンの評判も高い曹操その人ではないか。劉備は、居ずまいを正して挨拶した。

「これは、どなたかと思えば、曹操知事閣下ではございませんか。身分違いのお方が、なぜこのようなむさ苦しい場所へおいでなされました。お使いでもよこして下されば、こちらから参上致しましたものを」

「何を仰せられる。この乱世に身分がどうの、太学士がどうのといっているのは、世の中の

流れについて行けなくなった死にそこないばかり。私は、州知事でも太学士でもない一人の人間として参りました。

名刺代わりに、粗品をお納め下され」

手みやげの立派な包みを差し出しながら、曹操は劉備の顔をじっと見詰め、やはりこれは並の男ではないと思った。作戦会議に顔を出していたどの州知事と比べても、人間のできが幾回りか大きいわいと心の中で舌を巻く思いである。劉備も臆することなく曹操の目を見返して、これは、世間の噂以上の大人物だと感嘆したが、その気持は表に出さず、あくまでへりくだっていった。

「私ごときが、何のお役に立てましょうか」

「先ほどのご様子では、董卓の討伐に何やらお考えがあるようにお見受け致した。洛陽では、無人の原野や空中、宇宙での作戦経験はまるで役に立たず、困っております。良いお考えがあればお教え下さいませぬか」

曹操の丁重な態度を見て、劉備は一つうなずくと、うしろに控えている関羽を紹介してからいった。

「この義弟に一つの考えがございますが、われわれは田舎者のこととて具体的にはどのように致せばよいやら、見当もつきません」

「ほう。関羽どのとやら、それは、どのような方法でござる」

曹操は、鋭い目で関羽を見詰めながら、この男もただものではないと思った。関羽も、会

議場でのことは聞いていないものの、地位や肩書抜きに人の能力を認めてわざわざ意見を求めに来る曹操という人物に敬意を払わざるを得ない。思わず丁寧な態度になって、

「たかが董卓一人を倒すのに大軍を繰り出す必要はなく、謀略を用いれば充分と愚考致しますが」

「どのような謀略を……」

「董卓は、ただの乱暴な愚か者。恐ろしいのは呂2号とやらでございましょう。それなら、呂2号を作った呂布と董卓を仲たがいさせればよろしいではありませんか。

聞くところによれば、呂布は、董卓に目をかけられて豪勢な暮らしをしているとか。それならば、二人を反目させるぐらい曹知事のお力なら、たやすいことでございましょう」

「なるほど」

曹操は、腕組みをした。七州の精兵を洛陽に集めるのは、自分の謀略だったが、膨大な費用と労力を費やしたのにもかかわらず、何一つとして成果が上がっていない。だが、関羽のいうような謀略なら……。

「わかりました。何かうまい方法がありそうな気がします」

曹操は立ち上がって深く頭を下げると、大きな目で二人の顔を交互に見ながらしみじみとした口調でいった。

「あなたがたのような優れた人物を用いることのできない世の中は、けっして長くは続きますまい。いずれ、劉備どのも世に出られることでしょう。

それでは、これで失礼致します」

曹操は、静かに部屋を出て行った。

「相手が太学士でないというだけの理由で、人と同席するのも嫌だという人もいれば、曹知事のように手みやげまで持って意見を求めに来る人もいる。いずれ、ああいう人がのし上がって行くのだろうな」

と、劉備がつぶやいた。関羽もうなずいた。

「ああいう人に会うと、この国もまだ捨てたものではないという気がするではないか。われわれの未来も、思ったより明るいかもしれぬ」

などと話し合っていると、張飛が部屋に入って来た。

「兄貴。今出て行ったやつ、ありゃ何者だ。何か思いついたみたいな様子でわき目も振らずに飛び出して行ったぜ」

「あのお方が、有名な遠州の曹操知事どのだ」

「何しに来やがったんだ」

「われわれに敬意を表して、贈り物を届けて下さった」

劉備は、笑いながら曹操の手みやげを指さした。張飛は、すぐに包みを解いて叫んだ。

「これは、結構な陣中見舞いじゃないか。上等の酒が五本に、うまそうなつまみの詰め合わせと来てやがる」

当番兵の操縦する小型反重力艇の中で、曹操は腕組みしたまま空中を見詰めていた。作戦会議の席で一目見た時に、何とかして劉備を自分の客分に迎えたいと思っていたが、会って話してみるとなおその思いがつのった。だが、同時に、これほど包容力のありそうな人物を配下に収めておく自信もなくなった。安く踏んでも、州知事ぐらいは務まる、というより、今日の会議に出席していた七人の知事のうちで、劉備以上の大物がいるかどうかさえ疑問だと思う。

劉備が無理なら、せめて関羽でも部下にしたいところだったが、先刻の様子では二人が離れるとは思えなかった。

「ここでよろしい」

しばらくして、艇が花街である万寿街の入口にさしかかった時、曹操は当番兵に命じて停めさせると、身軽に飛び降りた。

「待つ必要はない。このまま帰ってよい」

そういうと、曹操はすぐに横丁に入り複雑な路地裏の狭い道を迷いもせずに伝い歩いて行った。洛陽での勤務が長く、主に警備の任務についていたため、この大都会の地理には誰よりもくわしいのだ。やがて、曹操は静かな裏通りに面した一軒の家の前に立った。曲がりくねった彫りのある欄干をめぐらし、窓や入口を美しいステンドグラスで飾った風流な家である。

チャイムを鳴らすと、いつも多額のチップを与えているメイドが、にこにこ顔で迎えてく

れた。ドアが開くと同時に馥郁たる名香のかおりがした。

「急にやって来たが、今日は、差し支えないかね」

「はい。どうぞ、お通り下さいませ。奥様は知事さまのおいでを待ちわびていらっしゃいますよ」

客間には、名だたる画家の手になる名画がかけめぐらしてあり、窓辺に置いてある盆栽もすべて名品ばかり。家具調度の類は、洛陽きっての名工が腕によりをかけて作った逸品が揃っている。刺繍した錦のクッションに寄りかかるようにして座る間もなく、ひそやかに空気が動いて、ゆるやかに裳裾をなびかせたこの家の女主人が、かろやかな足どりで入って来た。

見れば、顔は朝露を含んだ白牡丹のようで、腰つきは春風になびく柳のよう。まことにたぐいなきあでやかさである。

これこそ洛陽の花街に並ぶ者のない名妓と謳われた蝶蟬で、曹操もかつては馴染んだことがあった。

蝶蟬は、容貌の美しいことだけでも比べる者もないほどだったが、姿も美しいし芸ごとも名人級なら、床上手なことにかけても天下一といわれていた。もちろん、蝶蟬の客になれるのはよほどの富豪か高官に限られていたが、蝶蟬に馴染んだ客の大部分は、その後ほかの女のもとへは通わなくなるほど強く惹かれてしまうのが普通だった。

しかし、実をいうと蝶蟬は、これまでただの一度たりとも客に体を許したことなどなかっ

たのである。この道に入る時、蝶蟬は往年の名妓だった老婆から不思議な術を授けられた。それは、催眠術とテレパシーを組み合わせた寝室の秘術であって、蝶蟬自身は男に抱かれることなくベッドの横に座って客の心を操るだけで、客は天下の名妓を抱いた目くるめく喜びを味わうという一種のあやかしの術であった。もちろん、男が果てる瞬間にはシーツなどを汚さないよう巧みに処理するのだが、どんなに放蕩に慣れた客でも美女を抱いたと信じて完全に満足し、露ほども疑うことはない。

曹操とても、そんなこととは夢にも知らないから、かつては体の隅々まで味わい尽くした間柄の女だと思って、親しげに挨拶した。

「やあ。すっかりご無沙汰してしまった。元気にしているかな」

蝶蟬は、色っぽく微笑みながらうなずいて、

「まあ、曹さま。お待ちしておりました。やはりおいで下さいましたのね。各州の知事さまたちが洛陽にお揃いと聞きましたので、きっとお立ち寄り頂けると思って、ほかのお客様をお断りしておりました」

曹操は、その姿を見、声を聞いただけで心の中のしこりが解けたような気がして、

「かたじけない。一州をお預かりすると、まことに公務が忙しく、お前の所へも足が遠のいてしまった」

「曹さまほどのお方が覚えていて下さるだけでも、遊び女のわたくしには身に余る光栄ですわ。さ、今日はごゆるりとお過ごし下さいまし」

すぐに、名酒と天下の珍味を集めたつまみが運ばれて、二、三度盃のやり取りがあってから、蝶蟬は、しなやかな上半身を男に投げかけるようにした。いつもなら、そのまま膝の上に抱き上げてくれるところなのだが、今日に限って曹操は何やらもの思いにふけっている様子で、さっぱり乗って来ない。

「あら、どうなさいましたの」

曹操の豪放な性格を知りぬいている蝶蟬は意外に思い、体を離してまじまじと顔を見詰めた。

「うむ……天下の大事が、心にかかってならないのだ」

「それでは、女のわたくしにはお役に立てそうにありませんわ。もう少しお飲みになるか、それとも、あちらのお部屋へ参るか致しましょう。お楽しみになれば、気が晴れて良いお知恵が出るかもしれません」

「いや。お前も、洛陽切っての名妓といわれた女。いわば人の心の裏おもてを読む専門家だから、相談に乗って貰えるかもしれない」

曹操は、やおら蝶蟬を抱き上げると美しい目を見返しながらいった。

「わたくしのような者が、州知事さまのご相談相手になれるなんて、とても名誉なことだわ。歌のことでも踊りのことでも、男のだまし方でも、何でもご相談下さい」

蝶蟬は、曹操の首に抱きつきながら冗談のようにいった。

「実をいうと、その、男のだまし方の相談なのだが」

「あら、本当に……」

蝶蟬は、また体を離して目を見張った。

「二人の仲の良い男がいる。それを決定的に仲違いさせるばかりではなくて、一方が相手を殺すように仕向けたい。これが、天下の大事なのだ」

「まあ」

蝶蟬は笑い出しそうになったものの、曹操が恐ろしいほど真剣な様子なのに気づいて表情を改めた。

「そういうことなら、仰せの通り遊女蝶蟬の専門。お役に立てるかもしれません。ただ、本当に殺させるとなると、よほど事情をくわしく知らなくては……」

曹操は、うなずくと蝶蟬の耳もとでささやいた。

「これは、私の胸の内だけにあること。もし、世間に知れたならば、私の命はもちろんのこと、お前も無事ではいられまい。それさえ承知なら、打ち明けて話そう」

「そんな水くさい……」

蝶蟬は、不満そうにいった。

「わたくしの今日があるのは、すべて曹さまのおかげでございます。あの時、助けて頂いてから、思えば、もう三年にもなりましょうか。

あの頃の洛陽の花街では、たちの悪い暴力組織がはばをきかせておりました。平気で遊び逃げはする、乱暴はするというありさまなのに、警察に届けても偉いお役人の息がかかって

いるらしく、一向に取り上げて頂けませんでした。

このわたくしも、多少売れていたのに目をつけられ、組織の幹部の妾にされそうになりました。よほど逃げようと思いましたが、つかまればひどい目にあわされるので、困りぬいたあげく、曹さまが曲がったことをなさらぬお方と人づてに聞いて役所へ伺ったところ、気軽に面会して頂けました。あの時の嬉しさは、今でも忘れられません。

お願いして家に帰った時には、私が曹さまに直訴したことが、悪いやつらに筒抜けになっていて、待ち伏せされて殺されそうになりました。ところが、あなたはちゃんと部下の方にあとをつけさせて下さり、危ういところを助けて頂きました。

わたくしは何も存じませんでしたが、あなたは警察官ではなくて、大統領府の警備隊長でいらっしゃったのに、その日のうちに強い兵隊さんを大勢連れて来て組織の連中をその場でほとんど皆殺しにして下さいました。

あれ以来、万寿街から悪いやつらが一匹残らず姿を消してしまい、このわたくしも、いやな勤めをせずに済みました。そればかりか、曹さまが時々来て下さるようになって、どんなに嬉しかったことでございましょう。

今のわたくしの命は、いわばあなたのもの。わたくしにできることならば、たとえ命と引き換えでも喜んでお手伝いさせて頂きます」

「そういってくれるのは、有難い」

曹操は、蝶蝉を抱き寄せながら、三年前のことを思い出していた。万寿街の女たちを食い

物にする暴力組織のことは小耳にはさんでいたものの、管轄外のこととて手を出しかねていたところへ、青ざめた顔の飛び抜けて美しい女が直訴にやって来た時の気持は、今でもはっきり覚えていた。

蝶蝉ほどの美人が泣きついて来るほど信頼されているのは、良い気分だったし、自分の名を上げるチャンスだとも思った。大統領府警備隊は、共和国内のどこでも、現行犯なら逮捕できる権限があったし、曹操の官僚としての地位は、当時でもすでに洛陽市警察長官より上だったので、適当な機会さえあれば暴力組織を直接叩きつぶしても、警察側から足を引っ張られる心配はなかった。

それに、曹操が率いる正規軍の一個中隊にとって、花街を牛耳る組織のほとんど全員を正当防衛の名目で射殺するのは、ものの三十分とはかからない片手間仕事だったのである。もちろん、市民のすべての証言は、警備隊の行動の正当性を証明していたので、曹操の行為の合法性はまったく問題にされなかった。

この一件は、合法的な上、安い経費で犯罪の根を絶ったというので、その後、曹操が大統領顧問官たちに高く評価されるきっかけになった。また、以来、蝶蝉と忍び会う仲にもなれたのである。

「それでは、話そう」

曹操は、蝶蝉の耳に唇を寄せると、声をひそめた。

「私が殺したい相手は……」

天下は巡る

「兄貴。聞いたか。董卓の野郎が殺されたそうだぜ」
血相を変えて飛び込んで来た張飛が、怒鳴った。
「何だと。どこで、誰にだ」
「くわしくは知らんが、大騒ぎしてるぞ」
張飛は、トリビジョンのスイッチを入れた。画面に洛陽の市街が浮かび上がって、アナウンサーの緊張した声が聞こえた。
『……死亡した董卓大統領の葬儀は、行われない予定です。大統領府は、目下洛陽市外に駐留していた南陽州軍の管理下にあります。駆けつけた袁術知事の指揮によって大統領府に入った南陽州軍は、大統領の遺体を洛陽大学医学部法医学教室で解剖ののち、焼却、廃棄することに決定致しました』
「これじゃ、さっぱりわからん。あの呂2号とかいう恐ろしいロボットに守られていたはずの大統領が、どうして暗殺されたのだろう」
劉備が首をかしげると、張飛はトリビジョンのチャンネルを次々と切り換えながら、ぼや

いた。
「ちぇっ。どこも、肝心のところは説明していねえ。もう、一通り終わっちまったんだな」
その時、関羽が入って来た。
「兄者。おう、張飛もいたのか。董卓が殺されたというニュースを聞いたかね」
「今、張飛にいわれてスイッチをいれたところだ。だが、いったい誰がどうやって暗殺したのかがわからん」
「あの殺人ロボットの呂2号が、いきなりうしろから心臓を打ち抜いたという話だ。それも、大勢の部下が見ている前でだということだ」
張飛は、それを聞くとしたり顔でうなずき、
「故障したんだろう。機械というやつは、いつかは壊れるものさ」
「確かに、一種の故障だろう。呂2号は、董卓を背中から撃って即死させると、それっきり動かなくなってしまったそうだからな。呂布はその時、洛陽にいなかったということだが、まだ、姿を現さないそうだ。
だが、これには何か裏がありそうだな」
どっかりと腰を下ろして腕組みをする関羽を見ながら、劉備がいった。
「こうなると、洛陽から完全に撤退せずに機動歩兵を一個師団残しておいた袁術が決定的に有利になるぞ。
あの時は、遠州の曹知事の提案で、軍事パレードがお流れになった以上、全軍を引き上げ

ようということになり、他の六州は渋りながらも同意した。われわれも、公孫瓚知事についてこうやって北平州へ帰って来たが、袁術知事だけが、自分は形式だけでも主将なのだからといって、精鋭を一個師団残した。

何と無駄なことをするものかと思ったが、あれは、深い読みがあったからではあるまいか」

「はて、どのようなものか」

関羽は、首をかしげた。

「いろいろな情報を集めてみたものの、袁術がそれほどの大人物とは思えない。うしろで糸を引いているのは、他ならぬあの曹操のような気がしてならないのだよ」

「曹操といえば、あの時の酒は実にうまかったなあ。遠州の名酒だそうだが、この北平州にはあれだけの酒はない。また、持って来てくれねえかな」

張飛が、舌なめずりせんばかりにいった。関羽は、弟を相手にせずに続けた。

「洛陽で、曹知事が兄者の兵舎へお忍びでやって来た時、わしは、董卓と呂布を仲違いさせればよいと知恵を授けたが、もし、あの筋書を曹操が実行したならば、今度のようなことがあっても不思議はない。

当人は、さっさと遠州へ帰って高みの見物をしているのかもしれんぞ。あれから、もう三ヵ月近くになる。うまい手を打っておけば、そろそろ効果が現れてもいい頃合じゃないか。

兄者は、どう思われるかね」

「なるほど。さすがは、関羽だ。あの曹知事ならば、董卓にいつでも会える。呂布と知り合いだったかどうかはわからないが、洛陽には長い間住んでいたというし、あの通りの有名人だから、われわれと違っていくらでも打つ手があるだろう。

思いもかけない方法で、呂布に寝返りを打たせたのかもしれないな」

劉備は、洛陽の兵舎で曹操をはじめて真正面から見た時のことを、はっきり覚えている。美しく冴えた目が印象的だった。しかし、その目でじっと見詰められると、心の底まで見すかされているような気がして、これはただものではないという恐怖に近い気持が背筋を貫いて走った。

あの男なら、凡人には思いもよらない策略で董卓を葬り去っても驚くことはない。

「おい、兄貴たち。見ろ、見ろ」

張飛が、トリビジョンの画面を指さした。

「あれが、その曹知事じゃねえか」

大統領府の正面入口に、大型の乗用反重力艇が一機着地して、数人の士官を引き連れた一人の将軍が降りて来るところが映っていた。それは、明らかに曹操だった。実況中継のアナウンサーは、しゃべり続けている。

『今、大統領府から袁術知事が出て来て、到着した遠州の曹知事と握手を交わしております。

ただちに董卓大統領死亡後の今後の政局の見通しについての会談が行われるのでありまし

ようが、他の実力者たちはまだ到着しておりませんので、成り行きは流動的と思われます』
「いちいち、偉大なる董卓大統領閣下といっていた昨日までに比べると、トリビジョン放送もまともになったものだな」
張飛が、あざ笑うようにいった。
下積みの劉備兄弟は、のんびりとトリビジョンで見物しているが、全共和国民が息を飲んで見ている場面の主人公である曹操にとって、これはまさに正念場だった。自分が三惑星連合共和国大統領になるための仕かけは二重三重にしてあるものの、成功の確率は百パーセントではあり得ないからだ。
誰も知らない謀略の網をかけて、故郷であり任地でもある遠州へさっさと引き上げた曹操は、まるで何ごともなかったように普通の生活に戻った。謀略といっても曹操のやったのは、蝶蟬（ちょうせん）を董卓と呂布に紹介したことだけだった。女好きの董卓に取り入るために美女を献上するのはごく普通のことだったし、董卓の信任厚い呂布に接近してご機嫌を取るのも珍しいことではなかったから、これが特別なことだと思った者は一人もいなかっただろう。
曹操が気を使ったのは、董卓と呂布がまったく別の場所、別の機会に蝶蟬と知り合うようにすることだけだった。といっても、特別な細工をしたわけではなく、最初に呂布を連れて蝶蟬の家へ行き、数日たってからひそかに蝶蟬を董卓のところへ連れて行っただけのことである。

蝶蟬にすれば、呂布のような男をたらし込むぐらい簡単なことはなかった。
根は大の女好きのくせに、気位だけは高いので絶対に女性のご機嫌を取ることなどできない。おまけに、二枚目にはほど遠く、セックスアピールとやらもほとんどない。天才にありがちな変人ぶりも、明るい方なら救いがあるのだが、金さえ貰えば殺人用のロボットを作って平然としていられる神経だから、お世辞にも楽しい人物とはいえない。
これだけハンデのあるところへ、見かけによらないはにかみ屋と来ているから、まともな女が近づいて来るはずがなかった。
ところが、ご当人は、まともな女でなければ満足できないのだから、欲求不満が積もりつもっていることは、見る人が見れば一目でわかる。もちろん、蝶蟬のような超一流のプロにとって、こんな男をのぼせ上がらせるのは赤子の手をひねるよりも簡単だった。
おまけに、この時の蝶蟬は、女の細腕一本で天下を変えようと決心しているのだから、結婚の約束はするし、ベッドでは例の秘術を尽くして大サービスをする。
呂布が、蝶蟬の色じかけにころりと参ったのは、当然すぎるぐらい当然だった。
一方、董卓の方も五十歩百歩というところだった。共和国の大統領に成り上がって、生まれつきの女好きに油を注ぎ火をつけたような状態だったが、もともと大した身分でもないし、高尚な趣味もないから、女と見れば手当たり次第に手を出していた。
そこへ、曹操が飛び切りの美女を進呈したのだからたまらない。今まで寵愛していた女たちが急にお粗末に見えて、蝶蟬を片時も離さなくなってしまった。

　このことを知った呂布は、大いに悩んだ。蝶蝉は、はっきりと自分を愛しているといったし、その言葉がいつわりだとは思えなかった。幸いなことに、董卓の信頼は厚かったから、呂布はひそかに機会をうかがって蝶蝉に近づくと、真意を尋ねたのである。蝶蝉は、涙ながらに、

「あなたさまと添いとげたいという気持は、今でも変わりありません。でも、大統領さまのおられる限り、女の身として逃げることも隠れることもできないではありませんか。董卓さまのお情を受けるのは、死ぬよりつらいことながら、今にあなたが助け出して下さるだろうと思えばこそ、こうして生きながらえております」

と、答えた。これを聞いて、単細胞の技術屋はすぐ結論を出した。呂布は、定期点検の際に呂2号をひそかに改造してから、静養に行くと称して洛陽を離れた。

　董卓が呂2号に殺されたのは、それから三日目だった。すべては、呂布のプログラム通りに進行した。ただし、肝心の一点だけは予定通りに行かなかった。いそいそと駆けつけて妻になってくれるはずの蝶蝉は、待てど暮らせど呂布の前に姿を現さず、それっきり行くえをくらましてしまったのである。

　呂布の失望ぶりは大変なものだったが、それはともかくとして、事件の成り行きを正確に把握しながら、高みの見物をしている男がいた。いうまでもなく、曹操である。

　曹操は、蝶蝉からの連絡によって自分の仕かけた謀略の進行状態を詳しく知っていた。董卓が殺される三日も前に、死亡推定時刻を知っていたのだから、準備は完全にできていた。

五万の大軍にできなかったことをたった一人でやってのけた蝶蝉は、あらかじめ待機させておいた特別機ですぐに遠州に引き取り、安楽な生活が送れるように手を打った。呂布の行くえはわからないままだったが、董卓さえいなければ呂布がどうなろうとあまり問題ではないので、ただでさえ忙しい曹操は積極的に探そうともしなかった。

　こんなわけだから、表面は知らぬ顔で握手を交わしている袁術と曹操だが、二人の立場は出発点から違っていた。袁術が本当に何も知らないのに対して、曹操は、こういう状況を作り出した張本人なのだ。袁術が洛陽に残してある一個師団程度の兵力など、曹操の握っている情報に比べれば、あってないようなものだった。

　そんなこととはツユ知らぬ袁術は、曹操の先に立って歩きながら、もう大統領になったような気分を味わっていた。まるで自宅の書斎に入るような顔をして大統領の接見室へ入ると、人払いをして衛兵にドアを閉めさせた。そして、自分は大統領の椅子に腰を下ろすと、いくらか横柄な態度でいった。

「この私が、差し当たり共和国の臨時大統領になることに、曹知事は反対なさるまいな。年功からいっても、この私以外ではまとまるものもまとまらんと思うが、どうかな」

　そらおいでなさった、と思いながらも、曹操はとぼけて、

「臨時大統領職というのは、いったいどの法律で定められているのでしょうか」

「法律など、この際問題ではない。共和国の混乱を防ぐための緊急避難的な措置としてだな、誰かが行政の総責任者にならねばならんことは自明の理だろうが」

「しかし、今は戦争をしているわけではないのですから、かりに私がここで閣下を支持して、臨時大統領を名乗られたところで、合法的手続きなしでは誰も承服しますまい。袁術閣下も、あの董卓めの二の舞いとなられる恐れなきにしもあらず……」

軍事パレードの時に自分を立ててくれた曹操だから、一も二もなく賛成するものと思っていた袁術は、理路整然と反対されて詰まってしまい、やや姿勢を低くして尋ねた。

「それでは、どうすればいいと思われるかね」

「さよう。董卓は愚かで憎むべき男でしたが、合法的な大統領であったことは間違いない。たとえば、袁術知事を副大統領に任命した書類でも見つかれば問題ないでしょう。閣下が州知事の筆頭としてご挨拶なされたことは、董卓も覚えておりましょうから、万一を考えて指名しておいた可能性は充分あります」

といわれれば、袁術もまんざらではない。気もそぞろになって腰を浮かせ、

「おう。まだ探しておらぬ。さっそく、秘書官どもを立ち合わせて執務室を調べて見ることにしよう」

すぐに接見室を出た二人は、大統領府管理責任者の秘書官房長や秘書官たちに事情を説明してから、それぞれの副官や部下の軍人までを引き連れて、大統領執務室に入った。

「まず、デスクの引出しを開けて見ろ。それから、金庫もだ」

袁術にせき立てられて、引出しを開けた官房長は、書類を二、三枚取り出すとすぐに大声を上げた。

「あ、ございました。副大統領任命の正式文書で、董卓閣下の署名と玉璽（ぎょくじ）が入っております」

「おい。見せろ」

袁術は、ひったくるように取り上げたが、一目見るなり顔色が変わった。

「こ、こ、これは……」

「どうなさいました」

いぶかしげな表情で近づいた曹操は、手早く文書を取り上げると、立ち合い人たちによく見えるように拡げた。一同の口から溜息が洩れた。董卓の筆跡ではっきりと書いてある副大統領の名前は、ほかならぬ曹操だったのである。

「私のような若輩を指名するとは……」

曹操は、意外そうな顔をして見せたが、内心ではその場に座り込みたいほどだった。大統領を見事にたらし込んだ蝶蝶からの報告で、董卓に曹操を副大統領に任命する書類をひそかに作らせ、引出しの書類の下に無造作に入れたということは知っていたが、場合が場合だけに、誰かが見つけて握りつぶしている可能性もあった。幸い、法律に弱い袁術が占拠していたおかげで、家捜しをされずに済んだばかりか、ご当人が先に立って見つけてくれたのだ。

「これは、どういうことだ」

心の中に、自分がまんまとワナにかかったのではないかという疑念が湧き上がった袁術は、燃えるような目で曹操を睨みつけた。

「貴公。これには、何か裏があるな。いったい、どんな手を打ったのだ。官房長とぐるなのか。本当のことをいえ」

「袁知事閣下。お言葉が過ぎますぞ。私は、軍隊を連れて引き上げてから今朝まで、遠州から一歩も出ておりません。閣下こそ、洛陽から一歩も出ずに董卓を見張っておられたのではありませんか。私の部下が大統領府に出入りすれば、閣下には筒抜けでございましょう。私に何ができたとおっしゃるのですか」

曹操は、あくまで冷静だが、袁術は絶望で目の前が真っ暗になっていた。いつも先輩として立てていてくれた曹操を呼べば、自分が臨時大統領なりそのほかの適当な名目で実質的な最高権力者になれるように、あと押しをしてくれるだろうと思ったのに、その希望が一瞬のうちに崩れてしまったからだ。

袁術は、周囲を見廻して、軍人らしく自分の負けを悟った。立ち合っている自分の部下の軍人は二人だけで、儀礼的な武器しか持っていないのに、曹操の部下は三人いて、しかも、たった今軍用機から降り立ったばかりだから、黒光りのする大型ブラスターをホルスターにぶち込み、腰にはエネルギー・マガジンをびっしりとつけている。そればかりか、曹操自身も小型だが高性能のブラスターを腰につけているのに、袁術は、エンピツも削れない儀式用の短剣という飾りをぶら下げているだけなのだ。

ここで曹操を殺すように部下に命令すれば、次の瞬間には恐らく全員が射殺されるだろう。袁術は、南陽州軍一個師団で大統領府の周囲を固めている優越感に敗れたのだった。曹

操は、副官の持っていたブリーフケースに副大統領任命書をしまい込むと、切れ長な目で袁術の顔をじっと見詰めた。重苦しい沈黙が流れた。やがて、袁術は弱々しい声でいった。敗北宣言だった。

「官房長。報道官を呼んで、新大統領発表の手続きをさせるのだ」

だが、これこそ面従腹背の見本のようなもので、袁術は、心の中でつぶやいた。

——曹操め。今に見ておれ——

劉備は、関羽と張飛をしたがえてきらびやかな大統領府の中を案内されて行った。

「こちらで大統領閣下がお待ちでございます」

深い浮き彫りを施した銀の一枚板でできたドアが開いて、向こうに曹操が立っていた。

「これは、劉備どの。よくおいで下さった。関羽どの、張飛どのもご一緒か。さ、こちらへおかけ下さい」

曹操は、機嫌良く挨拶しながら、劉備には自分の席に向かい合ったひときわ豪華な椅子をさし示した。

「早速、用件に入って恐縮だが、劉備どのには徐州(じょしゅう)の知事になって頂けないであろうか。現在の陶謙(とうけん)知事は、高齢と病気のために辞任を願い出ておられる。

ご存じのように徐州は重要な土地なので、この難しい時に太学士出身のひょろひょろに治めさせるのでは心配でならぬ。そうかといって、王侯気取りの古手にまかせては、自分の領

地のように思い込みかねない。陶謙閣下の後任になって頂けるのは劉備どのしかないと見込んでお願い致す。

お引き受け頂けるなら、この場でただちに辞令をお渡し致したいのだが」

「ははあ……」

喜んですぐに引き受けるかと思いきや、劉備は腕を組んで首をかしげた。

「何の準備もなしにそのような大任をお受けしても、経験のない私に州知事などという重い職務がつとまるかどうか、自信がございません」

うしろの席で聞いていた関羽と張飛は驚いた。S星(せい)の田舎の村長ならともかく、G星の中でも重要な徐州の知事に任命すると、ほかならぬ大統領がいっているのに、劉備が断っているのだ。だが、曹操は穏やかに笑って、

「そのようなご謙遜はご無用。S星の安喜村(あんき)では、今でも劉備どのにもう一度村長を務めてほしいと申しておるそうではありませんか。

関羽どのは、どのように思われる」

「申すまでもない。兄者なら、どのように大きな州の知事でも立派に務まると信じております。

兄者。せっかくの大統領閣下の仰せではないか。お引き受けなさらねば、かえって失礼に当たりますぞ」

関羽には、ここは曹操が劉備への借りを返そうとしているのだということがよくわかるの

で、強い口調ですすめた。二、三度頼んで断られれば、曹操としては義理が済んだことになるから、そのまま追い出されても文句がいえない。

「だが、関羽。この私に本当に大州の知事など務まるであろうか」

謙虚なのもほどほどにしてほしいと、関羽ははらはらしながら、

「兄者よりももっとつまらぬ男でも、平気で州知事ぐらい務めておりますわい」

「そうとも。兄貴なら、大統領になったって立派なものだ」

と、張飛が調子に乗った。劉備は、慌てて、

「これ。何をいうのだ。大統領閣下の御前なのだぞ」

「前だろうが後だろうが、本当のことは本当だ」

「いや、まこと。劉備どのなら、共和国大統領でも立派に務まるだろうが、ここは小手調べに徐州の知事で我慢して頂きたい」

曹操がにこやかに受け流すと、劉備もさすがにそれ以上はいえなくなり、

「そこまで仰せ下さるならば、非才の若輩でございますが、徐州の知事の職を引き受けさせて頂くと致しましょう」

と、頭を下げた。曹操は、喜色満面、立ち上がって劉備の両手を取った。

「そうして下されば、私も安心だ。では、すぐに担当官に立ち合わせて、辞令をお渡し致そう。事務官と打ち合わせの上、早急に赴任して頂きたい」

一切の手続きを終えて、新しく徐州知事になった劉備が出て行くのを見送りながら、曹操

は考えた。

——これで、劉備兄弟への義理も済んだ。劉備は、なかなか謙虚そうな男だから、当分は私に反旗をひるがえすまい。ああいう有能な人物は、味方に取り込むに限る。

もし、徐州で失敗するようなら、どうせ見かけ倒しで大した男ではないのだから、さっさとクビにして野放しにしても危険はあるまい——

大統領に対して丁寧な挨拶をして出て行った劉備は、こう思っていた。

——あの曹操という男は不誠実ではない。なかなか義理堅い大した人物だ。しかし、ああいう利口な男は、いったん人を疑いだせば際限なく疑うものだ。

今のところ、こちらは名もなく、力も貯えもないのだから、当分は徐州で良い政治をするように努力しよう。世間では、主流の曹操派だと見るだろうから、差し当たっては風当たりも強くあるまい——

虎は野に

どこでまともな政治が行われているかを誰よりもよく知っているのは、政治家でもお偉い学者先生でもなければ、人民の立場に立っていると自称している新聞記者でもなく、当の国民である。

たとえ大新聞を買収して無から有が生じるようなことを書かせ、目先の人気取りの政治をしたところで、ツケを払うのは、何のことはない税金を払っている自分たちだということがわかれば、いずれ人心が離れてしまう。

反対に、カッコの良い理論などなくても、名目上のGNPが低くても、不正がまかり通らず安全でのんびり暮らせる政治なら、たとえ日常的なことではぶつぶつ文句をいいながらでも、その政権は支持される。世間知らずの学生や夢想家でもない限り、この世に理想の天国があり得ないことぐらいは無学な庶民でも知っているからだ。

劉備（りゅうび）が知事になって半年ほどたつと、徐州（じょしゅう）で大道芸人が目立つようになった。イデオロギーも家もない彼らは、水が低い所へ流れるように、安全で楽に暮らせる土地へと流れて行く。

といっても、僅か半年のことだから、州法が変わったわけでもないし税率が低くなったわけでもない。高級官僚は、相変わらず太学士出身者ばかりで、下級官僚ももとのメンバーそのままである。形の上では、知事が入れ替わり、知事の任命する公安委員長に関羽が就任しただけの、たった二人の人事異動だった。少なくともここ百年ほどの常識では、何も変わらないはずだった。

だが、徐州は変わった。

一つの組織が栄えるも衰えるも、その責任はすべて最高権力者の態度と実行力にある。下の者は、たえず上役の顔色を見ているから、頂点に立つ権力者の能力が、組織そのものの総合力になるのだ。G星でも有数の大州である徐州は、これまで無難な人事ばかりが行われていて、およそ活気のない土地だった。ところが、今度は何かが違っていた。

といっても、新知事は、熱心に新しい政策と取り組むタイプではなかった。それどころか、役人たちが次々に立案する政策を片っぱしから握りつぶした。下積み生活の長かった劉備には、箸の上げ下げまで制限しかねない法令や行政指導のおかげで、どれだけ国民が無駄なエネルギーを費やしているかよくわかっていたからだ。

つまらない規則を作るのを止めさせたばかりか、劉知事は、自分の権限の及ぶ限り、こまごました規則や許認可制度を廃止した。しかも、あらゆる方面から知事個人に対して贈られる膨大なつけ届けは、すべて丁寧な断り書をつけて送り返した。

その代わり、これまで犯罪者の人権ばかり重視して、被害者が泣こうがわめこうが取り合

わないのを民主的と称する不思議な習慣を改め、関羽に命じて刑法犯の迅速な逮捕と厳重な処罰を徹底させた。

関羽は、警察がこれまで手を出しかねていた強力な犯罪組織は、政治的な反乱軍として扱う法律を適用した。そして、自分のひきいる特殊部隊との交戦でほぼ全滅させたばかりか、専用機で州外に脱出しようとした幹部は、張飛が戦闘艇で待ちぶせして撃墜した。実戦経験の豊かな名将相手では、弱いものいじめ専門の犯罪組織など所詮はものの数ではなく、僅か二日足らずの戦闘でケリがついてしまった。

これで犯罪は激減したが、小物犯罪者に対しても容赦しなかった。再犯以上の常習犯罪者に対しては、すべての情状酌量が停止され、法の定める最高の刑が科せられた。

劉備は、何か新しいことをつけ加えたのではなく、国民の生活を押さえつけていた行政と犯罪の重しを取り除いただけだったが、これで世の中がパッと明るくなった。

もちろん、劉備は、犯罪さえ取り締まればあとは野放しにするだけでことが足りると思うほど単純ではなかったが、国民に可能な限りの自由を保障することと、最低限度の法律はできるだけ厳格に守ることが政治の基本だと信じていた。そして、身勝手な官僚制度がすべてに優先する三惑星連合共和国では、この政策は一種の革命だった。

悪事は千里を走るというが、良い噂も伝わるのが早い。徐州の今度の知事は、まともな政治をやっているという情報は、ほんの数ヵ月のうちに三惑星全体に拡がって行った。

そして、旅の大道芸人が目立ち始めた頃から、徐州へやって来るビジネスマンも増えだし

た。商人も景気の良さそうな土地をすぐに嗅ぎつけるからだ。

自分の考え方に自信を持った劉備は、次の段階として州の行政を州議会が支配するように改革しようと計画した。これまでの州議会は、大統領と同じように形式だけの存在になっていた。実際の権力は、すべて大統領による任命制の知事の手にあるのだから、共和国とは名前だけ、知事に実力があれば、実質は世襲制の王国と変わりなかったのである。

劉備は、共和国を本来の共和国の姿にするべきだと信じていたから、徐州を実験台にするつもりだったのだ。だが、その考えを聞いた時、関羽は顔をしかめながらいった。

「兄者。それは、考えとしては間違っていない。だがね、今程度の改革でさえ、太学士出身の役人どもは不平たらたらだ。悪党を叩き殺したことはともかくとして、連中の権限を大幅に制限したことに対しては、腹の中が煮えくり返っている。だから、機会があれば、われわれの足を引っ張って失脚させようと画策しているのだ。

聞くところによると、曹大統領は、憲法を改正して自分が終身大統領に就任し、独裁政治を始めようとしているそうだ。徐州で議会の権限を強化しようとしていると訴えれば、すぐに兄者は解任されることは目に見えている。もちろん、州の役人どもがそのチャンスを見逃すはずがない」

「では、どうすれば良いのだ」

「州知事の地位にいればこそ、曲がりなりにも自分の理想に近い政治を試みることができるのではないかね。ここで野に下れば、すべてはおしまいだ。口さがない連中は、一年やそこらなら誰にでも気のきいたことができるさ、などというだろう。

やはり、ここは慎重に保守的な態度を取って、敵につけ込まれないようにするべきではあるまいか」

「関羽。心配してくれる気持はよくわかる。しかし、お前は勘違いしているのじゃないかね。私には、自分の地位などどうでもかまわない。

ここで、曹操のご機嫌をそこねないように〈かしこく〉振る舞えば、徐州の知事としての地位は、うまく行けば死ぬまで保証されるだろうよ。だが、私の目的は、安楽な生活をすることではなく、先祖の劉邦初代大統領が建国したような三惑星連合共和国をよみがえらせることなのだ。曹操ごとき男の家臣となって一生を平穏に送ったところでなにになろうか。たとえ、徐州知事の地位は解任されても、ここに劉備ありということが共和国中に知れわたっていれば、いずれ、私の時代が来るだろう。

未開の時代ならともかく、今の世の中で独裁政治が無条件に受け入れられるはずはないのだから、まことの共和制を復活させたいという声が高まる日も遠くはないはずだ。私が州議会を強化しようとしているのは、徐州知事を解任されるためといってもよいほどなのだよ。

こういう考えは間違っているだろうか」

劉備は、じっと関羽の目を見詰めながらいった。関羽は、にっこり笑って、

「兄者が、そうなることを充分承知の上でなさることなら、わしも無条件で賛成だ。もともと、張飛もわしも、上に立つやつらがあまりにも身勝手でいばりくさっているのに腹を立て

て、こういう暮らしに入ったのだ。安楽な生活など求めてはいない。大きな目的があれば、大きな苦労もかえって楽しみになるぐらいのものだ」

「そう思ってくれるなら、本当に嬉しい」

とはいったものの、州議会の再建という大事が今日明日にできるものでもない。劉備がひそかに計画を練っていたある日のこと、一人の男が公邸を訪ねて来た。秘書の取りついだ名刺を見ると、呂布と書いてあるではないか。

もとより、劉備は呂布と面識はない。董卓が暗殺された件についても真相を知っているのは曹操と蝶蟬だけだから、表面に現れたことしか知らないが、董卓の死後、そのまま姿をくらました呂布という男に、あまり良い印象を抱いていなかった。だが、噂だけでものごとを判断するのは、他人の中傷を信じる結果になると、普段から自戒している劉備は、呂布を通させた。

呂布は、大きな体を縮めるようにして入って来るなり、

「知事さま。どうかお助けを」

と、いって、その場に座り込んだ。驚いたのは劉備である。

「いったい、どうしたというのだ」

「はい。私の命は狙われております。知事さまは、侠気のおありになるお方とうかがっておりますので、お助け下さるだろうと思って参りました」

「なぜ、だれに狙われているのだ」

「恐らくは、曹大統領だろうと思います」

「だが、なぜ曹操閣下がお前を……。董卓が殺されたからこそ曹閣下が大統領になられたのだ。あのお方の性格からすれば、恩に着ることはあっても殺そうなどとは思われないはず」

事情を知らぬ劉備がいぶかしげな顔をすると、呂布は、うなずいて、

「私の作った呂2号が、董卓大統領を殺したことはご存じだと思いますが、あれは私のせいではなく、董卓の性格が突然変わったからなのです。呂2号の電脳は、持ち主に同調しておりますので、普通の人ならけっしてあのようなことが起こり得ないのです。ところが、董卓という人は私の想像を上廻る異常な性格で、最初の調節をした時には想像もしなかったような二重人格、いえ、多重人格のため、呂2号が、持ち主を別の人間と誤認したとしか思えません」

「なるほど」

女の問題で董卓を殺したとはいえないので、呂布は上手な作り話をした。ことの真偽を確かめようもない劉備としては、ただうなずくほかないが、あれほど多くの人を殺した殺人機械を作ったことに対して、いささかの反省の色もなく平気な顔をしていられる呂布という男も、董卓に負けないほど異常ではないかと思った。

しかし、劉備は、曹操が呂布を殺そうとしているとはとても信じられなかった。

「それで、あなたはその件について曹大統領ににらまれている証拠でもあるのかね。あるいは、誰かに暗殺されそうにでもなったというのかね」

「そんなことはありません。ただ、大統領が私を探しているという評判なもので」

「それは、殺すためではあるまい。恐らく、あなたを取り立てるか仕事を依頼しようとしておられるのだろう。なんなら私の方から大統領に尋ねてみようか」

「お願いできましょうか」

と、いっているところへ、何か用でもあるのか関羽と張飛が入って来たが、異様な感じの男が床に座っているのを見て立ち止まった。劉備は、すぐに紹介した。

「よいところへ来た。この人は、例の呂2号を作った呂布氏だ。こちらは、弟の関羽と張飛」

「いったい、何しに来やがったんだ」

張飛が、うさん臭そうな顔でじろじろ見ながらいった。劉備が、呂布の来た理由を説明した。関羽は、じっと呂布を見詰めながら聞いていたが、はっきりといった。

「兄者。こういう不吉な人間とはあまりつき合わん方が良い。曹操ににらまれるぐらい気にはせんが、筋の通らないことはするべきじゃなかろう」

「そうともさ」

張飛は、立ち上がりながらいった。

「おれは、こういう小ずるそうなやつが生まれつき大嫌いなんだ。とっとと叩き出してくれる」

「待て」

劉備は、二人を押しとどめた。

「あちこち渡り歩いたあげく、この徐州にたどりついて、私の保護を求めて来たのだ。窮鳥懐に入らば猟師もこれを殺さず、というではないか。

私を頼って来たものを見殺しにすることなどできない」

「…………」

「有難うございます」

呂布は、二人が黙ってしまったのを見ると、床に額をすりつけた。

「このご恩は、けっして忘れることではございません。ほとんど体一つで家を出て参りましたので、手みやげもございませんが、幸い苦心して彫った光子超LSIだけは、肌身離さず持っております。これを使えば、世に二つとない機械が作れるので、何かのお役に立たせて下さい」

「私は、董卓のように卑劣な人間ではないつもりだ。それに、この弟たちが立派に守ってくれるから、人殺しロボットなど必要ない」

「光子超LSIは、なにもロボット専用の素子ではございません。どのような目的にも使えます。どうか、ご希望をおっしゃって下さい」

それを聞いて、関羽は目を光らせて尋ねた。

「呂2号にもその光子超LSIとやらを使っていたのか」

「さようでございます」

「ロボットの制御ができるのなら、反重力艇の制御もできるはずだな」
「お安いご用でございます。関羽さまの、お気持のままに動くように改造することができますが」
「そうか。では、わしの愛用の戦闘艇を改造してくれぬか」
「喜んでさせて頂きます。ただ、仕事場では本名を名乗らず、偽名を使わせて下さい」
といった次第で、呂布は、州軍の工場の片隅で整備工の姿をして働くこととなった。関羽にしてみれば、噂に聞いた手彫りの光子超LSIなるものを危険人物の手から取り上げようと思っただけなのだが、天下一の名人である呂布は、劉備の保護のもとに入れた嬉しさで精根込めて仕事に取りかかった。

一方、劉備は、人を介して曹操に呂布のことを問い合わせると、殺すどころか大統領直属の科学技術顧問とするつもりでいたという意向だということがわかった。喜んだ呂布は、関羽の反重力艇の改造が終わると、ほとぼりが冷めるのを待って旅立って行った。

さて、民主化を推進しようとする劉備は、部下の太学士出身官僚の中から優秀な行政官を何人か選んで、公正な選挙の方法や、議会の決定に従って行政を運営する手続きなどの草案を作らせては、細かく目を通して修正を加えていた。

優れた政治的天分を持って生まれた劉備にとっては、専門的な法律の知識などなくても、ある法案が誰にとってどういう価値があるのか一目見ればわかるのだった。

ただ草案を作るだけでなく、劉備は、でき上がり次第に次々と州の公報で発表させた。個

人的な研究ではなく、州としての公式な草案なので、三惑星全体の注目を集めたことはいうまでもない。劉知事の名は、劉邦初代大統領の子孫であるというニュースとともに、希望の響きを込めて、共和国に拡がって行った。

この成り行きを苦々しい思いで見詰めていたのは、いうまでもなく曹操だった。

曹操は、有名無実になっている三惑星連合共和国の国会を廃止して、自分が終身大統領に就任する計画を進めていた。同時に、大統領の諮問機関として、各州から推薦される学識経験者より成る枢密院を作る計画も着々と進んでいた。

これが、経費と時間ばかりかかって、ろくな政治のできない今の制度より、はるかに効率の良い安上がりな政府への近道であることには、絶対的な信念があった。大部分の国民は、政治のたてまえがどうであろうと、平穏で生活が楽なら文句をいわないものなのだ。

自分の計画の成功を疑ってもいなかった曹操にとって、劉備が次々と発表するかなり理想主義的な方針は、晴れ渡った空に現れた雲のようなものだった。それが、学者の唱える夢のような計画であれば、問題にもならないのだが、劉備が着任してからの徐州は、共和国中でもっとも平穏で暮らしやすいという評判だったから、笑ってはいられなかった。

州知事といえば、低い地位ではない。実質的な権限は、大統領に次ぐといってもいいほどで、劉備のような野人にとっては、本来いくらあがいても近づくことすらできない高嶺の花だ。董卓を倒すについて知恵を借りたとはいえ、曹操にすれば充分すぎる返礼だと思っていた。知事としての劉備の評判が高いことを聞くにつけて、自分の眼力に狂いはなかった、こ

れで、自分の派閥の有力なメンバーが一人できた、と思っていた矢先なので、まったく反対の政策を公式に発表する劉備のやり口に失望もしたし、腹も立てていた。

あれこれ考えたあげく、曹操は、劉備を一方的に解任した。

劉備が公文書メッセンジャーから、徐州知事を解任するという通知を受け取ったのは夕方で、退庁する直前の時間だった。だが、劉備は、少しも驚いた様子がなく、すぐに副知事を呼んで事務の引き継ぎを行い、翌日の午前中にはさっさと公邸を引き払った。

劉知事が解任されたと聞いて、喜んだのは太学士出身の官僚とならず者たち、悲しんだのは徐州の住民たちだった。

噂を聞きつけて、公邸の前には大勢の市民が餞別の品などを持って集まったが、劉備は、これまで通り何一つ受け取らず、二人の弟とともにそれぞれの反重力艇に乗り込むと、関羽の乗った真紅の重武装艇に先導されて、手を振りながら上空へ消えて行った。

まことにあっけない幕切れだったが、この情景は、あらゆるニュースメディアを通じて共和国の各地に伝えられ、希望の灯としての劉備の評価は、ますます高くなった。

曹操は、苦虫を嚙みつぶしたような顔でトリビジョンを見ながら、劉備を解任したのが大失敗だったことにはじめて気づいた。どんなに恐ろしい虎でも、自分が管理できる檻に入れておく限り安全なのだ。だが、曹操は、劉備が虎だということを今の今まで知らなかったのである。

虎は、野に放たれた。油断していた曹操には、その行方もわからなくなっていた。

スペースラブの男

警報ブザーが鳴った。モニター室の椅子に深く腰をかけ、目を半分閉じたままじっと瞑想にふけっていた諸葛孔明は、やおら体を起こした。3Dのレーダー・スクリーンの影を見ると、接近しているのが三隻の反重力艇らしいと見当がついた。すぐに、自動カメラが画像スクリーンに映像を映し出す。暗い宇宙空間を背景に中型の反重力艇が近づいて来るのが見えた。孔明の住んでいるスペースラブ〈隆中星〉は、今、G星の影から出たばかりで、三隻の反重力艇は輝いて見えた。

「武装はしていないようだな」

と、つぶやいてから、孔明は、苦笑した。わざわざ盗みに来るほど値打のあるものはないし、孔明自身も命を狙われるような重要人物ではない。放棄されて無人のまま廻っている人工衛星などに、強盗も刺客も来るはずはないのだ。また、水や食料の補給に立ち寄るもの好きもいるはずはない。中型の反重力艇なら、ここまで来れば地上までせいぜい三十分もあれば行けるから、通りすがりの船がわざわざ人工衛星の動きに同調する手間までかけて、僅かばかりの補給を受ける必要があるとは思えなかった。それにしても、世捨て人同然の暮らし

をしている自分の所へ、わざわざ訪ねて来たのは誰だろうと、孔明は、首をかしげながら、マイクに向かって共通波長で呼びかけた。

「こちらは、スペースラブ〈隆中星〉。接近中の船、応答願います」

すぐに、丁寧な返事が戻って来た。

『こちら、G星船籍庚一三三・六二八九四。船長は劉備と申します。司馬水鏡先生よりのご紹介で参りました。部下が二人同行しておりますが、ぜひ諸葛孔明先生にお目にかかりたく存じます。先生は、おいでになりましょうか』

「私が、諸葛孔明ですが。どのようなご用件でしょうか」

孔明は、映像回路のスイッチを入れながら尋ねた。見覚えのある、温厚そうで威厳のある男の顔が映った。

『これは、先生でいらっしゃいますか。折入ってお願い致したいことがございます。どうかお会い下さりますよう』

内心ではうなずきながら、孔明は冷淡な声でいった。

「私のような者にお願いとおっしゃっても、できることなど何もありません。当分ここを離れる気持はないし、雑用にわずらわされたくないものですから」

『そうおっしゃらずに、ぜひお会い下さい』

「劉備さま……とおっしゃいましたな」

数秒間考えるふりをしてから、孔明は問いなおした。

「あの徐州知事をしておられた劉将軍ではありませんか」
『はい。まさにその劉備でございます』
「わかりました。この私を、政治の世界に引き出そうとしておいでになったのですね」
『はい。まさにその通り。先生こそは、天地人のことごとくに通じたお方とうかがい、こうしてお願いに上がった次第でございます』
「将軍のようなお方に、そこまでいって頂くのは光栄の至りですが、それは買い被りというもの。私には、野心がなく、ましてご期待におこたえできる才能もありません。どうか今の平和な生活を乱さないで下さい」
　それを聞くと、劉備は、声を励ましていった。
『諸葛孔明どの。曹大統領は、ついに終身大統領に就任致しました。このままでは、三惑星連合共和国は、曹家の私物になりかねません。私は、何としてもわが先祖の建てた共和制を守り抜きたいのです』
「なるほど。しかし、だからといって若い世間知らずの私に何ができるとおっしゃるのですか。徐州知事として名声天下に轟く劉知事におできにならぬことが、中古の人工衛星でくすぶっている若造にできるはずがないではありませんか。
　失礼ながら、お引き取り下さい」
　孔明は、送信スイッチを切った。
『兄貴。こんな高慢チキな野郎に、これ以上ぺこぺこするこたあねえや。さっさと帰ろうぜ』

　張飛が、スピーカーのこわれそうな声でわめいた。関羽もいった。
『こりゃ、見込みがなささそうだな。どうやら、水鏡先生は、勘違いをしているんだ』
　高性能の暗号解読回路のおかげで、二人の声は筒抜けだった。孔明は、笑いながら映像を出して見た。厳めしい関羽と、荒々しい張飛の顔が映った。
　——噂に違わぬ豪傑揃いらしいな——
　孔明は、数秒間二人の顔を見ていたが、すぐに画像を消した。
『お会い下さるまでは、毎日でも参りますぞ。では、また……』
　劉備がそういって通信を切ると、間もなく反重力艇が衛星軌道から離れて行くのが見えた。関羽と張飛の艇もあとを追った。諸葛孔明は、また椅子に深く体を沈めると目を閉じて瞑想にふけった。
　もっとも、瞑想といっても孔明の瞑想は一風変わっていた。このモニター室の壁の半分以上は、四百面近い画像スクリーンでほとんど埋め尽くされている。映っている映像は、三惑星の各地で発信している実に雑多な情報だった。ニュースや学術的な講演、時事解説のたぐいはもちろんのこと、天気予報、惑星間の宇宙塵に関する情報から、新製品の広告宣伝に至るまで、三惑星の主なニュースソースから流れる電波は、二十四時間ここに映っていた。
　数年前、放棄されていた人工衛星のいくつかの使用権をただ同然で手に入れた孔明は、もとスペースラブだった中型衛星を住居にし、小型衛星を中継アンテナ用に使い、スクラップ

同然のイメージプレートや通信機材を集めてはせっせと運び込んだ。一年たらずの努力の結果が、世界中の最新情報をいながらにして見聞できるこのニュースセンターとなり、孔明は、数ヵ月に一度ぐらいの割合で、補給や情報収集のためにG星へ行くほかは、じっと閉じこもっていた。

孔明が、〈隆中星〉に住んでいることを知っているのは、師の司馬水鏡だけなのである。水鏡は、優れた心理学者で精神科医だが、非凡な才能を発見して育て上げる天才であり、多くの弟子を育てて来た教育者でもあった。孔明の能力も水鏡がいなければ半分も発揮できなかっただろうといわれている。

普通の人間なら、何の関連もない四百面もの映像を同時に見ることなど到底できはしないし、見ようと努力すればするほど、結局どの画面もはっきり見えなくなる。

ところが、孔明は、薄目を開いたまま画像スクリーン全体を眺めているだけで、四百の映像すべての内容を大まかに知ることができた。百面程度なら、同時進行している映像の内容をほとんど正確に追うことができたし、あとの三百面も内容の重要さの程度は判断することができた。

そればかりか、特に重要そうな映像があれば、その音声放送を同時に聞いても、五十種類程度なら完全に聞きわけることさえできた。

つまり、孔明は、半分眠っているようなポーズで深い椅子に体をうずめたまま三惑星全土から流れて来る情報の激流をゆったりと飲み込み、同時にリアルタイムで総合し分析することがそれほど苦労することなしにできるのだった。権力の頂点にいて、全世界の情報を一手に握っていると信じている曹操（そうそう）ですら、孔明に比べればほとんど何も知らないといってよい状態だったといって差し支えないだろう。内容を正確に理解しているかどうかという点まで含めるならば、孔明の把握している実質的な情報量の差は千倍以上にも達していたからだ。

しかも、官庁というフィルターを通して入って来る曹操あての情報が、かなり割引や割増をして考えなくてはならない場合が多いのに対して、孔明は、必要とあれば各地の友人の個人的な見解を聞くこともできた。身軽な孔明は、自分で現地へ行って直接調べることもできるのだった。また、有名人でもない普通の人間の方が、大統領よりも本当のことを簡単に知ることができる場合が多いのは、いつの世でも変わりない。

諸葛孔明こそは、三惑星の中で誰よりも天下の事情に通じているばかりか、その意味するところまで腹の底から知り抜いている人物だったのである。したがって、劉備がはるばると訪ねて来たのも、孔明にとってはそれほど意外なことではなかった。

聡明な劉備には、天下を支配しようとすれば、それなりの大組織とそれを統括できる人材が必要なことはわかり切っているはずだった。今や政治家としての人気はトップクラスで、野心もありながら、もともとが民間人を集めた義勇軍から名を上げた劉備には、組織的な背景が何もない。

関羽が優秀だといっても、根が武人だから得意とする謀略は軍事的な範囲に限られている。政治から経済、外交までを含めた戦略を立てるための総合的な力量のある参謀役がいな

い限り身動きのできないところまで追い詰められていることは、明らかだった。

人材を必要とする点では、三惑星を支配したい曹操も、ほかの実力者たちも変わりはなかった。だが、こういう時代になると、人材の売り込みや斡旋も盛んになるので、すでにある程度以上の組織を握っている実力者たちは、いっぱしの見識を備えたインテリたちを大勢かかえ込んで、食傷気味になっていた。

孔明のように、まだ二十八歳の若さでほとんど名を知られていない上、わざと表舞台から隠れているような男に対しては、たとえ師の司馬水鏡が推薦したとしても、あまり需要がなくなっていた。もし、わざわざ〈隆中星〉との会合点を求める軌道計算をしてまで訪ねて来る人があるとすれば、それは、もっともせっぱ詰まっている劉備だろうと、かねてから孔明は推定していたのである。

といっても、けっして孔明は首を長くして劉備が来るのを待っていたわけではない。政治や軍事について自分が少年時代から磨き上げた理論を、実地に試してみたい気持はやまやまだったが、そうかといって二流三流の人物とつき合うのはお断りだったし、曹操のように独裁的な人間とも、長くは行動をともにできないだろうと思っていた。

もちろん、孔明は、自分がトップに立つ性格ではないことを充分承知していたし、それほどの野心家でもなかったから、自分がその下で充分に腕を揮えるような実力者に会えなければ、学問の道に生きるつもりだった。

経済学や政治学だろうが、物理や数学の方面だろうが、世間で一流といわれる大学教授に

なる程度なら、どこへ行っても充分に通用する自信があったからだ。

劉備のもとで腕を揮うか、ほかの実力者に従うか、あるいは学者としての平穏な生活に入るか、孔明は、これからの成り行きにまかせるつもりだった。世の中の動きを、さながら自分の掌を見るように見通していた孔明にも、自分の運命だけは、天にまかせるほかなかったのである。

翌日になると、劉備はまた関羽と張飛を連れてやって来た。だが、孔明は、もう一度同じ理由を述べたてて、会うことを断った。劉備は、また引き返して行った。孔明は、張飛が腹を立てて、

『兄貴。これ以上頭を下げることはねえ。一言いってくれさえすりゃ、おれがハッチをぶち壊して、引きずり出して来てやらあ』

と、怒鳴っているのを聞いた。

そして、さらに次の日になると、劉備は、懲りもせずに三たび隆中星を訪れた。

『諸葛孔明先生。劉備でございます。また参りました。何とぞ、お目にかかりたく存じます』

三度目だというのに、その丁重さは最初と少しも変わらない。孔明は、スクリーンに映る劉備の誠実そのものの表情を見て、うなずいた。

「劉備さま。そこまでおっしゃるのでは、これ以上お断りすれば失礼のそしりを免れません。どうか、お入り下さい。ただ、これは比較的小型のスペースラブなので、大型のエアロ

ックなどあるはずもなく、外部への標準接続口も二ヵ所しかありません。その一方には私の船が接続してありますので、一隻しか接続できません。私一人で入らせて頂きます』
「それでは、どうぞ。こちらは、いつでも準備ができております」
『では……』
劉備の艇は、見事な動きを見せて衛星に接近すると、ほとんど無駄な動きなしに接続口を接触させた。孔明は、電磁石に通電して艇を定位置に密着させてから、接続用のメカニカル・バインダーでしっかりと固定し、内側のハッチを開いた。反重力艇のハッチの外壁が見えた。
「いつでもお入り下さい」
孔明は、壁についているマイクに向かって呼びかけた。すぐに、反重力艇の側のハッチが艇の内側へ引き込まれた。じっと見ている孔明の前に、画像スクリーンの上で見慣れた劉備の顔が現れた。
二人は、二メートル足らずの距離をおいて、しばらく見詰め合った。劉備の体を、軽い戦慄が走り抜けた。孔明の凛々しくも端整な顔は、研ぎすましたような面長の輪郭に納まり、簡素な作業着に包んだ体は、長身の劉備よりさらに顔半分ほど背が高かった。その漆黒の目を見た瞬間、これこそ求めていた人物だということが、理性の外で理解できた。
劉備は、思わずその場に膝をついた。

「先生。どうか、この私と志を合わせて共和国の再興をお許し下さい」
「劉将軍。お立ち下さい」
孔明は、劉備を引き起こしながらいった。
「この私は、まだ若輩でございます。将軍ほどのお方のお役に立てるかどうかわかりません。それに、将軍には関羽、張飛という立派なご兄弟がおられるではありませんか」
「あの弟たちは、武勇にかけては並ぶ者もございません。しかし、部下の将兵はすべて合わせても三千人足らず。これに対して、曹大統領が完全に掌握しているのは、G星の正規軍だけでも百万という大軍です。
聞くところによりますと、曹大統領は、遠からず終身大統領の制度も廃止して、三惑星連合共和国を三惑星連合王国とし、曹王朝を建てようと計画している様子です。先祖代々四百年あまりにわたって続いて来た共和国を、ここで個人の専制下におくことなど到底許せるものではありません。なんとしてでも、曹操の野望は打ち砕かねばならないのです」
「劉将軍。ここで立ち話もできません。どうか、中へお入り下さい」
孔明は、先に立ってモニター室に入ると、広い壁一面にちらちらしている3D映像にびっくりしている劉備に、椅子をすすめた。
「先生。いったいこれは何をご覧になっているのですか」
「ここにいるだけで、世界の情勢が手に取るようにわかります」
「しかし、これではごちゃごちゃして何が何やらさっぱりわかりませんが」

「私には、すべての画面を同時に見て理解することができるのです」
「ははあ……」
劉備は、しばらく眺めていたが、やがて画面から目をそらせていった。
「見ているだけで、頭がおかしくなりそうです。こちらを向いて座らせて下さい」
劉備は、モニター画面に背を向けて腰を下ろした。孔明は、尋ねた。
「将軍。何か飲物でもいかがですか」
「はい。有難うございます。できましたら、冷たいお茶を一杯頂きとう存じます」
「お安いご用です。遠州（えんしゅう）産の上等のがあります」
孔明は、モニター室を出てすぐに戻って来ると、向き合った位置に座った。
「私は、大統領に面会できるような身分ではないので、一度も直接会ったことはありませんが、将軍は、曹操をどう見ておられますか」
「ずば抜けて聡明なばかりか、人の心によく通じた立派な人物と申すほかありません。人を身分や地位で判断することはないし、恩義は忘れないし、あれ以上の人はなかなかいないでしょう」
「それほどの人物なら、三惑星連合国の国王としてもふさわしいのではありませんか。わが国は、共和国といっても、ここ五十年ほどは、共和制などただの名目だけの始末の悪い国になっていました。あんな形だけのイカサマ共和国よりは、曹操の王国の方がどれだけましかわからないと考えている国民が多いのも事実です。

劉将軍は、この点についてどうお考えですか」
劉備は、うなずいていった。
「ある瞬間だけを見れば、そういうこともあるでしょう。しかし、曹操がいかにすぐれた人物であっても、いつまでも今のままでいられる保証はないし、かりに曹操自身は今のままで変わらないとしても、世の中は必ず変わります。曹操とても、その変化について行けなくなることもあるはずです。
自分に限ってそんなことはあり得ないなどと思っているとすれば、曹操の聡明さもそこが限界ではありますまいか。本当に聡明ならば、三惑星連合共和国本来の法律に従って、十年に一度ずつ国民の信任を確認しながら大統領を続けるべきで、曹操ほどの人物なら長くその地位にいられるだろうと思います。
それをしないのは、国を私物化しようとしているからであって、私にはとても容認することができません」
「なるほど」
孔明は、うなずいた。劉備の誠実な態度を見て、この人となら運命をともにしても悔いはないという気になっていた。その時、ドアが開いて、茶の支度をした美女が優雅な身のこなしで入って来た。
「いらっしゃいませ。遠い所へよくおいで下さいました」
「これは、奥様でいらっしゃいますか」

よもや女性がいるとは思っていなかった劉備は、驚いて立ち上がった。孔明も立って紹介した。

「将軍。これは、家内の蝶蟬（ちょうせん）と申します。こちらは、有名な劉備将軍でいらっしゃる」

「お邪魔致しております」

「どうか、ごゆるりと」

蝶蟬が香りの高い茶を入れて、しとやかに出て行くと、劉備は、溜息をついた。

「なんという美しいお方でいらっしゃいましょう」

「あれは見かけによらず苦労した女なので、ここでの静かな生活を喜んでおります」

孔明は、劉備がそれを聞いてもただうなずくばかりなのを見て、蝶蟬にまつわる話が世間にまったく洩れていないことを改めて確認した。

「話をもとに戻しますが、曹操が義理堅いことも非常に賢いことも、まったく同感です。それに、あの男の今の政治姿勢に反対であることも、将軍と同じです。

しかし、将軍は、あの強力な曹操にどういう方法で対抗なさるおつもりなのですか」

「百万の精鋭をひきいる相手に僅か三千の手勢をもって対抗する方法など、どうしてこの私にわかりましょうか。それをお教え頂きたくて、先生のもとへ参ったのです。

いったい、そのようなことができましょうか」

孔明は、うなずいた。

「今ここで正面から曹操に逆らうのは、天の利にそむき虫が火に飛び込むのと同じこと。た

とえ、こちらにも百万の軍があったところで、G星を完全に掌握している曹操に勝てるはずはありません。

しかし、潮が満ちたり引いたりするように、天地間のことは時に応じて変わります。天地の利、時の流れ、人の和をことごとくわが方のために利用するならば、持てる力を百倍にも千倍にも使うことができるのです」

「どのようにして……」

孔明は、ゆっくり右手を上げた。劉備には、ただ空中で手を動かしただけのようにしか見えなかったが、次の瞬間、二人の目の前の空間に、光の渦のようなものが浮かび上がった。

「劉将軍。ご覧下さい。これは、わが太陽系の立体図です。中央にあるのが太陽で、周囲を惑星が廻っておりますが、内側のA、Bの二星と外側のP、Q、Rの三星には人間が住めません。その間にあるW、G、Sがわが三惑星であります。

三惑星の軌道はそれぞれ違った面上にあって太陽からの平均距離が大差ないため、三つのいずれにも人類が住めるのです。この立体図は、現在の惑星の位置をそのままに示しております。

ご承知のように、三惑星相互の位置関係はたえず変化しており、大変複雑です。専門家がコンピューターを使っても、容易に位置の予測をすることができません。重力制御ができるようになる前の三惑星間の交通が非常に不便だったのも当然のことです。重力制御ができるようになってからも、緊急便以外は自然落下で惑星間飛行を致しますから、かなりの時間が

かかり、けっして容易ではありません。

それでも、中央政府が強力な時は、三惑星間の連帯が強いため、しっかりと連絡が保たれておりますが、中央政府の統制力が弱まるたびに、三惑星が半独立の状態になったことは歴史上の事実であります。つまり、三惑星は、放置しておけば分離独立する傾向にあるといえます。

三つの惑星が一つの国家としてまとまっているのは、歴史上かなり珍しいことでもありますから、考えようによっては、独立している方が自然な姿なのかもしれません。

董卓が大統領に就任して以後の共和国は、中央政府の統制が弱まる一方のため、その自然な姿に近づいているといえないこともないのです。

そういう観点から、現在の情勢を眺めて見ますと、将軍のお立場はけっして弱いものではありません」

孔明は、まるで数学の証明でもしているような態度でいった。

「さようでございましょうか」

劉備は、複雑な表情で孔明の顔を見た。

「確かに、曹操は中央政権を掌握しました。しかし、完全に支配下にあるのはG星だけというのが、本当のところでしょう。W星は、もっとも独立性の強い所で、献大統領の当時でも、すでに長沙州の孫堅知事が事実上の権力を握っていました。孫堅知事は昨年亡くなって、子息の孫権があとをついでいますが、すぐれた人物を大勢擁して、曹操もちょっと手を

出せないほどしっかりとW星を統率しております。

しかし、S星は、今のところ政治的には空家同然です。三惑星の中ではもっとも山が多く平地が少ないため、昔からS星人は個性が強いので有名でした。そのおかげか、W星の孫一族のように強力な豪族も生まれず、中央から任命されて来た役人が各地の地方豪族と馴れ合いで、ようやく治めていたというのが実情でした。

ところが、董卓が大統領になってからというもの、中央政府が政変続きのために、そのバランスさえも崩れて、今では治安も悪くかなり混乱しております。

曹操は、誰か大物の知事を派遣して収拾を計ろうとしているようですが、あそこは、ただものに治められる土地ではありません。力で押さえようとすれば、かなりの兵力が必要になります。

しかし、ご承知の通りS星の公転軌道は偏平なため、大量の兵力を送り込める時期には制限があります。しかも、いったん大軍を派遣すれば、相当の期間それを駐留させなくてはなりません。そうかといって、僅かの正規軍を派遣したところで今の状況ではほとんど無力でありましょう。

さすがの曹操も、手を下しかねております。

敵の弱点こそ、とりもなおさずこちらの最大の味方です。ここをうまく衝くならば、S星をわが手に収めて独立国とするのも、さほど難しいことではございません。

「ほほう。どのように致せばよろしいのでしょうか」

劉備は、目を光らせた。

「ご覧下さい」

孔明は、手の中から一筋の光を発して、それで立体図を指し示しながら説明した。

「今や、S星はG星との内合状態から離れようとしているので、絶好のチャンスといえましょう。将軍は、ひそかにS星に入られて選り抜きの精鋭を三百人でも五百人でも呼び寄せられるべきです。あと十日以内なら、単座の反重力艇でもG星からS星へ移動できますから、一刻も早く手配する必要があります。

S星は、三惑星の中では一種の過疎地のため、三百機程度の臨時基地の設営をする場所には不自由しません。

劉備将軍が、歴戦のプロ戦士が操縦する三百機の武装反重力艇とともに名乗りを上げられるならば、多くの者が将軍の指揮下に入りましょう。もちろん、反旗をひるがえす者もありましょうが、その程度の抵抗なら簡単に排除できるはずです」

「しかし、曹操がそれを黙って見過ごすでしょうか」

「もちろん、将軍が共和制を推進されるのを阻止しようとするでしょう。しかし、S星とG星の距離は、これから急速に離れます。G星時間であと二ヵ月もたてば、軌道航行の輸送船で兵士を送るのが半年仕事になり、航続距離の短い戦闘艇を大量に送り込むことはできなくなります。そして、その状態は少なくともあと一年半は続きます。それだけあればS星にしっかりした共和体制を樹立できるのではないでしょうか。

S星人は、何よりも束縛を嫌いますから、曹操の王制に対しては強硬に反撥しておりますが、それだけにゆるやかで自由な共和制を選ぼうとする気持は強いようです。将軍の人望とご経験をもってするなら、一年半で充分ではありますまいか。

いったん、S星の中を固めてしまえば、その時はその時、曹操と戦う手段はいくらでもあります」

「なるほど」

劉備は、大きくうなずいた。S星を独立させる……天地の利、時の流れ、人の和を利用するということの意味がわかって、目から鱗が落ちた思いだった。三千の軍でどうやって百万の大軍に対抗するかということばかり考えて絶望的になっていたのが、まるでうそのように、目の前が大きく開けたような気がした。

かつて定州安喜村の村長を務めていたことのある劉備には、S星人の気質はよくわかっていたし、片腕ともたのむ関羽はS星人だった。それに、孔明の話の内容は常識的なことばかりだったので、この作戦に無理な点がないことも容易に理解できた。

それにしても、スペースラブの中に閉じこもっている青年が、世界情勢の裏表に通じているばかりか、こういう戦略をあっという間に考え出す能力は驚異だった。劉備は、目を輝かせていった。

「先生。ぜひ軍師、参謀長としてわれわれをお導き下さい。この作戦、先生のご指導があれば必ず成功致しますぞ」

「はて」

孔明は、空中の立体像と手の中の光を消して腕を組んだ。関羽と張飛のいかつい顔が目に浮かんだ。

「スペースラブでののんびりした暮らしになじんでしまった私に、年上の軍人たちを指揮することなどできましょうか」

とっさに、関羽と張飛のことだと思った劉備は、面に誠意を漲らせていった。

「この劉備、命に替えても、弟たちが先生のご命令に従うように致させます」

「その点さえお約束下さるならば、将軍のお供をさせて頂きましょう」

「有難うございます」

劉備は、テーブルの上に両手をついた。切れ長の目から大粒の涙がこぼれ落ちた。

孔明の戦い

「長官。このような暗号電文が入りました。発信は、G星の宋忠通信員、形式丙二五・三三四七であります」

通信の当直士官が、小型のディスクを持って入って来た。

「どれ、見せろ」

関羽は、受け取って解読機のスリットにさし込んだ。すぐに、電文がディスプレーに流れ出た。

――七月十八日十時、G星軍がS星討伐に出発することに決定。戦闘艇一万、戦闘艇母艦十隻、戦艦二隻、巡空艦二十隻、地上兵力七万は輸送艦十五隻に分乗――

「わかった。下がってよろしい」

関羽は、プリントアウトを取りながらいった。曹操がいずれ攻撃をしかけて来ることは予期していたが、これほどの大軍とは誰も予想していなかった。通信士官が出て行くと、関羽は唇を噛みしめたが、すぐに直通電話を取って張飛を呼び出し、すぐ来るように伝えた。非番だった張飛は、間もなく酒の臭いをぷんぷんさせながら現れた。

「どうした、兄貴」

「これを見ろ」

暗号を解読したプリントアウトを押しつけられて、張飛の表情が固くなった。

「こっちは洗いざらい繰り出しても、旧式の戦艦四隻、巡空艦二隻、それに戦闘艇が千、地上軍が二千だ。まあ、勝ち目はゼロだな。でも、兄貴。考えてみりゃ、良い死に時かもしれねえ。劉備の兄貴は、S星の大統領になってからというもの、一にも孔明先生、二にも孔明先生じゃねえか。

確かにあいつは優秀だ。めちゃくちゃに優秀だ。S星の共和体制とやらは、とんとん拍子にうまく行って、選挙をすれば兄貴は大統領、諸葛孔明先生は大統領の指名を受けて首相兼任の参謀長だ。治安は良くなる、景気も上々。まさに、大宰相孔明閣下だよ。

だけどさ、こんなのはどうせ束の間の夢さ。G星には、民主主義なんて大嫌いな曹操がいるんだ。劉備兄貴と孔明のおままごとみたいな共和国なんて、長続きするわけはない。おれは、こんなぬるま湯につかったような世の中で、コソ泥をぶん殴ったりしているよりは、宇宙戦で華々しく死んだ方がましだ」

「つまらん愚痴をいってる場合じゃない。すぐにこれを兄者の所へ届けなくてはならん。一緒に行こう」

「わかったよ」

二人は、連れ立って軍の司令部を出ると、大統領官邸へ向かった。S星の首府成都では、

もう日は暮れていたが、軍の最高指揮官である関羽と張飛は、もちろん大統領府も官邸もフリーパスである。

「こんな時間に、いったいどうしたというのだ」

劉備は、私室でくつろいでいたが、すぐに出て来た。

「兄者。こんな電文がG星の通信員から入ったのだ」

関羽の差し出した電文を受け取った劉備の顔色が変わった。

「これは大変だ。すぐに、孔明先生を呼ぼう」

「兄貴。それはないだろう」

と、張飛がとんがった声でいった。

「これは、戦争の話なんだ。そりゃ孔明は切れ者さ。だけど、あの若造に戦争のことがわかるわけがない。ここは、おれたちに任せて貰おうじゃないか」

「といって、お前は、この十万の大軍に対抗して勝つ自信はあるのか。どんな作戦があるというのだ」

「死ぬ覚悟をしているのに、作戦もへったくれもあるもんか」

「お前一人死んで、ことが済むわけじゃない。私としては、S星共和国の将兵を一人でも無駄に死なせたくないのだ。

関羽。あんたには、勝つ自信があるのだろうな」

「残念ながら、勝ち目はない。わしは張飛と一緒に突っ込んで死ぬつもりだ。兄者が、死に

たくないのなら、孔明と一緒に降伏してくれ」
「三人とも、何をいっているのだ。曹操のG星軍が、ただ一度攻めて来ただけでわが共和国を滅ぼされてたまるものか。
とにかく、孔明先生をお呼びしよう」
劉備は、弟たちの不平顔を尻目に、すぐ孔明の私邸に連絡した。すると、孔明はまるで待ちかまえていたように、五分もたたないうちにやって来て、にこやかに挨拶する。
「大統領閣下。いかがなされました。おや、これは、関羽どのも張飛どのもお揃いでいらっしゃいますか」
「先生。G星の通信員から、このような暗号電報が参りました」
受け取って目を通す孔明の顔を、三人はじっと見詰めた。だが、予想に反して、孔明は顔色も変えずに電文を劉備に返しながらいった。
「そろそろ来る頃だと思っておりました。もう少し大軍かと思っておりましたが、どうやら、われわれは曹操になめられているようですな。
ま、少ないにこしたことはないから、文句をいうこともありませんが」
「な、なんといわれる……」
劉備は、驚いて孔明の顔を見直したが、張飛はとても黙っていられない。
「やい、やい。お前さんは、戦争のことをいくらかでも知っていなさるのかい。
これは、子供が一人で十人の大人とけんかするような戦争なんだぜ。どう考えたって、勝ち目はねえだろう」
「ほほう」
孔明は、ゆったりと椅子に腰をおろすと、愉快そうに笑いながらいった。
「すると、張飛どのは、戦わずして負けるおつもりなのですか」
「負けるつもり……というわけじゃないが、どう考えたって勝てるわけがないといってるんだ。それとも、お前さんの書生戦法なら勝ち目があるとでもいうのかい」
「子供が一人で運動場のまん中にいる所を十人の大人に不意に襲われれば、確かに勝ち目はありませんな。
しかし、われわれは、敵軍の出発日時から編成まで知っております。よその土地へふらふらやって来て勝手がわからず戸惑っている大人相手なら、たとえ子供でも有利な地点で待ち伏せて上手に攻撃すれば、負けるとは限りません。
まして、われわれは子供ではないし、丸腰でもない。関羽どののような名将も、張飛どののような猛将もおられるではありませんか」
「すると、首相は勝てるとおっしゃるのですか」
関羽が、鋭い目で孔明を見詰めながら尋ねた。
「しからば、どのような作戦か、お聞かせ願いたい」
「それは、ここでいうわけには参りません」
「何ゆえに」

「壁に耳ありと申しましょう。われわれが有利なのは、一つに、敵がごまかしようもない大軍で半月近い遠征をして来るという点です。もし、こちらの行動をあらかじめ知られてしまえば、勝てる戦(いくさ)も勝てなくなります。いよいよ開戦の時までじっと待っていて、あとは、私の命令通りに戦って下されば、勝率九十九パーセントを保証致しましょう」

自信たっぷりな孔明の口ぶりに、張飛が目をむいた。

「するとてめえは、おれたちが作戦の秘密を洩らすとでもいうのか」

「そんなことは一言も申しておりません。ただ、戦闘に入るまえにあれこれ考えたり、部隊を移動させたりされると困るのです。私の命令が出るまでは、お二人は何も知らないように平然としていてほしいのです」

「しかし、素人(しろうと)のお前さんにまかせて、万一ということがあれば……」

と、関羽がいいかけると、孔明は、

「いずれ、勝ち目はないと考えておられたのなら、同じことではありませんか」

理詰めにいいまかされた関羽は、さすがに、せめて綺麗に負けたいのだといい返すわけにも行かずに、口をつぐむほかなかった。

「大統領閣下」

二人の不平そうな顔を見て、孔明は、劉備にいった。

「私は、軍人ではありませんので、自分で武器を取って戦うことはできません。戦闘は、あ

くまでこのお二人におまかせするほかないのです。そして、勝つためには、お二人が私の命令に絶対に服従して下さる必要があります。

ここで、ぜひ、そのことをお二人に誓って頂きたいのです」

劉備は、うなずいていった。

「関羽、張飛。二人とも、この戦争では、孔明先生の命令に絶対服従することを誓ってくれ」

「わかった。兄者がそこまでいうのなら、誓おう」

「しかたがない。おれも誓う。どうせ死ぬのなら同じことだ」

しぶしぶながら二人が誓いを立てるのを見て、孔明は、深く頭を下げた。

「ご信頼頂いて有難うございます。この上は、全軍に充分な補給を行い、休息を取らせておいて下さい。疲れて到着する遠征軍と、気力体力とも充分な迎撃軍では、それだけで兵力が五倍になったほどの差があるものです」

こうして、三人は劉備の前を退いたが、孔明は、それっきり戦争のことなど忘れたように平然と政務を執(と)っている。

G星軍が攻めて来るという噂を聞いた国民は、不安に駆られているのだが、大統領は、トリビジョン放送を通じて、G星軍が大演習を行っているが、宣戦布告を受けたわけでもないし、S星には影響がないから安心するようにと繰り返して呼びかけるし、首相も普段と変わった様子がない。関羽と張飛もやけくそ半分、わざと平気な顔で振る舞っているし、さっぱ

り軍隊が出動する気配もない。

もちろん、報道制限などせずにありのままの情報をいつもの通り放送しているので、デマが乱れ飛ぶということもなく、S星は表面上平静そのものだった。

一方、遠征軍を率いるのは、曹操麾下でも屈指の猛将、夏提督だった。わざわざスパイなど使わなくても、S星の軍は民兵まで人数に入れてもたかだか五千人ということは常識のようなものだから、十万の大軍でただ一もみにもみ潰そうと、かさにかかって押し寄せて来た。

当然、S星ではさぞ大恐慌だろうと思って勝ち誇った笑いを浮かべながら、成都に張り込ませてあるスパイからの報告を見ると、驚いたことに、G星十万の大軍はただの演習だと、大統領から子供まで信じているというのである。

確かに、曹操は、S星を独立国と見なしていないのだから、宣戦布告はしていないが、だからといってこれが演習であり得ないことぐらい、常識のある大人なら誰にでもわかることだ。

夏提督がもう少し考え深い軍人なら、敵が平静すぎること自体を疑ってしかるべきなのだが、民主主義では、何ごとを決定するにも時間がかかるはずだという偏見がある。どうせS星のやつらは、G星の軍団がはたして演習なのか攻撃軍なのかを決めるのも、多数決でぐずついているのだろう、ぐらいに考えて、ジェネレーターを止めたまま慣性飛行を続けていた。

孔明にしてみれば、スクラップ同然の電子部品やスペースラブを使ってさえ、三惑星切っての情報通だったのだから、S星の首相となった今では、普通の技術者には意味さえわからないようなネットワークを作り出し、集めた情報を巨大な情報処理装置で一旦整理したものを数百も同時に流して、例の方法で見たり聞いたりしていた。何しろ、首相としての政務を片づけながら、濃縮した全世界からの情報を底なしバケツのように吸い取っていくという特殊技能があるのだから、G星遠征軍の動きぐらいは手に取るようにわかっている。

もとより、孔明には、G星の大軍団と地上戦をやるつもりなどまったくなかった。複雑な地形のS星での地上戦は、いずれ泥沼化するに決まっているし、民間人にも大勢の死傷者が出ることは目に見えている。宇宙から飛来する大軍団は、力学の法則通りに攻撃ができる宇宙空間で叩かなくてはならないのだ。

S星の独立を宣言する前から、孔明は、G星軍の攻撃を予想して、迎撃計画を立てていた。曹操が圧倒的な大軍を派遣することは明らかだったし、その方が好都合だった。

いかにG星が豊かでも、大軍団が惑星間飛行をする間エンジンを動かし加速し続けるわけにはいかない。巨大なエネルギー補給艦が必要になるし、その護衛のためにまたかなりの兵力が必要になる。結局、計算した軌道に乗るまでエンジンを動かし、あとは慣性で飛行するほかないのだ。

つまり、出発の日時さえわかれば、敵が飛来するコースも簡単に計算できるから、三惑星間の空間の状態を克明に知っている孔明にとって、迎撃作戦はそれほど難しくはなかった。

問題は、戦闘そのものよりも、こちらが決死の形相物凄く迎撃態勢を敷いて待ち構えていると攻撃軍に誤解されることだった。孔明の戦術は、文字通り天地の利、時の流れ、人の和を利用した自然流だから、力攻めに攻めて来る敵と、真っ向から撃ち合うようなことはしない。

G星軍団が、慣性飛行だけならあと十五日で着くという日になって、孔明は、劉備に進言して作戦会議を開くことにした。参加するのは、劉大統領と孔明。軍人では、関羽、張飛のほかに、地元S星の名将である趙雲（ちょううん）の三人。合計五人だけの極秘の会議である。

その通知が来た時、張飛はたまたま関羽と一緒にいたが、せせら笑いながらいった。

「敵の大軍がつい鼻の先まで来た今頃になって、作戦計画が笑わせるじゃねえか。兄貴も兄貴だ。シロウトのいうことにあんまりのめり込みなさんなといってやったら、何て答えたと思う。私が魚なら、孔明は水のようなものだ、とさ。兄貴にカマっけはないと思っていたが、最近少し心配になって来たよ」

「張飛よ。あまりつまらんことを口にするな」

関羽は、さすがにきびしくたしなめたが、敵が目の前に来てからの素人くさい作戦会議が面白かろうはずはなく、

「孔明が水だというのなら、その〈水〉のやり口を拝見しに行こうじゃないか」

と、不機嫌な顔でいい捨てた。

定刻になると、大統領府の会議室には、不機嫌を絵に描いたような顔の関羽と張飛が入って来た。続いて、劉大統領にはぞっこん惚れ込んでいるものの、諸葛孔明という青年については何とも評価を下しかねている趙雲が入って来て、会議用の円卓の前に並んだ。

孔明は、将軍たちが自分の能力に不信の念を抱いていることなど百も承知だから、大統領と将軍たちの両方に対して直角の位置に立ち、わざと悠々とした態度で迎えた。

「皆さん。着席して下さい」

劉備は、大統領になっても少しも変わらぬ謙虚な態度でいった。全員が着席すると、孔明は、

「それでは、作戦会議を始めます。早速、本題に入ります」

と、いってから、司会者の前にあるパネルに手をやった。照明がやや暗くなり、円卓の上の空間に立体図形が浮かび上がった。孔明は、光の筋をカーソルのように動かしながら説明した。

「これがS星で、この一帯に緑の点で示してあるのが、小惑星群です。G星からの攻撃艦隊は、現在まで赤い線で示した軌道をそれることなく進んでおります。このまま進めば、恐らくこの延長上のコースを通って小惑星帯を通過するでありましょう。

そこで、張飛どの。あなたの部隊は、S星時間で明後日の二〇:〇〇までに、このあたり一帯に自動宙雷を二千個セットしてから、小惑星に着地して待機していて下さい。正確な位置や方向は、作業艦と戦闘艇の発進直前に伝えますが、要するに、敵艦隊が通過する時に宙雷で無人の集中雷撃ができるようにするのです。その頃になれば、G星艦隊が予定位置を通

過する軌道は、プラスマイナス十メートル以内の精度で予測できますから、二千個の自動宙雷で集中攻撃すれば、少なくとも大型艦艇の三分の二は大破します。

　関羽どのは、敵侵入軌道沿いの小惑星帯外縁に近いこの付近にある小惑星丁卯(ていぼう)三二の背面に、戦闘艇の精鋭三百機を五日後の〇四：〇〇までに集結させて待機して下さい。

　趙雲どのの出番は最後で、敵艦隊が小惑星帯の外縁に到着する前日の〇一：一五頃には、この位置に戦闘艇を二百機、散開させて待機して下さい。

　出動は、すべて散発的を原則とします。基地の地元住民にさえ普段の訓練程度としか思われないために、特に戦闘艇の出発はすべて母艦に搭載して行うこと。そして、地上二万キロメートルあたりで母艦を離れ、小惑星群にまぎれるように個別行動をとります。敵の方向から見て小惑星にまぎれやすい角度になる各小隊の軌道は、追ってデータを送ります。

　あとは、必要に応じて指令しますから、忠実に遂行して下さい」

「質問があります」

　と、劉備がいった。孔明は、丁寧に頭を下げた。

「小惑星群といっても、それほど密度の高いものではないはずですが、そのかげに隠れて行動できるものでしょうか」

「確かに、個々の小惑星の間隔は、近いものでも数十キロメートルは離れていますが、敵艦隊の方向から見ればこのように密集して見えます」

　孔明は、立体図形を回転させて部分を拡大した。緑の点が雲のように固まって見えた。

「したがって、この距離ではどんなに解像力の高いレーダーや望遠鏡を使っても、小惑星と小型の宇宙艦艇を識別できません」

「わしも質問していいかね」

　関羽が、右手を低く上げていった。

「どうぞ」

「そこに待機して、わしにいったい何をしろというのか教えてほしい」

「私の命令を待っていて下さい」

「敵艦隊は、本当にそこを通るのかね」

　孔明は、自信たっぷりにうなずいた。

「われわれは、まるでウブな娘のように、宣戦布告なしの戦争などあり得ないから、G星の艦隊は演習しているだけだ、といい続けて来ました。そして、実際に戦争の準備などせずにのんびりやって来ました。夏提督は、S星の上空へ来てから宣戦布告して奇襲するつもりでいるでしょう。これからのわが軍の動きさえ探知されなければ、敵がコースを変えるはずはありません。

　それだけに、行動の隠密性にはくれぐれも気をつけて下さい」

「おれも質問だ」

　張飛が、虎ひげを震わせていった。

「おれは、自動宙雷をセットするだけで、あとは引っ込んでいろというのか」

「やはり、私が命令するまでは小惑星上で敵に探知されないように待機していて下さい」

「私の部隊は、攻撃させて貰えるのですか」

趙雲が、控え目に尋ねた。孔明は、首を横に振った。

「命令のあり次第攻撃して、じりじりと後退しなくてはなりません。肝心なのは、こんなつまらぬ戦闘で、戦死者はおろか戦傷者も出さないことです。

くわしくは、その時の状況を見ながら私が指揮します」

「それじゃあ聞くが、参謀長どのは、どこへ出陣なさるのかね」

張飛が、恐ろしい顔で尋ねた。孔明は愉快そうに笑ったが、急に表情を引き締めると、三人の将軍の顔を一人ずつ見詰めながらいった。

「私は、大統領閣下とともに、この成都で皆さんが凱旋なさるのを待って勝利の祝杯を上げる準備をするつもりです。

はっきり申し上げておきますが、これしきの小ぜり合いを将軍がたにお任せできないようでは、S星に将来はありませんぞ。張飛どの、肝に銘じておいて頂きたいのですが、これからわが共和国の歩む苦難の道を思うなら、こんな戦いなどものの数にも入らぬでしょう。この程度の戦闘で生きるの死ぬのといわないで下さい」

これには三人とも一言もなく、口をへの字に結んだままだった。

スパイの報告でも現地の放送でも、S星には敵を迎撃しようとする動きが何一つないところから判断して、攻撃軍側は、うまく行けば奇襲による無血占領も夢ではないと思い始めていた。

夏提督は、劉備という男は、人間を信じることを政治の基本としているセンチメンタルな男だという噂を聞いていた。もし、それが本当なら、正しいことをしている限りよそから攻撃されるはずはないとでも思っているのかもしれない。気の毒といえば気の毒だが、ばからしくて同情する気にもなれなかった。

指揮官の精神状態は、部下にも伝染する。艦隊内部は、いつの間にか無血占領するのが既定の事実のような雰囲気になっていた。

それでも、小惑星帯が近づくにつれて、旗艦のブリッジの緊張は次第に高まった。といっても、S星側の攻撃を恐れたわけではなく、この付近には浮遊している宇宙塵が多いので、航行上の危険を避けるために通常の警戒態勢を取ったのにすぎない。

艦隊が小惑星帯の半ばにさしかかったとき、突然レーダー・スクリーンに不規則な配置の数十個の光点が映った。

「艦隊の進行方向に、六十三個の不明物体が散開しているのを発見。現在、分析中」

警戒中の監視兵が報告した。夏提督は、自らブリッジに立った。

「分析結果を報告。不明物体は、中型戦闘艇。高速で接近中」

「なんだと」

提督は、驚いていった。

「おい。宇宙塵の見間違いではないのか」
「はい。反重力艇独特の重力波異常が検出されました」
ブリッジは、騒然となり、提督は、作戦士官に命令した。
「各母艦より、戦闘艇を百機ずつ出動させて迎撃態勢を取れ」
のんびり構えていたパイロットたちは、慌てて自分の艇に飛び乗って出撃したが、あまり突然のことなので、まさに三々五々という出撃状態で、六十三機の敵機が接近した時に反撃の態勢に入れたのは僅か二十機ほど。ところが、S星側の戦闘艇は、攻撃を受けるとまったく反撃せずに一目散に逃げ出した。

　これを見たG星の戦闘艇が、気負い立って追撃しようとした時だった。進行方向に対して直角の位置にある小惑星群の方から、いきなり強力な自動宙雷が突進して来て、戦艦や戦闘艇母艦、巡空艦を狙い撃ちするように次から次へと命中し始めた。各艦ともほとんど無防備の状態だから、なすすべもないままに損害が増大するばかりである。母艦を離れようとしていた戦闘艇の多くも、まきぞえを喰って大破したから、静かだった宙域は、一転して修羅場と化した。

「各艦。ただちに熱核ミサイルで反撃せよ」

　重力制御系統に損害を受けたらしく、大きく揺れる旗艦のブリッジで、夏提督は制御盤にしっかりつかまりながら叫んだ。この時になってはじめて、S星に抗戦の意志がなさそうに見えたのは、敵の戦略だったらしいと気づいたものの、今となってはあとの祭。無傷か無傷

に近いのは、戦闘艇母艦十隻のうち一隻、巡空艦二十隻のうち五隻という無残な結果になった。

　それでも、さすがはプロの軍人だから、ミサイル攻撃の準備をととのえて敵機の探知を始めたが、いくら探しても小型の戦闘艇さえ見つからない。ようやく母艦から発進できた二百機ほどの戦闘艇も、護衛の態勢にはついたものの、肝心の敵影がないのだから戦争にならない。うろたえているところへ、第二次の自動宙雷による攻撃が始まった。宇宙空間にセットしてあったのが、自動的に発進して飛んで来るのだから、何のことはない、空中で宙雷が湧き出すようなもので、防御法としては宙雷自体を攻撃して破壊するほかないのである。

　二度目だけあって、宙雷に対する攻撃はかなり正確に行われたが、とにかく数が多い。一度に百発ぐらいが一斉に襲いかかり、自動追尾装置が目標をとらえて迎撃ミサイルを発射した時には、次の百発が目の前に迫っているというありさまなのだ。一発の破壊力自体は、たかが知れているものの、一隻の宇宙艦当たりにすれば、いつでも二発ほど命中していて、その前の二発ほどが爆発し終わったところという状態だから、小うるさいどころではない。

　艦の装甲が穴だらけというほどにはならなくても、宇宙艦の感覚器ともいうべきレーダーのアンテナや、トリビジョンの撮像機などが破損するので、手探りで航行する羽目になる。もちろん、当たり所が悪ければ装甲も破れるし、ミサイル発射口も破壊される。戦闘艇母艦の発進口は十隻のうち七隻まで使えなくなってしまった。

　数次にわたる宙雷攻撃が終わった時に、艦隊は動くのがやっとというていたらくとなり、

さすがの猛将夏提督もとっさには対策の立てようがない。

「損害の程度を報告しろ」

と、怒鳴るのがやっとだったが、同時に次の攻撃が始まった。張飛の率いる戦闘艇が、ひそんでいた小惑星のかげから現れて襲って来たのだが、艦隊側ではもうその探知も充分にはできない状態になっていた。

護衛艇だけがこれに気づいて反撃に移ったが、攻撃する側にすれば大きい戦闘艇母艦や巡空艦だけ叩けばよいのだから、ミサイルを発射するとあまり接近せずに逃げてしまう。宙雷と違って新型ミサイルの破壊力は大きいから、さすがの大型艦も次々と大破して航行不能になったり爆発を起こしたりして、地獄の様相を呈し始めた。

提督は、もはやこれまでと、撤退命令を出した。動ける僅かな艦がフルパワーで方向転換し、ようやく反対方向に転じて加速し始めた時、行く手にまた戦闘艇の集団が現れた。護衛の戦闘艇が立ち向かったが、今度の攻撃軍は逃げるどころか猛然と向かって来た。赤塗りの艇が先頭に立って、まるでトンボでも叩き落とすようにG星軍の戦闘艇を撃破する。その一方では、身動きのできない大型艦に対するミサイル攻撃も執拗に繰り返されて、次々とスクラップと化して行った。

G星の宇宙艦隊が潰滅(かいめつ)したのは、攻撃が始まってから僅か三時間後だった。これに対して、S星防衛軍の損害は、戦闘艇二機が修理できる程度に破損しただけという、圧倒的な大勝利だった。

編隊を組んだ戦闘艇が成都の軍用宇宙港に次から次へと着陸する様子を、劉備は目に涙を浮かべて見守っていた。僅かこれだけの迎撃部隊が大艦隊を消してしまったとは、到底信じられないほどだった。

「これで、共和国の独立が守れた。それにしても、孔明先生。あなたというお方は、何という……」

劉備は、斜めうしろに立っている諸葛孔明を振り向きながら言葉を詰まらせた。だが、孔明は、小さく溜息をついていった。

「大統領閣下。この程度の勝利は、ほんの小手しらべでございますぞ。手放しで喜んではいられません。ただ、こんなことで関、張二将軍のご信頼を頂ければ、私としては望外の喜びです」

と、いっているところへ、赤く塗った戦闘艇のコックピットからとび出した関羽が駆けよった。続いて、張飛も全力疾走でやって来た。

「お二人とも、お見事でしたぞ」

感動のあまり口のきけない劉備に代わって、孔明が声をかけた。二人は、劉備には黙礼しただけで孔明の前に来ると、そのまま地面に座り込んで平伏した。

「孔明先生。無礼の数々お許しくだされ。関羽、今後は、いかようなご命令でも喜んで従います」

と、関羽は、頭を上げて孔明の顔を仰ぎ見ながらいった。張飛は、地面に顔を伏せたまま大声で、
「おれもだ。先生。おれには、先生の凄（すご）さがまるでわかっちゃいなかった。あんな失礼なことばかりいって、本当に許してやって下さい」
「お二人とも、何をおっしゃる。さ、お立ち下さい。戦争に勝ったのはお二人なのですぞ。さあさあ」
孔明の細腕では、二人の大男を引き起こすことはできなかった。

宇宙基地　K1

曹操（そうそう）は、頭をかかえていた。これまで、ほとんど挫折することなく権力への階段を登って来たのに、はじめて大きくつまずいたという感じだった。大統領になって間もなく、G星（せい）では袁術（えんじゅつ）が反乱を起こして、大軍相手の戦いで苦戦したものの、最後には勝利を収めた。ほかにも、小さな反乱は何度も起きたが、いずれも圧勝している。だが、今度はひどい負けようだった。それも、失敗の原因がどうにもはっきりしないから、一層いらいらがつのるのだ。

三惑星のどの軍団と戦っても負けるはずのない巨大な宇宙兵団が、ほとんど戦闘らしい戦闘もせずに潰滅（かいめつ）するなどということは、どう説明されても信じられなかった。しかも、どのような交戦によってそこまで徹底的に叩き潰されたのかも、正確にはわかっていないというのだから始末が悪い。

はっきりした報告を受けているのは、艦隊の進行方向から接近して来た一群の戦闘艇に攻撃をしかけたところ、いきなり側面からの宙雷攻撃を受けたというあたりまでで、その先は探知や長距離通信の機能の損傷が大きかったらしく、まとまった報告をするひまもないほどの激戦の末にほとんど全滅したらしいというのが、参謀たちの分析結果だった。

それだけなら、S星の迎撃軍の奇襲作戦だったと納得できないこともないのだが、S星にいるスパイからの報告によると、S星はまったく平静で、戦勝気分どころか戦争をしたらしい形跡もなく、戦闘艇による飛行訓練らしい発着が普段よりやや多いほかは、特に変わったこともないというのだから、いよいよわけがわからなかった。

もともと、劉備がG星の遠征軍など存在しないという立場を貫いていたことは、その綺麗ごとに便乗して、S星を攻略する計画を立てただけに、曹操もよく知っていた。民主主義のたてまえ上、S星の情報公開はかなり広く行われていたし、国民もそれを信じてごく普通の生活を続けているというのだが、S星軍が出撃したかどうかという点がなぜかもう一つはっきりしない。ということは、かりに、出撃したとしても、国民の注意も引かないほどの僅かな機数だったことになる。

もし、そうだとすると、なぜ問題にもならないほど少数の迎撃軍に、大艦隊が無残な敗北を喫したのか、考えれば考えるほど疑問はふくらんだ。

だが、負けた原因はともかくとして、最近では、自分こそ三惑星を統一するために生まれて来たと信じるようになった曹操は、このまま引き下がって劉備に勝手なことをさせておくつもりはなかった。

曹操は、これまでに数え切れないほどの人材を発見して引き立てて来た。末期の三惑星連合共和国を毒していた学歴主義や家柄主義を打ち破ろうとして、下積みの有能な人々を大勢登用した結果として、G星の今日の繁栄があるといってよいだろう。

しかし、その中でも劉備ほど低い地位にいた者を高い地位につけた例はほかにない。だが、同時に、劉備ほど曹操を失望させた男もなかった。ほかの者は、引き立てられたことに感謝し、曹操の目的のためには手足のようになって働いてくれるのに、劉備だけは、初代大統領の子孫のせいかどうか知らないが、共和制にばかに肩入れをして曹操の路線とは反対の方向に突っ走った。

——あの時に、殺しておくべきだった——

曹操は、何度後悔したかわからない。たとえ、関羽、張飛という豪勇の巨漢がそばを離れずにいても、遠距離から狙撃すればいくらでも暗殺できる。だが、あの時は、一人の庶民に戻してしまえばもう何もできなくなるだろうとタカをくくって、僅かながら退職金までやって徐州知事を解任したのだった。

それが突然S星に現れて、いったいどういう手段を使ったのか、G星との距離が離れていた二年足らずの間に、S星を共和国として独立させてしまったのである。

S星は、岩山が多いが、金属資源が豊富で、農業の盛んなW星とともに、G星にとっては重要な補完関係にある星なのだ。G星は、工業が主力で、農業もかなり盛んだったが、鉱物資源は貧弱だったから、S星からの供給なしには工業も縮小せざるを得なくなる恐れがあるほどだった。

それでも、曹操は、S星共和国が自分の計画している王国の一部としてG星の派遣する総督を受け入れるつもりなら、劉備にS星の大統領としての地位を認めても良いとまで思って

いた。劉備がなみなみならぬ人物であることは、誰よりもよく知っているつもりだったし、たとえ共和国の形をとっていても、形式的には自分の王国の支配下に入ってくれさえすれば、統治するための経費はかからず、税収は上がるし充分な鉱物資源も得られるため、かえって好都合でもあったからだ。

だが、劉備は、独立をそこなう一切の申し出を拒絶した。

それに対して、懲罰のために送り出した大艦隊が消えてしまったのだから、曹操が、眠れぬ夜を過ごしても当然だった。S星の資源なしには、本当に強大な王国を打ち立てることはできなかったからである。

悶々としているところへ、折り入った話があると申し入れて来た者があった。大統領に就任してから軍事参謀として採用した司馬仲達だった。十歳近く年上で、見るからに老獪そうな仲達を曹操はいくらか煙たく思っていたし、その気持が通じているのか、仲達も積極的には曹操に近づこうとはしなかった。

そういう男がわざわざ面会を申し入れて来た以上、何か重大な話があるに違いないと思った曹操は、ほかの予定をあと廻しにして司馬仲達を引見した。

「司馬参謀。どういうお話かな」

二人だけになると、曹操は挨拶を抜きにして早速切り出した。仲達も、儀礼は省略してすぐに主題に入った。

「はい。閣下。お話し致したいことは二つございます。

一つは、かのS星の劉備のもとには、諸葛孔明という男が参謀長としているということでございます」

「諸葛孔明とは、きいたことのない名だが……」

「まだ、三十になるかならぬかの若造でございますが、これがとんでもない男だということが、わかりました。

実は、この孔明を教えたのが私めの同族の司馬水鏡という学者でして、身内をほめるのはいささか気がひけますが、医師で心理学者でありながら万学に通じた大変な男でございます。

この水鏡に先日会いましたところ、これまで育てた弟子の中でもずば抜けて優秀な男が、劉備のところで首相兼参謀長のような地位についていると申しておりました。

どうやら、今回敗北を喫しましたのも、その諸葛孔明のせいではないかと愚考致しまする」

「ふうむ。そんな男がいたのか」

曹操は、腕を組んだ。関羽という男もなかなかの知恵者だったが、あの男は実戦派で、大規模な戦略の練れるタイプではないと見ていたので、今回の敗北が一層不可解だった。だが、劉備のもとにそういうとんでもない戦略家がいるのなら、謎が解ける。曹操は、少し気分が晴れるような思いがして、いくらか機嫌良く話の続きを催促した。

「それで、もう一つの話とは」

「Ｓ星を攻撃する方法についてでございます」
「ほう。あれほどの大軍が手もなく叩き潰されたというのに、何かうまい作戦があるというのか」
「はい。孔明のような人物がおりますれば、正攻法ではあっさりと手の内を読まれてしまいましょう。正々堂々と大軍を派遣すれば、小廻りがききませぬゆえに、こちらの動きは設計図を見るように前もってわかるはずでございます。
　攻撃準備がととのわぬうちに奇襲攻撃を受ければ、まるで大きな草食獣が狼に襲われたも同然で、通信や探知の装備と戦闘艇母艦の戦闘艇の発着口を破壊されれば、あとは強力なミサイルの餌食になるほかございません」
「しかし、小規模な艦隊で遠征したのでは戦闘を継続できないという意見が多かったので、あのような大艦隊を派遣したのではないか」
「それゆえに正攻法では駄目だと申し上げたのでございます。諸葛孔明のような参謀がいる限り、普通の方法ではたとえ勝てたとしても、被害も甚大でありましょう」
「では、どうすれば良いといわれるのか」
「ご覧下さい。閣下」
　司馬仲達は、持って来た大きな星図を机の上に拡げた。ホログラフィックな立体画像が浮かび上がった。
「三惑星の間には、数多くの小惑星がございます。最大のものでも直径が五十から六十キロ

メートル程度で、到底住むことはできませんし、採掘して引き合う鉱物がないことも長年の探査の結果わかって、今ではすべて放棄されております。
　誰も注目しないところを利用致すのでございます」
　仲達は、曹操の顔色をうかがうようにいった。ずっと落ち込んでいた曹操は、久し振りに希望の持てそうな話を聞かされて、いくらか元気が出たようだった。
「面白い。それで、どのように利用するのか」
「ここに小惑星群Ｋと呼ばれている中規模の小惑星群がございます。この中で最大の小惑星Ｋ１と申しますのは、直径が十五キロメートルばかりの不規則な形をしております。天体としてはお話にもならないちっぽけなものですが、これでも人工物にくらべればとてつもなく巨大な石の塊でございます。
　今のうちにこのＫ１の上に基地を作り、次にＫ１がＳ星と大接近する今年の秋にいっせいに攻撃すればよろしい。その時には、僅か五十万キロメートルほどに接近致しますゆえに、軌道飛行をせずに急襲致すなら、成都を一気に制圧致すことができましょう。
　しかも……」
　仲達は、別の星図を拡げた。
「こちらをご覧下さい。Ｇ星、Ｓ星、Ｋ１の軌道でございます。このように、Ｋ１の軌道はかなり偏平な楕円なので、Ｓ星に接近致す前後の三ヵ月ばかりは非常に近い距離を保ちます。つまり、われわれはかなりの期間、Ｋ１をＳ星にたいする攻撃基地として使えるのでご

ざいます」

「しかし、K1のように小さな惑星上に本当に基地を作れるのか」

「重力は、G星に比べて十のマイナス七乗つまりほとんどゼロに近く、もちろん空気もないため、戦艦でも巡空艦でも戦闘母艦でも簡単に係留できます」

「人員は、どうするのか。まさか、水も空気もないK1のうえに、数万の兵員を待機させてはおけぬだろう」

「機関などの維持要員など、最低の人数を残します。戦闘要員は、必要な時に輸送艦で送ればよろしゅうございましょう。輸送艦の二隻や三隻なら、補給艦を随行させれば、軌道飛行をせずに全コースを機関フル運転で直行させることもできます。K1に到着した時は、燃料がなくなっていてもかまわんのですからな。

そればかりではございませぬ。もう一つ耳よりな話がございます」

「ほほう。どういう話かね」

曹操は、奥深い所で薄笑いを浮かべているような仲達の顔を見詰めながら尋ねた。

「あちらの十月十日は、S星の国会議員選挙の日に当たります。その前後は、恐らく国を挙げての大騒ぎでありましょう。ところが、K1とS星が大接近するのは十月十六日でございます。

選挙という手段が目的になってしまうのが民主主義の大きな弱点の一つですから、この日こそ彼らの厄日(やくび)、われらの吉日にござりましょう。攻撃を仕かけるなら、この日をおいてはございませぬ」

「なるほど」

曹操は、大きくうなずいて司馬仲達の茶渋で染めたような色の顔を見ながらいった。

「よろしい。それでは、早急に正確な作戦を立てて提出してほしい。その時に、作戦会議を開いて決定しよう」

作戦会議は三日後に開かれ、一時間の討議の末に、曹操はこの作戦を裁可した。折しもK1はG星に近づいており、大規模な輸送にはもって来いの状態だったから、直ちに戦艦三隻、巡空艦五隻、大型補給艦十隻、戦闘艇を各二千機ずつ搭載した戦闘艇母艦十隻からなる艦隊を送り込んだ。ほとんど無重力状態で空気がないため、錆びる心配はないし風も吹かないから、艦の係留はまことに簡単だった。重力場が艦を僅かに地面に押しつける方向に作用させればよいだけなので、機関要員が一人ずつ当直しているだけで充分すぎるほどだった。

こうしてK1は、大艦隊をのせた天然の基地として、数十億年もの昔から廻り続けている軌道をG星の関係者以外には誰にも知られることなく進んで行った。S星との大接近は、G星時間で一年八ヵ月後だが、一年六ヵ月後には、S星に対して作戦行動に入れる距離に達する。その空間点に直行すればG星から三ヵ月で到達できるから、あと一年三ヵ月は準備期間があるわけだ。

だが、曹操は、これだけではまだ満足できず、さらに豊富な軍事予算を投入して、最新型の宇宙空中兼用艦隊を建造することを命じた。G星政府の科学技術顧問に就任した呂布(りょふ)が、

パイロットを必要としない無人反重力戦闘艇の開発に成功したのを受けて、まったく新しい戦術のための艦隊を編成する計画を立てたのである。

人間の兵員をほとんど必要としない新艦隊なら、百万相当の大軍を惑星軌道を越えて送り込むことすら大して難しくない。人間を養うために必要な膨大な補給物資を、すべて燃料や武器弾薬に置きかえられるからだ。

まず小うるさいS星を制圧し、その勢いを駆ってW星まで攻略することさえできない相談ではなかった。

さらに、小惑星の戦略的価値に目覚めた曹操は、天体地理学の専門家に、ある程度以上の大きさの小惑星と三惑星の位置関係に関するデータをまとめて、司馬仲達のもとに提出するよう依頼した。小惑星の公転周期や軌道の形、大型惑星との軌道傾斜はあまりに個性的なので、集まったデータから戦略的な意味をくみ取ることは容易ではなかった。しかし、少なくともK1に充分な戦略的価値のあることは、はっきりわかった。

曹操は、たとえ劉備に諸葛孔明とやらいう天才青年がついていても、仲達の知恵を充分活用すれば対抗できるのではないかと心強く思った。

こうするうちにも時は流れ、K1はS星に接近し、G星の新艦隊は完成に近づいて行った。曹操は、今度こそS星を徹底的に叩く決心をしていた。S星で必要なのは地下資源なのだから、田舎じみた都市や旧式の軍事施設などがどうなろうが、あまり問題ではなかった。

G星の六月四日から五日にかけて、十五万の兵員をのせた輸送艦が四隻、それぞれ別の基

地から深夜目立たないように離陸して行った。総指揮官として、司馬仲達もその一隻の特別室にひそかに乗っていた。さらに、別の基地からは大型の補給艦が二隻、あとを追って飛び立った。

今回の作戦は、すべてまったく秘密のうちに遂行された。今度こそ、S星の運命は決まったようだった。

しかし、孔明もこの間昼寝をしていたわけではなかった。専門の学者になど依頼しなくても、主だった小惑星や小惑星群の動きぐらい頭の中におさまっているので、その戦略的価値はほぼ完全にわかっていたからだ。

「大統領閣下」

孔明は、選挙の準備で夢中になっている大統領にいった。

「どうも、悪い時に選挙にぶつかったようでございます」

「なぜでしょうか」

劉備は、不審そうにいった。

「小惑星群Kが、ちょうどそのころに大接近致します。この中で最大のK1は、最大級の小惑星で、しかもこの小惑星群は一年半ほど前にG星のそばを通過しております。

曹操のもとにも知恵者がいるでしょうから、K1をわがS星攻略の基地として使う作戦を立てている可能性は充分考えられます」

「何か、証拠でも……」

「前回でこりていますから、今回はこちらに探知されるようなへまは致しますまい。宇宙は広大ですから、そのつもりになればいくらでも隠密行動をとることができます」

「すると、先生は、G星軍がK1にたてこもっているとでもおっしゃるのか」

「可能性は、充分あります。いや、正確にいうなら、K1以上にわがS星を狙うのにふさわしい小惑星はほかにもありますが、選挙の前後に大接近することと、しばらくの間S星に対して近い距離を保つという点が心配なのです。

そろそろ高速偵察艇で到達できる距離に近づいて参りましたので、すぐにでも優秀な偵察員を出してみるつもりです。最新式の偵察艇なら、浮遊隕石（ふゆういんせき）と同じパターンの反射波を出すように改良されておりますので、探知されずに接近できましょう」

大統領の許可を受けて、孔明はすぐに偵察艇を派遣した。結果は、予想通りだった。自転していないK1の、S星に向いていない側の谷間には、前回の遠征軍以上の大軍が潜んでいることが明らかになったのである。

「大統領閣下。選挙の期日を変更できないものでございましょうか」

偵察艇の撮影して来た写真とその分析結果を劉備に見せてから、孔明はいった。だが、劉備はむしろ不審そうに、

「なぜ、防衛戦と選挙にそれほど関係があるのですか。軍人にだけ、先に不在者投票をさせておけば済むことではありませんか」

「わがS星軍に充分な防衛力があるなら、それで間に合いましょう。しかし、全面衝突すれ

ば、わが軍が全滅することは火を見るより明らかです。前回の勝利は、敵がこちらをあまりにも甘く見ていたため、たまたまその弱点を突くことができたので、何度も申し上げたように、幸運だったからにすぎません。

しかし、敵がその点を反省して本格的な作戦を立てて来た場合、防衛戦はほとんど不可能です」

「では、どうすれば良いといわれるのです」

「選挙を延期して、政府機能を成都から分散させ、重要鉱山の従業員を避難させることです。曹操がほしがっているのは、何よりもS星の鉱物資源のはずですから、首府と主要鉱山を占拠すれば、当面の目的は達せられるでしょう。

それでも、S星政府はまだ存続できますし、ベテランのいなくなった鉱山など当分は鉱山としての役には立ちますまい」

「まさか、S星を曹操に明け渡せというのではあるまいね」

劉備は、少し険しい顔になっていった。孔明は、あくまで冷静である。

「将棋でも、王より飛車を可愛がれば負けてしまいます。たとえ、一時、首府や主要鉱山を明け渡したところで、S星は広いのです。

どんな大軍でも、住民を全滅させない限り愛国心に燃えるゲリラに勝てないことは、歴史の証明するところではありませんか。わがS星軍のような少数精鋭の軍隊がゲリラとなった場合、どれほど手強（てごわ）いか想像に余りあります」

「なるほど……」

劉備は、腕を組んで考え込んだが、しばらくして顔を上げた。

「だが、選挙は民主主義の根幹ですぞ。その時の政治の都合によって期日を変更するような悪い前例を残すべきではありますまい」

「しかし、国民があり政府があっての民主主義でございましょう」

孔明は、大統領をさとすようにいった。

「選挙は、民主主義のための手段の一つにすぎません。圧倒的な敵が目の前に迫っているかもしれない時に、手段にのみこだわっていては、国を誤りかねませんぞ」

「いや。やはり、選挙は行いたい。行わねばなりません」

劉備は、これまでになくはっきりした口調でいった。

「敵の襲撃を前にして、なお整然と選挙が行われる……これこそ、わが民主体制を曹操にはっきりと見せつけるチャンスではありませんか」

「止むを得ません」

孔明は、しかたなくうなずいた。あまりにカッコが良すぎると思った。だが、それならそれで、次の手段を考えるのが参謀の仕事だ。数秒間考えて、孔明は頭の中に灯がともったように感じた。

「大統領閣下。それでは、選挙は普通に行って結構です。前回と同じようにこちらは何も知らずにいるのだと、敵に思い込ませることができるでしょう。

ただし、選挙の日までに、軍人たちにはひそかに不在者投票を終えさせ、八大鉱山には、共和国の記念日として一斉休暇をとらせます。そして、われわれ政府の首脳は、あらかじめ不在者投票をしておくなり、当日の朝一番にテレビの前で投票して見せるなりしてから臨時首府へ移ることに致しましょう」

「臨時首府とは、どこのことですか」

「表向きは漢中（かんちゅう）市ということにするのがよろしいでしょう。しかし、実際はどこでもかまいません。通信手段の発達している現在ですから、準戦時中にわざわざ攻撃されやすい都市にいる必要はないからです。心当たりの場所がありますので、細かいことは、この私が詳しく計画して実行させます」

「では、この件に関しては、先生に一任致しますぞ。すべて、事後報告をして下されば結構です」

「いつもながらのご信任、有難うございます」

先の先まで見通している孔明の考えをすべて理解することなど到底できないとあきらめている劉備は、ただうなずいて、

孔明は、重大な危機を前にした首相兼参謀長とは思えないほど元気な足取りで、大統領執務室を出て行った。

「成都標準時の正午を期して、予定通りの地点に降下せよ。抵抗するものに対しては、ため

らうことなく武力攻撃を行わなくてはならない。ただし、民間人、軍人を問わず、非武装の者あるいは無抵抗な者に対しては、一切の暴力行為を禁止する。

違反したる者は、軍法会議にかけて厳罰に処する。各系統の命令に従って行動せよ。

では、諸君。ただ今より、作戦行動に入る。

武運を祈る」

司馬仲達司令長官の訓示が終ると同時に、Ｋ１に集結していた大兵団は、整然と離陸し始めた。

最初に戦闘艇が、巣から飛び立つ蜂の大群のように、母艦を離れて舞い上がり、二重三重の護衛編隊を組んで上空を覆った。続いて、巡空艦が戦艦を囲んで浮き上がると、最後に戦闘艇母艦がゆっくりとＫ１を離れた。

宇宙空間へ出たG星の大艦隊は、戦闘艇母艦を中心にして戦艦と巡空艦が取り囲み、さらにその外側を無数の戦闘艇が護衛しているというまさに鉄壁の布陣である。これでは、宙雷など艦隊に近づく間もなく爆破されてしまうし、大型艦は大型艦、戦闘艇は戦闘艇が相手をするから、同格以上の大艦隊でなければ勝ち目はないのだ。

G星艦隊は、Ｋ１の陰から出ると全速力でS星に向かって殺到した。今回は探知されていない自信があるので、仲達は、今度こそ奇襲攻撃に成功したと思って、全艦隊を首府成都に向けて降下して行った。

戦争をして殺したり破壊したりすることは、第一の目的ではなかった。曹操が何よりも望

んでいるのは、劉備が降伏することだったから、まず圧倒的な大兵力で首府を包囲して威圧せよという命令が出ている。

十月十日正午、成都の上空は突然現れた大宇宙艦隊で覆われた。市民は、これほど多くの艦艇が空から降りて来るのを見たことがないので、大勢の人々が家の外へ出て上空を見上げた。

数日前から、G星の連合艦隊が友好訪問するというニュースが繰り返し放送されていたので、驚いたり恐れたりするどころではない。折しも選挙の当日でちょっとしたお祭り騒ぎをしている最中だから、商店街ではついでに歓迎のアーチを掲げて待ちかまえている有様だった。

もちろん、G星艦隊側もこの放送をキャッチしているのだが、せっかく苦心してここまで隠密行動をとって来たのを、今さら作戦変更するわけにも行かず、予定通りの行動を取らざるをえなかったのである。

あらゆる戦況を想定しては、机上訓練をして来た仲達だったが、まさか友好訪問として迎えられるとは予想すらしていなかった。

「孔明のやつ、何という汚い手を使うのだ」

歯ぎしりしてくやしがってみても、差し当たり名案が浮かばない。攻撃に来たとはいっても、S星の住民もついこの間まで同じ三惑星連合共和国の同胞で、親類知人はどこにでもいる。攻撃軍のメンバーからS星出身者は除外してあったものの、S星の迎撃部隊が出撃して

来たのならばともかく、旗を振って歓迎している市民に武器を向けることはできない。このまま制圧して、G星の領土にするつもりならなおのこと、ここで敵意を抱かれては今後の占領行政のマイナスにしかならないことは明らかだった。

　血のめぐりの悪い軍人ならともかく、優れた判断力があるだけに、司馬仲達は振り上げた拳固(げんこ)のやり場に困ってしまった。攻撃も退却もならず、ただ迷うばかりである。

　だが、最高司令官に迷いは禁物だ。たとえ誤った判断であっても、判断を下すのは迷っているより数等ましなのだ。そのことを誰よりも良く知っている仲達は、副官に時間かせぎの方法を命じた。

「劉大統領と会談致したいと、大統領府の儀典係に連絡せよ」

　だが、返って来た返事は、『劉大統領は、緊急公務のため首相とともに地方へ出張中。ただし、秘密の用件のため、行き先不明』というそっけないものだった。

　仲達は、全軍に命令を下した。

「旗艦および一号、二号巡空艦は、一号戦闘艇母艦と戦闘艇とともに成都周辺の予定地点に着陸せよ。他の全艦艇は、第二作戦に移行し主要鉱山と周辺都市を制圧せよ。

ただし、市民に対してはけっして高圧的な態度を取らぬように慎重に対処せよ」

　全艦隊は、ただちに行動を起こした。

　司馬仲達司令長官は、旗艦が着陸すると間もなく、儀礼的に見える武装をした百人たらずの将兵だけを連れて、成都市民が歓迎の旗を振る中を悠々と大統領府に入った。

　劉大統領の執務室に入るまで、ただ一人の警備兵も警官も妨害しなかった代わりに、残っていたのはろくに権限のない留守番の下級事務官だけで、重要な資料や通信装置などは何ひとつ残されていなかった。

　前任の夏(か)提督と違ってG星軍の一兵を傷つけることもなく、見事にS星大統領の執務室の椅子に座ったものの、仲達は、どう考えても勝ったような気がしなかった。無血占領に浮かれる部下たちが、口々に祝いの言葉を述べるのを聞いても、仲達は、唇を固く結んだままにこりともしなかった。司令長官の不機嫌さの理由がわからない部下たちが、席をはずすと、仲達は、低い声でつぶやいた。

――諸葛孔明。今に、きっとひと泡吹かせてくれるからな――

ゲリラ大襲撃

「兄貴。行くぞ。準備はどうだ」

「オーケーだ。連中、油断しているようだが、こっちは締めて行こう。それでは、タイマーをマイナス十秒にセットして、こちらに連動させろ。わしの方でスタートさせて、ゼロ時点で両中隊とも一斉発進する。いいな」

「了解」

「では、十─九─八─七─六─五─四─三─二─一─〇」

関羽と張飛の率いる戦闘艇の精鋭二個中隊は、山岳地帯の小さな盆地を両側からはさみ撃ちするように二手に分かれ山肌に沿って急速上昇した。

　この盆地には、純度の高いエルビューム鉱石の出る鉱山があるので、G星軍は戦艦を派遣して占領しているのだ。S星側としては、人里離れた鉱山にいる敵こそ、ゲリラ的な攻撃をするのに恰好の標的だから、孔明は、まず小手調べにこの鉱山の駐屯軍を血祭りに上げることに決めたのである。

　精密な計算にもとづいて選んだ深い谷間沿いのコースを通って侵入したため、山のすぐ下

まで着いても、まだどちらの中隊も探知されていない様子だった。

　数秒のうちに千メートル以上の鋭い岩山の頂上を越えた赤と黒の戦闘艇群は、盆地の中心部に着地しているG星の戦艦に向かって殺到した。上空で哨戒していた護衛の戦闘艇がこれを発見した時はすでに遅く、艦の両舷から襲いかかった二十機ずつの戦闘艇は、それぞれ一発ずつの多弾頭ミサイルを発射すると、そのまま常識では考えられないような急上昇をして離脱した。

　あらゆる宇宙艦の弱点を知り尽くしている孔明から、あらかじめ攻撃するべきポイントが指示されていて、四十発のミサイルはすべて吸い込まれるように命中した。すぐに艦橋が火を噴いた。続いて、一ヵ所に数発ずつが命中し、装甲の厚い機関部の爆破孔から黒い煙が流れ出した。

「先発隊は援護せよ。後発隊は二次攻撃開始」

　関羽は、落ち着いた声で命令を下すと、追撃のために上昇して来るG星軍の戦闘艇を見下ろした。少なくとも二百機はいるが、イエロー・キャップ討伐以来の戦士たちにとって、奇襲攻撃にうろたえている敵が相手なら五対一でも恐れるほどのことではなかった。

　次の瞬間、関羽の艇はまるで空中を切り裂くようなジグザグの動きをすると、追尾して来た二機が急に力を失ったように墜落して行った。張飛も、またたく間に三機を撃墜、二機を大破したが、その時、戦艦の艦尾に近い部分から押し出すように炎が噴き上がった。機関のリアクターが制御不能になり、質量・エネルギー反応が急速に進んだのだ。まるで蟻のよう

に大勢の乗組員が逃げ出すのが見えた。

「兄貴。やったぜ」

張飛が、大声でいった。

「戦艦の何のといったって、おれたちにかかっちゃチョロいもんさ」

「すぐにほかの基地から救援の戦闘艇か巡空艦がやって来るだろう。そうなると厄介だから、早いところここの連中を始末して姿を消そうじゃないか」

「久しぶりだから、この程度じゃもの足りないが、もうひと暴れしてズラカるか」

見る見るうちにG星軍機が百機あまりも撃墜された。これに対してS星側の損害は、僅か に三機が小破して操縦性が低下した程度なので、両軍パイロットの実力の差は誰の目にも明らかだった。こうなると、G星軍はすっかり戦意を喪失してしまい、ひたすら逃げ廻るばかり。

「総員、引き上げ」

形勢を見て関羽が命令した。

「もう一押しで、全滅させられるぜ。兄貴、あと五分やらしてくれ」

「いかん。追撃されると厄介だ。飯を喰うのも戦争も、腹八分目が大切だ。ぐずぐずしていてヘマをやらかすと、営倉にぶち込まれるぞ。孔明参謀長は、命令違反には厳しいからな」

「仕方がねえ。そんじゃあ帰るとするか」

張飛は、ぶつくさいいながらも自分の部隊をまとめて帰路についた。追撃して来るG星軍

機は、一機もなかった。

「ああ、面白れえ。この年まで生きて来た甲斐があるってもんだ」

張飛は、このところ上機嫌で顔の色つやも良かった。

「大体、おれにゃ共和制だ王制だとかいうクソ理屈は性にあわねえんだ。小学生じゃあるまいし、みんなで平等に楽しく暮らしましょとか、王様は偉大なりとかいってニコニコ暮らすのなんて、面白くもおかしくもねえ。

劉備の兄貴と組んだのも、こういう気ままな暮らしをしたかったからなのさ。おれは、型にはまった毎日を送るのが大嫌いなんだ。こうやって暴れ廻っていられりゃご機嫌で、文句はねえよ」

確かに、こういう男にとっては、乱世ほど面白いものはないだろう。小うるさい規則もイデオロギーもいらない。強い者が正しいという単純素朴な法則が通用する世界だから、強さしか持ち合わせていない張飛にしてみれば、全人格が肯定されているようなもの。面白くなかろうはずがない。

最初のうちは比較的うまく行っていたS星の市民とG星駐留軍の関係は、駐留期間が長引くにつれて悪くなっていた。G星軍が友好的な訪問者ではなくて、実は自分たちが選挙で作った政府を追い出したことが知れわたり、間もなく、劉備大統領の代わりに曹操が国王として君臨することになるらしいという噂が広まるにつれて、S星の空気は次第に険悪になった。

もともと独立精神が発達しているS星人だから、せっかく風通しの良さそうな政府ができたというのに、また頭を押さえられるようになるのには大反対だった。

当然のことながら、曹王朝反対の声が高くなってデモやストが盛んになる。駐留軍の最高司令官司馬仲達としては、これを放置しておくと曹操に対する忠誠心を疑われかねないので、地上軍を出動させて取り締った。

ところが、これが裏目に出てしまった。もともと鉱山関係者が多く気性は荒いが単純なS星人のことだから、放っておけばひと騒ぎ騒ぐだけで済んだかもしれないのに、なまじ強硬な態度を取ったものだから、すぐにあちこちにゲリラ組織ができて、G星軍の設備を襲撃し始めた。しかし、相手は最新の装備を誇る正規軍である。素人集団のゲリラ活動など、プロの軍人に本気で反撃されればひとたまりもない。最初の攻撃は手もなく蹴散らされて、死傷者の山を築いた。

これでゲリラ活動が停止すれば、駐留軍としては思う壺だったのだろうが、司馬司令官は、叩かれれば叩かれるほど反抗的になるというS星人気質を知らなかったのか、あるいは過小評価していたのである。最初は散発的だったゲリラ組織は、すぐに全国的に拡がった。

もともと、諸葛孔明があっさり政府を亡命させたのは、S星人の性質から判断して、一旦手に入れた自由をそう簡単には手放さないだろうと予想したからだった。

すべてが筋書き通りに進行して行くのを、亡命政府のある峨眉山で眺めていた孔明は、ころ合いを見計らうと地元出身で人気も人望も絶大な関羽を主なゲリラ組織と接触させ、ゲリラとS星軍の連合軍を結成する交渉をさせた。

この話は、ほとんど無条件でまとまったが、それもそのはず、関羽、張飛の二人は、どちらかといえば正規軍の軍人よりゲリラや反乱軍のボスの方がはるかにふさわしい性格である。趙雲も、れっきとした正規の軍人出身ながら、豪傑肌の武将だから、たちどころにゲリラ側の信頼を得てしまった。

特に張飛は性質が粗暴だから、口より先に手が出るような荒くれどもの親分にはもって来いだった。ただ、こういう男は、放っておくと脱線してとんでもないことをしでかしかねないのだが、張飛は、兄貴の関羽のいうことにはけっして逆らわないという長所があった。

同じゲリラ型でも、関羽は、腕前の方は張飛より上ながら、性質は冷静沈着、おまけに曲がったことは殺されてもやらないというカタブツである。二人が一組で動いている限り、張飛の欠点はすべて長所として生きるのだから、劉備も孔明も安心して戦闘をまかせることができた。

もちろん、関羽も張飛も、今では孔明の見通しの正確さと巧妙極まる作戦にはすっかり参っているから、迷わずに戦闘に没頭できる今の状態に満足していた。新参の趙雲は、もともとこのチームが好きで参加したのだから、文句のあるはずがない。

会社の経営でも、幹部が判断に迷って右往左往するぐらい部下のやる気を失わせることはないが、戦闘ではそれが死に直結する。たとえ誤った方向であっても、失敗したらやり直すぐらいのつもりで進んだ方が、ためらっているよりはるかにましなのだ。ところが、この場

合、孔明の判断に対する三人の将軍の信頼は絶対的なものだから、一瞬間でも迷うことはない。こういう条件のもとで戦えば、一人の戦士が何人前もの働きをするのである。

　実際、連戦連勝のS星連合軍の士気は、いやが上にも高く、将兵とも命令がなくても飛び出して行きかねない有様だった。特に血の気が多く、一週間も出撃しないと退屈でたまらなくなる張飛は、作戦室に現れて、孔明の前でもみ手をした。

「そろそろ、また、でっけえなぐり込みをやらかしたいもんだ。参謀長どの。どこか、手頃なポイントをめっけて下さいよ」

　それを聞くと、孔明は、普通の人間にとってはほとんど無意味な、線や点が無数に交錯している立体図を見ながらいった。

「そうですか。では、どこか探しましょう。宇宙艦の基地の方は、このところ大分叩き廻ったもので周辺の探知と監視が厳しくなったようだから、しばらく手を出さないでおくとして……そうですな、ええっと、地上軍のキャンプは、上空は厳重に監視して戦闘艇が哨戒しているものの、地上の警備はゆるやかなようだ。どこか、食べごろになった所を選んで襲撃して頂きますか。

　作戦としては、関羽どのと張飛どのが上空から攻撃して牽制し、趙雲どのに地上兵力を率いてなぐり込みをかけて頂けば、まずは成功疑いなし。大勝すれば、わが軍の士気はいやが上にも高くなり、G星軍の戦意は著しく衰えるでありましょうな」

　それを聞くと、張飛は張り切って、

「そいつは、面白い。ところで、このおれも、たまには地上戦をやらかしたいのだが、趙雲と一緒にやらせて貰えませんかねえ」

「それでは、良い場所が決まったら大統領閣下と将軍方、それにゲリラの隊長諸君にお集まり願って、作戦会議を開きましょう」

　というわけで、しばらくして孔明が招集をかけると、幹部が各地からひそかに峨眉山へ集まって来た。この峨眉山は、古い金鉱山のあとで、かつては三惑星全体の金の需要をまかなっていたという。それだけに、昔採掘のために掘った坑道が、数十キロメートル四方にわたってクモの巣のように拡がっている。孔明は、峨眉山の坑道の地図を最初に見た時、これはゲリラの本部にもって来いの場所だと思い、ひそかに手入れをさせておいたのである。

　なぜ、ゲリラの本部に適しているかというと、出入口が百ヵ所以上もあって、しかも広い範囲に散らばっているから、大勢の人間が集まっても気づかれる心配がない。かりにどこかの出入口を発見されて襲撃されたところで、中の複雑な迷路を暗記しているのは孔明だけだから、容易に閉じ込めて全滅させることができる。おまけに、全山が固い石英性の岩石でできているから、上空から爆撃されても中はびくともしない。

　強力な軍隊ならこんな所に立てこもってしまえば身動きできないが、ゲリラや反乱軍にとってこれほどごつごうの良い要塞はないのである。

　さて、将軍たちとゲリラの幹部たちが、峨眉山の岩山の間にある共和国臨時政府の作戦室に集合すると、孔明は、一同の顔を見廻しながらおもむろに口を開いた。

「わが連合軍の士気がすこぶる高いようですので、このあたりで一つG星軍を意気消沈させるような大作戦を決行することに致しました」

「今度は、どこに決まったのかね」

張飛が、前に乗り出すようにして尋ねた。全員が期待に満ちた表情で待ち構えているのを見て、孔明は、満足そうにいった。

「実は、最大の地上軍の駐屯地である江陵（こうりょう）キャンプです。成都（せいと）を占領している地上軍の根拠地ですから、あそこを叩き潰（つぶ）せば、敵に与える心理的影響だけでも非常に大きいでしょう」

それを聞くと、劉備が眉をひそめていった。

「参謀長のお考えであるから、ゆめゆめ間違いはありますまいが、あの江陵の攻撃にはよほどの覚悟が必要でしょう」

「ほほう。何ゆえでございますか」

孔明は、笑いながら尋ねた。

「皆も知っての通りに、成都は益州（えきしゅう）平野の中心にあり、江陵も成都からいくらも離れておらぬから、キャンプは平原のまん中に居座っている。周囲は何一つない平地で、隠れる場所もない。高解像力レーダーを要所に配置しておけば、ネズミが一匹近づいても探知できるから、あれほど警備しやすい地形はまずないだろう。

あそこは、司馬司令官が充分にあらゆる条件を検討して選んだ場所で、立地条件も良いし、装備も抜群だというではないか。

キャンプのプレハブ兵舎群の中心には、探知器をぎっしりつけた大型の輸送艦が着地しているから、あれなら、キャンプから二キロ以内の動きは細大もらさずキャッチできるだろう。また、諜報員の報告によると、キャンプの周囲には高圧電流を流した厳重な柵が張りめぐらしてあるし、五百人の重武装した兵士がいつでも出動できる態勢で待機しているという話だった。おまけに、上空にはいつでも戦闘艇が十機滞空して監視しているから、地上から攻撃すればこちらの損失もかなり多いのではあるまいか。

参謀長は、それほどまでにして、あのキャンプを攻撃する戦術上の必要があると考えておられるのだろうか」

孔明はうなずいて、

「すべて、大統領閣下の仰せの通りです。しかし、それほど厳重に警備されているからこそ、攻撃するべきなのです。

これまで、私は意識して江陵キャンプにゲリラ部隊を近づけることを避けていました。恐れていたためではなく、警備を空洞化させるためです」

「というと……」

「攻めることだけが攻撃ではありません。攻撃しないのも攻撃の一部なのです。

極度に恐れているように見せかけていれば、たとえ油断しなくても、緊張は必ずゆるむものです。身の廻りで絶えず戦闘が行われていればともかく、永久に攻めて来ないかもしれない敵を待って、半年も一年も真剣に待ち続けられるかどうか、大統領閣下も実戦経験は豊富

におありになるので、よくおわかり頂けると存じます。

私の目に狂いがなければ、江陵キャンプの警備は、もはやぬけがら同然。段取り良く攻めるならば、恐れるに足りません」

「しかし」

と、関羽がひげをしごきながら思慮深げにいった。

「あそこには数え切れないほどの自動システムが働いているはず。人間が緊張し続けられる期間には限度があっても、自動監視システムは飽きることも疲れることもないから、危険の度合は減りますまい。

と申しても、このわしはけっして江陵キャンプの襲撃を恐れているわけではないから、その点は誤解のないように」

「その通り、と申し上げたいが、正確には、自動監視システムは〈働いていた〉と過去形でいうべきでありましょう」

「ほほう。すると、誰かが侵入して破壊したとでもいわれるのか」

孔明は、にやりと笑った。

「機械はあくまで人があっての機械にすぎません。人が倦めば、機械もおのずからその働きを失うのです。

私は、占領軍の取り締まりで干上がってしまった博打打ちの親分に話をつけて金をやり、益州平野の南部にうじゃうじゃいるマビットもぐらをたくさんつかまえさせました。そして、

少しずつキャンプの北側で放させたのです。

マビットもぐらは非常に帰巣性が強いため、うろちょろしながら江陵キャンプを横切って南へ帰ろうとします。高圧電流の柵に引っかかって感電するのもあれば、地面を掘ってキャンプに入り込み、そのまま南へ進むのもあるし、あっちこっちで精密な監視システムにひっかかって大騒ぎになりました。マビットもぐらには、ネズミほどのから子犬ぐらいのまでいろいろな大きさのがいるので、監視システムは警報の出しっぱなしになり、結局、かなりの監視システムは、内部からスイッチを切られている状態です」

「なるほど。敏感すぎる火災報知器を誰も信用しなくなるようなものだな」

「その通りです。マビットもぐらは今でもキャンプの中をうろついています」

これを聞いた一同は、孔明の知謀にただ驚くほかなく、安心して作戦の説明を受けたのだった。

くわしい説明が終わると、孔明は腕に取りつける大型の腕時計のようなリスト・ユニットを取り出して、各人に配った。これは、各部隊に対する行動命令が時間を追って入力してある作戦用の新兵器で、全部隊が配置についてから、孔明が発信する作戦開始の信号を受けると同時に作動し始め、あとはすべてその命令通りに行動すれば作戦が完成するようになっている。

作戦用リスト・ユニットを使えば、通信はただ一度、最初に作戦開始の暗号を送るだけですべての作戦が進行するため、通信を傍受される心配がまったくない。今回の作戦のように

狭い範囲での地上戦には、非常に安全で効果的に命令を伝えることができるのだ。
ただ、途中で命令を変更できないために、もし普通のボンクラ指揮官が使えば、部隊が全滅しかねない。だが、これを作った諸葛孔明にとっては、小規模な局地戦での作戦などほんの遊びのようなものだから、各部隊長が命令に違反しない限り失敗することなどあり得ないのである。

江陵キャンプでは、G星陸軍の祭冒（さいぼう）将軍が二万の地上軍を率いて駐屯していた。惑星間戦争でも、地上軍の重要性は大きかった。相手を住民もろとも全滅させるような戦争をすることは滅多にないので、最終的には、やはり地上軍が主要都市を占領して直接にせよ間接にせよ軍政を敷く必要がある。S星の首府成都でも、司馬仲達司令官がもとの大統領府を最高司令部として使い、全S星に目を光らせていた。しかし、市中では広い場所が取れないため、地上軍の主力部隊は五キロほど離れた江陵の草原に大型輸送艦を着地させて臨時の司令部として使い、その周辺にプレハブの兵舎を建てて将兵の居住区としていた。

ゲリラ部隊は、一般市民と区別のつかないような服装で少しずつキャンプの周辺に集まったが、高圧電流の柵にはけっして近づかないし、明るい野原でピクニックやスポーツを楽しんでいるように見えるのでまったくG星側の注意を引くことはなかった。しかし、そのつもりで見ると、北には張飛の率いる部隊、南には趙雲の率いる部隊が散開していて、攻撃開始の命令が出るのを待っているのだった。

張飛と趙雲は、孔明が何かを知っていてこういう平穏な夕暮時に襲撃するように決めたのだろうと思っているが、兵士たちには、なぜこんな危険な日にゲリラ攻撃など計画したのかわからない。負け知らずの将軍たちだという信仰に近い気持があるからこそ、不安な中でも平静な態度で待っていられるのだ。

孔明も、峨眉山の作戦本部で何かを待っていた。例によって無数の情報機器のディスプレーを眺めているのだが、この時は、益州を中心とした気象情報に思考力の大部分を集中していた。

不確定な気象現象の予測を正確に行うのは、孔明ほどの頭脳でも容易なことではなかった。まして、はずれても笑って済ませられる天気予報と違って、この場合は大勢の生命がかかっていた。

外部からの連絡をいっさい禁止した孔明は、恐ろしい表情で気象衛星からの映像と益州付近の気象データをじっと見続けていたが、やがて、作戦開始の信号を送るべくセットしてあったキーボードに手を伸ばし、S・S・S・Sと、Sのキーを五回叩いた。

張飛と趙雲は、リスト・ユニットがカン高い音を立てるのを聞いて目をやった。〈作戦開始〉の文字が小型ディスプレーに浮かんだ。

二人は、思わずあたりを見廻した。何も変わったことはなかった。もう夕暮は間近くて雲は多くなっていたが、空は晴れていたし、風も静かに吹いている。このまま襲撃に移るのはいくらなんでも危険なように思えた。

だが、張飛も趙雲もためらうことなく部下の指揮官たちに合図を送った。すぐに、スポーツもピクニックも中止され、道具や弁当、マットなどがまとめられる。夕方なので、そろそろ遊ぶのを止めても不自然ではなく、キャンプの警備兵も遠くから眺めている。

その頃になると、今まで西から吹いていた風が急に北に変わり、上空では異様に黒い雲が渦巻き始めた。

「おう。北斗の嵐だ。こいつは、ツイてるぞ」

地元出身の兵士たちは、どよめいた。これまでの不安な気持のマイナス面が、この瞬間にすべてプラスの方向に転じた。北斗の嵐は、この季節に一度か二度、必ず半日ほど吹き荒れる季節風で、その凄まじさのために運命の神である北斗の名をつけて呼ばれていた。

北斗の嵐は、非常に狭い範囲のいわゆる微小気象の変化によって左右されるため、予報はほとんど不可能とされていた。張飛と趙雲は、孔明がいつもながらの人間離れした能力で北斗の嵐を完全に予測していたのだろうと思って納得したが、部下たちは、信じられないほどの幸運だと感じてふるい立った。もちろん、よそ者の集団であるG星軍では、恐ろしい天候の急変が始まろうとしていることなど、誰も知らないはずなのだ。

「AGバイク部隊を先頭にして、第三陣形を取れ」

リスト・ユニットの命令を読みながら、張飛が叫んだ。雨が降り始めた。風もますます強くなり、夕暮と重なって、あたりは急に暗くなって来た。

「AGバイク部隊を先頭に、第一陣形を取れ」

と、趙雲も叫んだ。

今の今まで平和な市民の姿をしていた数百人の男たちは、牙をむき出した。スポーツの道具を入れるケースには、武器がぎっしり入っていた。休憩用のマットや椅子の中には、破壊用の器械が隠してあった。弁当の包みには、弾薬が詰まっていた。小型のAGバイクが、あっという間に武装されると、ゲリラの兵士たちは赤外ゴーグルとイアホンをつけたヘルメットをかぶり、攻撃のための陣形に整列した。すぐに、AGバイクの集団が地上一メートルの高さに浮かび上がり、まっしぐらに高圧電流の柵目ざして突進する。

張飛の率いる部隊では、幅百メートルほどに散開して柵に取りつき、趙雲の部隊は、五メートルほどの幅で柵を突破する。高圧電流は、丸腰の市民にたいしては強力なバリアであっても、厳重に装備したプロの集団の前には無力だった。ほんの二、三分のうちに柵は破られ、激しい嵐の中を荒くれのゲリラたちが江陵キャンプになだれ込んだ。

キャンプの司令部では、監視装置が警報を鳴らしたが、荒れ狂う風雨のせいだろうとばかり、すぐにスイッチが切られてしまった。

上空を哨戒していた戦闘艇も、これでは敵襲はないという司令部の判断で、全機が地上に降りた。

すべては、孔明の予測した通りに進展した。

散開したまま待機していた張飛の部隊は、戦闘艇が着地すると同時にAGバイクが宙を飛んで接近し、至近距離から携帯ロケット弾を打ち込んで次々に爆破する。続いて、歩兵が兵

舎に殺到して歩哨の兵を倒すと、片端からセルミット爆弾を打ち込んで爆破した。

　不意をつかれたキャンプ側は、上を下への大混乱に陥ったが、情報を完全に把握している攻撃側と違って、これが嵐による災害なのか敵襲なのかも最初のうちはわからない。しかも、司令部のアンテナが正確に狙い撃ちされたから、外部との交信も一時途絶する有様だった。

　こうなれば、見かけは武力による戦闘でも、実際に勝敗を決めるのは情報量の差である。たとえどれほど優れた新兵器があったところで、目や耳をふさがれていたのでは使いようがないからだ。

　それでも、さすがに正規軍の軍人ともなれば、いつまでもうろたえてばかりはいなかった。非常呼集を受けると、混乱の中でも日頃の訓練のままに武器を身につけて兵舎の外へと飛び出した。頃合いを見て、張飛の部隊が一斉射撃をすると、G星軍は反撃しながらも、なだれを打って敵のいない方へと後退する。

　風雨は一層強くなるばかりなので、G星軍側が、ひとまず退却して集結しようとした時、趙雲の率いる部隊が直線状に中央を突破して来た。

　この部隊は、特別に荒っぽい鉱山労働者の集団で、腰にはブラスターをつけてはいるものの、主力は、デリケートな刃などついていない粗削りの板刀（ばんとう）や鋼鉄の棍棒（こんぼう）といった腕力がものをいう原始的な武器である。通常の地上戦ではものの役にも立たないが、嵐の中の白兵戦ではこれほど強いものはない。最新式の戦闘訓練しか受けていないG星陸軍の兵士たちは、

ただ一打ちに倒されて行った。

　だが、古つわものの祭冒将軍は、さすがに古典的な戦法にも通じていた。ふだんは儀礼的な用途しかないものの、いつも身近に持っていたサーベルを抜き放つと、ゲリラ部隊の中に切り込んだ。

　プロの剣士にかかっては、腕力だけを頼みに鉄の棍棒を振り廻す程度の戦法に勝ち目はないから、今度はゲリラ側がばったばったと切り伏せられる。その様子を見た趙雲は、これではならじとばかり、得意の大板刀を振りかざして救援に駆けつけた。

　二人の将軍は、お互いに相手が本職の軍人と見て、本格的に身構えてから、二、三回切り結んだものの、趙雲の腕前の方が数等上だった。鋭い刃物を使うのは、本質的に体力の不足を補うためだから、十倍もの重さの板刀を同じように扱える剣士を相手にした場合、たとえ相打ちでも勝ち目はない。

　趙雲の板刀は、祭冒将軍のサーベルを軽くはじき返してまるで受けつけないのに、真っ向から振りおろされた二十キロもある板刀を受け止めたサーベルは、将軍の体といっしょにへし折れて地面に叩きつけられてしまった。

　そのまま一方的な殺戮（さつりく）戦になりかけた時、リスト・ユニットがカン高い音を立てて、地上部隊の退却を命じた。張飛も趙雲も、渋々ながら負傷者を中心にして引き上げかけた時、火を噴いた戦闘艇が空から落ちて来たので、大慌てに逃げ出した。

　この時、上空では、急襲して来た関羽の戦闘艇部隊が戦い始めていたのだ。激しい風雨の

中でも、急降下して来る戦闘艇が風を切る凄まじい音ははっきり聞こえたので、地上部隊は逃げ足を早めた。

関羽は、キャンプの横に着地している輸送艦の攻撃を部下の戦闘艇にまかせると、上空に静止したまま待機していた。反重力艇は、空気力学的な原理で飛ぶのではないが、大気圏内にいる限り風の影響を受けるため、嵐の中で静止しているのはほとんど不可能に近いことだった。だが、真紅に塗られた関羽の艇は、まるで空中に固定されたようにじっとしていた。予想通り、すぐに接近して来た援護のG星戦闘艇編隊には、3Dレーダー・スクリーンに浮かんでいるこの影がいったい何なのか見当がつかなかった。

そればかりか、江陵キャンプの救援に派遣された戦闘艇は、情報不足と荒れ狂う北斗の嵐のために、司令部となっている輸送艦の周囲を飛んでいる影が、味方の護衛機なのか敵機影なのかもわからない。

この場合も、勝負は武器の数よりも情報量で決まった。輸送艦に集中攻撃を加えて爆破した関羽の部隊は、そのまま反転するといきなりG星軍の戦闘艇群に襲いかかった。不意をつかれたG星軍側は、慌てて反撃に転じたが、百分の一秒を争う戦闘艇のドッグファイトでは、先にミサイルを発射した方が圧倒的に有利である。G星軍機は、次々に撃ち落とされて行ったが、何しろ戦闘艇の数は一対五程度で圧倒的にG星軍が有利である。G星軍が次第に態勢を立て直せば、ゲリラ側は上下左右を包囲されて袋のねずみという有様。

だが、その時まで上空でじっと待機していた関羽の戦闘艇が、突然動き出した。G星機は

包囲した内側だけを攻撃目標にしていたので、ほとんどこのことに気づかず、いきなり上空からミサイルの猛攻を受けて二、三機を失うと、大いにたじろいだ。

さすがに、隊長機はすぐに上空の機影をとらえて急上昇したが、関羽の戦闘艇は呂布（りょふ）が改造した高性能機である。その常識離れした動きの前に、反撃する間もなく撃墜された。この一戦でG星軍がいくらか乱れたすきをとらえて、ゲリラ側は軽く反撃したが、この後はまともに渡り合うことなく、四方八方へ散りぢりになって逃げてしまった。

G星軍機は、本来なら追撃しなくてはならないのだが、護衛の目標である輸送艦は爆発炎上するし、隊長機は手もなく撃墜されるしで、猛烈な嵐の中を低空飛行して山ひだ沿いに消えて行くゲリラ機を追うほどファイトのある者は一人もいなかった。ますます激しくなる北斗の嵐の風雨の中、江陵キャンプは、当分は友軍の援助も期待できないまま、残骸をさらし続けていた。

女の戦争

「あなた。どうかなさったの」
蝶蟬は、夫の書斎のドアを少し開いて声をかけた。食事の支度ができたと知らせてからもう十五分にもなるのに、一向に出て来ないので心配になったのだ。
「うむ」
孔明は、振り向いた。
「お体の具合でもお悪いのではありませんか」
「いや。体は何ともない。少し考えごとをしているのだ」
「まあ。珍しい」
蝶蟬は、袖で口をおさえて笑った。いつも明るくて朗らかな孔明が、妻の前で考え込んだりしたことなどこれまでただの一度もなかったのである。
「あたくしでは、ご相談相手にはなりませんか」
蝶蟬は、冗談めかしていった。
「さあ。あなたは顔が広いから、役に立つかもしれない」

孔明は、穏やかに微笑みながらいったが、それが冗談なのか本気なのかはわからなかった。大勢の男を見て来た蝶蟬には、夫がどの男たちとも桁違いに聡明な人だということが、初対面の時からわかっていた。一緒に生活するようになって六年が過ぎた今では、夫の知能の高さはまったく人間離れしていて、他人と比べることが無駄だとさえ感じるほどになっていた。夫が考え込むほどのことがあるとすれば、自分のような女が役立てるはずのないことは、六年間の経験でよくわかっている。だが、今日の孔明は、どことなく普段とは違っているような気がした。
家庭での孔明は、いつも穏やかで、けっして腹を立てることなどなかった。最初は、ただ人柄のせいだと思っていたが、しばらくすると、それだけではないことに気づくようになった。孔明にとっては、普通の人間のすることなどあらかじめ予測できて意外性がないため、結果を見てから改めて腹を立てることなどあり得ないらしいのだ。
しかも、だからといって、けっして他人を見下したりばかにしたりすることはない。自分の行為が他人に与える影響も正確に読めるため、相手に不必要な不快感を与えるようなことは最初からしないのである。
長い間、男の機嫌を取って暮らして来た蝶蟬にとって、こういう夫との生活はこれまで想像もしたことがなかったほど快適だった。
董卓が呂2号に殺された直後、蝶蟬は曹操にいわれたまま遠州へ行って、ひっそりと隠れ住んだ。

洛陽にあった財産は、曹操が上手に処分して莫大な金額を渡してくれたので、物価の安い地方都市でつつましく生活するには金利だけでも充分すぎるほどの収入になった。経済的には豊かだったものの、蝶蟬は事件後の曹操の態度には失望した。

英雄色を好むというが、曹操もこの点では例外ではなく、大統領に就任してからは、専属の愛人の一人になるようにとかなりしつこく誘いをかけて来たが、蝶蟬は取り合わなかった。

束縛のない生活。これこそが蝶蟬の何よりの望みだった。堅気の女より自由な生活ができた自前の遊女稼業さえ、三十歳近くになって充分な財産のできた今となっては、再び開業する気はまったくない。

たとえ正式に大統領夫人になってほしいと求婚されても、そんな堅苦しい立場はお断りとばかり袖にするつもりなのに、実質は奴隷と大差のない権力者の愛人になれとは安く踏まれたものだと、蝶蟬の自尊心は深く傷ついた。

曹操ほどの男でも、権力を握ったあとの変わりようは、その辺にざらにいる男と大差ないことが今さらのようにわかって、ほのかな慕情も消え失せてしまい、蝶蟬は木で鼻をくくるような断りの返事をした。

その直後、あの呂布が、曹操の新政府が創設した軍の研究所に特別顧問として入所して、豪華な官舎と莫大な給料をあてがわれ、新しい兵器の開発を始めたという噂を聞いた時、蝶蟬は、打ちのめされたように感じた。

自分は自分なりに董卓の政治を憎んでいたので、非力な女の身で残虐な大統領を倒すことができるならと、洛陽一の名妓と謳われた誇りをもって曹操の頼みを聞き入れたのだった。

それなのに、大統領になった曹操は、あの時の真剣さなどどこへやらで、妾になれといって来るし、呂布は呂布で、その曹操から金を貰ってまたぞろ恐ろしい人殺しの道具を作ろうとしているというのだ。

結局、自分は、物欲と色欲と権力欲しかない男にいいように利用されて、あのいやらしい董卓のお相手までしたのだと思うと、恥ずかしさと悔しさでいたたまれなくなる。

すっかり落ち込んだあげく鬱病になった蝶蟬が、知人に紹介されてかかった精神科の医者がかの大学者、司馬水鏡だった。水鏡は、蝶蟬の美しさにも驚いたが、心理学者としてはむしろその性質の良さと聡明さに着目して、このまま水商売を続けさせるのは惜しいと思い、治療が終わるとすぐに高弟の諸葛孔明に引き合わせたのである。この二人ほど相性の良い男女は滅多にいないと分析したからだった。

さすがに、師の目には狂いがなく、ものごとの本質を見抜くことにかけて、二人とはいない才能に恵まれている孔明は、蝶蟬の過去など気にもかけずに一目惚れしたし、蝶蟬もまた孔明に夢中になった。

二人が結婚して遠州から姿を消したのは、それから間もなくのことだった。孔明は、当時ほとんど完成していたスペースラブ〈隆中星〉の情報ステーションを新居として、美しい新妻との生活を始めたのだが、そのことを知っていたのは、師の司馬水鏡だけだったことは

前にも述べた通りである。

蝶蟬にとって、この新婚生活は信じられないほど幸福なものだった。結婚する前、孔明には、董卓の死亡にまつわる一件以外の自分の前歴は、洗いざらい話してあったので、気になることは何もなかった。その話を聞いた時の孔明は、まるで小説の筋でも聞いたような態度で、

「そんな経験をした人は、めったにいないでしょうね。あなたと一緒に暮らすのがいよいよ楽しみになって来ましたよ」

といっただけだった。

そうはいっても、男は嫉妬深いものだから、実際に結婚すれば、何かにつけて厭味をいわれるのではあるまいかと内心では心配だったが、さっぱりそんな様子はなかった。孔明は、良家の令嬢と結婚したのと同じような態度で接して、蝶蟬の自尊心をいささかでも傷つけるようなことはなかった。

一緒に暮らすうちに、蝶蟬は孔明のそういう大らかな心がますます好きになった。スペースラブでの静かで平和な新婚生活は長くは続かず、夫は難しい政治と軍事の世界に身を投じ、住む所も転々とした。だが、孔明は、どんな時も心配そうな顔を見せたことなど一度もなかった。G星の大軍が来るからといって、成都の官邸から峨眉山の洞窟の中に移った時も、平然としている夫の態度を見ているうちに、蝶蟬はまるでピクニックへでも行くような気分になったほどだった。

そんな孔明が、今日は、真剣な顔で何かじっと考え込んでいる。蝶蟬にとっては、心配というより珍しい経験だった。

「あたくしでお役に立つのなら、どんなことでもするわ。もちろん、あたくしは普通の人だから、あなたのためにできることなど何もないと思いますけれど」

蝶蟬は、室内に入ってドアを後手に閉めながら、甘えるようにいった。

「いや。今度は、役に立って貰えるかもしれない」

孔明は、これまでに一度も見たことのないほど暗い表情になっていった。

「まさか……」

こんなことははじめてなので、蝶蟬は、そばにあった小さな椅子に腰を下ろしながらつぶやいた。結婚してからどんな時にも感じたことのない不安が胸をよぎった。

「本当なのだよ、蝶蟬」

孔明は、じっと妻を見詰めた。いつもなら、悩みごとなどほんの一かけらもないように澄んでいる孔明の目に、苦しみの色が浮かんだ。

「どうなさったの」

蝶蟬は、驚いて立ち上がると、夫の胸にすがりついた。

「おっしゃって。あたくしにできることがあるなんて信じられないけれど、もし、本当にお役に立つことがあるのなら、はっきりおっしゃって。どんなことだってするわ」

孔明は、うなずいた。

「劉備大統領を中心にして平和な三惑星連合共和国を再建しようという私の夢は、これまで曲がりなりにも形ができて来た。今、S星は形の上では占領されているけれど、占領軍がもう分解しかけていることは、あなたも知っているだろう。

この状態が続けば、あと一年もしないうちに、G星の占領軍は潰滅してしまうし、今後当分の間は、曹操も恐れをなして攻めて来ない。私は、そう信じていた。

ところが、G星ではおそるべき新兵器を開発して大量生産を始めているという情報が入ったのだ。その兵器の性能を調べたところ、われわれの手持ちの兵器ではとても太刀打ちできるようなものでないことが次第にはっきりして来た。

しかも、曹操は、その新兵器の数が揃い次第、自分で空前の大軍団を率いてS星の遠征に出発しようと、目下準備中だという。このままでは、どうあがいてもS星共和国の運命はおしまいだといわざるを得ない。三惑星連合共和国の再建どころではなく、S星共和国すら曹操の帝国の一部に組み込まれようとしているのだ」

孔明は、そういって深い溜息をついた。

「そんな恐ろしい。あたくしたちの、この立派な国が曹操のものになるなんて……で、あたくしが何のお役に立てるとおっしゃるの」

かつては洛陽の都きっての名妓だっただけに、人一倍カンの良い蝶蟬は、自分の役割がおぼろげにわかるにつれて、体の芯が震え出すのを感じながら尋ねた。

「あなたにしかできない……あなたならできることがある。恐らくあなたは引き受けてくれるだろうが、同時に、この私に失望するに違いないこともはっきりしている。私は、あなたを失いたくないから、怖くてとてもいい出す気にはなれなかった。

でも、あらゆる方法を検討した結果、曹操に対抗するためには、もうほかに手のないことがわかっている。

私に残された道は、仲間とともに死ぬか、裏切って逃げるか、あなたを失うかの三つに一つとなってしまった」

「そんな……。あたくしがあなたに失望するなんてことが、あるはずはないわ」

青ざめた夫の顔を見上げながら、蝶蟬は必死になっていった。

「ねえ。おっしゃって。あたくしは何をすればいいの。どうすれば、曹操を撃退できるの。どんなことでもするし、あなたから離れないことも誓うわ」

「誓ってはいけない。私がひとことといえば、夫婦の間はおしまいになる」

「誓うわ。たとえどんなことがあっても、あたくしはあなたのもの。絶対に嫌になったり離れたりしません」

いったんこうと腹を決めれば、そこは綺麗なだけのお嬢さん奥さんと違って度胸が据わっている。さすがの孔明も、妻の燃えるような視線にたじろぎながらうなずいた。

「わかった。そこまでいってくれるのなら、思い切って話そう。G星で新兵器の開発をしているのは、その

あなたは、呂布という男を知っているはずだ。

呂布なのだよ。
　呂布という男は、現在のように科学技術が複雑になった世の中では考えられないような超天才で、並の優秀な技術者が一万人も集まって試作したり実験したりしながら十年かかる研究をたった一人で半年で片づけてしまう。しかし、素晴らしい才能の反面、この男には節操というものがない。充分な金を出す相手なら、誰とでもつるんで注文通りの道具を作り出すのだ。以前は、呂2号という殺人ロボットを作って悪名をあげたが、今度は、曹操と組んで新兵器に手を出した。
　この新兵器が、無人戦闘艇つまりロボット戦闘機なのだが、その性能がこれまでの宇宙戦争を根本的に変えるほどのものなのだ。
　今までの戦闘艇は、人間のパイロットが操縦するのだから、人間の乗るスペースがかなり必要なうえに、人間を保護するための防御機能にかなりの重量を取られる。また、宇宙空間から地上へ降りて来た時は、やはり人間の上下感覚に合わせて着陸するような構造にしなくてはならない。要するに、本来の戦闘には必要のない機能のためにかなり無駄な体積と重さが必要なのだ。
　ところが、全自動操縦になると、同じ大きさならこれまでの五倍もの性能が盛り込める。わかりやすくいうなら、一機で普通の戦闘艇五機と渡り合っても充分対抗できるというわけだ。おまけに、パイロットが乗っていないから撃墜されても機械を損するだけで、貴重な人材をむざむざ死なせずに済む。大工業国のG星にとっては、これほど有利な武器はちょっと

考えられないだろう。
　曹操は、無人戦闘艇を何と百万機作らせているそうだけれど、話半分の五十万、いや十分の一の十万機を引き連れて攻められても、S星にとっては致命的になるだろう。今までの遠征軍と違って、乗組員の士気を気づかう必要はないし、生身のパイロットには耐えられない無理な飛行もできるから、理論通りの戦闘をいつでも強行できる。
　われわれが、これまでのような奇襲作戦を計画しても、油断もしない疲れもしない無人戦闘艇をいつでもうじゃうじゃ飛ばして護衛していられたのでは、とうてい勝ち目はないのだよ」
「わかったわ」
　蝶蟬は、きっぱりといった。
「どんなことでもお見通しのあなただから、もちろん、あたくしと呂布との因縁はご存じでしょうね。確かに、あたくしなら曹操に見つからない限り誰にも怪しまれずに呂布に接近できるわ。
　それで、あたくしは、その新兵器の設計図を取ってくればいいのね」
「設計図なんて必要はない。無人戦闘艇がどんな構造になるかぐらい、わざわざ設計図を見なくても九十九パーセント見当がついている。わからないのは、戦闘艇の複雑な動きをコントロールするコンピューターのプログラムだけだ。これさえわかれば、人間の作ったものだから、必ず弱点を見つけることができるのだ。

その複雑なプログラムは、親指の先ほどのギガ・メモリーキューブに納めてコンピューターに入れるのだが、いったんセットしてしまえば、自壊回路がついているはずだから、外して調べるというわけには行かない。どうしても、呂布の持っているはずのオリジナルのコピーが必要なんだ」

「そんなこと、あたくしにできるかしら」

「呂布の研究室に入ることさえできれば、あとは簡単だ。私の調べたところでは、どうやら呂布は、曹操の命令でコピーの作業まで自分一人でやっているらしい。

もちろん、自動装置が一日に万の単位で作っているから、労力はいらないのだが、研究室の外は五人の警備兵が二十四時間警備していて猫の子も入れないし、コピーした完成品の受け渡しも、責任者が何人も立ち合って厳重に監視しながら行っている。

つまり、普通のスパイ組織などでは絶対に手を出せない」

「それで、もしあたくしがその部屋に入れたとして、一体どうすればいいの」

「ただ盗むわけには行かない。一個でも数が減っていれば、怪しまれる。コピーマシンが動いている時にブランクのキューブを一個加えて、完成品を取るほかないだろう。それでも、マシンの動作回数が一回増えるが、呂布がどういう態度を取るかは、運を天にまかせるほかない。

絶対に盗難が起こり得ない状況で、製品の数さえ揃っていれば、あまり気にしないという方に、私は賭けている。呂布だって、自分の責任で面倒に巻き込まれたくないだろうから

ね。幸い、あの男はそれほど神経質な性格ではないのだ」

蝶蟬は、孔明が驚くほどあっさりといった。

「わかったわ。やってみましょう。呂布は、どんなことをしてもあたくしがいることを曹操に知られないようにするでしょうから、好都合だわ」

「蝶蟬」

孔明は、妻を抱きよせると、美しさのいささかも衰えていない顔をじっと見た。

「こんなことをさせて、許しておくれ」

蝶蟬は、首をゆっくり横に振った。

「許すどころか、あなたほどのお方があたしに最後の望みをかけて下さって、誇らしく思っています。

あんな人殺しの道具ばかり作りたがる男の鼻を明かしてやれる良いチャンスですもの。むしろお礼をいいたいほどだわ。こうなれば、あたしだってもとはプロ。立派にあの呂布の懐に入り込み、役目を果たして参ります。

もちろん、今では遊女ではなくて諸葛孔明の妻ですから、秘術の限りを尽くしてこの肌にはあんな男の指一本触れさせは致しません。そうでなければ、あなたの妻である誇りと、売れっ妓であったことの誇りを両立させられませんものね。

ただ、もし差し支えなければ、呂布とあたくしのことをどうしてお知りになったのか、教えて下さらない。あの件だけは、曹操と呂布とあたくし以外の者には絶対知られていないは

ずなのに、なぜあなたの耳に入ったのか、どう考えても不思議でならないわ」

「蝶蟬。壁に耳ありというだろう。私は、呂布をそそのかして董卓を殺させるよう曹操に入れ知恵したのが関羽だったことを、かつて劉備大統領に教えられた。そのしばらく後で、たまたまあなたが寝言でいかにも悔しそうに呂布の名を呼んで、『許せない』とつぶやくのを聞いてしまった。

それだけ知れば、あの悪党を始末して国民の苦しみを除いたのが誰だったか、すぐにわかって当然だろう」

「あなたなら……ね」

蝶蟬は、鉄も溶かしてしまいそうな媚を含んだ微笑を浮かべながら、うなずいた。

「それでは、お食事を済ませてからくわしく計画を立てましょう」

虫取りすみれ

——ああ、面白くない——

呂布は、あくびをした。

美しい女たちが、ご機嫌を取りながらまわりに侍っている。

昔からほしいと思っていたものが全部手に入ったというのに、どうも今ひとつ楽しくないのだ。宗教とか哲学についていくらかでも考えたことがあれば、たとえ宮殿に住んで美女にとり囲まれ、金銀財宝を山のように持っていても、それだけで心の満足が得られるものでないというのは真理だと悟ったかもしれないが、あいにく、呂布は、技術以外のことにさっぱり関心がなかった。

毎日、膨大な科学や技術の文献に目を通し、信じられないほどの早さで読み下しては要点を理解してしまうのだが、天は二物を与えずという言葉のままに、驚くべき才能は科学技術の面に限られていた。

この男、どんな機械を設計製作させても、一流の技術者を何千人も集めた以上の能力を発揮するというのに、人間の心についてはあきれるほど鈍感だったし、美術や音楽などについ

ては犬程度の鑑賞力しかなかった。だから、何より好きな金が使い切れないほど入る身分になっても、仕事の合間にすることといったら、女遊びにふけるほかは、最高級の酒を飲み、うまい料理をたらふく食べるだけだった。何しろ、体重が百五十キロもあるから、並の男の三人前や五人前はあっさり食べるので、洛陽の高級レストラン業界では十人といない上客の一人になっていた。

　特に重点をおいたのは、女遊びだったが、呂布が大好きな割りには女が呂布を好いてくれないのが、今ひとつ面白くない大きな原因だった。いうまでもなく、女性ぐらい科学技術の立場から理解しにくい存在はないから、どう扱えばよいかわからないのである。

　ところが、呂布の場合、人間の心について鈍感だといっても、その人間は他人に限られていて、自分の心には普通人よりはるかに敏感で自尊心が強いから始末が悪かった。わかりやすくいうならば、相手の求めるものは気がつかないくせに、相手が自分に与えてくれないものはほんのつまらないことにでも気がつくのである。

　こういう男が女にもてるはずはないのだが、とにかく莫大な契約金と給料を貰っているばかりか、どこかの国と違って高額所得に対する罰金じみた税法がないので、金だけはふんだんに使える。だから、女も形だけはすり寄って来るし、抱きたいだけ抱けるのだが、相手が本気でないことはすぐにわかるから、たとえ千人の美女を擁していてもさっぱり楽しめないばかりか、絶えず心を傷つけられている。

　それなら、自宅でおとなしくしていれば良さそうなものだが、とにかくほかに趣味のない

男だから、夜な夜な色街へ繰り出すほかにすることがないのだ。

　もっとも、呂布にも同情すべき点はあった。今や国家的VIPだから、どこへ行っても二十四時間二、三人の護衛官が影が形に添うように張りついている。超高級マンションの自宅には、呂布がいようがいまいが玄関に一人、外に面した窓の下に一人が立番しているし、外出する時も、防弾ガラスの入った運転手つきの反重力艇に一緒に乗って来る。最初のうちこそ、いかにも出世したようでいい気分だったが、次第にうるさくなって来た。表向きは誘拐や狙撃を防ぐためという名目なのだが、怪しげな人間と接触しないように監視されているらしいことがわかるにつれて腹が立って来た。

　色街へ行っても、入口は護衛官が固めているから、行きつけの店以外はつい入りにくくなる。しかし、図々しい呂布は、やがてその状態にも慣れてしまい、運転手と護衛官の乗っている反重力艇に平気で女を同乗させて自宅やホテルに引っ張り込むようになった。呂布にとっては幸か不幸かわからないが、女性を一人前の人間と見なさない風潮の残っているこの国では、どんな女と遊んでもけっして問題にされることはなかったのである。

　大金を使って遊蕩の限りを尽くした人にいわせると、のめり込めばのめり込むほど白々とした虚しい気持になるものらしいが、呂布の場合もそうだった。表面ではちやほやしてくれても、実際は金ほしさに我慢して目をつぶっているような女たちばかりとつき合っているうちに、こんな男でも、金がふんだんにあって女がいくらでも自由になるだけでは何かがもの足りないと感じるようになるのだ。

——〈あの女(ひと)〉は、今どうしているだろう——

心の中に隙間風が吹くような思いがするのを感じるたびに、必ずといっていいほど思い出すのが、心の中でひそかに〈あの女〉と呼んでいる蝶蟬(ちょうせん)だった。一日に何度かは必ず思い出す。もう十年近くになるというのに、どうしても忘れることはできなかった。

これだけ毎日のように女あさりをしていても、呂布は、蝶蟬ほど美人で人をそらさぬいい女に出会ったことはなかった。放蕩を重ねれば重ねるほど、本当にいい女はいないものだということがわかるようになるものらしい。そうなると、当時の最高権力者だった董卓(とうたく)までがほかの女に目もくれないほど寵愛した蝶蟬のことが、一層思われてならない。

あの時は、結局董卓に横取りされてしまい、そのために間接的ながら人殺しまでしたというのに、肝心の蝶蟬は、どさくさにまぎれて姿を消してしまった。董卓の女だったという理由で殺されたという噂も聞いたが、呂布は信じていなかった。

あれほど利口な女が、子供にでも危険だとわかる状況で殺されるのをぼんやり待っていたとは考えられないからだ。恐らく、G星(せい)を抜け出してほかの惑星のどこかでひっそりと暮らしているのだろうと思っていた。

——できることなら、もう一度会ってみたい——

ひざの上に、はたちそこそこの可愛らしい女の子を抱き上げて、小さな唇を吸いながら、呂布は、これまでに何十回考えたかわからないことを改めて考えた。その時だった。

『呂布さま』

どこかで、女の声が聞こえたような気がした。

「だれか、わしを呼んだか」

あたりを見廻しながら、呂布が女たちに尋ねた。店を楽に維持できるだけの金を一人で使ってくれるこの客の機嫌を損(そこ)ねないようにと、それこそ小指の動きにまで気を使っているママが、女たちの顔色を瞬間に読んで首を横に振った。

「いいえ。誰もお呼び致しません」

「ソラ耳であったか」

呂布は納得して、また若い女の体をまさぐり始めた。

『呂布さま』

また、声が聞こえた。呂布は、首をかしげた。

『呂布さま。あたくし、蝶蟬でございます。覚えていて下さいますか。外のお乗り物の中で、お待ちしております』

今度は、はっきり聞こえた。呂布は、思わず立ち上がった。女の体が床の上にずり落ちて、裾が花のように開いた。

「いかがなさいました。呂布さま」

ママが、驚いて腰を浮かせた。だが、呂布はもう聞いていなかった。懐へ手を入れて金貨をつかみ出して大まかに数えると、それをママに押しつけ、何者かに操られるようにさっさと店の外へ出た。なぜ急にご機嫌が悪くなったのかと、女たちが慌ててあとを追ったもの

の、大男が急いで歩くのにはなかなか追いつけない。
　呂布が、店の前に駐機している反重力艇に近づくと、護衛官の一人が待ちかまえていてささやいた。
「先生。ご婦人が一人、お約束があるとおっしゃいまして、中でお待ちになっておられます」
「そうか。わかった」
　呂布は、護衛官がドアを開いてくれた艇の中に胸を高鳴らせながら体を押し入れた。高官専用セダンの後部座席というよりは、客室というのにふさわしいゆったりしたシートの上に黒いベールで顔の大部分を包んだ女が座っていた。心の蕩(とろ)けるような良い香りが漂っている。ドアを閉めると女は小声でいった。
「呂布さま。蝶蟬でございます。お懐かしゅう……」
「ち、ち、蝶蟬。本当に蝶蟬か。顔を見せてくれ」
　呂布は、口ごもりながらいった。女が、ベールを落とした。ほの暗い照明の下にまがうことなき蝶蟬の輝くような美貌が現れた。夢のよう、というより、夢の中でもこんな経験をしたことはなかった。マイクを引きよせると、呂布は運転手に命じた。
「まっすぐ、家に帰ってくれ」
　すぐに、反重力艇は浮き上がった。
「今まで、どこにいたのだ」

　護衛官たちの乗っている運転席との間は、音こそ聞こえないようになっているものの、こちらの姿は見えているから、いつもと様子が違うことに気づかれないよう、呂布はつとめて平静を保ちながら尋ねた。
「あのあと、大勢の人に董卓の片われとばかりつけ狙われまして、方々を転々と致しましたが、ようやくこの頃になって、G星へ戻って参りました。呂布さまも、大層ご出世あそばしたとうかがいまして、お懐かしさのあまりこうして図々しく顔を出させて頂きました。よもや、ご迷惑ではございませんでしょうね」
　いくらかでも冷静さが残っていれば、こういう不思議な現れ方をした女に対しては警戒心を抱くのが普通だが、呂布は、完全にのぼせ上がっていた。警戒するどころか、夢でもかまわないから、ただ一分でも長くこの夢が続くようにと願っている。
　ここまで来れば、蝶蟬にとっては相手がどんな大男であっても、リモコンのロボットと大差なかった。
「蝶蟬。会いたかった」
　呂布は、両手を拡げて蝶蟬の体を抱きしめながらシートの上に押し倒した。運転手と二人の護衛官、つまり三人の部下ともいうべき男どもの視線にさらされている場所でこういう行為にでるのは、社会的地位の高い普通の男ならかなり勇気のいることだろう。ところが、鈍感な呂布は一向に平気である。また、護衛官たちも、脂肪ぶくれの中年男が薄暗い所で何やら怪しげなことをしているのなど目もくれない。見ろと命令されてもあまり見たいような光

景ではないからだ。

　もしこれが夢ならば、遠慮するだけ損をするし、現実なら手を出した方が得である。呂布は、蝶蟬の小さな唇を自分の唇でふさぐと、下半身に手をのばした。

「呂布さま。こんな所で……いけませんわ。お楽しみは、お宅へうかがってからに致しましょう」

　呂布の耳もとで蝶蟬がなまめかしくささやいた。だが、呂布は手を休めなかった。

「いや。わしは待てないのだ」

「いけません。呂布さま、いけません。ああ……わたくし……困ってしまう」

　呂布の巨体が、しなやかな体の上におおいかぶさると、蝶蟬は胸を激しく上下させながらあえぎ始めた。

「先生。お宅の前でございます」

　聞き慣れた運転手の声が、座席の前のスピーカーから響くと、呂布はわれに返った。衣服もきちんとしているし、シートに深く腰を下ろしたままだった。思わず大きく溜息をついて、

「やはり、夢だったのか」

と、つぶやいた。

「ほほほ。よくお休みでしたこと」

耳もとで、含み笑いする声が聞こえた。慌てて振り向くと、蝶蟬が右手の甲を口に当てて微笑んでいた。

「おう。蝶蟬。久しぶりにあなたに会ったというのに、すっかり眠ってしまった」

　ほっとしながら、呂布は照れ笑いをすると蝶蟬の小さな荷物を持ってドアを開け、先に立って降りるのを助けた。そして、そのままマンションのホールへ入ると、専用エレベーターで自宅のある階まで直行した。玄関の前が、また小さなホールになっていて、ここにも護衛官が一人常駐しているのだが、呂布が女連れで帰って来たのを見ても、毎度のことと驚きもしなかった。

　豪華な室内に入ると、呂布はドアを厳重にロックし、照明を明るくした。蝶蟬はベールを取ってあたりを見廻している。

「まあ、立派なお部屋ですこと。本当にご出世なさったのね」

「なに。こんな部屋など、あなたがほしいのなら二つでも三つでも買って上げる」

　呂布は、立派なシャンデリアの輝く下で、以前よりずっと臈たけて美しくなった蝶蟬の顔を惚れ惚れと眺めた。

「何という美しさだろう」

「まあ。そんなことをおっしゃって下さるのは、呂布さまだけでございます。わたくしなど、苦労ばかりしているうちに年を取ってしまい、本当なら昔をご存じのあなたさまの前に姿を現したくないと思いましたが、やはり、洛陽に来た上は一目なりともお会いしたいと思

いまして、身分違いもわきまえず、こんな失礼を致しました。お許し下さいませ」
恋いこがれていた女にこんなことをいわれて喜ばない男はいない。呂布は、天にも登る心地でいった。
「何をいう。こんな所で良ければ、好きなだけいてくれ。どんな贅沢でもしたいだけさせてやろう。さあ、こちらへ来るがいい」
恋いこがれていたといっても、呂布の女性に対する関心は容貌と体のことが九十五パーセント以上をしめているから、こうやって二人きりになってしまえば、それ以外のことはすべてどこかへ吹っ飛んでしまう。普通の男なら、美女がわざわざ向こうから来てくれたとなれば、少しはロマンチックな雰囲気でも作り出そうとするところだが、この男が考えるのはひたすらセックスのことばかり。
「まあ。呂布さま。お宅にずっとおいて下さるのなら、何もそうお急ぎになることはないではございませんか。せめて、お湯でも使わせて下さいまし」
全身に恥じらいを見せた絶世の美女にそういわれると、さすがの呂布も逸（はや）る気持をぐっと押さえつけて、
「おう。そうか。バスルームは、こちらだ」
と、案内する。留守の間にメイドが来て磨き上げて行くから、家中どこもピカピカで、ちり一つ落ちていない。蝶蟬は、しばらく水の音をさせていたが、間もなく呂布の待つ広間の方へ出て来た。呂布は、いらいらしながら立ったり座ったりしていたが、静かにドアを開いて入って来たその姿を見るなり、まるで腰でも抜けたように豪華なじゅうたんの上に座り込んでしまった。

蝶蟬のその時のいでたちは、体の線をくっきりと出して胸と背中を大胆にカットした黒いナイトウェアの上から、それがほとんど透けて見えるガウンを羽織り、美しい髪は銀色のリボンでゆるく結んで背中に流している。あでやかにも艶めかしい微笑を浮かべながら、かかとの高いサンダルを履いて優雅に足を運べば、スリットが割れて雪のような太腿がちらりちらりと見える。女を見慣れているはずの呂布の目にも、その姿は人間というより天女が空から降り立ったようにみえるのだった。完全に蝶蟬の秘術にかかった呂布は、もう自分が何をしているかもわからなくなっていた。
「蝶蟬……」
呂布は、床に膝をついたまま両手を前に出して呼びかけた。蝶蟬は、一瞬立ち止まったが、すぐ崩れるように体を投げかけた。もう前後の見さかいもつかないほどのぼせ上がった呂布は、そのまま蝶蟬を抱き上げると寝室に運んだ。そして、この天下の美女のまとっているガウンとナイトウェアをはぎ取ると豪華なベッドの上に押し倒し、薄暗がりの中でも光を放っているような体を押し開いた。あとはテクニックも何もあらばこそ、ただひたすら欲情を満たすべく乗りかかる。誰かが横で見ていれば、これでは女にもてないのが当然だとすぐわかるほどの性急さだった。
ところが、美女を抱いていると思っているのは呂布だけであって、蝶蟬は一メートル以内

には近づいていない。ふらふら歩く呂布のあとについて寝室に入りはしたものの、美しい顔に嫌悪の気持をみなぎらせながらベッドの横に立って、巨大な蛆虫さながらにうごめく呂布の体をじっと見詰めているだけだった。ほどなく、大きなうめき声をたてて呂布が果てそうになると、シーツを汚さないように巧みに始末をしてやり、さっさと寝室を出て行った。あとには、ぐったりした呂布が大の字になってぐっすり眠り込んでいるばかりであった。

蝶蟬は、広間へ戻ると飾り棚に見事なカットグラス製の酒びんやグラスが並んでいるのを見つけて、有名なブランドの酒とグラスを二個、テーブルに置いた。そして、妖婦じみた夜の支度を小ざっぱりした衣装に着替えると台所へ行き、男世帯に貯えられている僅かな食料品を使って簡単なつまみを作った。

準備ができると、呂布は、すぐに目を覚ましたが、蝶蟬がベッドにいないのに気づくと、慌てて起き上がり、血相変えて飛び出して来た。女に逃げられたと思ったのである。日頃からろくなことをしていない男だから、反射的に思いつくのもこの程度のことなのだ。

ところが、広間に来て見ると、蝶蟬は逃げるどころか家庭的な装いに改めて、酒の支度をして待っていた。呂布は、思わず安堵の息をつき、

「やあ、すっかり眠ってしまった」

と、いいながら、テーブルの前に座った。改めて蝶蟬を見ると、いかにも上品な若妻風で、これはこれでふるいつきたいほどの魅力がある。

「さ、お酒を召し上がれ。ありあわせでおつまみもお作り致しましたわ」

蝶蟬に酒をすすめられた呂布は、グラスを取って受けたもののまるで魂を抜き取られたような顔でぼんやりしている。蝶蟬は、自分で自分のグラスを満たすと、目の高さまで上げていった。

「それでは、呂布さまとの再会を祝って頂きましょう」

呂布も、ようやくわれに返って、

「いや。今日は、本当に嬉しい日だ」

といって、飲み干し、今度は蝶蟬のグラスに注いだ。蝶蟬は、にっこり笑って受けると、グラスを目の高さに上げて灯にすかして見るような仕草をしながら色目を使い、

「あんなに可愛がって下さるのなら、しばらくここにいようかしら」

呂布は、もう夢中で、

「しばらくとはいわず、いつまでもいるが良い。お前がいてくれるのなら、すぐ召使を雇おう。ここは充分広いから、人を二人や三人置くぐらい何でもない」

「でも、あなたは国家の重要なお仕事をしていらっしゃるのでしょう。洛陽には、わたくしを知っている人が多いから、ここにいるとあなたにご迷惑をおかけするのではないかと心配ですわ」

「そんなことがあるものか。仕事は仕事、プライバシーはプライバシー。私が誰といっしょにいようと、とやかくいわれる筋合いはない」

「でも、わたくしは、洛陽に帰って来たことをあまり人に知られたくないの」

「そんなことは、何でもないさ。ここでひっそり暮らしているぶんには、誰にも知れはしない」
「そうかしら」
　蝶蟬は、酒を飲み干すと、また呂布の盃に注ぎながら尋ねた。
「でも、まさかあの恐ろしいロボットを作っていらっしゃるのじゃないでしょうね。もしそうなら、わたくしあなたとごいっしょにいるのはいやよ。あれのおかげで、どれだけこわい思いをしたかわからないから、もしあんな物をまだ作っていらっしゃるのなら、わたくし、今からでもここを出て行くわ」
「と、とんでもない」
　呂布は、顔色を変えると、親指と人さし指で丸を作って見せながらいった。
「あれは、董卓におどかされて作っただけだ。今は、わしの設計した宇宙船に使うメモリーキューブというこんなに小さなものを作っている」
「本当かしら。じゃ、証拠を見せて下さる」
「見ても面白いものじゃない」
「面白いとか面白くないとかいう問題じゃないわ。あなたの研究室で、呂2号みたいな物を作っていないということがわかりさえすればいいの」
「しかし、監視が厳重で、とてもあなたを連れては入れない」
「あら、そう。わかったわ。わたくしに見られたくないのね。今度は、きっと曹操大統領のために呂3号とでもいうのを作っているんでしょ。
　おお嫌だ。わたくし、やっぱり帰るわ。落ちぶれたといっても、ホテル代ぐらいに不自由しているわけじゃございませんからね。いくらもと遊女でも、人殺しロボットを作っている人と同じ屋根の下に暮らしたくないわ」
「待ってくれ。それじゃ何とかして研究室を見せるように考える」
　蝶蟬が、本当に出て行きかねない様子なので、呂布は慌てた。
「警備の連中を出し抜く方法を考えて、明日にでも研究室へ連れて行こう」
「ここが自分の研究室だとかいって、別の部屋を見せるつもりなんでしょう。あなたは、そういうことが平気でできる人だから」
　蝶蟬は、いつの間にか対等の相手に対するような言葉づかいになっていた。
「そんなことはない。私の研究室は、ごまかしたりできるようなチャチなものじゃないのだ。研究室というより研究所とか研究工場とかいうのにふさわしい設備がある。でも、肝心の部屋に出入りできるのはこの私だけで、いつも五十人からの警備兵が建物のまわりに立って監視している。絶対に誰も入れない。
　実をいうと、一つだけ方法があるのだが、危険がまったくないわけではないので、あなたに使わせるのはあまり気が進まんのだ」
　呂布は、そういうとグラスを置いて、蝶蟬を見詰めた。
「町を歩くのだって、絶対に安全とはいえないじゃありませんか。危険を気にしていたら何

もできないわ。わたくしは、中途はんぱなのは大嫌いなの。少しぐらい危険でもかまわないから、はっきりさせておきたいわ」

「わかった。それじゃ、やってみよう。準備に少し時間がかかるが、明日の朝には何とかなるだろう。よろしい。こちらへ見に来るがいい」

今までとは別人のように引き締まった顔つきになった呂布は、急に立ち上がって廊下へ出るドアを開いた。蝶蝉も、グラスを置いてついて行く。いくつかのドアの前を通ってから、機械類が雑然と置いてある研究室らしい部屋に入ると、呂布は、高さが二メートル、縦横が一メートルずつもある大きな箱の前に立った。

「これは、人間でも送れる物質電送装置だ。瞬間的に大電力が必要だから、特殊なキャパシターの充電に十時間近くかかるし、生物はせいぜい八百メートルしか生きたまま電送できない。物質コピー装置として使えるはずだと思ったが、オリジナルと同じ元素を同じ比率で供給するのが難しくて、どうもうまくできない。いずれにせよ、まだ、あまり実用的ではないし、今のところ金に不自由はしていないので、公表はしていないのだが、とにかく、これを使えば誰にも気づかれずに研究所へ出入りできることは確かだ。研究所までは五百メートルしかないし、途中に攪乱（かくらん）するような要因もないから、危険はほとんどない。私自身、もう何度も実験しているから九十九パーセント安全だ」

「面白そうね」

科学や技術のことなどほとんど何も知らない蝶蝉は、この説明の意味をほとんど理解でき

なかったが、研究室へ侵入することさえできれば、手段などどうでもよかった。どんな危険があるのかもわからなかったが、一パーセントぐらいの危険を恐れていては何もできない。

「よし。では、回路を点検してから、充電を始めよう。そうそう、あちらのキャパシターも充電するようにコンピューターに指令しておこう」

呂布は、別人のようにきびきび動き始めた。

『蝶蝉。聞こえるか』

電送装置の中に入ってドアを閉め、教えられた通りにロックしてからキーボードを叩くと、呂布の声が聞こえた。

「ええ、聞こえるわ」

『では、そのまま何もせずに、できるだけじっとしているのだ』

「わかったわ」

十秒ぐらいは何も起こらなかったが、急に目の前が激しく震動したと思うと、意識が薄れた。

「大丈夫か」

体をゆすぶられて目を開くと、蝶蝉の体は古ぼけたソファの上に寝かされていた。呂布の心配そうな顔がのぞき込んでいる。意識が急にはっきりして来た。

「ええ、大丈夫だわ」

蝶蟬は、上半身を起こした。少し胸がむかついて額に冷たい汗が流れていた。
「最初は、かなりショックを受けるものなのだ」
「覚悟の上よ。さあ、研究室を見せて」
蝶蟬は、しっかり立ち上がった。オフィスに使っているらしい小部屋である。
「ひと目見れば、ロボットと関係がないことぐらい素人にでもわかるさ」
呂布は、蝶蟬を支えるようにして部屋を出た。
「このあたりは、機材の倉庫で、ここは資料室。ここは……」
あとでいいがかりをつけられると困るので、呂布は、ドアを全部開けて中を見せた。そして、最後にメモリーキューブの工場へ来た。
「これが、わしの今の仕事場なのだ」
「へえ。ここで、何をしているの」
ハンドバッグに入っているのと同じ部品が整然と並んでいるのを見て内心ほっとしながら、蝶蟬は、さりげなく尋ねた。
「こちらが、ブランクのキューブだ。ここにある機械で複雑なメモリーをコピーして、こちらの箱へ移す。このメモリーが、今のわが国の最高機密なのだぞ。次に、こちらの機械を使って私の作ったケースに納めてしまうと、今度取り出せば必ずメモリーが消えてしまうようになっている。この私ですら、メモリーを消さずに出すことはできない構造になっているのだ」

「全部、あなたが発明なさったのね」
蝶蟬は、尊敬の目で男を見上げると、そばにあった椅子に腰をおろし綺麗な脚を見せつけるように高く組んだ。呂布は、それを見ると思わず唾を飲み込んだが、やや胸をそらせていった。
「そうだ。キューブそのものは特別な型ではないが、中のメモリーには私のつくったプログラムが入っている。私以外には作れない複雑なプログラムなのだ」
「素晴らしいのね」
と、いってから、蝶蟬は、ちょっと顔をしかめた。
「あなた。なんだか急にのどが渇いたわ」
「転送のせいかもしれない。さ、もう恐ろしいロボットを作っていないことがわかっただろうから、あっちへ行ってお茶でもいれよう」
「ええ。有難う。でも、ここの方が面白いわ」
「そうか。じゃ、ジュースでも持って来よう」
蝶蟬に逆らうことなど思いもよらない呂布は、急ぎ足で部屋を出て行った。それまでのんびりと周囲を見廻していた蝶蟬は、呂布が部屋を出るやいなや素早く椅子から立ち上がって、メモリーキューブ転写装置のそばへ行き、ハンドバッグから手早く取り出したキューブをブランクキューブの方へ押し込んだ。そして、コピー装置から出て来たばかりのキューブをそっとつまみ上げると夫に渡されたケースに納めてハンドバッグに入れた。

野菜ジュースを入れたコップを持った呂布が引き返して来た時、蝶蟬はゆっくりと脚を組みかえていた。短いスカートが捲れ上がって、白い滑らかな腿がちらりと奥の方まで見えた。

「あら、済みません。どうも有難う」

蝶蟬は、急いでスカートを直すと、呂布の手からジュースを受け取り、ひと息で飲み干した。

「おいしい」

「気分は、どうだね」

「まだちょっと頭がぼうっとしているみたい。ここにいて具合が悪くなると困るから、早く帰りましょう。あなたのベッドでゆっくり休みたいわ」

「そ、それがいい」

呂布は、ほっとしたようにいった。いかに鈍感な男でも、こんな所に女を長く置きたくないのである。

「なるべく早い方が、体の原子パターンがまだ転送された状態に近いので、ショックが小さいはずだ」

せき立てるように蝶蟬をもとの部屋に連れて行って電送装置に押し込むと、ドアを閉めながらいった。

「すぐに呼びかけるから、向こうに着いたら返事をしておくれ」

「わかったわ」

蝶蟬の姿が消えてから三十秒後に、呂布はマイクに向かって呼びかけた。

「無事着いたかい」

すぐに、甘い声が返って来た。

「ちょっとふらふらするけれど、さっきほどじゃないわ。あなた、今日はなるべく早くお帰りになってね」

呂布は、勢い込んでいった。

「もちろんだとも。どこへも寄らずにまっすぐ帰るさ」

「じゃ、またあとで」

通話を切ってから十分もたたないうちに、目立たない服装に着替えてサングラスをかけた蝶蟬は、呂布のマンションを出てしばらくぶらぶら歩き、次のブロックでタクシーを拾うと宇宙港へ直行した。地味で上品な奥様風の女の行動は、誰の注意も引かなかった。

二星同盟

G星軍最高司令官司馬仲達は、表面は冷静な態度で報告を聞いていたが、副官が執務室を出て行くと、恐ろしい形相でうめいた。

「孔明の若造めが。八つ裂きにしても飽き足らぬやつ……」

次々に繰り返されるS星ゲリラの襲撃は、G星軍の無力さの盛大な宣伝になっていた。被害の大きさもさることながら、こちらの影響の方が大きかった。

何といっても占領軍は占領軍だ。前の政府がよほど暴虐な限りを尽くしたとでもいうのでなければ、あまり歓迎される客ではない。まして、劉備のように国民に人気があった人物の率いる政府を追い出したのだから、もともと憎まれ役なのである。それも、圧倒的な兵力でS星軍を制圧して占領したのなら、民衆も力の前には屈伏するだろうが、S星の正規軍とはまだ一戦も交えていないのに、ゲリラには散々な目にあわされ続けている。

いくら報道規制をしても、噂話までは禁止できない。占領軍が悲惨な負け方をしたというニュースはすぐにS星中に広まって、拍手喝采する民衆の顔は、完全に劉備大統領の方を向いている。形の上ではG星駐留軍が支配しているというものの、曹大統領や司馬最高司令官

を本当の支配者だと思っているS星人などほとんどいなかっただろう。

もちろん、司馬仲達とて昼寝をしていたわけではない。劉備を隠れ家からいぶし出して逮捕しようと、スパイを使ったり討伐軍を派遣したりするのだが、まるでこの世から消えてなくなったように居所がわからない。

それだけなら、存在を無視していれば済むのだが、駐屯地を片はしからゲリラ攻撃で潰されるに至っては、放っておくわけにもいかなかった。全軍を一ヵ所に集めれば、ゲリラも手を出せないだろうが、それではS星側の思うツボで、G星は占領軍というより一点に駐屯しているだけの無力な寄生虫なみの存在になってしまう。

これが、すべて諸葛孔明のせいだということは、考えるまでもなく明らかだった。最新の装備をした大宇宙艦隊が、ただ一人の青年にあしらわれているのだ。

しかし、いくらくやしくても、仲達にはもうこれ以上打つ手がなかった。できることはただ一つ、曹大統領に実情を洗いざらい報告して判断を乞うことだけだった。その結果たとえ処罰されても、むしろS星で針のむしろに座らせられているよりましだった。

曹大統領が長々とした報告書を嫌うことをよく知っている仲達は、秘密を守りやすいせいもあって直接口頭で報告する決心をした。

あらかじめ大統領秘書官に話を通してアポイントメントを取ると、約束の時間が来るまでの間、仲達は何度も何度も報告の内容を練り直してメモを作ったが、いよいよ大統領の回線に接続したと秘書官にいわれた時は、さすがに緊張して声が震えた。

「大統領閣下。S星の現況について折入ってご報告申し上げたく存じます。ご都合がお悪いようなら、文書にしてお送り致しますが」
「かまわぬ。申してみよ」
「では……」
仲達は、自分の分析した状況を、できるだけ客観的に説明した。
「なるほど、よくわかった」
いくら客観的に述べたところで、情勢が悲観的なことに変わりはなかったが、仲達にとって意外なことに、曹操の反応は意外にも冷静なもので、失望した様子も腹を立てた様子もなかった。
「司馬将軍が最善を尽くしておられるなら、それで止むを得ないであろう。
私にも、考えるところがあるから、できるだけ損害を少なくするように努力して、現状を維持するように努力されたい」
「ははあ」
激しく叱責される覚悟をしていた仲達は、どちらかといえば投げやりなような曹操の返事に拍子抜けした。曹操は、一方的に通信を切ってしまった。
曹操は、司馬仲達の戦いぶりに失望していたが、今のところS星の占領はそれほど重要な問題ではなくなっていた。しかし、ここでS星から軍を引き上げれば、劉備に負けたことを天下に公表することにほかならないから、絶対に占領を続けなくてはならない。そのために

多少の損害が出るぐらいは止むを得ないことだった。
それに対して劉備の方は、いくら局地的なゲリラ戦に勝っているといっても、少なくとも表向きはすでにS星の支配者ではない。諸葛孔明という男が、どんなに小利口に立ち回ったところで、それは牛のまわりをうるさく飛び廻ってちくちくと刺すアブのようなものにすぎないのだから、大きな目で見れば、S星は現状を維持できれば勝ちだというのが曹操の基本的な判断だった。
圧倒的な軍備と三惑星きっての優秀なブレーンを背景にしている曹操は、劉備や孔明の小細工など気にしていなかった。将棋と同じで、大駒の一枚や二枚取られたところで、最後に王を詰めた方が勝ちである。曹操の読みでは、S星の片隅に追い詰めた劉備など、あといくつかの手を打てば完全に動きを封じられて降伏するはずだった。
そのための大きな手として、曹操は、W星を利用することを考えた。W星は、すでに立派な独立国だった。早く亡くなった孫堅のあとを継いだ子息の孫権が、実質的には支配者の地位にいて、多くの優れた部下たちが守り立てている。
だが、まだやっと二十歳を過ぎたばかりの若い孫権は、大統領を名乗るわけでもなく、父の地位であった長沙州知事の肩書のまま堅実に政権の足場固めを続けていた。農業国とはいっても、蓄積の多いW星は、最新式とはいえなくてもかなりの軍備があって兵力も多かった。
曹操は、自分に州知事の任免権があるのを利用して、かなり高圧的な文書を孫権にあてて

送りつけたのである。

『長沙州知事　孫権殿

三惑星連合共和国S星の反乱軍を鎮圧するため、最近開発した無人戦闘艇百万機を主力とする遠征軍を率いて近く親征することに決定した。短期決戦によって決着をつけたいので、長沙州からも精鋭軍を派遣されたい。

勝利の後は、W星全土の総督に任じ、さらにS星全土の二分の一の統治を委任する。

速やかな返信を期待するものである。

共和国紀元四百六十三年G星六月八日

三惑星連合共和国終身大統領　曹操　玉璽』

この文書は、ファックスなど使わずに伝統的な公文書メッセンジャーによって運ばれ、W星の首府建業にいる孫権に直接手渡された。

秘書官に封を切らせた孫権は、この短い文書を二度三度と繰り返して読んだ。表向きは、読み返す必要もないほど意味のはっきりした軍隊派遣の要請書だったが、孫権には、W星を事実上支配している自分に対する曹操の恫喝としか思えなかった。

「張昭。緊急の閣議を開くから、全員に招集をかけてほしい」

大統領からの公文書の受領に立ち会っていた主務大臣の張昭は、心配そうに孫権の様子を

見ていたが、

「はい。直ちに……」

といって出て行った。それを見送ると、孫権は、腕組みをした。遅かれ早かれ、何らかの形で曹操と対決せざるを得ないだろうとは覚悟していたが、ついにその日が来たのだと思った。だが、曹操の力がこの十年足らずの間に恐るべき早さで成長した実状を知り尽くしているだけに、対決とはいっても、戦うことになるのか屈伏することになるのか、容易には決められない。

父の孫堅が生きていたら、州知事としてははるかに後輩の曹操が主人面をするのに我慢できず、一も二もなく戦ったに違いない。

だが、孫権は、自分が曹操や劉備と違って、二代目だということをはっきり自覚していた。今のうちこそ、親の代からの優秀な部下たちがつき従ってくれているが、自分の判断に誤りが多ければすぐに離れて行ってしまうことは覚悟しなくてはならない。愚かなトップのいる組織に属していれば、地位どころか命まで危ない世の中なのである。

今後の自分の運命ばかりか、W星の住民たちの生活も大きく変えることになる判断の岐路に立たされているのだと思うと、若い孫権は体が恐ろしさに震えるのを感じた。

だが、ただ恐れているわけではなかった。平和な世の中でも、わざわざスリルを求めて全財産を勝負ごとに賭ける人間がいる。孫権は、自分が一つの惑星の運命を賭ける決断を下せる立場にいることを、心のどこかでは楽しんでいた。

間もなく、閣僚たちが閣議室に揃ったと秘書官が知らせて来た。孫権は、秘書官に先導されて閣議室に入り、直立して迎える重臣たちの前を通って正面の席についたが、頼りにしている一人の大臣の顔が見えないので秘書官に尋ねた。
「魯粛が来ておらぬようだな」
「はい。役所におられませんでしたので、少し遅くなられますが、間もなく見えるはずでございます」
「そうか。突然のことだ。無理もない。では、ここにいる者にまず話しておこう」
孫権は、左右を見廻しながら曹操の命令書を広げた。
「至急来て貰ったのは、ほかでもない。つい先ほど、曹大統領から公式文書が届いたので読んでほしいのだ」
すぐに、秘書官が孫権からオリジナルを受け取ってホルダーにはさんだ。閣僚の机のディスプレーに文書が映った。一同は真剣な目を向けた。重苦しい沈黙が流れた。孫権が、低い声でいった。
「どう対処するべきか、遠慮なく意見を述べてほしい」
しばらくの間、誰も口を開かなかったが、やがて、張昭がいった。
「やはり、曹閣下の仰せの通りに致すほかございますまい。大統領は、約束を守るお方と聞いております。ご命令に従いさえすれば、孫知事さまは名実ともにW星の支配者となられ、S星の支配権の半ばまでを手にお入れになれます。しかも、強大なG星軍とともに戦うので

ございますから、わがW星は戦場にならず国民の受ける被害も最低限で済みましょう。
しかし、この文書にははっきり書いてはありませんが、われわれが大統領の命令に従わぬ時は、このままでは済みますまい。S星の反乱軍を鎮圧した勢いを駆ってわがW星へ攻めて参りましょう。わが軍も精鋭揃いのこととて、よもや負けるとは思いませぬが、たとえG星軍を撃退したところで、かなりの犠牲が出るはずでございます。けっして、曹大統領に逆ってはなりませぬ」
「何をいわれる」
それを聞いて立ち上がったのは、軍務大臣の周瑜である。日焼けした顔の眉を逆立てて張昭の方をひと睨みしてから、孫権の顔を見すえた。
「閣下。各地に反乱軍が蜂起していたのを、父上、孫堅さまが鎮圧されてから二十余年になります。以来、長沙州の知事は事実上W星の総督と同じで、W星のほかの州知事に対して支配的な地位となりました。
G星の遠州知事あたりからお手盛りで洛陽に居座り、勝手に三惑星連合共和国終身大統領を称している成り上がりの曹操とは、そもそもの由緒が違っております。
特に、董卓大統領が暗殺されてからは、孫堅さまがW星の事実上の大統領になられ、孫権さまはそのあとを合法的に継いでおられます。何を今さら、曹操ごときに膝を屈してこの地位を安堵して貰う必要がございましょう。
それも、曹操が頭を下げて協力を頼んで来たのならともかく、このように脅迫がましい命

令におめおめと従うならば、今後は曹操のいいなりにならねばなりませんぞ。
わが軍は、数の上ではG星軍よりは劣っておりましょうが、戦争というのは数がすべてではございません。現に、S星では、僅か数千の軍でG星十万の第一次遠征軍を全滅させたそうですし、曹操は、さらにそれ以上の大軍を第二次遠征軍として派遣したのに、これまた散々な目にあっているという確実な情報が入っております。
寄せ集めの遠征軍など、いかに数ばかり多くても、ひと握りの精鋭で撃破できるという良い例ではありませんか」
「何とまあ、のんびりしたことを仰せられる」
張昭が、溜息をついた。
「ご存じかどうか知らぬが、今度のG星遠征軍の主力は、無人戦闘艇百万機だという。人間のパイロットなら、遠征に倦むこともありましょうが、ロボットならば疲れもしなければ、死ぬことを恐れもせぬ。そのような戦闘艇がかりに十万機ずつの波状攻撃を仕かけて来たとして、周瑜どのにはどこまで防ぐ自信がおありか。
この私とて、ご先代のお若い頃からお仕えして来た身であるから、どうにでもしてW星の独立は守りたい。だが、今この時にG星に刃を向けて徹底的に叩かれれば、独立どころではなくなってしまう。
相手は、たとえ名目だけでも大統領で上司なのだから、ここで命令に従うことは不名誉でも何でもない。いったん、命令に従って曹大統領の真意を探り、それから対策を講じても遅くはありますまい」
「張昭どの。よもや、曹操が、それほどお人好しでのどかな人間だと思っておられるのではありますまいな」
周瑜も負けてはいなかった。
「たかが大統領府警備隊長が、あっという間に遠州知事から大統領になり、今度は勝手に終身大統領を名乗って、実質的に三惑星連合共和国の帝王になろうとしている。われわれと協力してS星を攻略しようというのも、その手段の一部分にすぎないことぐらい、考えずともおわかりになるはず。
曹操が約束を守る人物と仰せだが、確かに当座はW星の支配権を認め、S星の半分も割譲してくれるかもしれぬが、この文書のどこを見ても永久にという文字は見えません。曹操によって与えられた権利なら、いつ何時曹操にいいがかりをつけられて剝奪されても、文句はいえますまい。
いかに無人戦闘艇が百万機攻めて来ようとも、人間の作ったものには弱点があるはず。受けて立つべき時には受けて立たねばなりません。たとえこの私の五体が宇宙の塵となって消え失せようとも、曹操ごときの風下に立つつもりはございませぬぞ」
周瑜が、激しい言葉を投げつけると、張昭は皮肉な笑いを浮かべて、
「聞くところによると、S星軍が、僅かな兵力でG星遠征軍をもてあそんでいるのは、諸葛孔明という参謀長がいるからだとのこと。なるほど、二千とか五千とかの兵で、十万、二十

万の敵と渡り合えるものなら、わがW星二十万の兵力をもってするならば、百万や二百万の敵はものの数でもありますまい。
　しかし、周兪どのには、その孔明とやらと同じような戦いができる充分な自信がおありなのかな」
　周兪は、きっとなって、
「諸葛孔明が、どれほどの才人かは存じませんが、わが国にも大勢の知謀すぐれた方々がおられます。けっして、孔明とやらにひけは取りますまい」
　意見は、文官と武官の間で真っ二つに分かれてしまった。
「もう止めるがよい」
　孫権が、右手を上げながらいった。
「突然のことであるから、今ここでにわかに結論を出そうとしてもデータ不足であろう。明日も同じ時間に閣議を開くことにして、今日のところはひとまず解散致そう」
　一同がそれを聞いてうなずき合った時、にわかに閣議室のドアが開いて、外交大臣の魯粛が急ぎ足に入って来た。
「遅くなりまして、申し訳ございません」
「おう。ちょうど良いところであった。議論が分かれてしまったので、一応解散しようとしていたところなのだ」
　孫権は、ほっとしたようにうなずくと、これまでのいきさつを手短に説明した。魯粛はそ

れを聞くとびっくりしたようにいった。
「何ということでございましょう。実は、その諸葛孔明が先ほど私の出先へひょっこり訪ねて参りまして、今しがたまで話していたのでございます」
「だが、S星では今G星駐留軍と交戦中なのではないか。参謀長がのこのこ出て来るとはどういうことなのだろう。占領されているのでわが国の援軍を求めて来たのではないのか」
「とんでもないこと」
　魯粛は、激しく手を振った。
「孔明とは、司馬水鏡（しばすいきょう）先生の同門で親しい仲ゆえ、遊びがてらやって来たのです。まさかこちらに曹操からの公文書が届いているなどとは知るよしもありますまい。
　それに、G星軍など取るに足らぬものらしく、占領しているとはいえそれはほんの形だけで、現に参謀長の孔明が夫人を連れて一般客船に乗って出て来ております。
　あのような遠征軍なら、百万や二百万攻めて来ようと小うるさいだけで実害はほとんどないなどと申しておりました。ホラを吹く性質の男ではないゆえ、本当のところだと思います」
「ほう。では、その諸葛孔明先生をこの席へお呼びできないものだろうか」
「しかし、外国人でございます。閣議の席へ招くのは憚（はばか）られます」
　魯粛がためらうと、孫権はきっぱりといった。
「いや。今はわが国に危険が迫っている時だ。そのようなことは問題ではない」

「さようでございますか。しからば、少々お待ち下さい。私のオフィスに待たせてありますゆえ、直ちに同道致します」

魯粛は、慌ただしく出て行ったが、ほどなく孔明を連れて戻って来た。

「知事閣下。こちらが、S星の諸葛孔明参謀長でいらっしゃいます」

「私が、長沙州知事の孫権です。ご高名はかねてよりうかがっております」

「諸葛孔明と申します。今後ともお見知りおきを……」

二人は、しばらく目と目を見合った。挨拶と紹介が済むと、魯粛は、孔明のために秘書官が運んで来て孫権の席の横においた椅子に座るように身振りで示した。孫権は、孔明が席につくのを待って尋ねた。

「S星は、目下G星の遠征軍に占領されているということですが、先生はどうしてこんな時に旅行などしておられるのですか」

孔明は、愉快そうに笑って、

「占領とはいっても、ただ大軍が無駄飯を喰っているという状態でして、いてもいなくても大して変わりはありません」

「それでは、どうして追い出されないのですかね」

と、張昭が質問した。孔明は、こともなげに答えた。

「追い出すといっても、相手は数十万の大軍です。いわば、庭のすみに象が入り込んで寝ているようなもの。しっぽや耳を切るぐらいのことはしても、押し出すことなどできる相談で

はありません。しかし、いずれ手足を切り取り目をつぶして、解体してしまうつもりでおります」

今度は、周兪が尋ねた。

「最初の遠征軍は、撃破してほとんど壊滅状態にされたそうですが、第二次遠征軍にはなぜ着陸を許されたのですか」

「第一次の時は、大袈裟な宣伝をして来てくれたもので、いくらでも奇襲攻撃をするチャンスがありましたが、二度目は、さすがに司馬仲達司令官だけあって、S星に接近する小惑星を利用して急襲して来ました。わがS星の劉備大統領の基本方針は、あくまで平和主義のため、自衛軍も僅か三千人というオモチャのような規模ですから、まともに相手をするわけには参りません。

仕方がないので着陸だけさせて、あとはほとんど身動きできないようにしてあります。兵隊たちには気の毒ですが、わが軍とゲリラ部隊の共同作戦で、もう五万人近い戦死者が出ています。したがって、士気は上がらず逃亡者が多くて、仲達どのもだいぶお困りのようでございますな」

孔明は、ありのままを話して愉快そうに笑ったが、張昭は、額面通りに受け取らなかった。皮肉たっぷりに、

「しかし、三十万なり二十万なりの大軍に駐留されて、撃退できない以上、S星はもはや独立国とはいえますまい。孔明先生のご旅行も、友人を頼っての亡命といった方が正確なので

はありませんかな」
「亡命などとはとんでもないこと。ちょうど休暇になり、かねてから家内がW星へ行きたいと申しておりましたもので、ぶらりとやって来ただけです。あちこち見物してから、来週にはみやげを山のように買って帰ります。
ただ、S星の独立が侵されていることは、残念ながら認めなくてはなりませんね。いくら死にかけた象でも、庭先に寝ていられて追い出せないというのは、正直なところわれわれの力不足でして、まことにお恥ずかしい次第です。
その点、W星は、精鋭を二十万も揃えておられるから、かりに曹操が五十万や百万の遠征軍を送って来ても、手もなく追い返せることでございましょうなあ。まことに羨ましい限りです」
本気とも冗談ともつかぬ態度でそういうと、孔明は、ふと思いついたように続けた。
「そういえば、G星では、とうとう無人戦闘艇を開発して、大量生産に入ったという情報が入っておりますが、曹大統領の戦争好きにも困ったものです。何でも百万機揃えるという噂ですから、まだぞろわがS星へでも攻めて来るつもりでしょうが、ばかなことをするものです。
よけいなお世話だから黙っていますが、本当に、無駄だからお止しなさいと忠告してやりたいではありませんか。曹操も、大勢の人材を集めたと宣伝していたが、そんなばかなことも止めさせられないようでは、ゴマすり人材しかいないようだ」

あざ笑うような口ぶりに、W星の高官たちは思わず顔を見合わせたが、孔明は、そ知らぬ顔でそそくさと立ち上がり、孫権に向かって一礼した。
「知事閣下。個人的な旅行で参りましたのに、このような席にお招き頂きまして、まことに光栄なことでございます。これから、家内の買物につき合わねばなりませぬので、そろそろ失礼致します。
W星の見事な翡翠は、この私にとって曹操の大軍より手強いのではないかと存じます」
孫権は、内心うろたえたが、表面はあくまでにこやかにうなずき、
「奥方が翡翠を求められるとあらば、良い店へご案内致させましょう」
といいながら、魯粛に目くばせする。魯粛は心得て、孔明にいった。
「その、無人戦闘艇とやらのことだが、ぼくははじめて聞いた。くわしい情報が入っているのなら、教えてくれないか。奥さまのお買物のお供なら、うちのやつにさせるから、何もきみが行くこともあるまい」
「しかし、わがS星と違って、W星は曹操ににらまれているわけでもないし、孫閣下も州知事を名乗っておられる上は、G星の支配下にあることを暗に認めておられるのだろう。儀礼的に引見されただけならともかく、ここで戦術的な話までするのはW星の立場上まずいのではないか。
こっちは、曹操なんて屁とも思っていないけれど、孫閣下のお立場を考えれば、ヤブヘビになるようなことはするべきではあるまい。荒くれ揃いのわれわれS星人と違って、おとな

しいW星の人にとっては、やはり、曹操は怖い人なんだろうからね」
「誰が、曹操など恐れているものか」
それを聞いた周兪が憤然としていった。
「われわれとても、勇敢な点ではS星人にけっしてひけを取るものではないし、曹操ごときに膝を屈するつもりのないことは、よくご承知願いたい」
「これは、失礼致しました。もちろん、W星の精鋭ならば、無人戦闘艇などたとえウンカのように押し寄せても蹴散らしておしまいになるでしょう。正面から向かえば恐ろしい敵でも、機械は機械ですから、弱点さえ握ればもろいもの。おっしゃる通り、少しも恐れる必要などありません」
孔明は、恐縮したように頭を下げると、魯粛にいった。
「武官がたは、曹操など恐れてはおられない。それなら、無人戦闘艇など張子の虎みたいなものだから、心配はいらんよ。では、本当にこれで失礼しよう」
孔明が立ち上がったのを見た孫権は、慌てて声をかけた。
「先生。お待ち下さい」
「は、何かご用でございますか」
孔明は、いぶかしげな様子で振り向いた。
「隠さずに申し上げましょう。どうか、もう一度おかけ下さい」
何事かといった表情で、孔明は再び自分の席に戻った。実をいうとこの一瞬のためにわざ

わざW星までやって来たのだが、そんな様子はおくびにも出さず、
「翡翠の店のことなら、なるべく安い所をお教え頂けないものでございましょうか。わが国の政府の給料は、あまり高くないものでして」
などととぼけている。孫権は、重臣たちの顔を見廻して、皆が同じ気持でいることを確かめると、曹操から送りつけられた公文書を取り出した。
「つい先ほど、このようなものが曹操大統領から送られて参りました」
孔明は、手渡された羊皮紙の格式ばった文書をゆっくり読んでから、まるで他人ごとのようにのんびりとした口調でいった。
「州知事からW星の総督に格上げとなり、おまけにS星の半分の支配権まで下さるというのなら、閣下のお立場としては、まことに結構な申し出ではございませぬか。今のままでも、どうせ曹操の支配下におられるのですから、失うものは何もない。
われわれの兵力では、正直なところ二惑星連合軍を正面から相手にして勝てる見込みはございませんが、これまで通りゲリラ活動でS星の実質的な支配権を握り続けるつもりなので、こちらも今さら失うものはありません。
なぜ、このようなものを私などにお見せになるのでしょうか」
「先生は、先ほどからW星が曹操の支配下にあると何度もおっしゃいましたが、われわれとしては、そんなつもりは少しもなく、完全な独立国と思っております。長沙州知事を名乗っているのも、曹大統領の属官というつもりではなくて、この地位が父の代から実質的にはW

星総督であったからにほかなりません。
　曹操が、終身大統領に就任した以上、われわれはすでに三惑星連合共和国の一員ではなくなったのですから、名称はともかくとして、W星も自動的に独立国となったというのが私たちの解釈です。
　となれば、このような命令を受けるいわれはないし、劉備大統領には特にうらみもないので、戦争する気持はありません。しかし、この命令書のもう一つの意味が、G星軍に協力してS星を攻撃しないのなら、ついでにW星も攻略するという恫喝であることは明らかです。三惑星の運行を見るに、あと半年でW星とS星が合（ごう）に近づきます。曹操は、恐らくこの時を狙って親征軍を率いて来るのに違いない。
　私としては、W星の独立を保つために、G星軍への協力を拒絶する返書を曹大統領へ送りつけるつもりですが、それは、同時に無人戦闘艇百万機の攻撃にさらされることを意味します。普通なら、遠征軍の士気は衰えるのが常識ながら、曹操自身が親征してしかも士気に関係のない無人艇が主戦力とあれば、受けて立つのも容易ではありますまい。
　ところが、先生は、無人戦闘艇など弱点さえ握ってしまえば張子の虎だといわれる。ならば、ぜひその弱点をお教え頂きたいのです」
「なるほど」
　孔明は、両手の細長い指を組み合わせると、しばらく空中を見詰めていたが、ゆっくりと孫権の方を向いた。

「つまり、S星と同盟を結びたいと仰せになるのでございますか」
「その通り」
「しかし、わがS星軍は、あまりにも数が少なく、直接の戦闘にはあまりお役には立てませんが」
「戦闘の主力は、わが軍が引き受けます。先生には、無人戦闘艇相手の作戦を立てて頂くだけで充分です」
「S星軍も、戦闘に参加致しますが、この作戦にはある程度の物量も必要なので、W星と同盟を結び周兪どののような将軍がご協力下さるなら、必勝疑いなしでございます」
　周兪は、得たりとばかりうなずいた。孔明の口ぶりは、まことにさりげないものだったが、大軍を相手に歴戦して負け知らずの名参謀長の言葉だけに、孫権知事以下、居並ぶ一同の重臣たちも、思わず安堵の息をついた。

宇宙の盗難

「なあ、魯粛。私は、どうもあの孔明という男が信用できんのだ」
周瑜は、軍務省の執務室へひそかに呼び寄せた魯粛の顔をじっと見ながら声をひそめていった。
「貴公の旧友だというし、あの通りの弁舌だから、知事もすっかり信用してしまわれたようだが、G星軍の無人戦闘艇が孔明のいうように見かけ倒しの張子の虎かどうか、はなはだ疑問だぞ。
最新の情報によると、遠征軍はすでにG星を出発したということだ。が、これまで集めたデータを分析した限りでは、無人戦闘艇は張子の虎どころか大変な新兵器だ。何しろ今までの遠征軍というのは、兵器を操作する人員の居住空間や食料などのスペースと重量を運ぶためにエネルギーの大半を費やしていた。
ところが、無人戦闘艇なら、パイロットなしで大編隊の宇宙機動部隊をどこへでも派遣できるのだから、今までの戦略とはまるで違うはずだし、受けて立つこちらも考え方を変えなくてはならない」

「いかに恐るべき武器かは、孔明にさんざん聞かされているが」
「とにかく、これまでのパイロットの代わりを掌に乗るほどの超高性能コンピューターがやるのだから、どんなに頑丈な装甲をかぶせたところで重量の増加は僅かなものだ。
しかも、そのコンピューターと各部分とは、重力波で連絡しているのだから、旧式の戦闘艇なら一発で撃墜できたところを二十発も三十発も命中させないとびくともしない。もちろん、エネルギー消費も半分近くで済む計算になる。同じトン数の母艦で、実戦力が五倍の戦闘艇を積載できるのだ。
百万機の無人戦闘艇は、在来型の五百万機に匹敵するといってもいいすぎではないだろう。われわれの二十万機足らずの戦闘艇の戦力と比べると、象と犬ぐらいのものだ。S星の二千や三千の戦力など、せいぜい子ねずみ一匹程度で、ほとんど戦力ともいえない。
諸葛孔明は、その五百万機相当のG星軍をまるでオモチャの兵隊のようにいいふらしているが、口先の議論はともかくとして、証拠を一つも見せて貰っていないことは、貴公も承知だろう」
「証拠を見せろといっても、見せようがなかろう」
孔明を信じている魯粛は、強い口調でいった。
「それをいいことに、でたらめをいっていないとはいえまい。われわれがこのまま孔明のいいなりになって実際にG星軍と対決した時、本当に勝てるかどうか、私は不安でたまらないのだ。孔明のやつが、ただW星とG星を衝突させたいだけでああいっているのなら、むざむ

ざ策にはまるだけではないか。
　魯粛よ。貴公は、本当に孔明のいうようにこのまま曹操の大軍と戦って勝てると信じているのかね」
「もちろん、不安のないことはない。だが、どんな戦争でも不安はつきものだ。孔明という男は、けっして裏づけのないことをいったりしない。それに、S星に行ってからは、百戦百勝、負け知らずというのも事実だ。
　曹操と戦うと決めた以上、孔明を信じて戦機を待つほかないと、私は腹をくっているのだが」
「文官である貴公の立場ならそれでも良かろう。だが、わが軍をあずかる私としては、そんなことをいってはおれんのだ。
　無人戦闘艇の実情が知れわたるにつれて、将兵の間に不安の色が濃くなっている。今のところは、私が平然とした顔をしているだけで抑えていられるが、G星遠征軍がさらに接近すれば、動揺が大きくなるのは必定。というより、そうなってからでは手遅れだから、そろそろ何か手を打たねばなるまい」
「手を打つといっても、どうすれば良いというのだ。もともときみはG星軍に協力することに反対だったのだから、孔明がいなくても遠征軍と戦うつもりだったのだろう。孔明は、きみの行動を縛るようなことは何もいっていないのだから、どんな戦闘訓練でもやればよかろう。

　あの男は、まるで奥さんと一緒に人質にでもなったように、建業から一歩も出ない。護衛と称してきみの方から見張りをつけているから、たとえ逃げようとしても逃げ出せないではないかね。
　孫権閣下が、孔明の指揮下で戦うと決定された以上、このまま待つほかあるまい」
「名参謀諸葛孔明のもとで戦うと知れ渡っているから、下手な訓練などするわけに行かんだろう。閣下は、曹操が攻めて来るまでぶらぶらしていろと決められたわけではない。われわれもこのまま普通の戦闘訓練をしているだけではいたたまれない気持だ。
　私としては、ここらで孔明先生に名参謀としての腕前を見せて貰わないと困るのだ」
「しかし、いかに孔明でも、敵がいなくては戦争もできないだろう」
「戦争はできない。しかし、本当に噂通りの大物なら、凡人にはとてもできないようなことをやって見せてほしい。さもないと、わが軍の動揺はますます大きくなる……」
　と、いいかけて、周瑜は、ふと何か思いついたようにいった。
「そうだ。良い考えがある。貴公、孔明に連絡して、相談があるからといってこの軍務省へ呼び寄せてくれないか。そして、無人戦闘艇を一機分捕って来てほしいと頼むのだ。
　見たこともない新兵器を相手に、W星の運命を賭けた大戦争を始めようとしているのだから、それぐらいの注文をつけるのは当然だろうが」
　魯粛は、それを聞いて渋い顔をした。
「しかし、いかに孔明でも、そんなことができるはずはなかろう」

「私も、できるとは思っておらんよ。しかし、何をいっても言葉たくみにいい抜けるあの男が、どんな顔をするか見るだけでも、充分価値はありそうだがね。
いずれにせよ、こっちがいらいらしていることをはっきり知らせてやりたいのだ。すぐに連絡してくれないか」
「そうまでいうのなら、声をかけてみようか」
魯粛は、胸のポケットからカード電話を取り出して、孔明の宿舎を呼びだした。
「こういうわけでございますから、何とかしてG星軍の無人戦闘艇を一機手にいれたいと思いまして、お越し頂いたわけでして。先生のお力で、どうにかならぬものでございましょうか」
丁重極まりない周兪の言葉の裏に、自分に対する不信の気持を読み取った孔明は、あまり気乗りのしないような口ぶりでいった。
「無人戦闘艇をですか」
「さようでございます。交戦する前にどうしても見ておきたいと存じまして」
「はあ。一機ですか」
孔明は、香りの高い茶を一口飲んでから、口ごもった。
「あれは、集団戦法の兵器だから……」
「三惑星第一の軍師といわれる諸葛孔明先生でも、曹操の無人戦闘艇には手が出せぬと仰せ

でございますか」
周兪は、ますます丁寧な口調になりながら、ここぞとばかり皮肉たっぷりにいった。
「まことに残念至極なことでございますなあ」
だが、孔明は、無人戦闘艇のことにはまるで関心がなさそうに、見事な茶碗を掌にのせてじっと眺めている。
「これは、W星の焼物でございますか。まことに美しい絵つけで感心致しました。ぜひ土産に買って行きたいので、どこで売っているか教えて下さい」
「茶碗のことなどどうでも良かろう」
魯粛が、さすがにむっとしたようにいった。
「無人戦闘艇のことは、どうなのだ。ちゃんと答えてくれないと困る」
孔明は、顔を上げて魯粛の方を見た。
「無人戦闘艇のことなど気にするなといってあるだろう」
「きみは気にならないかもしれんが、軍部の連中は、夜も眠れんのだそうだ」
「しかし、一機だけ取って来るのはちょっと難しい」
「できないのならできないと、はっきりいってくれないか」
孔明は、笑いながらうなずいた。
「そうか。じゃ、はっきりいおう。一機だけは取れない」
「おいおい……何だ、そういうことだったのか」

ようやく孔明の真意がわかった魯粛も、笑い出した。取り残された周兪は、驚いて魯粛に向かい、

「おい。貴公まで笑うとは、どういうことだ」

「これは、失礼」

孔明は、表情を改めて頭を下げ、

「無人戦闘艇を使った場合の作戦は、百機を一つの編隊として攻めて参ります。そのうちの一機だけを捕獲するのは大変難しく、どうしても百機単位になってしまいます。

もっとも、九十九機を爆破して一機だけ持ち帰れと仰せならそう致しますが」

孔明が平然としてとんでもないことをいい出すのを聞いて、周兪は目をむいた。

「諸葛先生。それは、まことでございましょうな。あとになって、あれは冗談だったとおっしゃっても、認めませんぞ。その時は、私も軍人のはしくれ、侮辱されたものとみなして、ただでは済まさぬつもり」

「なぜ、冗談など申しましょう。ただ、私は魔法を使うわけではないので、捕獲した無人戦闘艇を運ぶのになるべく高速の戦闘艇母艦を一隻お貸し願わねばなりません。

ただし、重い戦闘艇は積まずに、餌代りの超高速度武装偵察艇を十隻だけ積んで、腕ききのパイロットを待機させて頂ければ、あとは細工はりゅうりゅう、十日ほどでご希望の無人戦闘艇を百機か二百機積んで帰って参ります」

とうてい不可能な無理難題を吹っかけたつもりだったのを、まるで隣へ行ってナベでも借

りて来るような孔明の口ぶりに、周兪は、驚いて口もきけない。ようやく、

「どのようなことでもお申しつけ下さい」

というのが、せい一杯だった。だが、その目つきを見る限り、周兪が孔明を信用しているとは思えなかった。

さて、孔明は、艦籍表を調べて一隻の小型母艦を選び出すと、すぐにスーツケース一つの軽装で基地へ飛んだ。艦長以下乗組員は、すでに周兪の命令を受けて待機していた。孔明は、臨時司令官として乗艦するとすぐにブリッジに上り、配線図と仕様書を示して、特殊な端子を増設するように命じた。技術下士官たちが作業を終えると、孔明は、持って来た小型の装置を接続して厳重な点検を繰り返してから、またその装置をはずして自室へ引き上げた。

戦闘艇母艦は、数分後に離陸してただちにW星の大気圏外へ出ると、そのままG星遠征軍に向けてジェネレーター全開で直行し始めた。

G星遠征軍は、新造の巨大な無人戦闘艇専用母艦百隻と補給艦五十隻を中心に、戦艦十隻、巡空艦五十隻で護衛する空前の大軍団である。その周辺には、常時一万機の無人戦闘艇が護衛に当たっているから、たとえ宙雷で奇襲しようがミサイルを打ちかけようが、瞬間的に反応する無人戦闘艇からのビーム攻撃によって爆破される。しかも、必要とあれば、十分以内に百万機の無人戦闘艇を全部発進させられるのだから、文字通り鉄壁の守りであって、

S星はもちろんのことW星の運命も、大鷲に睨まれた雀のようなものと思われた。

さらに、G星遠征軍は、もう一つの鉄壁の要塞を準備していた。直径十五キロメートルの小惑星で、酸化鉄を含んで赤く見えるところから〈赤い岩〉と呼ばれていた。〈赤い岩〉の長い楕円軌道は、W星の軌道と四ヵ所で接近しており、あと三ヵ月でW星と〈赤い岩〉は接近点の一つに達する。遠征軍が今目ざしているのは、その〈赤い岩〉だった。全軍を小惑星に着陸させる作戦は、司馬仲達が考え出したものだが、今度は隠密行動ではないので、W星に面した平地に着艦させる。これで、全方位からの攻撃を避けられるため、攻撃も防御も効率を二倍にできるというのが、曹操の参謀たちの考えだった。

いずれにせよ、曹操は自信満々だった。旗艦〈銅雀〉に座乗して程仲徳をはじめとする優秀な幕僚に囲まれ、毎日大型3Dスクリーンの中で図上訓練を繰り返しているが、どう攻められても負けるはずがないという結論しかでないのである。

とにかく、艦艇の数を単純計算しただけでも、W・S星連合軍の七倍以上あるばかりか、主戦力となる無人戦闘艇は、少な目に見ても在来型の戦闘艇の五倍の能力があるのだから、圧倒的兵力などという程度ではない。うずらの卵をつぶすのに鉄のハンマーを使うようなもので、たとえどんな三流軍人に指揮させても、自爆でもしない限り負ける方が難しい戦争だとしか思えなかった。

図上訓練の時、実戦経験のない若手の参謀にG星軍を指揮させ、大ベテランの程仲徳、郭嘉などの名参謀にW・S星連合軍を指揮させても、G星軍が必ず勝つので、曹操はますます

上機嫌だった。

「諸葛孔明とやらいう小わっぱの知恵も、この物量攻勢の前には歯が立たんだろうな」

いかに有利な戦いでも油断は禁物、ということを知り抜いている聡明な曹操や幕僚たちでさえ、あまりに有利すぎる状況の前に、気がゆるみがちになるのをどうすることもできなかった。

こうして、小わっぱ呼ばわりされた孔明の乗ったほとんど丸腰に近い戦闘艇母艦と、戦う前から征服者のような意気込みの曹操の率いる大軍団とは、互いに高速度で接近していた。武力だけを比較すれば、鼻息どころか鼻毛の先ででもはじき飛ばされるほど無力な孔明だったが、情報量という点では、曹操を圧倒していた。

何より、遠征軍では孔明の乗った母艦が接近していることなど知らなかった。探知するには遠すぎるし、平凡な一隻の戦闘艇母艦がW星の基地を離陸したところで、どんな諜報員もその意味を理解できるはずがない。

ところが、孔明は、遠征軍の針路から現在位置までを正確に知っていた。曹操の真意は、戦わずにW星を降伏させるところにあったため、威圧する目的で大っぴらな行動を取っていたからである。

探知可能な距離に達する直前に、孔明は艦を反転させた。同時に、くわしい指示を与えた超高速偵察艇を五機、遠征軍の方向に発進させた。偵察艇が遠征軍の探知可能距離に入ると同時に、G星軍側からは無人戦闘艇が迎撃に発進した。孔明の予想した通り百機から成る編

隊だった。

偵察艇は、無人戦闘艇の編隊を捕捉すると同時に小型ミサイルを発射してから反転し、中速度で逃げ出した。無人戦闘艇は、簡単にミサイルを撃破してから偵察艇の追跡に移った。

無人戦闘艇の制御機能は非常に複雑なものだが、大まかにいうなら、司令艦からのリモコンによる制御と、搭載しているＡＩ（人工知能）による自己判断による制御に分けられる。もちろん、リモコン制御が優先しているから、追跡させるか、あるいは撃退した段階で引き返させるかは、司令部の判断次第になる。この場合、司令部は徹底的に追跡して撃破し、当然その先にいるはずの母艦を攻撃するように指令を発した。

いかに新兵器といっても、最初のうちは誰にも実戦経験がないのだから、いろいろな作戦を立ててみるほかない。無人兵器の場合は、人間が死ぬわけではないから、思い切った作戦ができるのだが、特にこの場合は、百万機という大量の無人戦闘艇を搭載して来ているので、実戦場でのテストも兼ねて中途はんぱな使い方はしない。

Ｗ星の偵察艇は、逃げ足だけは速いので、無人戦闘艇の探知可能距離でありながら射程距離に入らないぎりぎりの所を悠々と飛んで、母艦に近づいた。

孔明は、ブリッジで高解像力レーダーの大画面をじっと見ていたが、偵察艇の後を追ってＧ星の無人戦闘艇編隊の機影が現れると、しばらくたってから右手を上げてオペレーターに合図を送った。それを見て、操作パネルの前にいる士官がキーボードを叩いた。

「これで、無人戦闘艇は、こちらの管制下に入った」

孔明は、静かな口調でいった。司令艦からの距離が遠くなり、リモコン用の電波強度が一定の水準以下に低下するのを待って、こちらから強力な電波を発信したのだ。その距離では、戦闘艇の装備しているレーダーではまだＷ星の母艦を探知することはできないため、Ｇ星の司令艦にもその存在はつかめていない。

蝶蟬（ちょうせん）が呂布（りょふ）のもとから盗み出して来たメモリーキューブを徹底的に解析した孔明にとっては、Ｇ星の無人戦闘艇はもはや秘密兵器ではなかったのだが、もちろん曹操たちはそんなことは露知らぬ。いずれ、無人戦闘艇と敵戦闘艇との交戦が始まるものと待っているうちに、いきなり連絡が絶えてしまった。

「おい。どうしたというのだ」

気づいた程仲徳が、担当のレーダー士官に向かっていぶかしげに尋ねた。

「何か起きたのか」

曹操も、敏感に雰囲気を察して腰を浮かせた。通信士官がうろたえた声でいった。

「突然、無人戦闘艇との交信が途絶（とぜつ）致しました」

「どういうことだ」

「ただちに、出力を上げます」

程仲徳が、高解像力レーダーのスクリーンを見ながらいった。

「無人戦闘艇編隊の像が消えたぞ」

「それは、解像力限界より遠ざかったためでありますが、交信の途絶した原因は不明であり

ます」

士官は、部下に命じて回路をチェックさせた。すべて異常はなかった。最新鋭の無人戦闘艇編隊の第一陣は、宇宙空間に消え失せてしまったのだ。

「あらゆる手を尽くして原因を調査し、報告せよ」

得意の絶頂にいた曹操は、この意外な成り行きにショックを受けた様子だった。しかしさすがに表面は平然として私室へ引き上げたが、ドアを閉めると同時にわめいた。

「またもや、孔明とかいう男にしてやられたのに違いない」

曹操は、大きな椅子に体を投げ出すように座ると、孔明が百機もの無人戦闘艇を宇宙でかき消してしまうことのできた理由を考えた。技術上の専門知識が乏しいので、統率者としては、こまかいことはよくわからなかったが、この際、技術論など問題ではなかった。完全無欠と思われたこの計画全体を見通して、どの部分に穴があったのかを確実に知る必要があったのだ。

「呂布のやつ以外に考えられん」

三十分ほどたって、曹操はつぶやいた。無人戦闘艇の開発計画を隅から隅まで細かく分析してみても、ほかに弱点があるとは思えなかった。

――あの男は、董卓の金につられて呂2号を作り、次は女の色じかけにかかって董卓を殺した。今度は、おれの見せた地位と金につられて無人戦闘艇を作ったものの、またぞろ、金か女のためにそれを売ったというわけか。節操のないあの男なら、それぐらいのことはやり

かねん――

だが、さすがの曹操にも、厳重な監視のもとで呂布がどうして無人戦闘艇の秘密を売ることができたのかは見当もつかない。まして、あの蝶蟬が孔明の妻になっているとは、夢にも思わなかった。今では、女など男の道具ぐらいにしか考えていない曹操は、蝶蟬のことなどとっくの昔に忘れてしまっていたのである。

曹操が、恐ろしい顔で考え込んでいる時、ブリッジは大騒ぎになっていた。

「超高速偵察艇を五機発進させて、状況を偵察、報告させろ。無人戦闘艇操作用の全回路を点検。予備回路に接続しろ……」

程仲徳は、大統領の姿が見えなくなると、次から次へと命令を下した。技術兵たちは、息せききって駆け廻り始めた。

――今までが順調すぎたのだ。実戦では、これぐらいのことがあっても当然なのだ――

そう思って心を引き締めながらも、予想もしなかった奇妙な成り行きに、程参謀長は、地平線のかなたに突然湧き上がった黒雲を見た時のような、いいしれぬ重苦しい気分にとらわれていた。

にわかに騒然となった遠征軍側と違って、スピードを上げた偵察艇が帰投したW星の母艦では歓声が上がっていた。おもちゃのようなミサイルをたった五発、でたらめに発射しただけで、無人戦闘艇百機が戦利品としてついて来たのだから、エビでタイを釣るどころかミミズでクジラを釣ったようなもの。士気が上がって当然である。

「第五ハッチを開いて、捕獲した敵機を係留するよう待機させて下さい」
スクリーンを見ていた孔明が、艦長に伝えた。
「第五ハッチを開き、戦利品係留準備」
艦長が命令した。最大の搭載ハッチが大きく開いた。
「さあ。獲物が網に入るところを見物しに行こうではありませんか」
孔明は、艦長を誘った。艦長はうなずくと、当直の士官に合図してから孔明のあとに続いた。二人が、戦闘艇を係留できるようになっている艦倉を頑丈なメタレックスガラスの窓ごしに見おろす位置へ行って待っていると、間もなく整然と編隊を組んだ無人戦闘艇が、次々と着艦し始めた。高度のＡＩ機能を備えているため、いちいち誘導などしなくても、目的の位置さえ入力すれば、あとは自力で見事に着艦する。
「人間のパイロットより上手な着艦ですなあ」
ハッチの開口部を自動的に測定して等間隔に着艦し、整列しながら広い艦倉に滑り込んで来る無人戦闘艇を見ながら、艦長が、感に耐えないような声でいった。
「まことにしつけの良い子供たちですな。いや、素晴らしい性能だ」
孔明は、笑いながらいった。
「艦長。敵無人戦闘艇百機、無事収容致しました。ただちに係留作業を始めます」
間もなく、現場の指揮に当たっている士官が、喜びに弾む声で報告した。孔明は、それを聞くと艦長にいった。

「直ちにハッチを閉鎖して本艦のジェネレーターの限界まで加速し、全速で帰投して下さい。ここで、敵に追いつかれたらおしまいですからね。
まあ、こちらは荷物が軽いから探知可能距離にも近づけないはずですが」
獲物を積んだ戦闘艇母艦は、無事にＷ星に帰りつくと、もとの基地ではなく首都建業に近い基地に着陸した。
孫権は、張昭、魯粛、周兪などの重臣を連れてひそかに迎えに来たが、あれほど恐れていた無人戦闘艇が新品のまま百機も輸送艦の中にずらりと並んでいるのを見て、大喜びである。重臣たちも、まるで夢のような結果に驚いたり喜んだりした。
「うむ。さすがに三惑星で第一の軍師といわれるだけあって、大した男だ。この手並みなら、曹操百万の大軍も恐れるに足らぬでございましょう」
艦長の報告を聞いた張昭は手放しの喜びようである。だが、周兪は表面では調子を合わせているものの、内心では孔明に対する警戒心をいっそう強めていた。
――確かに、無人戦闘艇を百機取って来た。これは、驚くべきことだ。だが、どうやって敵の無人機を操ったかについては、ひとことも話さない。肝心のコンピューターらしい装置には技術士官たちにさえ手を触れさせなかったという。
油断はならぬ。いずれ、曹操の軍を破った時には、孔明も始末してしまわないと、わが国に百年の災いを残すだろう――

だが、それを知ってか知らずか、孔明は、事務的な挨拶を済ませると、例のスーツケースを片手にさっさと蝶蝉の待つ宿舎に帰っていった。

〈赤い岩〉

「地表へ向けて三号ビーム放射開始」
郭嘉（かくか）提督の命令が下ると、旗艦〈銅雀（どうじゃく）〉以下五隻の戦艦は、一列横隊になって一斉に白熱したビームを地上に放射しながら前進し始めた。
小惑星〈赤い岩〉のさして広くもない赤褐色の平野部では、コンピューターの選び出したランダム点に深透型爆弾が打ち込まれ、ひそかに埋設されているかもしれない爆弾を誘爆させる処置が取られた。爆弾の仕かけられている気配はまったくなかったが、それでも艦隊の着陸する平原では、さらに念を入れて、ビーム放射によって地表を切り裂いた。
艦列が進むにしたがって、五本の白熱した線が伸びて行った。やがて、戦艦は隊列を組んだままその線に交わるもう一組の白熱した線を地上に描いた。
「ランダム爆撃開始」
ビーム放射を受けなかった部分に、再度ランダムに爆撃点を定め、強力な深透型の爆弾が投下された。〈赤い岩〉は、激しく揺れ動いた。もし、爆弾が仕かけてあれば、たとえリモコン信管であっても、これだけの衝撃を受ければ誘爆するに違いないほどの激しさだった。

各艦からの報告は、すべて『異常なし』だった。情報艦からの報告も、『攻撃を受けなかった地点のいずれかに爆弾が埋設されている可能性は、十のマイナス六乗以下』というものだった。

「よろしい。全艦、十分後、予定位置に着陸せよ」

ここへ来るまでに、すでに百機の無人戦闘艇が原因不明のまま煙のように消え失せているので、遠征軍はかなり神経質になっていた。あの諸葛孔明のことだから、G星軍が〈赤い岩〉を臨時基地として使うぐらいのことは見通していて、地雷かリモコン爆弾を敷設してある可能性は充分ある。

その危険を避けるため、基地に使う場所を到着後に決定したのち、全域に爆弾を投下し、さらに着陸地域に対してランダムにビーム放射や爆撃を行ってから着陸することになった。〈赤い岩〉の宙域到着直後の緊急幕僚会議で決定されたことなので、事前に敵に洩れる心配はまったくなかった。

地表が安定を取り戻した頃になって、遠征軍の宇宙艦は続々と着陸を開始した。その勇壮なことは、まさに三惑星最大の宇宙軍団だけのことはあり、もし、W星宇宙軍の将兵がこの様子を見ていれば、それだけで戦闘意欲をそがれてしまったことだろう。

まず、中央に旗艦〈銅雀〉が堂々と着陸し、周囲を戦艦が取り囲んで砲門を上空に向けて開く。その外側には補給艦と輸送艦。そして、臨戦態勢の巡空艦群がやや浮上したまま全体を哨戒する上空には、常時十万機の無人戦闘艇が金粉をまき散らしたように護衛に当たって

いる。

ほとんど無重力に近い空間では、反重力艇のエネルギー消費は非常に少なく、人間のパイロットさえ乗っていなければ、何機飛んでいようと問題ではないから、制御可能な範囲でできるだけ多く飛ばしているのだ。

下は頑丈な岩石、上は巨大戦艦の砲門と巡空艦の全方位攻撃兵器、さらには無数といっていいほどの無人戦闘艇の攻撃力に守られて、〈赤い岩〉は史上空前の要塞となった。恐らく、かつて人類の作ったどのような攻撃力をもってしてもこの要塞を攻略することはできないと思われた。

しかも、〈赤い岩〉は、この最新兵器を集積した戦闘集団を遠征軍側のエネルギー消費なしに宇宙空間をW星へ向けて運んでくれるのだ。

一方、W星側では、解像力を高めるため百キロメートル間隔に超波大型アンテナを並べた3Dレーダーで、この様子を観測していた。遠征軍の動きは、無人戦闘艇一機ずつまで正確にわかるのだが、迎撃する側の周兪総司令官の顔色は、くわしい情報が入るたびに青ざめて行った。

見れば見るほど敵軍の備えは完全というほかなく、W星軍のお粗末さばかりが気になる。同盟国のS星にいたっては、参謀長の孔明が、美人の女房を連れて滞在しているだけで、援軍を送って来る様子もない。もちろん、二千機や三千機の戦闘艇など今さら来てくれても焼石に水だから、どうでもよいことであるし、今さら孔明に頭を下げて頼むのもメンツにかか

わる。

すべての状況が、神経の細い軍務大臣にとって絶望的だった。大秀才軍人の周兪は、心労のあまりついに執務中に倒れて動けなくなってしまった。

驚いた孫権知事は、医師を呼んで様子を尋ねたが、ほとんど危篤状態なのに検査結果では特に異常は認められないという。バランス感覚にかけては人一倍優れている孫権は、危篤状態の人間が正常だという検査など信用せず、ひそかに孔明を呼び寄せて相談した。事情を聞いた孔明は、驚いた様子もなく、

「では、私が軍務大臣をお見舞い致しましょう。多分、すぐに良くなられるはずでございます」

と、こともなげにいった。

「何と仰せられる」

孫権は、目を見張った。

「先生は、医術の心得もおありでいらっしゃいますか」

「心の病については、いささか心得ております」

「では、さっそく病院へ……」

「かしこまりました」

孔明は、差し向けられた地上艇に乗って、周兪の入院している軍務病院へ行った。秘書官の案内で病室に通ると、周兪は、やつれた顔で孔明を見て溜息をついた。

「今さら何かご用ですかな」

「大臣閣下と私以外は、全員病室の外へ出るように」

孔明は、秘書官に命じた。すぐに、病室は二人だけになった。孔明がベッドに近づくと、衰弱した周兪の表情には反射的に恐怖の色が浮かんだ。しかし、孔明は、それを無視して耳もとに口を寄せると、押し殺した声でささやいた。

「あのグループの小惑星のすべてには、S星軍の手によって昨年のうちにメガ級の質量爆弾がしかけてあります」

「なんと……」

周兪の顔にやや血色が蘇ったが、それでもまだ不審そうに尋ねた。

「だが、どうして探知されず、誘爆もしなかったのでありましょうか」

「比較的大型の小惑星には、空洞の多いものがあります。〈赤い岩〉もその例に洩れず、中心部近くにちょっとした空洞があるので、亀裂を利用してその部分に質量爆弾の炸薬を注入致しました。炸薬は、ただの高分子金属なので空洞の形に流れ込みますから、人工地震による探知ぐらいでは周囲の岩盤と区別できません。精密なボーリングなどしていれば、それだけで何年かたってしまうでしょう。

それに、超重合信管をセットしない限りあの炸薬は土くれ同然で、たとえ核爆弾を叩きつけようとも煙さえ出ないことはご存じの通り」

「しかし、孔明先生。メガ級の爆弾程度で、はたして敵にどれほどの被害を与えられましょ

うか」
「たとえ小型のメガ級爆弾でも、質量爆弾は質量爆弾です。〈赤い岩〉程度の小惑星の中心部で爆発したならば、岩の組織に沿って大きな亀裂が入り、いくつかの塊に分裂するでしょう。その時、W星に充分接近していたならば、潮汐力も作用してかなり激しく震動し地表は十メートル程度動きます。そうなれば、G星軍の艦艇の大部分が大破することは確実で、戦う前に勝敗は決まります」
　周兪の顔色は、ほとんど普段と変わらなくなっていた。
「それで、信管がリモコンで起動できるように新しい工夫をなさったのですかな」
　にわかに元気になった周兪は、見舞客の持って来た果物に手をのばしてむしゃぶりつきながら尋ねた。孔明は、首を横に振った。
「それは、いささか無理というもの。質量爆弾の信管は非常に敏感です。G星軍があのような予防措置を取ることは予想できましたから、あらかじめセットしておくことはしませんでした。今から誰かが行って信管用のチューブに入れて来なくてはなりません」
　口のまわりを果物の汁で汚した周兪は、大きくうなずいた。
「孔明どのの読みの深さは、私ごときのとうてい及ぶところではござらぬ。いや、劉備大統領は、お幸せなお方だ。というより、S星との同盟を決められたわが孫権閣下の先見の明も、大したものでありますなあ。さすがは、偉大な孫堅さまのお子であらせられる」
「まことに」

　孔明は、もっともらしく頭を下げながら、
「信管をセットする作業は、かなり危険なため、もちろんわがS星の鉱山専門家を派遣致します。こちらにはご迷惑をおかけ致しません」
「な、何をいわれる」
　ベッドをびしょびしょに濡らしながらメロンを二個平らげた周兪は、皮を床に叩きつけると勢いこんでいった。
「それはなりません。それでは、あまりにS星のお世話になりすぎだ。信管を取りつける作業だけは、断じてわがW星が引き受けますぞ」
　だが、それを聞いた孔明は薄笑いを浮かべて、
「失礼ながら、そちらには専門家がおられますか」
「何と仰せられる」
　周兪は、ベッドの上に正座すると、孔明を睨みつけた。
「先生。W星軍には、技術専門の将軍、士官が大勢おります。質量爆弾の専門家とて、S星に負けないほどいるはずです」
「いや。これは失礼致しました。無礼の段、お許し下さい。そういうことでしたら、資料だけお渡しして、あとはすべておまかせ致します」
　孔明は、丁重に頭を下げたが、なお脅かすようにいった。
「しかし、軍務大臣。どのようにして、敵に発見されずに〈赤い岩〉に接近されるおつもり

ですかな。発見されれば、すべて水の泡。W星の勝ち目はなくなりますぞ」
周兪は、自信たっぷりな笑いを浮かべながら答えた。
「私の知恵は、孔明先生には遠く及ばないまでも、その程度の謀略なら何とかこなしますわい。そうでなければ、どうしてお引き受けするものですか」
「繰り返して申しますが、正確なタイミングを計って質量爆弾を起爆させない限り、W星は曹操（そうそう）の手に落ちるのですぞ」
「孔明先生」
周兪は、不敵な笑いを浮かべた。
「この私は、蛮勇とは無縁の男でしてな」
「ほう。それでは、おまかせ致しましょう」
周兪がここまでいう以上、まかせても大丈夫という確実な感触をつかんだので、孔明はゆっくり立ち上がった。W星側ですべて手がけてくれるのに、文句をいういわれはないのだ。
「それでは、まだしばらく時間がありますゆえ、ごゆるりとご静養下さい」
「何をいわれる」
周兪も、立ち上がった。メロンを食べたせいもあるのか、足もとがしっかりしていた。
「こうしてはいられない。ご一緒に孫権閣下の所へ行かなくては……」
病室のクローゼットを開くと、周兪は、中の衣類を引きずり出して身につけ始めた。初老の男の着替えなど見ていてもしかたがないので、孔明が窓の外へ目を向けていると、すぐに

周兪の声がした。
「さあ。孔明先生。参ろうではありませんか」
孔明は、うなずいてドアを開き、先に立って外へ出た。その後から、さっきまでとは別人のように元気な軍務大臣が悠々と姿を現した。目を丸くしている秘書官に向かって、周兪は笑いながらいった。
「わしは、すぐ帰るから、乗物の手配をしてくれ。それから、病院の方へは、孔明先生に頂いた特効薬のおかげですっかり良くなったと伝えておいてほしい」

ほんの十年ほど前までは、三惑星連合共和国という同じ国だっただけに、三惑星間の敵と味方はそれほどはっきりしていない。特に、もともとが官僚国家だっただけに、社会的地位の高い者には仲間意識が強い。もちろん、はっきりした考えがあって曹操、劉備、孫権のいずれかに従っているエリートたちも大勢いるが、三人ともそれなりに優れた指導者だから、現状には一応満足しているものの、特に忠誠を誓うほど積極的でないものが圧倒的に多い。
要するに、大部分は成り行きで現在のボスのもとにいるだけなのである。
特に庶民の場合は、イデオロギーなど二の次で、安楽に暮して行けるならトップが誰でもかまわないという傾向が一層はっきりしている。劉備に人気があるのも、官僚制度を維持するだけのためにあったややこしい規則を取り払って、自由で風通しの良い政治をしているからで、同じ結果になるのなら議会制民主主義であろうがなかろうがかまわない、というのが

本音だろう。
こういう状態だから、生死をともにして来た仲間以外は、その時の利害関係によって敵にも味方にもなり得る。
つまり、誰も信用できないのだが、だからといってすべてを疑っていては何もできないばかりか、チャンスを逃す恐れがある。その時その時の状況と、相手の人物次第で信用するかどうかを決めなくてはならないのだ。
これに失敗すれば直ちに命にかかわるのだから、戦国時代のトップの立場は、まことに難しいものといわねばならない。
周兪は、気が小さく老獪な性格だけに、こういう心理については誰よりもよく知っていた。主な部下の一人一人については、信頼できる状況と信頼できない状況についてのくわしいリストが頭の中にでき上がっていたほどなので、孔明が、〈赤い岩〉に信管を仕かけに行く者が必要だというのを聞いた時、ただちにある人物の顔を思い浮かべた。退役直前の技術少将、黄蓋だった。
黄蓋は、G星生まれなので最初はG星で勤務していた。当時まだ若かった曹操の上官だった時期もある。W星へ来たのは、通常の転属命令に従っただけで、働き盛りの将校としては珍しいことではなかった。ただ、W星へ来てからは、孫堅知事の人柄に惚れ込んでしまい、以後、W星に住みついたのだった。もちろん、今の孫権知事の信頼も厚く、退役後は充分な年金を受けながら、しかるべき民間会社の技術顧問としての生活も約束されていた。

なぜ、こういうまともな人物を重要な謀略の場面で思い出したかというと、まず、何よりも黄蓋の侠気のある性格とW星に対する強い愛着と孫権への忠誠心を信じていたからだ。もう一つは、事務的な転属命令でW星に赴任したままの黄蓋なら、年をとってから故郷へ帰りたくなっても不自然ではなかったからだ。
周兪は、役所へ帰るとまっさきに黄蓋少将を呼びよせた。病床にあるはずの大臣に呼ばれて駆けつけた黄蓋は、元気そうな周兪の顔を見て意外に思ったが、その話を聞いて二度びっくりした。
だが、気骨のある黄蓋は、すぐにうなずいた。
「よろしい。お引き受け致しましょう。第一線に立って戦う機会などほとんどない技術将校が、空前の大軍をこの手で撃ち破れるなら、軍人の本懐これにすぎるものはござらん。ただ、だます相手が大きいだけに、こちらも大きな芝居をせねばならぬ。
軍務大臣どの。これは、小細工では片づかぬ。知事閣下を巻きぞえにするほどの政治問題にする必要がありますぞ」
「どのようにすれば良いでしょうか」
地位は自分の方が上でも、相手は軍歴が長く年齢もかなり上なので、周兪の方がついへりくだった態度になって尋ねた。黄蓋は、やせた厳めしい顔を引き締めて答えた。
「敵を欺くには、まず味方から欺かねばならぬと申します。大臣閣下さえ最後まで私を信じて下さるなら、長年お世話になったこの国のために、古狸の化かしの腕前をお見せ致しまし

ょう」
「こちらからお願いしたことゆえ、たとえどんなことがあっても将軍を疑うなどということはございません。どうか、計略をお聞かせ下さい」
「では、このように……」
しばらく打ち合わせをしてから、黄蓋少将は周兪に目くばせすると、つと立ち上がった。そして、足音も荒々しく部屋を横切り、乱暴にドアを開きながら大声でいった。
「貴様のような愚か者が、国民にいたずらな犠牲を強いるのだ。わが国のへっぽこ軍隊でG星百万の大軍に本当に勝てると思っておるとすれば、それは神がかりというものだ。
G星は、わしの故郷だ。こんな田舎惑星には、もう飽き飽きしているから、とっとと曹操の所へ顔を出して、凱旋艦隊に乗せて貰って帰るわい」
周兪も負けず劣らずの大声でわめき立てた。
「何をいうか。この裏切り者め。G星の遠征軍など、見かけ倒しの大軍だということぐらい、黄蓋将軍ともあろう人によもやわからぬはずはあるまい。それでは、まるでカカシを見て驚くスズメと変わりがないではないか。
長い間、わが国の禄(ろく)を食(は)んでおきながら、いざとなればG星に寝返るとは、見下げたやつ。逮捕して軍法会議にかけるぞ」
「何をほざく。この半病人の若造が。本当のことをいって悪ければ、軍法会議でも査問でもどこへでも出頭してやるわい」

黄蓋は、叩きつけるようにドアを閉めると、足音も高く出て行った。びっくりして廊下へ飛び出してきた武官も事務官も、大臣と老将軍の争いにはうっかり口出しもできず、慌てて目くばせし合って首を引っ込めた。
諸葛孔明が手つかずの無人戦闘艇を百機もかっさらって来たことなど、一握りの上層部しか知らないことなので、軍務省の内部でもG星遠征軍に対する評価はまちまちだった。軍人たちはトップの方針には逆らわない習慣が身についているため、表面に出さないだけなのである。
というより、孫権知事はじめ周兪、魯粛(ろしゅく)などの高官に対する信頼感は、非常に強かったし、S星の名参謀長である諸葛孔明が平然と滞在しているのも、動揺を抑えるのに大きな効果があった。だが、黄蓋のようなベテランの技術者将軍が、場所もあろうに軍務省の中で軍務大臣と大げんかをして、『G星軍に勝てるはずがない』とわめき立てるのは穏やかではない。たちどころに噂は噂を呼んで、やがて孫権知事の耳にも入った。
温厚な孫権も、有力な将軍の発言とあっては見逃すわけにいかない。すぐひそかに喚問しようとしたが、黄蓋は、その時すでに試運転の名目で新造の偵察艇に乗り込んでW星を脱出していた。それを知った孫権は、驚くと同時に激怒し、敵前逃亡罪で逮捕して軍法会議にかけるよう命令した。
周兪は、すぐ高速の戦闘艇部隊に追跡させたが、相手が悪かった。一切の武装をはずした新型の偵察艇は予想外に速く、行く手をさえぎるように上昇してビーム攻撃をしたものの、

片翼に損傷を与えただけで、完全に振り切られてしまった。大気圏の外へ出てしまえば、翼の損傷など影響なく飛行できるからだ。そして、この時、うろたえる追跡部隊の指揮官と周兪との切迫した通信は、すべてG星軍に傍受されていた。黄蓋は、曹操に内通すると同時に、W星が戦闘中の通信に使う暗号解読用の資料を送ったからである。

　黄蓋の乗った偵察艇は、W星軍の制宙圏を抜け出すとまっしぐらに〈赤い岩〉に向けて加速を続けた。

「無事に脱出して来たようだな。けっして攻撃するではないぞ」

　じっと、3Dスクリーンを見ていた曹操が念を押すようにいった。

　曹操も幕僚たちも最初はこれが謀略ではないかと疑ったのだが、丸腰の偵察艇が体当たりしたところで戦闘艇一隻も撃墜できるかどうか怪しいし、徹底的に身体検査をすれば針一本持っていてもわかるのだから、受け入れて損はないという結論に達したのだった。

　黄蓋の偵察艇が接近すると、迎撃の無人戦闘艇は命令通り編隊を大きく二つに分けて通した。大気圏内でも高速度で飛べる細長い針のような機体は、一瞬のうちにG星軍の防衛線を突破したが、攻撃力のないことが一目でわかるばかりか機体が損傷しているので、警戒心を抱いた者は一人もいなかった。

　偵察艇は、そのまま一直線に飛行を続けたが、〈赤い岩〉まであと五十キロメートルあたりまで接近した時、急に不規則な動きを見せ始めた。

「被弾しているようであります」

　パイロット出身の参謀がいった。確かに、それは反重力装置が不調な時に特有の跳びはねるような動きだった。

「そのようだな。だが、あの程度なら着地はできるだろう」

　曹操がいった。黄蓋の艇は、複雑なコースを描いて〈赤い岩〉に接近したが、艦隊が着地している付近にはうまく近づけないらしく、ごつごつした地平線の向こうに消えて行った。

「すぐ画面を切り換えろ」

　程仲徳（ていちゅうとく）が、どなった。だが、〈赤い岩〉での探知システムは、外部からの攻撃を目標としていて、地表での動きには重点をおいていない。もともと、地上戦などできる場所ではないし、する必要もないからだ。W星に面していない側の探知に当たっている情報艇のうちの一機が、外に向いていた探知システムを慌てて地上に向けた時には、小さな偵察艇の姿はどこかへ消えていた。

「不時着したのだな。すぐに、捜索するのだ。一刻も早く、黄蓋将軍を救出してW星のくわしい内部事情を知らねばならぬ」

　曹操が、いらいらした表情でいった。だが、いかに小惑星といっても、直径十五キロメートルはある。探知の盲点をついてけわしい岩の間に着地した全長十メートルそこそこの偵察艇を探すのは容易なことではなかった。

　黄蓋の方は、W星艦隊の着地している平原の裏面に廻り込んだ時、探知波のノイズが消えたのを知ってほっとした。何もない岩原に対する探知が行われていないことを祈っていたの

だが、その予想が当たったからである。かつてはベテランのパイロットだった技術者将軍も、今では戦闘艇相手のドッグファイトには向かない年齢になっていた。しかし、それでも被弾しているような飛行をして見せながら、小惑星の複雑な地形の岩山の間に偵察艇を無事着地させる程度のトリック飛行なら、若いパイロットより上手なほどだった。

弱い重力ながら、艇が岩の間に落ち着くのを待って、黄蓋は、宇宙ヘルメットの具合を確かめてから、後部座席に固定してあった質量爆弾用の信管を取り上げた。そうしている間にも、〈赤い岩〉はW星に近づいているので、気が気ではない。黄蓋は、艇のパネルについている標準時計と自分の腕時計が合っていることを確認してから、信管のタイマーをあらかじめ孔明に指示された爆破最適時間にセットした。

作動し始めた信管を、宇宙服の背中についているハーネスにかけると、黄蓋は立ち上がった。重量はほとんどないが慣性はあるのでぶつからないように動くのにはかなりの経験が必要だ。

探知を一分でも遅らせるために艇のジェネレーターを止めた黄蓋は、エアロックを開いて跳び出した。ほとんど無重力に近いのだが、さすがに慣れたもので、上空からはっきり見定めてあるポイント目指してほとんど水平に近い方向に向けて正確にジャンプする。垂直に切り立った岩に両足を揃えてぶつかっては方向転換する行動を何度か繰り返すと、明らかに人工の加わっている裂け目のそばに来た。

黄蓋は、たくみにスピードを減殺すると、右腕につけてある情報ボードを見て位置を確認

してから、両手両足を使ってその中に入って行った。中へ入ってからヘッドランプを点灯すると、爆撃のせいか壁がかなりくずれ落ちている様子だった。だが、岩の割れ目伝いに降りて行くと、きらきら光る金属鉄鉱床の露頭の間に、信管をセットするバヨネットがしっかり固定されているのが見えた。

——さすがは、諸葛孔明……——

心の中で感嘆しながら、黄蓋はそのすぐそばにふわりと着地した。こういう場所なら、たとえ最新型の金属探知機で地表から調べられても、周囲の地層がすべて金属なのだから、発見される恐れはまずないのだ。

黄蓋は、ハーネスから信管をはずすと、慣れた手つきでバヨネットに取りつけ、太いボルトをしっかり締めた。これで、もう〈赤い岩〉には用はない。あとは、離脱するだけだった。ゆっくり地表に出ると、ヘッドフォンに音声が入って来た。

「……黄蓋将軍。ご無事なら応答願います。こちら、G星軍。こちら、G星軍。黄蓋将軍。ご無事なら応答願います」

こちらの発信回路は最初から切ってあるので、探知される心配はなかった。黄蓋は、慎重に谷の底を伝って偵察艇へ向かった。注意して見ると、このあたりには鉄やニッケルの鉱床が到る所に露頭しているのがわかった。小型艇程度の金属の塊ならどこにでもごろごろしているのだから、不時着した宇宙船を探すのは容易なことではなさそうだった。まず発見される気づかいはあるまいと安心しながらも、黄蓋は孔明の読みの深さにただ感心するばかりだ

った。
　艇にたどりついてコックピットに座ると、安全限界時間まであと六分残っていた。G星軍がしきりに呼びかけて来るところを見ると、まだ発見されていないことは確かなので、黄蓋は、ぎりぎりの時間まで待機することにした。早く飛び立てば、それだけG星軍に発見される時間が長くなり、質量爆弾が爆発するまでごまかして間をもたせるのが難しくなる。G星側に孔明の半分でも頭の切れる人物がいれば、警戒するはずだ。
　もう信管をはずす時間はないが、用心してG星艦隊が〈赤い岩〉を百メートルも離れてしまえば、敵の受ける損害は激減する。骨の髄までの軍人である黄蓋としては、たとえ自分は危険を冒しても作戦を失敗させたくなかったのである。
　安全限界時間の二十秒前に、黄蓋はジェネレーターをスタートさせた。十秒で重力回路がフルパワーになる。
　タイマーがゼロ秒を表示したが、黄蓋はまだ発進操作をしなかった。安全限界時間はあくまで統計的に計算された結果なので、ベテランパイロットが最新鋭の偵察艇で脱出する場合なら、まだいくらか余裕があるはずだからだ。さらに三十秒が過ぎた。黄蓋は、レバーを引いた。艇は静かに浮上した。
　谷間を離れると、偵察艇は急に加速した。ほとんど同時に、艇はG星軍の探知網にかかったらしく、はっきりした呼びかけが聞こえた。
「黄蓋将軍。こちら、G星軍。すぐに救出に向かいます。そのまま着地して下さい」

　黄蓋は、それを無視してまた不規則な飛び方を始めたが、このままでは疑われるので、発信機のスイッチを入れてひどいノイズを流しながら、叫んだ。
「×××こちら、黄蓋。××コントロール×××××コントロール不能。×××コントロー××不能」
　真に迫った故障の演技を続けながらも、黄蓋は、少しでも〈赤い岩〉から離れる方向へ艇を操作して行った。すぐに、G星軍の偵察艇が接近して来た。あまりそばへよられると機体に損傷のないことがわかってしまうので、黄蓋は、またとんでもない方向へ遠ざかった。さすがにいくらか不審に思ったのか、さらに数機の偵察艇が接近した。
　爆発まで、あと三分だった。黄蓋は、顔に脂汗が流れるのを感じながら宇宙空間で一世一代の芝居を続けた。だが、五機も六機もの偵察艇に包囲され観察されれば、損傷がごく僅かにすぎないことがばれてしまう恐れがある。
　黄蓋が、芝居ももはやこれまでと、ジェネレーターを全開にして逃げ出そうとした時だった。〈赤い岩〉が少し揺れたように見えた。目をこらして見詰めると、次の瞬間、小惑星の表面に小さな稲妻のようなかすかな閃光が見え、続いて、白く輝く光の筋が幾筋か見えた。だが、それ以上の変化は起きなかった。
　あれで、効果があるのだろうかと、いぶかしく思いながら、黄蓋は反射的にまた偵察艇を加速させていた。今度は、G星軍の無人戦闘艇など問題ではなかった。〈赤い岩〉の岩体そのものが四散しないまでも、小さな破片が飛んで来る危険があったからだ。だが、それ以上

何の変化も起きなかった。全速力で逃げながらも、観察を続けていた黄蓋は、やがて大きくうなずいた。

――さすがは孔明だ。あの程度の爆発なら、大きな破片がW星まで飛んで来る危険はまったくない。ところが、〈赤い岩〉に陣取っているG星艦隊にすれば、地面が瞬間に十メートルも動けば被害甚大というわけだ――

まさにその通りで、G星の艦隊は一瞬のうちに大混乱におちいっていた。中心部に仕かけられた質量爆弾の爆発によって、〈赤い岩〉の表面は、最初はゆっくりと持ち上がり、すぐさま激しく揺れながら二十メートルほど隆起した。地表といっても、大きな惑星上とは違ってほとんど無重力に近いのだが、それでも質量の大きな大型宇宙艦は慣性も大きい。しかも、艦の安定を保つために〇・二G程度の重量が発生するように調節しているし、艦内は一Gとなるように重力コントロールが行われているところを、いきなり二十メートルも突き上げられてしかも激しく震動したのだ。

超大型の輸送艦や戦闘艇母艦は、まるで大型のハンマーでなぐりつけられたような衝撃を受けて、いったん空中へ放り上げられ、次の瞬間には艦を安定させていた人工重力に引かれて墜落した。もともとそれほど頑丈ではない着地用の脚は、簡単にひしゃげてしまったから、揺れ動く地面に巨体が激突した。本来、宇宙空間に浮かんだ時に安定するように設計されている輸送艇は、この種の衝撃にはあまり強くないから、無残に変形して大破した。

艦内の重力コントロールも、これほどの瞬間的な衝撃にはとうてい対応できないから、積

み込んである無人戦闘艇の係留索が破損して、艇同士が衝突する。まさに上を下への大騒ぎとなった。

ブリッジでは、慌てて艦を立て直そうとするのだが、そもそも宇宙艦の操艦訓練では、着地中に地震で倒れた場合など想定していないため、誰にもどうすれば良いのかわからない。おまけに、操縦系統も正常ではなくなっているから、大型艦が地上で跳びはねるような動きをして損傷を大きくするばかりだった。それでも、ただひしゃげただけの艦は運が良い方で、ジェネレーターの制御機能に異常をきたした艦は、あっという間に火を噴いて自爆する。

戦艦は、無人戦闘艇のように重くて不安定な積み荷がないだけましだったが、地面が嵐の海さながらに揺れ動くのに対して無力なことには大差ない。しかも、全体が武器倉庫のようなものだけに、ジェネレーターが制御機能を失った時は始末が悪い。次々と爆発してあたり一面火の海となり、ようやく二隻が離陸した。いくらかましなのは巡空艦で、こちらは艦体そのものが軽いのと、小回りのきく構造のために、かろうじて立ち直って離陸に成功したのが五隻あった。

だが、ようやく離陸に成功した艦に向かって、待ち構えていたW星軍が猛然と襲いかかった。上空には無人戦闘艇が飛び廻っているが、G星側のコントロールが混乱している上に、W星側も孔明のコンピューターがあるのであまり恐れることはなかった。この攻撃で、せっかく離陸に成功した戦艦も全滅し、コントロールできる無人戦闘艇に護衛された五隻の巡空

艦だけが、辛うじて戦場を離脱することができた。
　それでは、戦艦に乗っていた曹操はどうなっただろうか。
　大爆発の瞬間、曹操は、座乗している旗艦〈銅雀〉の司令長官室で、次第に近づいて来るW星の映像をスクリーンに映して眺めながら考えをめぐらせていた。
　かつては、相手の気持をこまやかに気づかいながらことを進めていた曹操だったが、権力に慣れた今では、服従しない相手は圧倒的な力で屈伏させるのが当然だと思うようになっていた。もちろん、曹操にとって今度の戦争の勝利は百パーセント確実だったから、W星を見る目は、すでに征服者の目つきになっていた。W星さえ落ちれば、大した力のないS星などものの数ではなく、三惑星帝国ができるのも時間の問題にすぎない。
　旧知の黄蓋将軍が、戦いを前にして寝返って来たのも良い前兆だった。脱出に使った偵察艇が不時着して行方不明になり、しばらくして発見されたという報告を受けても、今の曹操には、気にもならなかった。すべてが自分にとって好都合な方向に進んでいる証拠のようにしか思えないのである。
　含み笑いをしながら、今後のことをあれこれ考えていた時、何の前ぶれもなく曹操の体はいきなり床に叩きつけられた。慌てて起き上がろうとする間もなく、轟音とともにまるで巨人の手で振り回されているような激しい衝撃が続いた。照明も消えて心細い予備灯がかすかに光っているだけだが、曹操は、倒れたままデスクの脚にしがみついた。
　最初の衝撃だけでも大勢の死傷者が出たのだから、デスクの脚にでもしがみついていられ

たのは幸運というほかなかった。照明ばかりか重力コントロールも停止して部屋は横倒しになったままだから、ようやく駆けつけた若手の参謀たちに助けられて逃げようとしても、体が宙に浮くばかり。どこをどうやって抜け出したのかわからないうちに、気がついて見れば、巡空艦の艦長室に座り込んでいたというみじめなていたらくだった。
「いったい、どうしたというのだ」
　程仲徳の顔を見た曹操は、苦しそうに息をしながら尋ねた。
「はっきりとはわかりませんが、小惑星の中心部に質量爆弾が仕かけられていた可能性があります」
「また、あの諸葛孔明の仕わざであろうか。まさに憎んでもあまりあるやつ……」
　歯ぎしりしながらスクリーンを見れば、攻撃しているのはW星軍ばかりで、G星軍の艦艇が大破炎上している悪夢のような映像しか映っていない。無傷なのはほんの数隻の巡空艦と、滞空していた無人戦闘艇だけだという報告を聞いて、さすがの曹操もただ茫然とするほかなかった。
　征服するつもりの相手に徹底的に叩き潰されて命からがら逃げる立場となってしまったのだから、天国から地獄に落ちるというのは、まさにこのことだった。こうなれば、W星軍どころか、劣勢のS星軍と戦っても簡単にひねり潰されるのは目に見えていた。曹操は、大きく息をついていった。
「このままでは全滅する。全速力でG星へ帰るほかあるまい」

だが、このまま無事G星まで帰り着けるとは誰一人思っていなかった。

追撃命令

「黄蓋将軍のお手柄は、わがW星の歴史に永久に残りますぞ」

W星の戦艦に救出されて無事帰投した黄蓋を基地まで出迎えた周瑜は、大喜びで手を取りながらいった。出発の時は不名誉な逃亡者だったが、大戦果をあげて帰って来た今回は、軍人たちが大勢出迎えて栄誉礼を捧げ、凱旋将軍の扱いである。

「知事閣下も、たとえ一ときでも将軍の忠誠を疑って済まなかったと仰せです。お疲れでしょうが、すぐ閣下の所へ参りましょう」

上機嫌の軍務大臣とならんで、黄蓋は、出迎えの人々に向かって両手をふりながら迎えの反重力艇に乗った。五日間も独りで偵察艇を操縦してかなり疲れてはいたが、重大な任務をはたせたので元気一杯である。周瑜は、その間に副官を呼びよせて何か耳打ちしたが、そのまま黄蓋と一緒に知事官邸に向かった。

道すがら、黄蓋は〈赤い岩〉でのG星軍の惨状についてくわしく説明してからいった。

「この功績の九十九パーセントは、あの諸葛孔明のものだと思います。

曹操がまた小惑星を基地に利用することを見越して、あらかじめ質量爆弾を仕かけたばか

りか、〈赤い岩〉が飛び散らぬ程度に爆薬の量を正確に計算してあるところなど、とても人間わざとは思えません。

　私よりも、孔明どのに感謝の意を述べられるべきでありましょう」

　これを聞いて、周兪は薄気味の悪い笑いを洩らした。

「お礼と仰せになりますか。お礼ならもう致しました」

「ほう。どのように」

「将軍が無事お帰りになった上はもう安心なので、先ほど部下に孔明を殺すように命令致しました。いかに知謀にたけたあの男でも、寝込みを襲われてはひとたまりもありますまい」

「なぜ、そのようなことを」

　驚く黄蓋を見て、周兪はうなずいた。

「孔明は、一人で五百万、いや一千万の大軍にも匹敵する男です。味方にすればあれほど頼りになる人物はいない代わりに、敵に廻せばあれほど恐ろしいやつもおりません。

　ところが、あの男は、劉備のもとを離れるつもりはまったくないのですから、いつわがW星の敵として向かって来るかわかったものではありません。

　こちらの手の内にいる間に除いておくに限ります」

「それもそうだが……」

　とはいったものの、黄蓋が何か割り切れない気持でいた時、艇内のビジホンが鳴った。周兪の副官だった。

「大臣閣下。襲撃は、失敗に終わりました」

「どうしたのだ」

「孔明の宿舎を包囲して踏み込みましたが、人の住んでいた気配もないほどすっかり綺麗に片づいておりました。

　調べましたところ、二時間前にS星の民間機が近くの宙港に正規の手続きをして臨時着陸し、孔明夫妻を乗せて出発したことを確認致しました。

　いかがはからいましょうか」

「すぐに、高速戦闘艇を一個中隊派遣して追跡させ、撃破するのだ。断じてあの男を生かしてS星へ帰してはならん。民間の旅客船なら、今からでも充分追いつけるだろう」

　ビジホンを切ると、周兪はつぶやいた。

「油断もすきもない男だ」

　黄蓋もそう思ったが、同時に、この周兪の手並みでは、さか立ちしても孔明を殺すことなどできないだろうとも思った。

「ご命令の日時にW星へ着いたものの、その間三ヵ月もの間一度もご連絡がなかったもので、本当に予定通りの時間に来られるか心配致しました」

　宇宙船がW星を離陸して大気圏を脱出するのを見ながら、趙雲はほっとしたようにいった。荷物を置いて蝶蟬と一緒に客室から出て来た孔明は、控の間で待っていた趙雲に向かっ

ていつもと少しも変わりのない朗らかな態度でいった。

「正確に指定した通りの時間に来てくれて助かりました。前の日から来て待機していれば怪しまれるし、あと一時間遅ければ私たちの命も危なかったかもしれない」

孔明は、まるで他人ごとのようにいった。趙雲は、不思議でならないように尋ねた。

「どうして、三ヵ月も前にこの正確な時間がおわかりになったのですか」

「簡単なことです。〈赤い岩〉を曹操が基地として使うことは、遠征軍がG星を出発した時点から正確に推定できる。そこで、関羽（かんう）将軍に工兵隊を率いて質量爆弾をセットして来て貰いました。爆薬の量とW星までの距離から、爆発させる最適のタイミングが計算できるので、信管の取りつけをするW星の技術者は、もちろんこちらの指定した時間に爆発させるはずです。当然のことながら小型艇でW星へ帰投できる時間も計算できる。

その技術者の帰投時間より、早すぎもせず遅すぎもせずとなると、あの時間しかないというわけで、タネを明かせば大したことでもありません」

孔明にとっては、ごく単純な計算問題にすぎないのだろうが、武将である趙雲にとっては奇跡としか思えないことだった。

「大統領はお元気かな」

「はい。G星軍が潰滅（かいめつ）状態だと聞いて喜んでおられます。参謀長も奥様もお元気なご様子で何よりです」

真正直な趙雲が、自分の帰国を心底喜んでくれている様子を見て、孔明は片手にもったス

ーツケースを軽く振りながら愉快そうにいった。

「われわれは、W星でゆっくり骨休めをしていたのだから、元気で当たり前です」

「大統領閣下は、こうなれば一刻も早くS星に駐留しているG星軍を追い出したいと張り切っておられます。張飛（ちょうひ）将軍などは、今すぐにでもなぐり込みをかけたそうな勢いで、あの関羽将軍でさえ内心では賛成しておられる様子です」

「駐留軍など、今は問題ではない。将軍たちには、敗走する曹操を追って貰わねばならないのです。こちらはこれからちょっと忙しくなるが、用が片づく二時間後には、峨眉山（がびさん）も夜が明けるだろうから、ホロビジョン会議を開かなくてはなりません。そのむね大統領閣下と将軍たちにお伝えするよう、秘書官に連絡して下さい」

「はい。わかりました。しかし……」

趙雲が、いぶかしげな顔をした。

「これから忙しくなるとおっしゃいましたが、いったい何をなさるのですか」

「そろそろ、W星の戦闘艇がわれわれを追跡して来るはずだから、趙雲将軍にお相手をして頂かないとこちらの命がなくなってしまう」

「何ですと」

孔明は冗談めかしていったが、趙雲は血相を変えた。

「私が一人でW星に乗り込み、毎日女房と遊び暮らしながらG星の大軍を潰滅させたのに、肝心の秘密は何一つ明かさないものだから、腹が立ちすぎて恐ろしくなって来たのでしょう

な」

孔明は、平然として薄笑いさえ浮かべているが、趙雲は真剣だった。

「しかし、こちらには護衛機をつけぬようにとの仰せでしたから、私の率いて来た連隊は一・〇八行程離れた空間点で待機させてあります。戦闘艇に攻撃されれば防ぎようがありません」

「わがS星の護衛機に迎撃して貰うわけにはいかないのです。そんなことをすれば、S星対W星の全面戦争になる危険があります。この攻撃は、周兪大臣の個人的な判断によるもので、孫権知事の知らぬことだから、私としては、うやむやにもみ消したいのですよ。とはいっても、私はまだ死ぬつもりはないので、G星とW星を〈赤い岩〉で戦わせたついでに、今回も『他人の拳で戦う』という秘策を用いるつもりです。そうすれば、同盟関係にひびが入らないばかりか、当分S星にちょっかいを出さなくなるでしょうから」

その意味がわかりかねて趙雲が首をかしげていると、孔明は、スーツケースを持ち上げながらいった。

「これを使ってすぐに護衛機を呼びよせます。ブリッジに準備ができているはずです」

何をいわれているのかわからないまま、怪訝そうな表情で先に立った趙雲のあとについて、孔明は妻と肩を並べてブリッジに入った。苦心して無人戦闘艇の頭脳を手に入れて来てくれた蝶蟬に、その効果の一端を見せようというのである。あでやかな女性が入ると、殺風景なブリッジがにわかに華やいだ。孔明は、スーツケースからコンピューターとコントローラーらしい装置を取り出して船長に渡した。

「これを発信回路にセットするように」

船長がそれを受け取ってすぐ通信長に手渡す。船長も乗組員も、あらかじめそのために訓練しておいたので、説明をしなくてもすべてはスムーズに進んだ。訓練したといっても、担当者たちは誰一人として今の今までその目的は知らなかったのだが……

「コンピューターのセット、完了しました」

「すぐに作動させよ」

「これは、いったいどういうことでしょうか」

自分の知らないところで事態が進行するのを見ながら、趙雲が驚いていると、孔明は、ブリッジの中央にある大型の3Dレーダー・スクリーンの前に立った。

「私が、コントローラーを操作すると、すぐにこの方向から戦闘艇の編隊が現れます。それが、G星の最新兵器で、無人戦闘艇というものです。先日、私がW星の協力を得て捕獲しておいたものの一部を、この船の護衛用に頂いて来たものだから、心配することはありません。

趙雲将軍。ひとつここで無人戦闘艇を指揮してW星の戦闘艇を迎撃する練習をして下さい。高度のＡＩ機能があるため、一機ずつの操作をする必要はなく、全体としての作戦の流れを指揮するだけで充分です」

孔明はこともなげにいったが、何の予備知識もなしにいきなり重大な役割をまかされた趙

雲は、大いに驚き、

「し、しかし、私は、無人戦闘艇の経験がまったく……」

と口ごもったが、孔明は平然とした顔で、戦闘指揮用コントローラーを手渡した。

「経験者の大部分は、G星の遠征軍とともに〈赤い岩〉で戦死しました。将軍なら、すぐに一流の指揮官になられるでしょう」

孔明は、説明しながらコントローラーを操作して、3Dスクリーンに映る五十機の無人戦闘艇を旋回させたり編隊を組ませたりしながら操作法を教えた。額に脂汗を浮かべた趙雲は、見よう見まねで動かしてみたが、さすがは優秀な指揮官だけあって間もなく立体的な戦闘隊形の組み方を飲み込んでしまった。

「これでは、戦争というより電子ゲームですな」

趙雲がすっかり操作に慣れた頃、予定の位置に二十か三十ほどの小さな影が点々と映り始めた。拡大スクリーンを見ていた通信士がすぐに観測結果を報告した。

「本船後方、軸座標三〇―一六三に、戦闘艇らしい機影を発見」

孔明はうなずいて、ブリッジにいる全員に向かっていった。

「W星の戦闘艇だ。趙雲将軍がただちに迎撃するから心配する必要はない」

趙雲は緊張した面持で迎撃を開始した。無人戦闘艇の群が斜め前方から接近すると、本船のうしろからまっしぐらに追いすがって来たW星の戦闘艇は、遠慮なくビーム攻撃を開始した。だが、人間のパイロット相手の戦術は無人戦闘艇には通用しなかった。人間のパイロッ

トにはとうてい耐えられないような加速や旋回が自由にできる無人艇は、信じられないような動きでビームを回避すると、情容赦のない反撃をしかけた。

趙雲の作戦は堂々たるもので、優勢な迎撃側が敵を包み込んで攻撃力を分散させ、一機また一機と空中に飛散させて行く。

「お見事」

と、孔明がほめた。

「しかし、参謀長。なぜ、G星の無人戦闘艇がこちらの命令にだけしたがって、W星軍のコントロールは受けないのでしょうか。W星軍も無人戦闘艇を捕獲して持っているのではありませんか」

無人戦闘艇が敵機を次々に撃破する様子を見て、ほっとした趙雲が尋ねた。

「無人戦闘艇のコンピューターの基本メモリーは、絶対に外から調べられないようにガードがかけられているし、取りはずしても記憶しているメモリーが自動的に消去されて内容が読めないようになっているのです。W星軍は、十機もつぶして調べたものの、ついにわからないままなのに、こちらは大魔術を使って内容を読んでしまったもので、軍務大臣はますます面白くないのでしょうな」

孔明は、蝶蟬の方をちらりと見て愉快そうに笑った。

「もう少し倍率を上げろ」

趙雲が通信長に命じた。3Dスクリーンの中では、豆粒のようなW星の戦闘艇と無人戦闘

艇のドッグファイトが終わりかけていた。映像がやや拡大された。
「将軍。かなり距離が離れましたので、これで一杯です。間もなく解像力の限界に達します」
勝負はスクリーンの映像が見えるうちに終わった。途中、W星側の巧妙な作戦によって無人戦闘艇は何度か小さな集団に分断されて集中攻撃をあびたが、趙雲も負けずに包囲を突破して戦闘を逆転させた。結局、無人戦闘艇が二機破壊される間に、三十機のW星戦闘艇は全機破壊されてしまった。
「なかなか、ご立派でした」
孔明は、W星戦闘艇がすべて攻撃能力を失ったのを確認すると、にこやかにいった。趙雲は、汗を拭った。
「恐るべきは無人戦闘艇です。わけもわからぬこの私が指揮してこれほど強いとは、何という恐ろしい武器を作り出したものでありましょうか。
参謀長がおられなければ、今ごろは、W星もS星も惨敗して、曹操に降伏していたことでしょう」
「ま、いずれにせよ勝ったのだから良いではありませんか。では、将軍。会議室へ行ってホロビジョン会議を始めなくてはなりません」
孔明は、スクリーンの前に立ち尽くしている趙雲に声をかけた。趙雲が尋ねた。
「残った無人戦闘艇は、どうしましょうか」

「放っておきなさい。そんなものは、これからいくらでも手に入ります」
こともなげにいった孔明の顔を、趙雲はしばらく茫然と眺めていた。

「ついにS星としては、一兵も出すことなく曹操の大軍を追い返してしまった。これは、すべて先生のおかげです」
劉備は、深く頭を下げた。最新式のホロビジョン会議室である。孔明と趙雲に向かい合って、劉備を中に関羽、張飛が席についているありさまは、お互いに本人たちを前にしているのとまったく区別ができない。いわば、臨場感百パーセントといったところ。
孔明も、深々と礼を返して、
「私一人に何ができましょう。S星共和国の劉備大統領閣下のご威光を背負っているからこそ、孫権知事も魯粛（ろしゅく）も、気の小さい周兪大臣も、この書生のいうことを真剣に聞いてくれたのです。閣下を水とすれば、私などはその中で泳ぐ魚にすぎません」
これが、口先だけの謙遜ならいつか必ずぼろが出るのだが、本心から旦那は番頭を立て、番頭が旦那を敬っていられるなら、これほど強いものはない。中小企業のS星でも大企業のG星を相手に互角の勝負ができようというものだ。
「参謀長」
さっきから発言したくてうずうずしていた張飛が、儀礼的なやり取りに我慢できなくなって口をはさんだ。

「このチャンスに、わがS星に駐留しているG星の駐留軍を叩き潰すべきじゃないだろうかね。命令してくれさえすれば、おれさまが今すぐにでも出て行って、こてんこてんにやっつけてやるんだが」

孔明は、それを聞くと微笑みながらいった。

「袋のネズミ同然の駐留軍など、この際は、二の次、三の次。もとさえ断てば慌てて逃げ出します。肝心なのは、そのもとの方で、G星の遠征軍は、〈赤い岩〉で潰滅的打撃を受けて今や敗走中です。これを追撃して全滅させれば、駐留軍どころか、G星をわが共和国の中に組み込むことすらできるではありませんか」

「その追撃戦は、わしにまかせてくれ」

関羽が立ち上がりながらいった。張飛も黙ってはいない。

「それは、ぜひおれにもやらせてくれ」

「まあまあ。お二人とも、そうせき立てないで下さい。いかに敗走中とはいえ、G星軍は新鋭の巡空艦五隻と無人戦闘艇十万機の大軍です。血気にはやって攻めたところで、群がる無人戦闘艇の餌食になるだけのことですぞ」

「そんなことはない。こっちは一機で五機も十機も叩き落とせる豪の者が揃っているんだ。G星の無人戦闘艇なんぞ、あっという間に蹴散らしてくれる」

張飛が威勢良くわめき立てると、趙雲が口をはさんだ。

「それが、なかなかどうして、無人戦闘艇というやつはやたら滅法強いのだ」

「いくら強くても、腕ききのパイロットにゃかなうまい」

「いや。なかなかそうではない。実は……」

と、趙雲が自分の指揮した無人戦闘艇とW星の戦闘艇との戦いの様子を話すと、さすがの張飛も黙ってしまった。孔明は、それを待っていたようにいった。

「ただし、こちらも手をこまねいているわけではない。無人戦闘艇の秘密を知ったのは、私がまだW星へ出発する前なので、S星には無人戦闘艇と戦うための準備が整っております。これから私が申し上げる作戦通りに、将軍たちが戦って下さるならば、八十から九十パーセントの確率で曹操を倒すことができます」

「こちらで敵の無人戦闘艇を操作できるのなら、百パーセント全滅させられるのではありませんかな」

と、劉備が尋ねた。孔明は、頭を横に振って、

「相手が無人戦闘艇の操作を知らないのならともかく、G星軍はいわば本家本元。私が九十五パーセント知っているところを、敵は百パーセント知っております。こちらへの攻撃は抑えることができても、それを使ってG星軍に逆襲するのはいささか無理でしょう。

しかも、曹操はまことに運の強い男です。運などといえば非科学的のように思われるかもしれませんが、けっしてそうではありません。すべての情報を知ってしかもそれを自由にコントロールすることができない以上、人間の運命が基本的にはなり行きまかせになるのは止むを得ません。

そのなり行きも、くわしく見ればある周期性というか法則性があるのですが、周期の上向きの時にうまく乗れる人とそうでない人があるのです。

曹操は、生まれつきのカンと努力によって上げ潮に乗るこつを知っているばかりか、どうやらバイオリズムまでが周期の上向きの時に一致しているようです。こういう男を倒すのは、容易なことではありません」

「参謀長」

関羽が、少し苛立ったようにいった。

孔明は、ゆっくりと首を横に振った。

「こんな議論をしている間にも、曹操はどんどん逃げて行く。一刻も早く攻撃部隊を出発させないと逃げ切ってしまうのではないか」

「G星軍は、補給艦が全滅したため、加速し続けるだけのエネルギーがありません。仕方なく慣性軌道飛行をしているので、わが軍が補給艦を同行させて全力加速するなら、簡単に追いつけます。ここは、急がずに慎重な作戦を立てるのが肝心です」

劉備は、うなずいて、

「では、孔明先生。さっそくその作戦をお授け下さい」

「もちろん、準備はできております」

孔明は、立体スクリーンを映し出した。

「これは、現在の三惑星の位置関係を示しています。S星の位置はここで、曹操はこのあた

りまでしか進んでいないはずですから、まだ、S星から直接出動して攻撃できる距離です。

先陣は、張飛将軍にお願いしましょう。戦艦二隻を率いて全力加速で追跡し、S星時間で六月九日午後三時頃、この空間点で戦闘距離に入ります。もちろん、G星軍は大量の無人戦闘艇を投入して来ますが、趙雲将軍の話でもわかるように、まともに戦って勝てる相手ではありません。戦艦に無人戦闘艇をコントロールするコンピューターを積んで、攻撃を防げば充分です。

それも、あまり接近すれば敵のコントロールの方が優勢になって逆襲されますから、反重力推進尖頭ミサイルの有効距離ぎりぎりで、一斉攻撃を仕かけて下さい。巡空艦の攻撃力では対抗しかねて加速し始めるはずだから、ただちに追撃します。もちろん、その場合も一定距離を保ってミサイル攻撃を続けます。

趙雲将軍には、第二陣をお願いしましょう。約十時間後に、本船は趙雲将軍の連隊に接近しますので、将軍はそちらに移って出撃して下さい。こちらからの距離は、G星軍の軌道に近いので、逃走経路の途中に待ち構えて二方向から挟撃します。もちろん、また護衛の無人戦闘艇が群がって迎撃するでしょうが、趙雲将軍は、その半数を引きつけてこちらのコントロールのもとにおき、無人艇同士を戦わせて下さい。同時に、尖頭ミサイルを一斉発射して巡空艦を攻撃します。

無人戦闘艇の攻撃さえ抑えられるなら、G星軍は僅かに巡空艦五隻。それも、補給ができない状態ですから、戦艦四隻からの攻撃に耐えられるはずはありません。普通の相手ならば

ここで最後の止(とど)めを刺せば全滅しますが、曹操は、今回恐らく生きのびるでありましょう」

「参謀長」

関羽が、不思議そうに尋ねた。

「いかに曹操の運が強いといっても、生身(なまみ)の体の普通の人間だ。わしは、何度か会ってもいるが、鉄でも石でもない。堂々とした男ではあるが、それでも張飛や趙雲やわしなら簡単にひねり殺せるだろう。まして、爆弾の破片でも当たれば女子供と同じように死ぬはずだ。なぜ、そう特別扱いをするのかね」

「…………」

目を伏せて口をつぐんでいる孔明に向かって、関羽は続けていった。

「それに、今の作戦では、このわしの出番がないではないか。わしとて、特に戦争を好むものではないが、これまで主な戦いに参加しなかったことは一度もない。それなのに、曹操を倒すという肝心の一戦に出陣できないというのは、いかにも残念だ。

わしが劉備の兄者(あにじゃ)について戦いの道に身を投じたのは、このような乱世に平凡な暮らしをするのに耐えられなかったからだ。ぬるま湯につかったような生活をするぐらいなら、むしろ戦いの中で死にたい。

参謀長。わしを出陣させてくれんのなら、その理由をお聞かせ願いたい」

孔明は、目を開いてしばらくの間はるかかなたを眺めるようにしていたが、おもむろに視線を関羽の方に移した。

「将軍。人の運命ほど不可解なものはございません。軍人の場合でも、一兵卒として百回の戦闘に参加しながら、かすり傷一つ負わずに生きている者もおれば、戦闘らしい戦闘を経験せずに老衰で死ぬ将軍もいるのです。

これこそ、因果の理法の上に成り立っている運命というほかありますまい。

もし、関羽将軍が出撃なされば、曹操が今度の戦いで生きのびる原因となるでありましょう」

「それは、どういう意味でござる。わしが、曹操に内通しているとでもいわれるのか」

関羽は、語気激しく孔明に詰めよった。それを聞くと、孔明は目を見開いて真正面から睨みすえた。

「関羽将軍が敵に内通されたなら、この孔明、とうの昔に軍法によりお命を頂戴しておりますぞ。それほど単純なことではないゆえに困っているのです」

「孔明先生。それがどのようなことか、私にもお聞かせ下さい」

と、劉備もいった。孔明は、気乗りがしない様子で答えた。

「申し上げましょう。関羽将軍は、軍人である前に人間であられるからです。将軍は、曹操を人としては憎んではおられない。むしろ、立派な人物として尊敬しておられる。この点は、政治上の立場を別にすれば大統領閣下とても同じでございましょう。

関羽将軍には、曹操に止めを刺すことなどおできにならない。私には、そのことがよくわかっているので、曹操とは面識のない張飛、趙雲両将軍だけで決着をつけて頂きたいのです」

それを聞いて、張飛は威勢良くいった。

「兄貴。まかせといてくれ。参謀長のいう通りだよ。おれは、曹操がどんなやつでも平気でミサイルをぶち込めるんだ。あいつさえいなければ、みんな揃ってG星へ凱旋して、劉備大統領を洛陽(らくよう)の主にできるんだ」

「いや。張飛。やはり、ここはわしも出撃する。年長のわしが曹操に止めを刺さぬことには収まりがつかぬではないか。

参謀長どの。誓って、曹操を見逃すことはしないから、最後の一撃はこのわしにまかせてほしい」

孔明は、それ以上逆らいもせずにうなずいた。

「では、関羽将軍は、探知可能距離の外を迂回してG星軍の軌道上のこの空間点に急行し、待機していて下さい。曹操の乗った巡空艦が、護衛の無人戦闘艇もなしにS星標準時で十一日の午前二時前後に通過するはずです。もちろん、ミサイルは打ち尽くして無防備になっていますから、将軍に、尖頭ミサイルで爆破して頂きます。これで、G星遠征軍はただの一人も帰国できない完全な全滅をするのです。

これこそ、万が一にも、し損じることのない攻撃となるはずです」

関羽は、手を振った。

「いや。無防備になっているのなら、もとは同じ共和国の仲間だった者をこれ以上むだに殺したくない。わしは、その巡空艦に乗り込んで曹操一人をこの手で殺し、遺体をかついで帰

って来るつもりだ。

もし、曹操を取り逃がすようなことがあれば、関羽のこの素(そ)っ首、自分でかき切って差し上げましょう」

「よろしい。そのお言葉信じますぞ」

孔明は、関羽の目を見据えながらいった。

戦いのはて

曹操は、臨時の司令長官室で頭をかかえていた。逃走を続ける巡空艦の中である。どう考えても、なぜこんなことになったのか納得が行かなかった。これまで、G星での戦いではただの一度も劣勢に立ったことすらない。だからといって、慢心したつもりはなかった。実力のある優秀な将軍たちの意見を入れて、三惑星最強の宇宙軍を建設するべく努力して来たのだった。

合理主義者の曹操は、戦争をするに当たっても、できるだけ犠牲者を出さないように努力した。そのためのもっとも有効な方法は、質量ともに圧倒的な大軍をもって敵に当たることだというのが信念だった。五倍、十倍の軍を前にすれば、よほどの信念があるか、それとも深く憎み合っている間でもない限り、戦う意欲を失うのが普通である。たとえ戦うとしても、強硬派を沈黙させるため前線に出して小ぜり合いをさせる程度だろう。

目の上のこぶのようなS星を制圧するために、まずW星と同盟を結ぼうとしたのも、同じような考えだった。司馬仲達さえ手を焼いているS星も、G星の大軍ばかりかW星軍までが連合して攻めてくれば、たとえ劉備がどんなに頑張ったところで、肝心の兵士たちが闘志を

失ってしまうはずだというのが、曹操の予想だった。

だが、予想は狂いっぱなしだった。予想を狂わせた最大の原因は、これまでの戦術を一変させるほど強力な新兵器だと自負していた無人戦闘艇が、なぜかほとんど役に立たなかったせいだった。百機もの編隊が、宇宙に消え失せたのがケチのつき始めで、いざ戦闘となってもほとんど敵を攻撃しないのである。技術者たちが分析した結果、W星軍側からもどうやら無人艇を操作するための強力な電波が出ているらしいことがわかったものの、対策の立てようさえなかった。何しろ、軍の最高機密とあっては、整備担当者でさえメカそのものとメカを直接動かすために必要なエレクトロニクスしか知らず、頭脳に当る部分はブラックボックス化されていて手をつけられない。勝手にプログラムを書き換えたりできないのである。

問題は、これほど厳重に守られている秘密がいったいどこからどのようにしてW星側に洩れたかという一点にあるのだが、メモリーキューブが、どのようにして敵の手に入ったかは誰にも想像できなかった。

洩れるとすれば、呂布の所しかないはずなのだが、曹操は、金と女には底抜けに弱いあの天才技術者が最大の弱点であることは、最初から承知の上だった。それだけに、充分な金を与えた上、莫大な成功報酬を約束してあった。

もちろん、メモリーキューブについては、異常なほど管理を厳重にした。大量生産も二重三重に監視されている呂布の研究室で呂布自身にやらせた。秘密を知っている人間は少ないほど良いからだ。その上、さらに研究室の出入りに際しては、呂布の体を内外ともにスキャ

ナーで検査させることまでした。胃の中に針一本隠して持ち出すことさえできないはずだったのだ。それなのに、秘密は洩れてしまった。

——あの男を生かしておいてはならない——

曹操は、決心した。呂布が、無人戦闘艇の秘密を洩らしたかどうかは、今となっては大した問題ではなかった。信頼できない人間、それもただ一人の男にこちらの心臓部ともいうべき秘密を握らせておいたことが許しがたい失策だったのである。

覇道(はどう)を行くべきではない。やはり、一国の運営は王道を進むべきだ……手遅れながら、曹操は痛感した。新兵器の開発は、たとえ時間がかかっても、きちんとした研究機関を設けて優れた若い研究者を集め、充分な費用を注ぎ込んで行うべきなのだ。

呂布のようなタイプの天才を利用していれば、安くて早い代わりに、後進が育たないばかりか、いつすべてを失うかもしれない危険を背負うことになる。俗な言葉でいえば、結局のところ『安物買いの銭失い』以外の何ものでもないのだ。再びあのような人間を利用するべきではない。

だからといって、ただ追放したのでは、節操のまるでない男だから今度はどこへ行ってどんなことをしでかすかわからない。劉備や孫権(そんけん)の所へ流れて行って、とんでもない新兵器を作りかねない男なのだ。生かしておいてはならない。曹操は、程仲徳(ていちゅうとく)を呼んでひそかに命じた。

「どう考えても呂布が怪しい。遠征軍が負けたニュースを聞いて逃げ出さぬうちに、厳重に

監禁するよう本国に訓令せよ」

油断もすきもない男だから、いざとなればどんな策を使うかわからない。死刑にするのは、自分が帰ってからのことで、本当に死んだかどうかこの目で確かめるまでは安心できなかった。だが、将来のことはともかく、たとえ呂布を死刑にしたところで今回負けたことが帳消しになるわけではない。無残な敗北という重苦しい現実は、何一つ変わらないのである。

それにしても、無人戦闘艇が役に立たなかっただけなら、あれほど無残な結果には終わらなかっただろうと思う。戦艦と巡空艦の大火力だけをもってしてもW星軍を制圧できたはずだからだ。〈赤い岩〉がいきなり爆発したのが致命的な打撃となった。

幕僚たちは、質量爆弾が仕かけられていたらしいと推測しているが、〈赤い岩〉を選んだのには理論的な根拠があったわけではなく、候補に上がっていた小惑星は六つあったのだ。〈赤い岩〉は、出発直前にランダムに選ばれたので、曹操自身ですらコンピューターが決めるまでは知らなかった。

しかも、どんな爆弾や地雷が仕かけられていても爆発するようにあらかじめ地表に猛烈なビーム放射や爆撃をして、いわゆるクリーニングまでしているのである。質量爆弾が仕かけてあったとしても、あれだけの衝撃を受ければ信管が誘爆しているはずだった。曹操は、ふと思いついた。

——黄蓋(おうがい)のやつが、信管を仕かけに来たのではあるまいか。もし、そうなら——

黄蓋とは、特に親しい間柄ではなかったが、若い頃、勤務の上で世話になった上司であ

り、いかにも技術者らしい誠実な男という印象が強かった。もともとG星の出身で、W星に赴任した当時はかなり不満だったと聞いているので、G星軍が攻めて来ればW星を見捨ててても不自然ではないと思い、こちらへ逃げて来るというのを受け入れることにしたのだった。

将軍とはいっても、丸腰の老技術者がただ一人、武装していない偵察艇で来るというのだ。高級軍人が一人でも寝返ってくれれば敵の情報は筒抜けになるから、誰がどう考えても百パーセントの儲け話としか思えなかった。しかし、あれがもし謀略ならば、不時着と見せかけて質量爆弾の信管をセットする作業など、ベテランの技術者にとって取るに足らないことだろうから、実に見事に引っかけられたことになる。

曹操は、何やらえたいの知れない力が、自分のまわりに邪悪な網を張りめぐらしているような気がして来た。

——諸葛孔明——

またもや、不愉快な名前が頭に浮かんだ。孔明とは、実在の一人の人物ではなくて、闇の中から人を操る不気味な存在のようにさえ思えるのだ。だが、曹操は頭を振って迷信じみた考えを追い払った。合理主義者の曹操は、現在の状況の明るい面を見詰めて苦境を切り開く優れた才能があった。

G星の人口や工業力にとって、この程度の打撃はかすり傷程度にすぎないのだ。敗れたとはいっても、自分が現実にこうして負傷もせずに生きている以上、G星へ帰りさえすれば、二年もたたないうちに宇宙軍を再建できる自信があった。敵の作戦は、肝心のところで失敗

していると曹操は思った。

——孔明、孔明というが、どうやら名前が先走りしているだけではあるまいか。いかにS星軍が弱体でも、戦艦の二隻や三隻はあるはずだから、このあたりで攻めればわが軍がひとたまりもないことは、子供にもわかる。そんな、ごく初歩的な作戦にも気がつかぬようでは、所詮大した人物ではあるまい——

そこまで考えてかなり楽観的な気分になった曹操が、薄笑いを浮かべた時だった。ブリッジに直結しているインターコムから、程仲徳の切迫した声が流れた。

「閣下。後方より、戦艦一隻が全加速で追跡しながら攻撃して参りました。艦の型式は、S星所属のものであります。ただちに応戦致します」

「すぐに行く」

曹操は、愕然として立ち上がった。恐れていた通りのことが右から左へ起きたのだ。背中に冷汗が流れた。慌ててブリッジへ行くと、もう戦闘は始まっていた。五隻の巡空艦は、曹操の座乗する旗艦を先頭に立てた一列縦隊となって、なけなしのエネルギーを注ぎ込みながら加速を始めていた。追跡して来た戦艦は、ミサイルを発射しながら距離を詰めていた。

「無人戦闘艇一千機を迎撃に出動させました」

いかに戦艦の装甲が頑丈であっても、一隻当り五百機もの無人戦闘艇が群がってミサイル攻撃すればひとたまりもない。曹操は、3Dスクリーンの中では点に近い形にみえる無人戦闘艇が、S星の戦艦に近づいて行くのを見ていた。今度は、かなり接近してもコントロール

を失わないばかりか、敵戦艦の発射したミサイルを攻撃して爆破している様子である。このぶんなら、秘密はW星だけに洩れているのではないかと安心しかけたのもほんの束の間、整然と行動していた無人戦闘艇の機影が先頭の方から乱れ始めた。

「どうしたのだ」

曹操は、戦術士官の方を向いてどなった。

「はい。ある距離に達すると、敵の電波によるコントロールが優先するようで、こちらは出力の限界であります」

見る見るうちに一千機の無人戦闘艇は、戦闘力を失ってS星戦艦の後方へ廻ってしまった。そのすきに、戦艦からの猛烈な攻撃が始まった。

「無人艇一千機を、ミサイルの迎撃に向けよ」

程仲徳が命令した。それを聞いて、曹操が大声でいった。

「出し惜しみするな。戦力の逐次投入は負けいくさのもとだぞ。思い切って三万機ぐらい繰り出せ」

「それは、閣下……」

程仲徳が、何かいおうとしたが、司令長官の威勢に押されたオペレーターは、本当に三万機を発進させてしまった。すぐに、S星艦との間の空間が煙って見えるほど大量の無人戦闘艇が、整然と分散しながら迎撃に向かった。高速度で接近して来るミサイルの影が次々消えた。

だが、小型艇に比べるとミサイルのスピードはあまりにも速かったので、いかに高精度のビーム攻撃でも百発百中というわけには行かない。しかも、比較的狭い空間に三万機もの無人艇が集まったから、同士撃ちを避けるため自動的に安全回路が作動し、ビーム放射のチャンスが三度あっても二度は放射できない有様である。

曹操ほどの人物でも、追い詰められるとばかなことをする見本のようなケースだが、命令系統がある以上、総指揮官がそれを無視した命令を下すのは、たとえ結果が良かったとしても後に悪い影響を残すものだ。この場合は、明らかな作戦のミスだったが、相手がボンクラだったら救われたところだろうが、諸葛孔明の命令で出動している戦争上手な張飛(ちょうひ)だったからたまらない。スクリーンをじっと見ていた張飛は、すぐG星軍の失敗に気づいてあざ笑った。

「やれやれ。落ち目の人間は、どこまでばかなことをしやがるのだろう。ウチの参謀長の足のつめの垢でも煎じて飲むがいいや。下手な鉄砲も数撃ちゃ当るというが、すぎたるは及ばずともいうじゃねえか。

さあ、こっちは今がチャンスだ。全ランチャーを開いて、敵巡空艦に全力攻撃開始」

歴戦の将軍の命令一下、鋼鉄の激流さながらに、反重力推進の尖頭ミサイルがG星艦隊へ向けて殺到した。もちろん、襲いかかる無人戦闘艇によって次から次へと爆破されて行くが、これこそ下手な鉄砲も何とやら、目標は僅か五隻の巡空艦だから、心臓部にさえ命中すればたった五発で全滅させられる。たちまちのうちに最後尾の一隻のジェネレーターが火を

噴いて爆発した。
　だが、G星軍もすぐに立ち直った。無人戦闘艇を巡空艦の周囲に層状に配置してミサイルに対する楯としたのである。特に、曹操の座乗している艦は、自分のレーダーも使えないほど厳重に覆ってしまったから、ミサイルがビーム攻撃の間を縫って接近しても、目標に到達する前に使い捨て同然の無人艇にぶつかってしまう。
　張飛艦隊の攻撃があまり効果を上げなくなったので、G星軍の間にほっとした空気が流れたが、それもほんの束の間だった。進行方向前方に四十五度離れた角度から、二隻の戦艦が突然現れて、息つく間もなくミサイル攻撃を始めたのだ。後方からの攻撃に対する防備に集中していた艦隊はたちまち大混乱におちいった。必死の防戦も空しく、巡空艦二隻がまたたく間に爆破され、無人戦闘艇で旗艦を守ろうとしても、残った二隻の巡空艦の出力でコントロールできるのはせいぜい五万機が限度である。
　加速できなくなった二隻の巡空艦の周囲には、僚艦の破片やコントロールを失った無人艇が無数に漂っていた。まさに、宇宙の墓場というところだが、S星の戦艦が近づいて来ると、これまで死んだようだった無人戦闘艇のジェネレーターがにわかに作動し始め、整然と編隊を組み始めた。それだけでも、死者の復活のようで不気味なところだが、百機単位の集団が次々にまとまると、急速にG星の巡空艦に向けて殺到し攻撃を開始した。
　いうまでもなく趙雲の集めたはぐれ無人艇が、S星軍の指揮下に入ったのだ。すぐに迎撃機との間で凄まじい戦闘が始まった。

　趙雲が指揮する無人戦闘艇は四万機足らずだったが、G星軍にすれば飼犬に手を噛まれるどころの騒ぎではなく、飼犬がいきなり喉笛目がけて襲いかかって来たのだからたまったものではない。手持ちの無人戦闘艇の大部分をS星軍に寝返った艇との戦闘に注ぎ込まなくてはならなくなったため、旗艦の護衛に当たれるのは五千機程度に減ってしまった。
　こうなれば、G星軍の全滅は目の前に迫っていた。だが、曹操にはさすがに優れた部下が揃っていた。今やただ一隻残った護衛巡空艦の艦長は、決戦のさなか旗艦に接舷し、チューブを伸ばして残るエネルギーを旗艦に転送した。そして、操艦と戦闘に必要な最低の人員以外はすべて旗艦へ移すと、指揮下にある全戦闘艇をS星の戦艦へ向けて体当たりの態勢を取った。
　この作戦にたじろいだ趙雲が、捕獲した無人戦闘艇を迎撃の構えに配置しなおしているすきに、旗艦はジェネレーター全開で戦場を離脱した。もちろん、S星軍もこれを見逃すはずはなく、直ちにミサイルの総攻撃を加えたが、群がる無人艇が爆破されるばかりでなかなか旗艦にまでは届かない。たまに届いても、数が少ないからビームで狙い撃ちされて空しく爆発するばかりだった。
　ようやく、死角目がけて発射した一発が旗艦のブリッジ付近に命中しそうになった時、最後の護衛巡空艦がミサイルの行く手を遮った。もちろん、ミサイルは艦体の中心部を直撃したからたまらない。最後の護衛艦は宇宙空間に飛び散った。
　ミサイルもビームエネルギーも使い尽くした巡空艦が身をもって護衛の職責をはたしたお

かげで、旗艦は危うくこの場を脱出した。幸い、趙雲の率いるS星軍は、無数の無人戦闘艇との戦いで足止めされているから、もともと足の速い巡空艦は、簡単に戦艦を振り切ることができたのだ。

3Dスクリーンから、S星の戦艦の影が消えそうになるのを見て、曹操はようやく人心地がついたようにいった。

「やれやれ。今度という今度は、護衛艦どころかミサイルの一発も残っていないし、ビーム攻撃のエネルギーも底をついた。形は巡空艦でも実力は商船並だから、たとえ戦闘艇一機でも現れたら降伏するほかあるまい。しかし、このぶんではG星まで無事たどり着けるかもしれないぞ」

権力者などというのは、まったくいい気なもので、一人の男の野望の犠牲になって宇宙に消えて行った兵士たちは気の毒というほかない。だが、人間の歴史はこんなことの連続なのだ。夢見る平和主義者がいくら溜息をついたところで、世界中で軍人の志願者が絶えることはないのである。

しかし、曹操が安心していられたのも束の間だった。

「進行方向斜め前方より大型艦らしい艦影が接近中」

高解像力レーダーのスクリーンをのぞき込んでいた士官が報告した。自室へ引き上げようとしていた曹操は、顔色を変えて3Dスクリーンの前に戻った。白い点がかなりの速度で接近しているのがわかった。

——あるいは、援軍……

どんなに急いでも今後二十日以内に援軍と出会うはずはないのだが、追い詰められた曹操は、そんなことまで考えた。だが、レーダー士官の声が、曹操の最後の希望を奪い去った。

「接近中の艦は大型巡空艦。型式は、S星所属のものであります」

もはやこれまでと、さすがの曹操もついに観念した。ブリッジは、重苦しい空気に包まれた。S星の巡空艦は、ある程度接近すると急に方向転換し始め、大きく旋回しながら間もなく旗艦の斜め前方を同じ方向に針路を取った。両艦の距離は見る見るうちに縮まり、ブリッジからは肉眼でもはっきり見えるようになったが、まだ攻撃は始まらなかった。だが、迎撃も回避もできないこの至近距離からでは、一発のミサイルですべてが終わる。一同が息を呑んで見詰めていると、共通チャンネルを使った音声連絡が入った。

『こちらは、S星共和国の巡空艦。私は、司令官の関羽（かんう）という者だ。そちらに、G星大統領の曹操閣下が座乗しておられるはずだが、確認したい。艦長または、副長が返答されることを希望する』

それを聞いた艦長は、曹操の方を向いた。

「司令長官閣下。いかが返答致しましょうか」

「大統領は、戦死した。乗ってはおらぬと返答せよ」

「はい……関羽司令官。こちらは艦長。曹大統領閣下は、先刻の戦闘で戦死された。この艦には座乗しておられない」

『そうか。では、本艦と交戦するか、降伏して乗員は本艦の捕虜となりS星へ連行されるか、いずれかを選んでほしい。後者の場合、艦は宇宙空間で爆破する』

「徹底交戦したいが、本艦にはすでにミサイルもビームエネルギーもない」

『では、捕虜となることを勧告する』

「拒否すれば、どうなるか」

『交戦中であるから、ただちに攻撃する』

関羽の言葉に、あいまいなところはなかった。艦長は、スイッチを切って曹操に質問した。

「閣下。いかが致しましょうか」

「うむ……」

曹操は、絶句した。目の前には、大型巡空艦の艦腹が見えている。威嚇(いかく)するようにミサイルの発射口がすべて開いていた。たとえ、こちらにミサイルもビームエネルギーもふんだんに残っていたとしても、互角に戦って勝てる状況ではない。力を信じ、最後には力がすべてを決めると信じて来た曹操が、最強の力を結集したつもりだった遠征の最後としては、これ以上皮肉な結末は考えられなかった。

だが、どんな場合でも決断を下さねばならないのが最高責任者のつらいところである。一呼吸か二呼吸する間考えてから、曹操はいった。

「臨検と、全艦全兵員の武装解除を受け入れるから、このままG星へ帰ることを許してほし

いというのだ」

艦長がすぐにそのむねを伝えた。関羽は、すぐに答えた。

『よろしい。ただし、臨検中に挙動不審の者がいれば、連行する。場合によってはその場で射殺する』

「了解したといえ」

曹操は、度胸を据えたようにいった。艦長の返事を聞いた関羽は、

『では、士官以上はブリッジに、一般乗組員は集会所に集合して待機せよ。ただし、負傷者を移動させる必要はないし、出迎える必要もない』

といってスイッチを切った。巡空艦側では、すぐに準備を始めて登舷用の大型エアロックを開いた。曹操は、私室で士官用の作業服に着替えると、平然としてブリッジに戻って来た。ほどなく、S星の巡空艦から大型の作業艇一隻が戦闘艇四隻に護衛されて現れると、空間をゆっくり移動した。

エアロックに入ったのは、作業艇一隻と戦闘艇一隻だけで、三隻の戦闘艇は外で待機する。エアロックが閉じると、作業艇からは関羽を先頭に数十人の武装した士官と下士官が降りた。宇宙艦の構造はほとんど同じだから、勝手知ったる他人の家という感じで、あらかじめ打ち合わせた通りにそれぞれ散って行く。

ものものしく武装した十人の士官を従えた関羽は、ブリッジへ直行した。

ブリッジでは、艦長以下の士官がテーブルの上に個人用の武器を積み上げて整列してい

た。関羽が入って行くと、号令をかけたわけでもないのに全員が直立不動の姿勢を取った。イエロー・キャップ討伐以来の不敗の戦闘体験と一国の主将としての地位は、赤黒い威容と堂々たる体格に加えて軍人たちを威圧する独特の放射線を放っていたのだ。

ただし、ブリッジに居並ぶ士官のうちただ一人だけは、関羽を見ても威圧されることなくゆったりとたたずんでいた。いうまでもなく、曹操その人である。

関羽は、艦長と儀礼的な挨拶を交わしただけで、すぐに曹操の前に行った。その瞬間、ブリッジは異常な緊張に包まれた。全員が呼吸を止めて見守る前で、二人は黙って見詰め合った。もう何年会わなかっただろうか。二人とも昔を懐かしく思い出した。

関羽は思った。

――年を取られたな。ご苦労が多いのだろう――

曹操は思った。

――予想以上に立派な男になったな。これだから、試験制度などあてにならんのだ――

だが、関羽は感傷を振り払わなくてはならなかった。

「G星大統領、曹操閣下ではございませんか」

ブリッジは、小鳥の羽が床に落ちても聞こえるほど静まり返った。曹操は、関羽の目をじっと見詰めながら心にしみ入るような声でいった。

「関羽将軍。ここにいるのは、飲む水も充分になく命からがら逃げて行く兵士だけだ。丸腰のみじめな兵士を殺したところで、将軍の名誉にはなるまい。人には得意な時も失意の時も

ある。得意の者は失意の者を助け、失意の者から学ばねばならない。その意味が本当にわかるのは、この世で劉備どのと将軍と私ぐらいのものであろう」

「は、はい」

孔明のいう通り、関羽はまともな人間であり、曹操は骨の髄まで政治家だった。優れた政治家は詐欺師と紙一重であって、その時その時につごうの良いことを心の底から本気で信じてしゃべれなくてはならない。嘘をついているわけではないから、説得力はある。まして曹操ほどの超大物になれば、その弁舌に抵抗できるのはよほどの政治的人間だけである。

関羽は、かつて洛陽(らくよう)の都でのことを思い出していた。太学士出身でも士官学校出身でもない人間は、どんなに立派なことをしても認められないことをあの当時は劉備ともども嫌というほど思い知らされていたものだった。そのくやしさが、もっとまともな国を作ろうという原動力になって、現在の劉備や関羽を作り上げたのだ。

だが、あの時、ひそかに宿舎を訪れて慰めてくれた超エリートの曹操が、

「あなたたちのように優れた人物を用いることのできないような国は、もう長くは続きますまい」

といったしみじみとした口調は、今でも耳の底にはっきり残っている。劉備も関羽も、それを聞いてどれほどふるい立ったかわからない。もし、劉備と曹操のどちらかが、一歩を譲り合えるような性格だったら……関羽は、しみじみと思う。たとえどんな形になるにせよ、戦争をせずに三惑星は再び統一されたに違いない。

「関羽将軍。この敗残の将兵を、国へ帰してやって下さらんか」

表情から関羽の心を読み取っていた曹操が、すかさずいった。関羽は、うなずいた。

「ここには、曹操大統領はおられない。武器を集めて退艦する。全員に退艦命令を出すように」

S星側では、関羽以外に曹操と直接会ったことのある者はいないし、そもそも関羽の命令にしたがわない軍人など一人もいないから、ガラクタ同然の武器を集めミサイルランチャーなどを破壊してからの撤退は早かった。そればかりか、心やさしい関羽は、充分な酸素、水、食料さえ供給して、G星大艦隊の最後の一隻に別れをつげたのだった。

「将軍。本当に曹操は乗っていなかったとおっしゃるのですね」

孔明は、これまでに誰も見たことのないような恐ろしい目つきでいった。

「はい。疲れはてた将兵と、怪我人、病人だけでした」

関羽は、目を伏せながら答えた。

「本当ですか。劉備閣下に誓って、本当だとおっしゃいますか」

「は……はい」

「では、この写真を何と説明されますか」

孔明は、一枚のホロ写真をつきつけた。そこには、あの巡空艦のブリッジの光景がはっきり写っていた。

「士官たちの装備に、ホロカメラをつけておいたのです。もちろん、このことは誰も知りません。それはともかく、将軍が話しておられる相手、これは曹操ではないのですか」

「そうかもしれません。しかし、長い間会っていないので、断定できませんでした」

関羽が、苦しそうにいいわけをするのを見て、孔明は立ち上がった。

「関羽将軍。あなたらしくありませんぞ。曹操の顔は、三惑星の住民なら子供でも知っております。なぜ、そのように見えすいたいつわりをいわれるのですか」

孔明の青白い顔が一層青くなった。

「本当に、これが曹操でないと信じて逃がされたのですか。はっきりお答え下さい」

「………」

関羽がうなだれた様子を見て、孔明は腰のホルスターからブラスターを抜いた。

「さあ、将軍。お約束通り、ご自害下さい。将軍は、われわれに対する誓いを破って、曹操を逃がされたのです。これは、劉備閣下に対してもS星共和国に対しても、明らかな反逆ですぞ」

孔明の体から青白い炎のようなものが燃え立つように見えた。恐れを知らない関羽の体が、そばで見ていてもわかるほどぶるぶると震えた。

「さあ。将軍、ご自害を」

「まことに申し訳もないこと。お約束通り、この場で自害致します」

関羽は、孔明の手からブラスターを受け取った。

「お待ち下さい。孔明先生」

劉備が、立ち上がった。

「もし、関羽が死ぬなら、この私も死なねばなりません。関羽と張飛、それに私は、生まれたのは別の時、別の所だが、同じ時、同じ所で死のうと誓った仲です。誓いを守るためには、私も張飛もこの場で死なねばなりません。それでよいのなら、約束通り関羽に死をお与え下さい」

今度は、孔明が沈黙する番だった。といっても、孔明にとっては、すべてが筋書き通りに進行しているのだから、演技は完全だった。

「私にとっては、大統領閣下のお命に比べるべきものはございません。閣下がそう仰せられるのなら、二度とこういう不始末をしないという約束をして、関羽将軍を許すほかございません」

「かたじけない」

劉備は、頭を下げた。孔明は、関羽の手からブラスターをもぎ取るようにしてホルスターに戻しながら、厳しい表情とはうらはらに、心の中では落ち着き払っていた。

――こうなるはずなのだ。所詮、すべては時の運。複雑にからみ合う天地の理法にしたがって動くほかない。人は、持って生まれた可能性の範囲内でしか動けないのだ――

また会う日まで

「これは、諸葛孔明どの。よくおいで下さった」

司馬仲達は、渋い顔でいいながら、孔明につき従っている荒々しい張飛の方をじろりと見た。

「はじめまして」

孔明は、師の親戚に当る仲達に丁重に頭を下げた。

「同行致しましたのは、わがS星軍の張飛将軍でございます」

「ほう。こちらが、あの有名な張飛どのか」

「はじめてお目にかかります」

張飛は、一応は挨拶をしたものの相手をじろじろ見ながら警戒心を隠そうともしなかった。S星駐留軍最高司令官室つまり、もと劉備大統領のオフィスだった部屋である。

「まずは、おかけ下され」

仲達は、椅子をすすめた。孔明は一礼して座ったが、張飛はそのうしろに仁王立ちになったままで睨みつけている。

「そちらからおいで下さるとの仰せでございましたが、年長のお方に対して失礼と存じまして、こちらから参上致しました。どのようなご用件でございましょうか」
孔明が尋ねた。仲達は、厳めしい表情で答えた。
「大変勝手な話でござるが、わがG星軍がこれ以上駐留を続けることは難しい情勢となりました。
そこで、近日中に引き上げたいと思い、曹操閣下も可及的速やかに帰国するようにとの仰せなのですが、一つ休戦協定を結んでいただけますまいか」
それを聞いて、孔明はとぼけて見せた。
「これは、異なことを承りますな。わがS星共和国と致しましては、司馬将軍の率いておられるG星軍とは宣戦布告も致しておりませんので、交戦状態にはなく、したがって休戦ということもあり得ないのでございますが」
「そ、それは……」
仲達は、絶句した。交戦状態にないというにしては、あまりにもひどい目にあって来たからである。その様子を見て、孔明は、いった。
「したがいまして、駐留軍がS星を出発されるとしても、わが軍がけっして攻撃しないことは、はっきりお約束致します」
「さようでござるか。それは、まことに有難いが、あの……ゲリラの方とも休戦協定を結べないものでありましょうか」

「ゲリラは、正規軍の支配下にございませんもので、私の立場としてはお約束できませんが、ゲリラも命がけで攻撃しているのですから、駐留軍がS星を立ち退かれるとなれば、これ以上犠牲を出そうとはしますまい。
なるべく早い機会に出発日を決めて公表なされば、その後は攻撃しないだろうと思います」
「そう願いたいものですが、孔明どのの方からゲリラの指導者に約束を取りつけて下さるまいか」
「努力してみましょう。恐らく、問題ないと思います。ところで、いつご出発のご予定ですか」
「五日以内にと思っております」
「では、帰り次第すぐに交渉して結果をお知らせ致します」
仲達は、ほっとしたようにいって軽く頭を下げた。
「それは、かたじけない」
「はは。ご安心下さい」
孔明は、愉快そうに笑って首をすくめた。
「何といっても、将軍の率いておられるG星軍は大軍です。白昼堂々と真っ向からぶつかっては、ゲリラどころかわが正規軍でもひとたまりもないし、また住民にも被害が出ます。攻撃しろとのご注文を頂いても、正直なところ願い下げにしたいほどです」

真意がいずれにあるかはわからないものの、どうやら出発の時に攻撃しないことだけは信じられると仲達は思った。

「では、お言葉を信じますぞ」

「はい」

孔明は、はっきりそういってから、ふと思いついたように尋ねた。

「将軍は、G星の遠征軍が〈赤い岩〉でW星軍に大敗したことは、もちろんご存じでいらっしゃいましょうな」

「むろん存じておる」

仲達は、うなずいてから薄笑いを浮かべた。

「その黒幕が孔明どの、あなただということも存じておる」

「はは。もうそのような噂がお耳に入っておりますか。まあ、噂は噂と致しまして、一つお教え頂きたいことがございます」

「ほほう。何でもお見通しの孔明どのに、この私ごときがお教えできることなどありますかな」

仲達は、皮肉たっぷりにいった。孔明は、平気な顔で、

「あの時、曹操大統領が命からがら敗走されたのに、将軍はなぜ救援の軍を送られなかったのでしょう」

「何といわれる」

むっとしたような表情になって、仲達は答えた。

「わが軍が、S星軍のために釘づけになっていたことは、孔明どのが誰よりもよくご存じであろうに。曹大統領閣下も、駐留軍が身動きできない状態であることを充分ご承知であった」

「しかし、将軍は、あの時われわれが軍の主力を出して曹操を追っていたため、S星にはほとんど艦艇のなかったことをご存じだったはずではありませんか。

あまり積極的に曹操を助けようというおつもりではなかったようにお見受け致しましたが」

「何をいわれるか」

仲達は、明らかにうろたえながらいった。

「とんでもないことだ。こちらは、またもや、孔明どのの新手の計略と思い、息をひそめておりましたぞ。さだめし、このわしを不甲斐ない男だと思われるだろうがな」

司馬仲達は、ほとんど真っ白になった頭髪をかき上げた。

「いやいや」

孔明は、首を横に振った。

「曹操大統領があれほどの大軍をほとんど全部失ってしまったのに比べると、遠征軍の半ばを温存しておられる将軍こそ、まことの戦上手なお方だと思います。敵地で戦えば、地の利に明るい地元の軍が有利なのは当然です。特に、わがS星のように岩山の多い土地で宇宙艦

を主力にした軍隊が戦うのは、たとえ百倍の兵力をもってしても容易ではないはず。

まことの戦上手なら、このような土地でまともな戦争を避けるのが当然でありましょう。もし、止むを得ずに遠征したならば、将軍のように耐えに耐えて損失を少なくするほかありますまい。将軍は、あの場合に考えられるもっとも良い戦略を選ばれたと思っております」

仲達は複雑な表情で、

「そうご理解頂けるなら有難い。あの時、わが軍を繰り出せば、W星軍を挑発する結果となり、S星との連合軍を相手にしてかなりの打撃を受けたでありましょう。私の選択は、曹大統領閣下も認めて下さると信じております」

「その通りだと思います。今、ご帰国になれば、司馬将軍の軍団がG星最大、最強のまとまった兵力となりましょう。実戦経験は豊かで、しかもS星を制圧することこそできなかったものの、みじめな結果に終わった大統領親征軍と違って、必ずしも負けたとも申せません。これでは、曹操閣下もしばらくは将軍に頭が上がりますまいな」

それだけいうと、孔明はしばらく口を閉じていたが、やがて、仲達の渋紙のような顔を見ながら続けた。

「もし、長生きなされば、いずれG星の天下は将軍のものになりましょう」

それを聞いた仲達は、急に落ち着かない様子になり、立ち上がって窓際へ足を運ぶと外へ目を向けた。

「孔明どのは、恐ろしいお方だ」

しばらくたって、仲達は半ば独りごとのようにつぶやいた。

「あなたこそ、長生きなされば三惑星を統一なさるに違いない」

「それこそ、とんでもない」

孔明は、翳りのない笑いを浮かべた。

「戦争は一種のゲームですから、当面する敵を倒せば終わります。商売にたとえるなら、投機のようなものといえましょうか。値上がりを見越して安い商品を買いこみ、高くなったところで売れば終わりです。人こそ死にませんが、投機は要するに情報の戦争です。確実な情報を知って、正しい時を選んで売買すれば必ず儲かります。そして、売買の相手が損をしようが得をしようが、こちらが考える必要はないのです。

これに対して、国を治めるのは、大きな店を経営するのにもたとえられましょうか。商店主ともなれば、品物をできるだけ高く売ることばかり考えていたのでは、客はよりつかなくなります。まともな店なら、あまり売れない品まで並べておかないと繁盛しません。また、移り気な客の好みを予測して次から次へと新しい商品を仕入れなくてはならないし、売れ残ったと判断すればバーゲンセールをして損を最小限におさえ、ついでに客足を引きつけるとか、とにかくいろいろなことをしなくてはならないのです。

政治も似たようなものです。国民のためにせよ、自分が権力を楽しむためにせよ、あの董卓のような末路をたどりたくなければ、とにもかくにも国の中を平穏に治めなくてはなりません。そのためには、国民の雑多な要求に耳を傾けなくてはならないし、あちらを立てれば

こちらが立たずで不平不満を絶えず聞かされます。

　そういう面倒なことは、わが劉備大統領とか、おたくの曹操大統領のようなお方におまかせしたいですな。司馬将軍も、どうやらお嫌いではないようにお見受け致しますが。

　ところが、この張飛や、わが関羽、趙雲のような将軍たちも私も、いわば投機家のタイプでして、もみ手をしながらお客の顔色を見るようなまだるっこい商売はできません。

　たまたま戦乱の世に生まれたからこそ世の中の表面に出て働けるので、戦争をしなくて済む世の中なら、世間の隅の方でひっそり暮らしていたでしょう。あるいは、これからどなたかが再び三惑星を統一されれば、それこそ夏のストーブや冬の扇風機のようなものになってしまうことでしょうな。

　その日が来れば、私も家内ともども手頃な小惑星にエアドームでも建てて引きこもるつもりです。

　ただし、それまで生きていられればの話ですが……」

「なあに。劉備大統領が天下を統一なされば、孔明どのは、大宰相となられるでありましょう」

　仲達は、まんざらのお世辞でもなさそうにいったが、孔明は、首を横に振った。

「買いかぶって頂いて恐縮ですが、大国の宰相などという不自由な職務は願い下げにしたいものです」

「ははは。いかにも孔明どのらしい」

　仲達は、乾いた声で笑ったが、急に表情を改めた。

「ところで、孔明どのは、この世の行く末をどのようにご覧になっておられるかな」

「先のことなど、どうして私ごときにわかりましょうか。ただ昔から、〈天下は長く統一されていれば必ず分裂し、分裂している期間が長くなればまた必ず統一される〉といわれているではありませんか。イエロー・キャップの反乱に始まり、献大統領が董卓に殺されてからまだやっと十数年に過ぎません。三惑星の鼎立時代はまだまだ続いて、戦乱の世が本当に終わりを告げるのは、われわれの次かその次の世代あたりになるのではないかと見当をつけております。

　当分、退屈はしそうにないし、老いさらばえて死ぬ代わりに、戦場でさっぱりと死ねる時代がまだまだ続きそうではありませんか。

　さて、そろそろ行かねばなりません」

　孔明は、ゆっくり立ち上がった。

「ご出発の時は、お見送り致しません。しかし、将軍とは、いずれまたどこかの宇宙空間でお互いに艦隊を率いて相まみえることになりましょう。その日まで、お元気で」

「孔明どのこそ、お達者でな」

　孔明は、一礼して部屋を出た。あとを追って、張飛が大きな足音を立てながら出て行った。

　表面はにこやかに話し合っても、孔明と仲達は、ついに最後まで手を握り合うことも、共

に一杯の水を飲むこともなく別れた。

外へ出るともう夕暮だった。張飛は、油断なくあたりを見廻しているが、孔明は平然と足を止めて空を見上げた。

G星は、西の空に白く輝き、W星は、ようやく昇ったばかりの東の空に青く見えた。三惑星は、大きな重力で干渉し合いながら一瞬の休みもなくそれぞれの複雑な軌道を進んでいるのだ。

孔明は、深呼吸をしながら考えた。曹操は、無残な負け方をしたが、あの気性では、死ぬかあるいは自分の手で三惑星を統一するまでは、絶対このまま引きさがらないことは目に見えていた。しかもG星の強大な工業力が背景にあるから、次のチャンスまでには何としても再び新兵器を開発して新しい作戦を練り、大軍を擁して攻めて来るに違いない。

W星の孫権も、今はまだ若いが、遠からず三惑星統一のレースに本格的に参入して来ると覚悟するべきであろう。

S星も、もっと力を蓄えなくてはならない。謀略だけで勝ち抜ける時代は終わりつつあるからだ。

ここで司馬仲達の駐留軍を本格的に叩かないのもそのためだった。戦って追い出せば、G星駐留軍の残りの半分ぐらいは撃破できる自信はあった。だが、数少ないS星軍が無傷で済まないことも明らかである。今は、じっとこらえて兵力を温存し、G星やW星と対決する日に備える時なのだ。

遠巻きにしたG星軍兵士たちの鋭い視線を感じながら、孔明は、軽い足どりで歩き出した。張飛も腰のブラスターに手をかけたまま、巨体をゆすりながらあとを追った。

戦乱の世である。

『SF三国志』文庫版へのあとがき

『SF西遊記』を講談社から出したのが、昭和五十一年（一九七六）六月で、続いて書いた『SF水滸伝』が翌年十二月に出た。名作に便乗させてもらったおかげで、駆け出し作家の作品としてはかなりよく売れたため、続いて三国志もパロディーにして三部作にしようとした。だが、そろそろ自前の作品を、という編集者の要請で方向転換し、次に書いたのが『大江戸神仙伝』だった。

これ以後は、江戸について書くことが多くなり、しばらく中国古典のパロディーから遠ざかっていたが、昭和六十二年（一九八七）の春、書きかけていた『未来妙法蓮華経』に行き詰まってしまい、急に思いついて書き始めたのが『SF三国志』だった。こちらは、かねてから筋を考えていたせいもあって、四ヵ月で一気に書き上げてしまった。刊行が十月末だったから、実に十一年以上もかかって、ようやく三部作が揃ったのである。

さらに八年がたち、講談社文庫の仲間入りをすることになったが、古い作品が現在の読者にどのように受け入れられるか、ちょっと気になるところだ。

乙亥　一九九五年　七月　二十九日

石川英輔という人の世界について

野田昌宏

　ＳＦの読者（ファン）同士、それにファンとプロが交流する場として、ＳＦ大会（ＳＦコンベンション）という行事が大は世界各都市持ち回り・一万人規模の世界大会（ワールド・コン）から、気のあった数十人の仲間で開く小規模なローカル・コンまで、週末には世界中のどこかで十や二十は必ず開かれている。
　そんなひとつ、〔ダイナコン〕と呼ばれる中規模のＳＦ大会が名古屋の一角〝大名古屋温泉〟で毎年開かれているのだが、もう十年も昔の事、私はその〔ダイナコン〕の会場で他ならぬ石川英輔に衝撃的な目に遭わされたことがある。
　その日、私は仕事に捕まりかなり遅くなって〔ダイナコン〕の会場に到着した。
　そして、私にあてがわれた部屋へ行く途中ふと『石川英輔』という名札の部屋の前を通り掛り、賑やかな声が洩れて来るので何気なく襖を開けて中を覗いてみた。
　するとキミ！　六畳程あるその部屋には若い女の子が立錐の余地もないほど充満していてパンク寸前、その真ン中の炬燵を前にドテラ姿の石川の〝おッさん〟が（私より一ヵ月も若

い彼をこんな呼び方はしたくないのだが……）宇名主風に鎮座していて、私の姿に気がつくと「やぁ、遅かったね……」と気軽に声をかけてきた。

こんな場合、すぐ、脂粉ムンムン、酒池肉林……などと下世話な表現へと続くのが通例だが、そんなものではない。女の子に囲まれた〝おッさん〟はとっても嬉ッそうではあったが別にヤニ下る風もなく、モテ具合を見せつけるでもなく、まさに飄々とした雰囲気を漂わせているだけだった。

同じ昭和八年に生まれ、同じように大東亜戦争を体験しながら際どい年齢で危うく勤労動員・徴兵、陸士・海兵・予科練への強制応募などの諸々を免れて生き延び、同じように戦後の混乱から一気に高度成長時代の只中を生き抜き、同じように中小企業の〝社長〟なのに、どうしてここまで〝差〟がつくのであろうかと、その夜、私は忸怩（じくじ）たる思いを一晩中噛みしめたのであった。だッてあんなに女の子を根こそぎ持ってかれちまえば、私の部屋に集まるのは菜ッ葉かゴリラみたいな兄ンちゃんばっかし……という仕儀に相成るのは当然の成り行きではないか。

しかし、そのへんが石川英輔の人徳なのであろう。

考えてみると、石川英輔という人の存在を初めて知ったのはさらに二十年も前の《宇宙塵》の誌上だった。

《宇宙塵》といえば、星・小松・筒井の御三家を始めとして日本SF作家のほとんどが何らかの時期に何らかの形でコミットしているSF同人誌であるが、その《宇宙塵》に彼が〈ポンコツ宇宙船始末記〉という作品を発表したのは一九五〇年代の後半ではなかったかと思う。

タイトルに〝ポンコツ〟と名のつく一連のSFが単行本として出たのはずっと後の事で、その最初の作品である。

もともと一九三〇年代のアメリカには〝バックヤード・スペースシップもの〟と称し、裏の物置で仲間と建造した宇宙船に御馳走や水を搭載して月世界探検に出掛ける……という類いの、アメリカならではの楽しい作品分野があって、本来、宇宙探検の醍醐味はこれだと私は思っているのだが、戦後も十五年近く〔スプートニク〕も上がり、〝真面目な（ゆうずうのきかない）〟SFファンが幅を利かす当時の日本でこの手の作品を発表するのはためらいがないでもなかった日々、ヌケヌケとその〈ポンコツ宇宙船始末記〉という楽しい作品を発表した石川英輔という人には、編集の小隅黎を始めとしてみんながとても好感を抱いたものだった。

それが彼との出会いである。

彼が中国古典の設定を下敷きに新しい視点から長編SFを書き始めたのは《宇宙塵》でのデビューからしばらく経ってからの事だと思う。

こういった設定の作品が出ると、すぐに〝古典のパロディ化〟などという安直な括りが行なわれるが、彼のこのシリーズのどれを読んで見てもお判りのように、作品の背後にこめら

れた石川英輔のメッセージは半端なものではない。
かつて、偶然の事から水滸伝の世界的な研究家として知られる中国文学者の高島俊男氏とお話しする機会があった時、この《SF水滸伝》についてお話しした事があって、さっそく読まれた氏が「石川英輔さんというかたは実に頭の切れる方ですね……」と感想を洩らされた事がある。
要するに、これは名作に名を借りた半端なSF娯楽冒険シリーズなどではなく、原典それぞれの背後にある思想をきちんと著者独自のコンセプトに基いて咀嚼し、SF的手法を駆使して奔放に展開していくさまは痛快の一語に尽きる。
この《SF三国志》がその一冊にあたる訳だが、私は敢えてこの《SF三国志》については何も言わない事にする。
いま、こうして後書きを読んでいる君にとって余計な説明の意味はないと思うからだ。
この石川英輔の《SF三国志》で満足した君に（必ず満足していると思うが）、次に是非とも読んで欲しい作品群がある。
この中国古典シリーズを書いて間もなく、江戸時代という空間へのノメり込みを始めた石川英輔は《大江戸神仙伝》に始まる一連の江戸の社会を舞台にしたシリーズを生みだす。
そして、その際に収集された江戸関連の資料が別の形で発酵し始めたのだろう。そこから彼は《大江戸テクノロジー事情》《大江戸えねるぎー事情》《大江戸リサイクル事情》という

大変なスピンオフ作品を世に送る事になるのである。
これを是非読んで欲しいのだ。
江戸時代の科学技術、文化、庶民の日々の暮らしを独特の切り口から解明し再評価していくこのエッセー群は、江戸をチャンバラ映画の舞台としてしか捉えていない不勉強な我々にとって目を見張るばかりの新鮮さに溢れている。
〝江戸時代の庶民社会は、そして江戸時代の日本という国は、実はこんなに凄い知恵がさりげなくあちこちに溢れていた社会なのだぜ……〟という事を淡々と説く彼の話術は正直言って衝撃的である。
石川英輔という作家がこの世に生まれた意味は、この一冊で決まったと私は思った。
別に特殊な資料を渉猟している訳でもないらしいし、石川英輔ならでは……という強烈かつユニークな主張が全面に展開されている訳ではない。ただ、こつこつと調べた事実をもとに書かれたこの本のどこを開いても出て来る、江戸という時代の温もりとさり気ない知恵に満ちた社会のありようが、実に魅力的で素晴らしいのだ。
随筆としても第一級のもので、行間に溢れる淡々として人なつっこい雰囲気は、そう、まさに、〔ダイナコン〕で若い女の子に囲まれ、ヤニ下る風もなく、モテ具合を見せびらかすでもなく、ただ飄々としていた〝おッさん〟のあの自然な姿勢そのものなのである。
君のように、よく冷えたビールも熱いピッツァもパソコンもスカGもない江戸時代なんか絶対にご免を被りたいという人も、彼の手にかかると、そんな時代がとても魅力的に見えて

来て、彼の〝大江戸もの〟に出て来る主人公のようにちょっとタイムスリップで江戸を覗いてみようか、一週間位なら暮らしてみてもいいなぁ……なんぞという気にさせられてしまう事を保証する。

SF三国志（エスエフさんごくし）

石川英輔（いしかわえいすけ）

© Eisuke Ishikawa 1995

1995年9月15日第1刷発行

発行者――野間佐和子

発行所――株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-263050-8

講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン――菊地信義

製版――豊国印刷株式会社

印刷――豊国印刷株式会社

製本――加藤製本株式会社

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

講談社文庫 最新刊

田辺聖子	ひねくれ一茶	時代を超えて親しまれている、一茶の句と人間像を描いた傑作長編。田辺文学の金字塔。	780円
杉本苑子	汚名	徳川幕府のために辣腕を振い、叛臣の汚名のもとに葬り去られた、本多正純の真実を描く。	600円
石川英輔	SF三国志	あの『三国志』の英雄豪傑美女が宇宙に飛び出し大活躍。劉備は平和を勝ち獲れるのか!?	600円
原田康子	風の砦(上)(下)	ロシアの樺太進出に備え幕末の北海道で警固の任をつとめながら苦悩の愛に揺れる侍達。	上640円 下600円
古川薫	雪に舞う剣	幕末の日本を生きた若き剣士たちの、明治という夜明けに向かう心の葛藤を描いた名作。	520円
陳舜臣	琉球の風 (一)怒濤の巻	明と大和の間で困難な立場の琉球。一六〇〇年初頭、平穏の国琉球を襲う試練。〈全三巻〉	540円
陳舜臣	琉球の風 (二)疾風の巻	薩摩に屈するか、独立抵抗か。主戦・非戦、国論は二分したが、人々の胸には祖国愛が!	540円
陳舜臣	琉球の風 (三)雷雨の巻	薩摩の圧力に苦悩する琉球。だが、人々は琉球の誇りの下、南海王国建設へと立ち上る。	540円
高橋克彦	炎立つ 壱 北の埋み火	東北の地に黄金の楽土を築こうとした藤原氏の夢がいまその炎を燃やし始めた。〈全五巻〉	620円
高橋克彦	炎立つ 弐 燃える北天	朝廷側にありながら蝦夷の真に触れた藤原経清はもののふとして俘囚の側に身を投じる。	640円
高橋克彦	炎立つ 参 空への炎	大敗を喫した源頼義・義家父子は謀議を尽くして巻き返しをはかる。苦闘する藤原経清。	660円
D・ハンドラー 北沢あかね訳	女優志願	ハリウッドを舞台にホーギーと愛犬ルルが大活躍! MWA賞作家の人気シリーズ最新作。	940円

表示価格はすべて税込み定価です

講談社文庫 最新刊

- 平岩弓枝　**はやぶさ新八御用帳(四)**〈鬼勘の娘〉　武家の面目にかかわる難事件を捌く、新八郎の手練。シリーズを重ねてますます佳境に！　520円
- 宮城谷昌光　**夏姫春秋(上)(下)**　乱世の男たちに渇望された、妖しい美女夏姫。壮大なスケールで、美と力の拮抗を描く長編。　各540円
- 北原亞以子　**降りしきる**　幕末から明治にかけて、時代の奔流に浮き沈みする男女の哀歓を、暖かく描く名作短編集。　500円
- 柴田錬三郎　**柴錬大岡政談**　世間を惑わす面妖な事件に挑む、眇眼の醜面、与力石子伴作の名推理。新趣向の大岡政談。　440円
- 安西篤子　**不義にあらず**　武家の体面が支配する封建社会の不条理のなかで、ひたむきに生きる女たちを描く秀作集。　520円
- 佐藤雅美　**影帳　半次捕物控**　江戸町内で起きた事件の真相を綿密に描くサスペンスあふれる直木賞作家の傑作捕物帳。　520円
- 明石散人　**二人の天魔王「信長」の真実**　天魔王・織田信長の実像を、出自の解明から奇行や合戦の深層に踏みこんで明かす問題作。　560円
- 日本文芸家協会編　**闇に立つ剣鬼**〈時代小説傑作選〉　山本周五郎の幻の名作から、新鋭の話題作まで、これ一冊あれば時代小説を堪能できる。　640円
- 井沢元彦　**謀略の首**〈織田信長推理帳〉　天下統一を目指す信長の前に立ちはだかる一向宗石山本願寺。熾烈な間者合戦の結末は…。　480円

表示価格はすべて税込み定価です

講談社文庫　目録

- 五木寛之　危うし！逆ハンぐれん隊
- 五木寛之　珍道中！逆ハンぐれん隊
- 五木寛之　挑戦！逆ハンぐれん隊
- 五木寛之　怒れ！逆ハンぐれん隊
- 五木寛之　さらば！逆ハンぐれん隊
- 井上ひさし　モッキンポット師の後始末
- 井上ひさし　モッキンポット師ふたたび
- 井上ひさし　ブラウン監獄の四季
- 井上ひさし　歌麿の世界
- 井上ひさし　喜劇役者たち
- 井上ひさし　ナイン
- 井上ひさし　たそがれやくざブルース
- 井上ひさし　闇に咲く花
- 井上ひさし　四千万歩の男　全五冊
- 井上ひさし　百年戦争　全二冊
- 生島治郎　兇悪の拳銃
- 生島治郎　死ぬときは独り
- 生島治郎　総統奪取
- 生島治郎　幕末ガンマン
- 生島治郎　片翼だけの天使
- 池波正太郎　忍びの女　全二冊
- 池波正太郎　近藤勇白書
- 池波正太郎　殺しの四人〈仕掛人・藤枝梅安〉
- 池波正太郎　梅安蟻地獄〈仕掛人・藤枝梅安〉
- 池波正太郎　梅安最合傘〈仕掛人・藤枝梅安〉
- 池波正太郎　梅安針供養〈仕掛人・藤枝梅安〉
- 池波正太郎　梅安乱れ雲〈仕掛人・藤枝梅安〉
- 池波正太郎　梅安影法師〈仕掛人・藤枝梅安〉
- 池波正太郎　梅安冬時雨〈仕掛人・藤枝梅安〉
- 池波正太郎　まぼろしの城
- 池波正太郎　私の歳月
- 池波正太郎　新私の歳月
- 池波正太郎　殺しの掟
- 池波正太郎　よい匂いのする一夜
- 池波正太郎　梅安料理ごよみ
- 池波正太郎　田園の微風
- 池波正太郎　抜討ち半九郎
- 池波正太郎　剣法一羽流
- 池波正太郎　若き獅子
- 井上靖　わが母の記
- 井上靖　楊貴妃伝
- 井上靖　本覚坊遺文
- 伊藤桂一　静かなノモンハン
- 伊藤桂一　秘剣やませみ
- 石川英輔　大江戸神仙伝
- 石川英輔　大江戸仙境録
- 石川英輔　大江戸遊仙記
- 石川英輔　未来妙法蓮華経
- 石川英輔　大江戸えねるぎー事情
- 石川英輔　大江戸テクノロジー事情
- 石川英輔　SF三国志
- 石牟礼道子　苦海浄土〈わが水俣病〉
- 今西祐行　肥後の石工
- 今西祐行　ヒロシマの歌ほか
- いわさきちひろ　ちひろのことば
- いわさきちひろ・松本猛　いわさきちひろの絵と心
- いわさきちひろ・松本猛　ちひろへの手紙

いわさきちひろ 絵本美術館編　ちひろ・子どもの情景〈文庫ギャラリー〉
いわさきちひろ 絵本美術館編　ちひろ・紫のメッセージ〈文庫ギャラリー〉
いわさきちひろ 絵本美術館編　ちひろの花ことば〈文庫ギャラリー〉
いわさきちひろ 絵本美術館編　ちひろのアンデルセン〈文庫ギャラリー〉
いわさきちひろ 絵本美術館編　ちひろ・平和への願い〈文庫ギャラリー〉
石野径一郎　ひめゆりの塔
今西錦司　生物の世界
入江泰吉　大和路のこころ
井沢元彦　猿丸幻視行
井沢元彦　本廟寺焼亡
井沢元彦　六歌仙暗殺考
井沢元彦　修道士の首
井沢元彦　ダビデの星の暗号
井沢元彦　五つの首
井沢元彦　義経幻殺録
井沢元彦　欲の無い犯罪者
井沢元彦　義経はここにいる
井沢元彦　芭蕉魔星陣
井沢元彦　謀略の首〈織田信長推理帳〉
李御寧(イーオリョン)　「縮み」志向の日本人
一ノ瀬泰造　地雷を踏んだらサヨウナラ
石森章太郎　トキワ荘の青春〈ぼくの漫画修行時代〉
伊藤雅俊　商いの心くばり
泉麻人　丸の内アフター5
泉麻人　オフィス街の達人
泉麻人　東京23区動物探検
泉麻人　地下鉄の友
石山茂利夫　中学校教師〈現場で何が起きているか〉
伊井直行　草のかんむり
伊井直行　さして重要でない一日
今井正明　カイゼン
いしいひさいち　わたしはネコである
飯沢匡 黒柳徹子　つば広の帽子をかぶって〈いわさきちひろ伝〉
飯村隆彦　YOKO ONO〈オノ・ヨーコ 人と作品〉
伊集院静　三年坂
伊集院静　乳房
伊集院静　遠い昨日
伊集院静 長友啓典　ともかく静かに
伊集院静　夢は枯野を〈競輪躁鬱旅行〉
伊集院静　峠の声
伊集院静　白秋
井﨑博之　エノケンと呼ばれた男
いとうせいこう　からっぽ男の休暇
伊藤礼　狸ビール
石毛直道　文化麺類学ことはじめ
稲垣美晴　フィンランド語は猫の言葉
色川武大　明日泣く
内橋克人　匠(たくみ)の時代1〜12
内橋克人　「手法革命」の時代
内橋克人　「退き際(とき)」の研究
内橋克人　ガンを告げる瞬間
内田康夫　死者の木霊
内田康夫　シーラカンス殺人事件
内田康夫　パソコン探偵の名推理
内田康夫　「横山大観」殺人事件
内田康夫　漂泊の楽人
内田康夫　江田島殺人事件

内田康夫　琵琶湖周航殺人歌
内田康夫　夏泊殺人岬
内田康夫　平城山(ならやま)を越えた女
内田康夫　「信濃(しなの)の国」殺人事件
内田康夫　鐘
内田康夫　風葬の城
生方幸夫　日本企業転落の日
歌野晶午　長い家の殺人
歌野晶午　白い家の殺人
歌野晶午　動く家の殺人
歌野晶午　ガラス張りの誘拐
with編集部編　男子禁制OL物語〈丸ごと本音激白集〉
with編集部編　男子禁制OL物語2〈もう許さないの巻〉
with編集部編　男子禁制OL物語3〈赤面しちゃうの巻〉
with編集部編　男子禁制OL物語4〈人の噂も七十五日の巻〉
内館牧子　ひらり 全四冊
内館牧子　出逢った頃の君でいて
内館牧子　リトルボーイ・リトルガール
内館牧子　切ないOLに捧ぐ
内館牧子　あなたが好きだった
小林旭 内館牧子　徹夜対談・いつもロンリーだった
宇神幸男　神宿る手
宇神幸男　消えたオーケストラ
有爲エンジェル　踊ろう、マヤ
植田まさし　らくてんパパ1〜2
内海隆一郎　蟹の町
内海隆一郎　欅通りの人びと
梅棹忠夫　夜はまだあけぬか
宇佐美徹也　プロ野球データブック最新版
宇都宮直子　神様がくれた赤ん坊
遠藤周作　海と毒薬
遠藤周作　白い人・黄色い人ほか二編
遠藤周作　わたしが・棄てた・女
遠藤周作　ユーモア小説集
遠藤周作　第二ユーモア小説集
遠藤周作　第三ユーモア小説集
遠藤周作　怪奇小説集
遠藤周作　第二怪奇小説集
遠藤周作　ただいま浪人
遠藤周作　どっこいショ
遠藤周作　ぐうたら人間学
遠藤周作　ぐうたら愛情学
遠藤周作　ぐうたら好奇学
遠藤周作　ぐうたら交友録
遠藤周作　協奏曲
遠藤周作　口笛をふく時
遠藤周作　結婚
遠藤周作　聖書のなかの女性たち
遠藤周作　さらば、夏の光よ
遠藤周作　最後の殉教者
遠藤周作　何でもない話
遠藤周作　悪霊の午後 全二冊
遠藤周作　作家の日記
遠藤周作　父親
遠藤周作　わが恋(おも)う人は 全二冊
遠藤周作　イエスに邂(あ)った女たち
遠藤周作　妖女のごとく

遠藤周作　反　逆　全二冊
遠藤周作　ひとりを愛し続ける本
遠藤周作　決戦の時　全二冊
永　六輔　無名人名語録
永　六輔　普通人名語録
永　六輔　一般人名語録
永　六輔　評論家ごっこ
永　六輔　真紅の琥珀
永　六輔・下保　進　第一生命広報部長からの手紙
江波戸哲夫　左遷！〈商社マンの決断〉
江波戸哲夫　小説大蔵省
江波戸哲夫　乗っ取り指令
江波戸哲夫　小説都市銀行
江波戸哲夫　政商誕生
江波戸哲夫　社長の決断〈その裏側〉
江波戸哲夫　田中角栄を生んだムラ〈西山町物語〉
江坂　彰　団塊サラリーマンの生き方
海老沢泰久　さびしい恋人
海老沢泰久　孤立無援の名誉

円地文子　源氏物語のヒロインたち〈対談〉
大江健三郎　新しい人よ眼ざめよ
小田　実　何でも見てやろう
大森　実　アメリカとは何か100章
大森　実　ヒトラー〈人物現代史1〉
大森　実　ムッソリーニ〈人物現代史2〉
大森　実　スターリン〈人物現代史3〉
興津要編　古典落語　全六冊
大原富枝　婉という女・正妻
大谷羊太郎　殺意の演奏
落合恵子　奇妙な愛の物語
落合恵子　愛すれどひとり
落合恵子　女が別れを告げるとき
落合恵子　アローン・アゲイン
落合恵子　ここに愛がいる
落合恵子　素敵なヤツなのに
落合恵子　バーバラが歌っている
落合恵子　あなたの庭では遊ばない
大橋　歩　トマトジュース

大橋　歩　鉛筆の先っちょ
大橋　歩　生活のだいじ
大橋　歩　くらしは楽しみ
大橋　歩　涙はひとりで流すもの
大橋　歩　おしゃれになりたい
大石邦子　この生命ある限り
岡倉天心　宮川寅雄訳　茶の本
沖　守弘　マザー・テレサ　あふれる愛
岡嶋二人　焦茶色のパステル
岡嶋二人　七年目の脅迫状
岡嶋二人　あした天気にしておくれ
岡嶋二人　開けっぱなしの密室
岡嶋二人　三度目ならばＡＢＣ
岡嶋二人　とってもカルディア
岡嶋二人　チョコレートゲーム
岡嶋二人　ちょっと探偵してみませんか
岡嶋二人　記録された殺人
岡嶋二人　ツァラトゥストラの翼
岡嶋二人　そして扉が閉ざされた

講談社文庫　目録

岡嶋二人　どんなに上手に隠れても
岡嶋二人　タイトルマッチ
岡嶋二人　解決まではあと6人〈5W1H殺人事件〉
岡嶋二人　なんでも屋大蔵でございます
大石芳野　女の国になったカンボジア
大石芳野　闘った人びと
太田蘭三　赤い雪崩
太田蘭三　破牢の人
太田蘭三　餓鬼岳の殺意
太田蘭三　南アルプス殺人峡谷
太田蘭三　木曽駒に幽霊茸を見た
太田蘭三　殺意の朝日連峰
太田蘭三　謀殺水脈
太田蘭三　寝姿山の告発
太田蘭三　密殺源流
太田蘭三　殺人雪稜
太田蘭三　葦が泣く
太田蘭三　失跡渓谷
大前研一　企業参謀　正続

大前研一　世界が見える日本が見える
大前研一　トライアド・パワー
大前研一　新・国富論
大前研一　平成維新
大前研一　世界の見方・考え方
大前研一　平成維新PART2
大沢在昌　野獣駆けろ
大沢在昌　氷の森
大沢在昌　死ぬより簡単
大沢在昌　相続人ＴＯＭＯＫＯ
大沢在昌　ウォームハート　コールドボディ
大沢在昌　アルバイト探偵
逢坂　剛　コルドバの女豹
逢坂　剛　幻のマドリード通信
逢坂　剛　スペイン灼熱の午後
逢坂　剛　カディスの赤い星　全二冊
逢坂　剛　十字路に立つ女
逢坂　剛　斜影はるかな国
小川和久　在日米軍

小川和久　原潜回廊
小川和久　仮想敵国ニッポン〈アメリカの対日戦略シフト〉
御田重宝　戦艦「大和」の建造
御田重宝　シベリア抑留
御田重宝　特攻
沖藤典子　女が会社へ行きたくない朝
沖藤典子　転勤族の妻たち
沖藤典子　女が再婚するとき
オノ・ヨーコ　飯村隆彦編　ただの私
大泉実成　説得〈エホバの証人と輸血拒否事件〉
大泉実成　東京サイテー生活〈家賃月2万円以下の人々〉
尾上松緑　松緑芸話
折原　一　倒錯のロンド
折原　一　螺旋館の殺人
折原　一　丹波家殺人事件
折原　一　仮面劇MASQUE
折原　一　灰色の仮面
大下英治　小説東急王国
大下英治　梟商〈小佐野賢治の昭和戦国史〉

講談社文庫　目録

大下英治　自民党分裂〈政治改革の攻防〉
大下英治　知られざる王国NHK
大下英治　小説・吉田茂〈戦後復興に賭けたワンマン宰相〉
大橋巨泉　わがシングルへの道
大橋巨泉　巨泉の使える英語
小野寺誠　白夜の国のヴァイオリン弾き
大石英司　B-1爆撃機を追え
大石英司　シーナイトを救出せよ
大石英司　カナリアが囁く街
大木トオル　伝説のイエロー・ブルース
太田忠司　僕の殺人
太田忠司　美奈の殺人
大笹吉雄　花顔の人〈花柳章太郎伝〉
奥田哲也　霧枯れの街殺人事件
海音寺潮五郎　孫子
海音寺潮五郎　列藩騒動録 全二冊
海音寺潮五郎　江戸城大奥列伝
梶山季之　朝残影
加賀乙彦　頭医者留学記
加賀乙彦　生きている心臓 全二冊
海渡英祐　伯林(ベルリン)―一八八八年
梶龍雄　透明な季節
金井美恵子　タマや
柏葉幸子　霧のむこうのふしぎな町
柏葉幸子　地下室からのふしぎな旅
柏葉幸子　天井うらのふしぎな友だち
柏葉幸子　エバリーン夫人のふしぎな肖像
加藤周一　雑種文化
梶原一明　本田宗一郎思うままに生きろ
勝目梓　その死を暴くな
勝目梓　牙の街
勝目梓　日蝕の街
勝目梓　女教師に捧げる鉄拳
勝目梓　私設断頭台
勝目梓　悪女軍団
勝目梓　夜のエージェント
勝目梓　闇が裂ける
勝目梓　殺し屋
勝目梓　肉狩り
勝目梓　不倫の報酬
勝目梓　蜜の報酬
勝目梓　引き裂かれた夏
勝目梓　炸裂
勝目梓　はみだし者
勝目梓　邪淫記
勝目梓　炎
勝目梓　媚薬
勝目梓　抱け、そして撃て
勝目梓　女王蜂の身代金
勝目梓　蜜の私刑
鎌田慧　自動車絶望工場
鎌田慧　日本の兵器工場
鎌田慧　教育工場の子どもたち
鎌田慧　アジア絶望工場
鎌田慧　ロボット絶望工場
鎌田慧　国鉄処分
鎌田慧　弘前大学教授夫人殺人事件

1995年9月15日現在